

総合研究大学院大学

博士学位論文

『枕草子』における漢文学受容の可能性

文化科学研究科 日本文学研究専攻 張 培華

目次

序章 本論の目的と構成	一
一 清少納言と漢文学の環境	一
二 先行の研究と本論の狙い	六
三 本論の構成	一五
第一部 『枕草子』における漢文学受容の総覧	
一 凡例	二五
二 本文	二九
三 参考文献	一四二
第二部 詩句と典籍をめぐる問題	
第一章 『枕草子』における『白氏文集』の引用	一五一
一 はじめに	一五一

二	『枕草子』に引用した詩句と『白氏文集』の分類……………	一五二
三	『源氏物語』に引用した詩句と『白氏文集』の分類……………	一五七
四	引用した詩句による『枕草子』と『源氏物語』の差異……………	一六三
五	『枕草子』の『白氏文集』引用特徴……………	一七三
六	おわりに……………	一八〇
第二章	『枕草子』における『和漢朗詠集』の引用……………	一八三
一	はじめに……………	一八三
二	『枕草子』における『和漢朗詠集』引用箇所……………	一八四
三	漢詩句にみる三巻本と能因本の相違……………	二〇四
四	前田家本と三巻本の類似表記……………	二一五
五	堺本本文に見える「加筆」……………	二二三
六	おわりに……………	二三三
第三章	『枕草子』「文は」の章段の問題……………	二三五
第一節	「新賦」について……………	二三六
一	先行研究による問題点……………	二三六
二	「古賦」と「新賦」の区別及び『文選』の「賦」の分類……………	二四〇
三	『賦譜』の成立及び日本への輸入……………	二四八

四	『賦譜』の「新賦」と『枕草子』の新賦……………	二五二
五	おわりに……………	二五七

第二節	「史記五帝本紀」について……………	二六一
-----	-------------------	-----

一	問題の所在……………	二六一
二	「こたいほんき」の意味……………	二六二
三	先行研究による「史記五帝本紀」の解釈……………	二六四
四	「史記五帝本紀」に関する古記録……………	二六九
五	おわりに……………	二七五

第三部 表現の基層

第一章	『枕草子』「青ざし」、「ませごし」、「花や蝶や」の表現考……………	二八一
-----	-----------------------------------	-----

——「三条の宮におはしますころ」の章段を中心に——

一	はじめに……………	二八一
二	「青ざし」について……………	二八三
〈1〉	問題の所在……………	二八三
〈2〉	「青ざし」の実態……………	二八七
〈3〉	「青ざし」と「青刺」……………	二九〇

〈4〉 薬草としての青刺の薊……………	二九三
三 「ませごし」について……………	二九七
〈1〉 問題の所在……………	二九七
〈2〉 「ませごし」と先行の解釈……………	二九九
〈3〉 「ませごし」と「青刺」……………	三〇三
〈4〉 「ませごし」と「五月五日」の風物……………	三〇五
四 「花や蝶や」について……………	三一〇
〈1〉 問題の所在……………	三一〇
〈2〉 「花や蝶や」の先行の解釈……………	三一〇
〈3〉 「花や蝶や」と和漢文学の表現……………	三一三
〈4〉 「萎花蝶飛」と「花や蝶や」の寓意……………	三二八
五 おわりに……………	三三三

第二章 『枕草子』 「蚊の細声」 の表現考……………	三四九
----------------------------	-----

—— 「にくきもの」の章段を中心に——

一 はじめに……………	三四九
二 先行研究の解釈と問題の所在……………	三五〇
三 『枕草子』以前の「蚊の細声」の表現……………	三五四
四 『白氏文集』における「蚊」の「頗微細」……………	三六三
五 おわりに……………	三七六

第三章 『枕草子』 「唐鏡のすこし暗き、見たる」 の表現考……………	三七九
------------------------------------	-----

——「心ときめきするもの」の章段を中心に——	
一 はじめに……	三七九
二 四系統本文における「唐鏡」に関する表現……	三八二
三 研究史による「唐鏡」の解釈……	三八五
四 平安文学における「唐鏡」及び「鏡」と漢籍の影響……	三九一
五 唐代伝奇小説『古鏡記』による「暗い鏡」——「宝鏡」……	四〇二
六 おわりに……	四〇六

第四章 『枕草子』「月の窓より洩り」の表現考……………四一三

——「九月二十日あまりのほど」の章段を中心に——	
一 はじめに……	四一三
二 「九月二十日」はいつの「年」なのか……	四一四
三 「人歌よむかし」の「人」や「歌」……	四一九
四 仮名文学における「窓」……	四二三
五 「詩」の世界における「窓」……	四三一
六 「窓」から射し込む「月光」……	四三六
七 おわりに……	四四二

第五章 『枕草子』「朝にさる色」の表現考……………四四七

——「雲は」の章段を中心に——	
一 はじめに……	四四七

二	先行研究の解釈及び問題……………	四四九
三	「朝にさる色」と「朝に去る雲」……………	四五二
四	「巫山」と「白帝」……………	四五六
五	日本漢詩における「朝雲」の表現……………	四六一
六	「朝にさる色」と「朝雲曲」……………	四六四
七	おわりに……………	四六八

第六章	『枕草子』「春はあけぼの」章段考……………	四七一
-----	-----------------------	-----

一	はじめに……………	四七一
二	四系統「春はあけぼの」本文……………	四七二
三	漢詩文の対句的表現と「真名序」及び「仮名序」……………	四八二
四	「春はあけぼの」の対句的表現の基層……………	四九〇
五	「新賦」の「四段」と「春はあけぼの」の構成……………	四九八
六	おわりに……………	五〇六

終章	漢文学受容の特徴と意義……………	五一七
----	------------------	-----

附録資料	『賦譜』翻字……………	五二二
------	-------------	-----

序章 本論の目的と構成

一 清少納言と漢文学の環境

清少納言は、皇后定子が長保二年（一〇〇〇）十二月一六日崩後、まもなく宮仕えを辞めた。^①寛弘七（一〇一〇）年に成立した『紫式部日記』^②には、中宮彰子の女房である紫式部が、清少納言について、次のように記している。（引用文は新日本古典文学大系による）

清少納言こそ、したり顔^{がほ}にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書^{まなか}きちらして侍ほども、よく見れば、まだいと足らぬこと多^{おほ}かり。

（三〇九頁）

傍線部「真名書きちらし」とあるように、紫式部は、清少納言の資質について、宮廷女房の教養としての琴、手習、古今集を暗記するなどの必須知識に対してではなく、単に「真名」に関する漢学の才能と認め、それに疑問を提起したのである。

「真名」は、男性の世界で、すなわち漢文の才に関わる問題である。女性である清少納言の漢才は『枕草子』と

の関係において、考察されるべきところであろう。

前述のごとく、清少納言が、正暦二年（九九二）宮仕えを始めてから、長保二年（一〇〇二）に辞めるまで、^③彼女の宮廷での生活期間はほぼ一〇年近い。この点については、『枕草子』（本文は新編日本古典文学全集による、以下同）「鳥は」の章段の中で、「十年ばかり候ひて聞きしに、まことにさらに音せざりき。」（九六頁）という記事が残されている。

その一〇年あまりの宮廷生活の中で、交りの深かった人物は、中宮定子（九七七～一〇〇二）、一条天皇（九八〇～一〇一一）、藤原伊周（九七四～一〇一〇）、藤原齊信（九六七～一〇三五）、藤原行成（九七二～一〇二八）などで、いずれも当代一流の高級貴族である。これらの貴族との関わりの中で育まれた環境が、清少納言の『枕草子』における漢文学の背景にあるといえよう。

この時期の、一条天皇の文壇における「私的詩会」の様相は、一条天皇が詩文を作ることに対し意欲的であったことを推測させてくれている。^④例えば、長保元年（九九九）に、一条天皇が主催した詩会は次の通りである。

長保元年（九九九）	六月九日	庚申御遊詩会	（『日本紀略』、『御堂関白記』、『本朝世紀』）
	九月九日	重陽平座 御前詩会	（『日本紀略』、『小右記』、『御堂関白記』、『権記』）
	九月十三日	内裏詩会	（『権記』）
	九月三十日	内裏詩宴	（『日本紀略』、『権記』）

詩会に参加する官人貴族は、詩を作らなければならない。右の九月九日の詩会の場面について、藤原行成は『権

記』の中で、次のように記述している。（本文は『史料纂集 権記』（続群書類従完成会）による）

長保元年九月

九日、御前有作文、草樹減秋声、以聞為韻、七言六韻、左・右大臣^{已上}絶句、・宰相中将以下侍臣献詩、

（一二四頁）

決められた題によつて、左大臣（藤原道長）、右大臣（藤原顕光）は絶句を献上、宰相中将以下の侍臣も詩を献上したという。『権記』を読むと、行成は、翌日にもまた作文を行っている。

十日、辰剋講詩、不罷出、自昨夕御書所亦有作文、

（一二四頁）

また、作文の記事はその翌日にも見える。

十一日、通直、^{（大江）}広業来る、^{（藤原）}帥宮於觀音院有作文事云々、^{（敦道親王）}

（一二四頁）

さらに、翌々日は、内裏で一条天皇が詩会を主催した。一条天皇も詩文を書いた。

十三日、参内、有作文事、左大弁上題、云、菊開花尽遍、以鮮為韻、広業献序、有御製、左右丞相・左武衛・左大□・宰相中将献詩、侍臣有其員、

(一二五頁)

右の挙例を瞥見すると、一条天皇時代には、漢詩文は極めて重視されていたことが分かる。しかも、寛弘年間（一〇四〇―一一一二年）編纂された、一条天皇時代の男性官人貴族の詩作である『本朝麗藻』に載る一条天皇、藤原伊周、藤原齊信、藤原行成、藤原道長、藤原公任、藤原輔尹、源俊賢、源頼定の作者たちは、『枕草子』にも登場した人物でもある。

これらの宮廷の男性貴族の漢文学の背景は、おのずと清少納言に影響を及ぼしていたと考えられる。現存している『枕草子』『跋文』において、内大臣伊周から献上された紙には、「上の御前には史記といふ文をなむ、書かせたまへる」（四六七頁）のように、一条天皇は、漢籍の『史記』を書写していたことが分かる。清少納言が「文は」章段の中で、『史記』の第一巻「史記五帝本紀」（三三六頁）と明記したことも、一条天皇の『史記』の書写と関連があるであろう。

男性の貴族との漢詩文のやりとりや交際は、『枕草子』の中にも反映している。例えば、「第七八段」「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」の章段の中で、藤原齊信が清少納言の状況を尋ねるために送ってきた手紙には、『白氏文集』「卷一七」律詩「廬山草堂 夜雨獨宿（廬山草堂に、夜雨獨り宿し）」の対句「蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵

中」の上句「蘭省花時錦帳下（蘭省の花時 錦帳の下）」を書いた。それに対して、清少納言は、対句の下句「廬山雨夜草庵中（廬山の雨夜 草庵の中）」に基づいて、「草の庵を誰かたづねむ」と返事した。互いに、『白氏文集』の詩句を周知していたからこそ成り立つ応酬である。

また、中宮定子と漢詩文を応答する場面が、『枕草子』には、しばしば見える。例えば、「第二八〇段」「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐり」の中で、中宮定子が『白氏文集』「卷一六」律詩「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」の「重題」という題の四番目の詩の中の、対句「遺愛寺鐘欹枕聴 香炉峰雪撥簾看」の下句から、「香炉峰の雪いかららむ」と清少納言に問い、清少納言らはすばやく簾をあげて応えた記事は著名である。

この記事も、中宮定子と清少納言が、『白氏文集』の詩句によく通じていたと想像される。

前述の日記『権記』の作者藤原行成は、当時の有名な能書家で「権跡」と言われ、小野道風（八九四～九六七）の「野跡」、藤原佐理（九四四～九九八）の「佐跡」と合わせて有名な「三跡」と呼ばれている。

特に、後世世尊末流や持明院などの祖となり、日本の書流の源流ともなった藤原行成の見事な書風は、『枕草子』「第一二八段」「二月官の司に」に記されている。中国の孔子像を掛ける時期、藤原行成は、清少納言に一包の「餅餠」と手紙を送った。その手紙は「いみじうをかしげに書いたまへり」と清少納言が讚美し、中宮定子にも「めでたくも書きたるかな。をかしくしたり」と感服している。

藤原斉信、藤原行成、源俊賢（九五九～一〇二七）と藤原公任（九六六～一〇四一）の合わせて四人は、一条天皇時代の著名な「四納言」とも呼称され、いずれも『枕草子』の中に登場している。源俊賢と藤原公任は、それぞれ一箇所だけであるが、清少納言は彼らへの尊敬する心情を表した。藤原斉信と藤原行成は、多くの章段の中で、主要人物として活躍している。

以上の如く、清少納言は、ほぼ一〇年間における宮廷の上流貴族の環境のもとで、常々漢文の知識を聞いたり見たり、あるいは交際する中で、高級貴族の生活スタイル、精神文化の様式を基盤として、日本文学史において特異な位置を占める『枕草子』を創作したのである。

そのような『枕草子』をより深く理解するためには、漢文学に関わる問題を解明することが必要であろう。

二 先行の研究と本論の狙い

A 四系統の本文

『枕草子』を研究するに際し、まず直面する問題はどのような本文をとりあげるかということである。かつて池田亀鑑（一八九六～一九五六）は、次のように述べている。

清少納言枕草子は、最も多くの異本を傳へている古典の一である。異本と云つても、色々程度の差があつて、字句の少々の異同位に止まるものもあるが、枕草子に至つては中々さう云ふものではない。字句の異同はもとより、時によつては、全く轉寫の誤とのみは考へられないやうな甚しい文章の相違があるのみならず、章段の數にも大きな出入があり、その順序にも亦非常な相違がある。⁽⁵⁾

多くの写本を研鑽し、氏が、『枕草子』の本文を雑纂形態の三卷本、能因本と類纂形態の前田家本、堺本の二種の四系統本文に分かれているとした分類は、いまなお定説となっている。

すなわち、次の(1)と(4)の通りである。

(1) 三卷本（雑纂形態）

奥書…往事所持之荒本紛失年久更借出一本両之本令書写之依無証本不散不審但管見之所及勘合旧記等注付時代年月等是亦謬案歟

安貞二年三月 毫及愚翁 在判^⑥

*安貞二年（一二二八）

(2) 能因本（雑纂形態）

奥書…枕草子は、人ごとに持たれども、誠によき本は世にありがたき物なり。これもさまではなけれど、能因が本と聞けば、むげにはあらじと思ひて、書きうつしてさぶらふぞ。草子がらも手がらもわろけれど、これはいたく人などに貸さでおかれさぶらふべし。なべておほかる中に、なのめなれど、なほこの本もいと心おくもおぼえさぶらはず。さきの一条院の一品の宮の本とて見しこそ、めでたかりしか、と本に見えたり。これ書きたる清少納言は、あまり優にて、並み並みなる人の、まことしくうちたのみしつべきなどをば語らず、艶になまめきたる事をのみ思ひて過ぎにけり。宮にも、御世衰へにける後には、常にも候はず。さるほどに失せたまひにければ、これを憂き事に思ひて、またこと方ざまに身を思

ひ立つ事もなくて過ぐしけるに、さるべくしたしくたのむべき人も、やうやう失せ果てて、子などもすべて持たざりけるあままに、せんかたもなくて、年老いにければ、さま変へて乳母子のゆかりありて、阿波の国に行きて、あやしき萱屋に住みける。つづりといふ物をぼうしにして、あをなといふ物乾しに、外に出でて帰るとて、「昔の直衣姿こそ思ひ出でらるれ」と言ひけむこそ、なほ古き心の残れりけるにやと、あはれにおぼゆれ。されば、人の終りの、思ふやうなる事、若くていみじきにもよらざりけるとこそおぼゆれ⁽⁷⁾

(3) 前田家本（類纂形態）

奥書…ナシ

(4) 堺 本（類纂形態）

奥書…此枕草子は深養父 孫元輔の御娘にて上東門院にこうせしとぞ清少納言のつぼねとがうして紫式部と名をおあんじく、ほまれたかく、人の口にある事共、世の行によしあるわざをしるしあつめられたるなり。いやしくもゆかりの故をもて先祖の遺文又人ありてたづねば、いかがは答侍らんかしと和泉の堺に世にそむきたるわざしていとまのあるを幸として好事の佳士道巴といふ翁の心の月をすまし、身のさとり明なるが持なれたる本をしばしかりもちゐて書写しむる所なり。古本一とせ、祖父にておはせし後浄后院殿能州へ下給ひし時、太守匠作とくゐんしよまうによりてつかはされし由、仰られしこそまのあたり耳にあるやうにおぼえて、くりかへしみるに、女房のもてあそぶべき理り、男のしらでかなはざ

るわざ成べし。あな、かしこよみおぼえずはあるべからず。

時に元龜元年十一月 日 宮内卿清原朝臣⁽⁸⁾

*元龜元年（一二五七〇）

（1）三卷本は、写本が「三冊」からなることから名付けられたものである。「奥書」に「安貞二年」（一二二八）の年次が記されることも特徴となっている。残存の状況によつて、「春は曙」（第一段）から「あぢきなきもの」（第七五段）までのを欠く本文は「第一類」となり、無闕の三冊本は「第二類」と言われる。これらの二種の写本は多く存在している。代表的な第一類は、陽明文庫蔵（思文閣影印）『枕草子』（室町時代書写）である。第二類は、相愛大学図書館蔵『枕草子』、弥富破摩雄・田中重太郎蔵本がある。（2）能因本は、「奥書」にある「能因が本」によつて、「能因本」と言われ、最善本は学習院大学蔵の室町時代の写本である。（3）前田家本は、現存の最古の『枕草子』写本であり、鎌倉時代写本と言われ、前田家旧蔵「四冊」となり、昭和二年（一九二七）尊経閣文庫蔵が唯一である。（4）堺本は、「奥書」にある「和泉の堺」地名が、「堺本」の名の由来、代表的な写本は高野辰之旧蔵、斑山文庫本（古典文庫影印）がある。

右（1）、（2）、（3）、（4）間での異文、異同は少なくない。田中重太郎は、（1）系統写本の二三種（第一類と第二類を含む）、（2）系統写本の七種、（3）系統写本の一種（孤本）、（4）系統写本の一一種を合わせて参照し、『校本枕冊子』（古典文庫、一九五三―一九七四）を刊行しており、四系統『枕草子』本文を対照する研究には今なお裨益している。その後、一九八八年、林和比古は、（4）系統写本の二三種を参照し、『堺本枕草子集成』を完成、これらの研究は、『枕草子』本文の研究に対して大きな業績となっている。

B 先行研究

四系統『枕草子』本文の差異をふまえた上での漢文学の受容状況について、先行の研究では、これまで如何に言及されてきたのか、簡単に述べてみたい。

まず漢語に関しての典拠を指摘する注釈書から説明する。

そもそも、『源氏物語』と比べると、『枕草子』の研究は、かなり遅れている。『源氏物語』には、すでに平安時代末期ごろ成立した『源氏釈』があり、物語本文において漢詩、故事、仏典などの典拠に関して注が施されているが、『源氏物語』より先に成立した『枕草子』に関する注釈書は、この時期にはまだみえていない。

現存最古の注釈は、三巻本『枕草子』の「奥書」にある「耄及愚翁」が、「安貞二年（一二二八）三月」以前に注した断片的「勘物」である。ただし、三巻本「勘物」は、主に年次の指摘にしか過ぎない。

その後、江戸時代前期によって、和学者による古典注釈におけるいわゆる「三注」が成立した。加藤盤斎（一六二一～一六七四）『清少納言枕双紙抄』（延宝二年（一六七四）五月）、北村季吟（一六二五～一七〇五）『枕草子春曙抄』、岡西惟中（一六三九～一七一）『枕草子旁註』である。これらは、いずれも『枕草子』本文における漢語、漢籍、あるいは漢文学に関わる典拠を様々な視点から指摘しており、漢文学の研究についても貴重である。

ただし、前掲した『枕草子』四系統本文によって、江戸時代の「三注」は、いずれも能因本系統を底本としている。⁽⁹⁾

明治以後では、昭和三年（一九二八）、内閣文庫本、三巻本系統第二類本文を底本として、至文堂から出版された藤村作『清少納言枕草子』は、比較的早期の三巻本本文の注釈で、その後、昭和後期以降の『枕草子』諸本の底本

は三卷本系統を底本としている。例えば、「日本古典全書」（朝日新聞社）、「新潮日本古典集成」（新潮社）、「日本古典文学大系」（岩波書店）、「新日本古典文学大系」（岩波書店）、「新編日本古典文学全集」（小学館）などがある。その中、萩谷朴氏は、同じく三卷本によって、『枕草子解環』一〜五（同朋舎 一九八一〜一九八三）の注を著している。また最近のものでは、津島知明氏と中島和歌子氏の三卷本本文による『新編枕草子』（おうふう、二〇一〇）がある。

一方、昭和から平成までの能因本系統本文の注釈書は少なく、わずかに二種である。一つは、松尾聰氏、永井和子氏校注『枕草子』（日本古典文学全集11）（小学館、一九七四〔初版〕）である。もう一つは、田中重太郎氏の昭和四七年（一九七二）から、昭和五八年（一九八三）にわたる『枕草子全注釈』第一冊から第四冊の出版、と第五冊の田中重太郎氏、鈴木弘道氏及び中西健治氏による校注である。

三卷本と能因本に対し、前田家本、堺本の注釈書はさらに少ない。前田家本の注釈書は、田中重太郎氏校注『前田家本枕草子新註』（古典文庫、一九五一）のみで、堺本は、同じく田中重太郎氏『堺本枕草子』（古典文庫、一九四八）と速水博司氏『堺本枕草子評釈』（有朋堂、一九九〇）がある。

ところが、これらの四系統の本文に関する注釈書は、漢語の表記、漢籍の典拠、漢文学の影響等が指摘されているが、前に取り上げた『枕草子』本文の流行の変化が、その時々漢文研究の深化を汲み込んでについて、各注に反映しているとは必ずしも言えない。

次に、単篇の論文であるが、数が多いので、ここでは代表的な論考を取り上げたい。

昭和三六年（一九六一）、『国文学』第六卷、第三号の特集「古典に投影した海外文学」による田中重太郎の「枕草子に投影した海外文学」は、『枕草子』における漢文学の受容の研究に対して、重要な論文であろう。

氏が『枕草子』における「李義山雜纂」の影響⁽¹⁰⁾に対して、「正直にいつて、枕冊子と雜纂と、あるいは枕冊子と十列との関係をば、わたくしはそれほど重要に考えない。」と「根本的に雜纂は、遊戲の文学であると思う。したがって、たとえ、時代的に、雜纂の成立や渡来が、わが枕冊子に投影する可能性があつたとしても、また、その文学形態上類似しているところがあるにしても、枕冊子の本質には、たいした投影力がないといえるであろう。」と述べていた。そして、氏が「この冊子に見える作者の漢才について」漢籍、仏典からの詩句・文などを一覽表にした、五〇数箇所の漢籍に関わる点をまとめている。これは『枕草子』における漢文学の研究のためには、有力な参考文献となっている。

同時期の、大曾根章介氏の「枕草子と漢文学」も重要であろう。『国文学』第十二卷、第七号（一九六七）に掲載された。氏が、『枕草子』における漢詩句の表現については、作者清少納言の独自の知識ではなく、当時の貴族の基本教養と強調された。主に『白氏文集』の対句が中心で、また漢文章の華麗な秀句で、共に「断章取義」の立場の受容である。そしてこれは全く『和漢朗詠集』の世界と重なり合うものであつて、当時の一般的傾向であつたといえる。『枕草子』に見られる漢詩文は作者個人の才能に関わる特殊なものではなく、当時一般の宮廷人に共通のものであつたと論じられている。⁽¹¹⁾

その後、相田満氏は、平安時代の「簡便な類書」『蒙求』における「漢故事」の出典に関する視線から、『枕草子』漢故事考——『蒙求』故事とのかかわりを通して——（『東洋文化』一九九五）（他二本）を発表された。氏は『枕草子』における漢文学の「典拠の性質」については、「詩文に関するもの」と「漢故事に関するもの」との違いを切り分けて検証しなければならないといわれている。特に『蒙求』の古注釈によって、四系統『枕草子』本文の古さについて検討する方法を明示している。例えば、『枕草子』「故殿の御服のころ」における「宣方」に関する年齢に

ついで、三卷本（新日本古典文学全集「第一五五段」）系統本文では、「三九」歳（二九〇頁）となり、能因本（日本古典文学全集「第一六六段「宰相中将齐信、宣方の中将と」系統本文では「四九」歳となる。この点について、氏は次のように述べている。

『枕草子』本段のこの本文箇所は、九九六長徳二年のことと推定され、その時の宣方の年齢は推定三十九歳である。

『枕草子』の原初形態推定の観点からすれば、三卷本系統本文は能因本系本文に対し比較的古形を保持しているとの見方が優勢であり、併せて『蒙求』の普及の様相から考えると、本段において念頭に置かれた朱買臣故事は、最古注系『蒙求』と目される国立故宫博物院蔵本「宮内庁書陵部転写本」にある「四十↑↓三十九」を以て理解することがふさわしいといえる。(13)

このように、『蒙求』のような「簡便な類書」の古注の故事を考証することは、『枕草子』における漢文学の受容の状況及び四系統『枕草子』本文の素性を求め、検証するに際して、極めて有効な実証方法であろう。

次に、『枕草子』における漢籍の影響と考える箇所を纏めた研究について、最も代表的な考察は、矢作武氏の「枕草子の源泉」と題して、『枕草子講座』（有精堂 一九七五）第四巻に掲載された。「枕草子と漢籍」の内容を充実させ、『枕草子大事典』（勉誠社 二〇〇一）に収録されたものがある。氏は冒頭で、次のように述べている。

枕草子と漢籍との全般的な影響・出典関係については、かつて田中重太郎氏の「枕冊子に投影した海外文学」（『国文学』昭和三十六年二月号）があり、それを参考に、その他諸注釈書や論文等を参照し、新説に留意しながら

ら、三卷本枕草子の章段に従って、筆者も以前、「枕草子の源泉——中国文学——」（有精堂『枕草子講座』第四卷所収、昭和五十一年三月）に記した。その時の思い違い、誤記等もあったので訂正し、体裁も多少改めて記す。¹⁴

氏は、一「白氏文集」（17箇所）、二「和撰詩文集、抄、朗詠集」（19箇所）、三「幼学書、史書、類書等」（14箇所）、四「仏典」（7箇所）を分けて、『枕草子』本文と漢詩文を比べて列挙した。氏の整理は、今までで最も詳しく『枕草子』において漢詩文の典拠を一覧にし、価値の高い文献となっている。ただ残念ながら、氏が述べたように、『枕草子』の原文は三卷本だけで、ほかの系統本文と照らし合わせるとどのようなになるのかという点で、改善の余地はある。

以上、四系統『枕草子』本文に関する主な注釈書及び代表的な漢文学の受容に関して、簡単に述べた。

C 本論の目的

本論の狙いをまとめていうと次の通りである。

『枕草子』と漢文学の関わりは、どのようなになっているのか。『枕草子』を読む時、漢文学の関係をどのように認識するのか。これらの問題を追究することが本論の目的である。

従来の研究は、漢語、漢籍の典拠の指摘に力点が置かれていたと言ってもよいだろう。そこで、本論では、典拠論をこえて、一見すると和語だけで成り立っているかのような表現の基層にも含まれている漢籍の影響にも目を向け、その受容の実態を踏まえた、新しい「読み（解釈）」の可能性を提示したい。また、その考察の過程で、従来の

注釈で難義とされていた問題についても、改めて考察する。さらに、四系統（三卷本、能因本、前田家本、堺本）『枕草子』本文についての問題も、同じく漢文学の受容の視点から解析を試みたい。たとえば、四系統『枕草子』本文に引用された漢詩句と『和漢朗詠集』の漢詩句と一致する部分に着目し、『和漢朗詠集』の古注釈の訓読を参照することで、『枕草子』本文と比較し、漢詩句の表現の特性を明らかにするなど、四系統本文の表現の特徴を明らかにすることをめざすものである。

三 本論の構成

本論の構成は、序章から、「第一部 『枕草子』における漢文学受容の総覧」、第二部 「詩句と典籍をめぐる問題（第一章～第三章）」、第三部 「表現の基層（第一章～第六章）」、終章までを組み合わせたものである。次に、第一部、第二部、第三部に分けて、各章の主な内容を簡単に説明する。

序章 本論の目的と構成

第一部 『枕草子』における漢文学受容の総覧

序章では、『枕草子』や作者である清少納言に関わる漢文学の背景、『枕草子』における漢文学の研究に関わる本文の問題、注釈、論考及び本論の狙いと本論の構成について簡単に述べた。

第一部『枕草子』における漢文学受容の総覧」は、『枕草子』における漢籍の典拠について、先行する研究や既存の研究成果のまとめはあるが、四系統の本文を対照して整理することはまだ行われていない。そこで、本章では、江戸時代から現在までの『枕草子』に関する漢文学との関係がある箇所を整理し、さらに四系統本文を対照させながら一覧できるように配慮し、さらに明治から平成までの『枕草子』における漢文学に関する重要な論考を網羅した。

第二部 詩句と典籍をめぐる問題

第一章 『枕草子』における『白氏文集』の引用

第二章 『枕草子』における『和漢朗詠集』の引用

第三章 『枕草子』「文は」の章段の問題

第二部では、「詩句と典籍をめぐる問題」を扱う。文字通り、詩句と典籍に関わる問題を考察するものである。特に、平安時代に流行した『白氏文集』と『和漢朗詠集』を取り上げて考察した他、「文は」の章段を中心に、「新賦」と「史記五帝本紀」をめぐる問題を考証した。

第一章「枕草子」における『白氏文集』の引用。平安時代では、貴族の知識教養として、『白氏文集』が愛読されている。従来の研究では、数多くの論考が積み重ねられてきた。しかし、『枕草子』との関係はどのようなにあるのか、

清少納言が取り上げた『白氏文集』の詩句は、『源氏物語』と比べてみると、どういう特徴があるのか。また作品の背景に注目し、単なる引用だけではなく、詩句の内容と『枕草子』の場面との関係について、考証した。

第二章「枕草子における『和漢朗詠集』の引用」では、『枕草子』とほぼ同時代に編纂された『和漢朗詠集』の詩句を取り上げて考察した。その方法は、『枕草子』に見える漢詩句と『和漢朗詠集』における秀句と重なる詩句に注目し、漢詩句の訓読する読み方によって、四系統『枕草子』本文の諸本間での秀句の扱う異同を考証し、『和漢朗詠集』の古注釈に残される訓読みを利用し、諸本の詩句の表現差異及び本文の特徴を明らかにする。

第三章『枕草子』「文は」の章段の問題」では、従来、難義とされている三巻本の「文は」の章段における「新賦」と「史記五帝本紀」の問題を考証した。

まず、「新賦」については、『通憲入道藏書目録』に「新賦略抄」の名が見えることや日本に佚書『賦譜』が残存していることと、その内容を考察した結果、「新賦」が『文選』の六朝時代の古賦に対する唐の新体の賦、すなわち「律賦」であることを示した。

次に、同じ章段にある「史記五帝本紀」を考察するとともに、作者が『史記』の第一巻である「五帝本紀」と書名「史記」を並べて記した理由を考察した。

第三部 表現の基層

第一章 『枕草子』「青ざし」、「ませざし」、「花や蝶や」の表現考

——「三条の宮におはしますころ」の章段を中心に——

第二章 『枕草子』「蚊の細声」の表現考

——「にくきもの」の章段を中心に——

第三章 『枕草子』「唐鏡のすこし暗き、見たる」の表現考

——「心ときめきするもの」の章段を中心に——

第四章 『枕草子』「月の窓より洩り」の表現考

——「九月二十日あまりのほど」の章段を中心に——

第五章 『枕草子』「朝にさる色」の表現考

——「雲は」の章段を中心に——

第六章 『枕草子』「春はあけぼの」の章段考

終章 漢文学受容の特徴と意義

「表現の基層」では、『枕草子』本文の基礎的な表現の背後にある漢籍の影響について論じたものである。従来の

注釈で、難解とされているところを改めて考証し、第五章から第十章まで、六つの章に分けて論じた。

第一章では、「三条の宮におはしますころ」の章段において「青ざし」というものと、中宮定子が書かれた和歌の中の「花や蝶や」について考察した。「青ざし」は「青麦」で作られた菓子ではなく、俗名「青刺」の「薊あざみ」という植物の葉草であること。また俗名である「青刺」の別名に「馬薊」(ませ)があることについて提出した。さらに定子が、当時流行していた『白氏文集』「感傷」の詩句「菱花蝶飛」を踏まえて、歌に詠み、自らを「菱花」に例え、周りの若い人々が蝶のように飛んで去るということをたとえた内容が盛りこまれた章段であることを論証した。

第二章では、「にくきもの」の章段を中心として、特に微細な蚊についての「蚊の細声」を考証した。その結果、『白氏文集』巻十二「感傷詩」における「蚊」の表現からの受容であった。この詩から、白楽天の親友の元稹が書いた「虫豸詩」とも繋がることを検証した。和歌、説話、物語、日記には、「蚊」の描写は極めて珍しい。しかし、清少納言は『枕草子』の中の幾つかの場面で援用している。漢詩文の精華を吸収して、その基盤から再構成していることに注目したい。

第三章「心ときめきするもの」の章段にある「唐鏡すこし暗き、見たる」の表現について考察し、唐の伝奇小説である『古鏡記』における暗い特徴を持つ「宝鏡」との関係を示した。引用された漢籍の内容と背景は『枕草子』の該当する章段の内容と背景と方向的に一致することが、『枕草子』における漢詩文を引用する特徴である。近年の研究動向として、仮名日記と唐代伝奇小説との関係が採り上げられ始めているが、『枕草子』における唐の伝奇小説に関する指摘は本論が初めてである。

第四章では、「九月二十日あまりのほど」の章段にある「月の窓より洩り」の表現と「歌詠む」について考察した。まず、漢語である「窓」を読まれた和歌がないことから、「窓」の表現史を検証し、作者が様々な漢詩文によって、

「和」と「漢」の美意識を融合する新たな表現が創出されていることを証した。

第五章では、「雲は」の章段にある「朝にさる色」の表現について考察した。朝の雲の色に注目し、従来の指摘された漢籍の典拠ではなく、唐の時代に編纂された類書に見える沈約の詩の「朝雲曲」のテーマと合致することを指摘することにより、漢籍の影響についての新たな指摘を行った。

第六章では、初段「春はあけぼの」の章段を考察した。具体的には対的な表現や、春、夏、秋、冬の四段を分ける理由について、漢文学による対句の表現や唐の新体の賦（第二部の第三章の第一節に述べた）の規則を対照し、それらが中国詩格と合致する可能性を提示した。

終章では、各章によつて考察した結果をまとめ、改めて四系統『枕草子』本文における漢文学の受容の特徴及び本論の考察の意義と価値を述べることを通じて、標題に掲げた『枕草子』における漢文学の受容のあり方とその研究手法の有効性についてまとめた。

そして、以上のことを通じて、『枕草子』における漢文学の受容は、単に詩句の出典だけではなく、女性の目による観察、女手で記した真名の世界は、高級貴族の高踏的な教養を持つ精神生活において「和」と「漢」を融合した美意識の表現であるといえることを示した。

〔注〕

- (1) 岸上慎二『清少納言伝記攷』（新生社 一九五八）「二〇〇〇 宮仕終止 35 一〇〇一 宮仕退出 36」五一
四〇五四五頁。

- (2) 伊藤博「構成と原形 寛弘五年（一〇〇八）〜寛弘七年（一〇一〇）」『紫式部日記』新日本古典文学大系（岩

波書店 一九八九）五四四頁。

- (3) 清少納言の初め宮仕えの時期について、正暦二年、三年などの諸説がある。ここで岸上慎二の考証に従って、正暦四年（九九三）とする。岸上慎二『清少納言伝記攷』（新生社 一九五八）五一三頁。
- (4) 滝川幸司『天皇と文壇』——平安前期の公的文学——（和泉書院 二〇〇七）一二四頁。
- (5) 池田亀鑑『清少納言枕草子に關する異本の研究』（至文堂 一九二八）二頁。
- (6) 陽明文庫蔵『枕草子・徒然草』（思文閣 一九七五）三四八頁。
- (7) 学習院大学蔵『能因本枕草子』（笠間書院 一九九五）二二九～二三〇頁。
- (8) 高野辰之旧蔵『堺本枕草子』（古典文庫 一九九六）三〇一～三〇二頁。
- (9) 中西健治「伝能因所持本」『枕草子大事典』（勉誠出版 二〇〇一）七五頁。
- (10) この問題に關して、代表的な論文は、川口久雄「枕草子における十列雜纂の影響」『国語』（東京教育大学 一九五三）及び「李商隱雜纂と清少納言枕草子について」『東方学論集』（東方学会 一九五四）である。
- (11) 田中重太郎「枕冊子に投影した海外文学」『国文学』第六卷第三号 昭和三十六年（一九六一）四八頁。
- (12) 大曾根章介「『枕草子』と漢文学」『国文学』第十二卷第七号、学燈社、昭和四十二年（一九六七）五三頁。
- (13) 相田満「『枕草子』漢故事考——『蒙求』故事とのかかわりを通して——」『東洋文化』第七五卷（一九九五）一八九頁。また、相田満氏の①「幼学・注釈の世界と説話——『蒙求』・『職原抄』の注釈学を例として」『説話文学研究』（一九九九）。②「幼学書のひろがり——台湾故宫博物院蔵平安朝古鈔本『蒙求』の意義と特質」『アジア遊学』（二〇〇四）がある。
- (14) 矢作武「枕草子と漢籍」『枕草子大事典』（勉誠社 二〇〇一）五九九頁。

第一部

『枕草子』における漢文学受容の総覧

第一部 『枕草子』における漢文学受容の総覧

凡 例

本部では、『枕草子』と漢文学に関わる箇所を明示させるために、四系統（三卷本、能因本、前田家本、堺本）『枕草子』本文を対照させた表を一覧にした示した。

一 参照した四系統の底本は、以下の通りである。三卷本（第一類）は、陽明文庫蔵『枕草子』、第二類は、相愛大学、相愛女子短期大学図書館蔵『枕草子』、能因本は、学習院大学蔵三条西家旧蔵本『枕草子』、前田家本、尊経閣蔵『枕草子』、堺本は、高野辰之旧蔵『枕草子』である。

一 引用に使用した本文は、以下の通りである。三卷本、松尾聰・永井和子校注『枕草子』新編日本古典文学全集（小学館、二〇〇四）、能因本、松尾聰・永井和子校注『枕草子』日本古典文学全集（小学館、一九七九）、前田家本、田中重太郎校注『前田家本枕冊子新註』（古典文庫、一九七二）、堺本、速水博司『堺本枕草子』（有朋堂、一九九〇）。

一該当する章段番号は、右側に「第〓段」のように記し、長文の章段の中に漢文学との関係が複数ある場合は、章段号を省略して示した。

一参照した漢詩文の主な文献は、次の通りである。編集者を省略し、出版社と年次を示した。

- 『和刻本正史』（汲古書院 一九七二）
- 『和刻本漢詩集成』（汲古書院 一九七四～一九七五）
- 『和刻本漢籍文集』（汲古書院 一九七七～一九七九）
- 『和刻本類書集成』（汲古書院 一九七六～一九七七）
- 『和刻本諸子大成』（汲古書院 一九七六～一九七七）
- 『和刻本經書集成』（汲古書院 一九七五～一九七七）
- 『和刻本漢籍隨筆集』（汲古書院 一九七二～一九七八）
- 『新釈漢文大系』（明治書院 一九六〇～一九九七）
- 『蒙求古注集成』（汲古書院 一九八八～一九九〇）
- 『台灣故宮博物院藏本『蒙求』（国文学研究資料館、二〇〇七）
- 『和漢朗詠集古注集成』（大学堂書店、一九八九）
- 『賦譜』（五島美術館所蔵 影印資料）
- 『史記會注考證』（宏業書局（台灣） 一九九八）
- 『史記』（中華書局 一九八二）

- 『漢書』（中華書局 一九六二）
『後漢書』（中華書局 一九六五）
『三國志』（中華書局 一九八二）
『晉書』（中華書局 一九七四）
『隋書』（中華書局 一九七三）
『旧唐書』（中華書局 一九七五）
『新唐書』（中華書局 一九七五）
『宋書』（中華書局 一九七四）
『全唐詩』（中華書局 一九六〇）
『全唐文』（中華書局 一九八三）
『文苑英華』（中華書局 一九六六）
『諸子集成』（中華書局 一九五四）
『十三經注疏』（大化書局（台灣） 一九八二）
『文選』（上海古籍出版社 一九八六）
『白居易集箋校』（上海古籍出版社 一九八三）
『李白集校注』（上海古籍出版社 一九九八）
『杜詩鏡銓』（上海古籍出版社 一九九八）
『北堂書鈔』（清華大學出版社 二〇〇三）

『初學記』（清華大学出版社 二〇〇三）

『藝文類聚』（清華大学出版社 二〇〇三）

『白氏六帖』（清華大学出版社 二〇〇三）

一 「漢文学との関係」欄の「＊」を付けた部分は、本論で初めて指摘した箇所である。引用した漢文は旧字体で表記し、書名等は、新字体に表記した。また、先行の研究に拠る漢文学に関する論考は、本部の〔注〕（C）を参照されたい。

三卷本

第一段

春はあけぼの。や
よやうしろくなり
ゆく山ぎは、すこし
あかりて、紫だちた
る雲のほそくたな
びきたる。

能因本

第一段

春はあけぼの。や
うやうしろくなり
ゆく山ぎは、すこし
あかりて、紫だちた
る雲のほそくたな
びきたる。

前田家本

第一段

春は、あけぼの。
空はいたく霞みた
るに、やうやうしろ
くなりゆく山ぎは
のすこしづづあか
みて、紫だちたる雲
のほそくたなびき
たる。

堺本

第一段

春は、あけぼのの
空。いたくかすみた
るに、やうやうしろ
くなりゆく、山のは
のすこしづつあか
みて、むらさきだち
たるくものほそく
たなびきたるも、い
とおかし。

漢文学との関係

『白氏文集』三一「早

春憶蘇州寄夢得」

吳苑四時風景好

就中偏好是春天

霞光曙後殷似火

草色晴来嫩似煙

『初学記』四「天部」

「隋蕭慆奉和元日詩」

天門拂曙開

瑞雲生寶鼎

『芸文類聚』七

「山部慶雲」

望氣者云

蔣山上有紫雲

時時晨見

三巻本

夏は夜。月のころ
はさらなり、闇もな
ほ、螢のおほく飛び
ちがひたる。また、
ただ一つ二つなど、
ほのかにうち光り
て行くもをかし。雨
など降るもをかし。

能因本

夏は夜。月のころ
はさらなり、やみも
なほ螢飛びちがひ
たる。雨などの降る
さへをかし。

前田家本

夏は夜。月のころ
はさらなり、闇もほ
たるのほそく飛び
ちがひたる。また、
ただ一つ二つなど
ほのかにうち光て
ゆくもをかし。雨な
どの降るさえをか
し。

堺本

夏は、よる。月の
ころはさらなり。や
みもなを。ほたるお
ほくとびちがひた
る、夕ただひとつ
たつなどほのかに
うちひかりてゆく
も、いとおかし。あ
めのだやかにかに
りたるさへこそ、お
かしけれ。

漢文学との関係

『初学記』三、
『芸文類聚』三
「歳時部 夏」
「梁蕭子範夏夜獨坐詩」
蟲音亂階草
螢光繞庭木
『白氏文集』一四
「禁中聞蛩」
夜深無月明
西窗獨聞坐
『白氏文集』二二
「聞夕」
一聲早蟬發
數點新螢度

三巻本

秋は夕暮。夕日

のさして山の端いと近うなりたるに、
からすのねどころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まいで雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにならず。

能因本

秋は夕暮。夕日花

やかにさして山ぎはいと近くなりたるに、鳥のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど、飛び行くさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など。

前田家本

秋はゆふぐれ。ゆ

ふ日のきはやかにさして、山の端いと近くなりたるに、鳥の寝にゆくとて、三つ四つ・二つ三つなど飛びゆくさへあはれなり。まして、雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、をかし。日の入りはてて、風のおと・虫の音など、はたいふべきにあらず、めでたし。

堺本

秋は、ゆふぐれ。

ゆふ日のきはやかにさして、山のはちかくなりたるに、からすのねに行とて、みつよつ、ふたつみつなど、とびゆくも、あはれなり。まして、かりのおほくとびつれたる、いとちひさくみゆるは、いとおかし。日いりはて後、かぜのをと、むしのこゑなどは、いふべきにもあらずめでたし

漢文学との関係

『白氏文集』巻二六

「秋思」

夕照紅於燒

晴空碧勝藍

雁思来天北

砧愁滿水南

『白氏文集』巻二九

「秋日与張賓客舒著

作同遊龍門醉中狂歌」

秋天高高秋光清

秋風嫋嫋秋虫鳴

嵩峰余霞錦綺卷

伊水細浪鱗甲生

『白氏文集』巻一〇

「送兄弟迴雪夜」

对雪画寒灰

残灯明復滅

三巻本

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

能因本

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜などのいと白く、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

前田家本

冬は、つとめて。雪の降りたるはいふべきならず。霜などのいと白く、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこし、炭など持てわたるもつきづきし。昼になりて、やうやうぬるくゆるびもてゆけば、雪も消え、炭櫃・火桶も白き灰がちに消えなりぬるはわろし。

堺本

冬は、つとめて。雪のふりたるには、さらにもいはず。霜のいとしろきも。またさらねど、いとさむきに、火などいそぎおこして、すみもてありきなどするみるも、いとつきづきし。ひるになりぬれば、やうやうぬるくゆるびもていきて、ゆきもきえ、すびつ・火をけのひもしろきはいがちになりぬれば、わろし。

漢文学との関係

灰死如我心

雪白如我髮

所遇皆如此

頃刻堪愁絶

*『賦譜』（古本）

（五島美術館蔵）

「新賦」

凡賦体分段

各有所帰

但古賦段

或多或少

若『登楼』

三段

『天台』

四段之類也

至今新体

分為四段

三卷本

第三段

正月一日は、まいて空のけしきうらうらとめづらう、霞みこめたるに、世にありとある人は、みな姿、かたち心こにつくろひ、君をもわれをいはいなどしたる、さまことにかし。

能因本

第三段

正月一日は、まして空のけしきもうらうらとめづらしく、霞みこめたるに、世にある人は、姿、かたち心こにつくろひ、君をもわが身をもいはいなどしたる、さまことをかし。

前田家本

第一九七段

正月一日は空のけしきもうららかに霞みわたりて、目のうちつけによろづめづらしく見なさるるこそをかしけれ。「中略」、君をも身をも、こと忌みしつつ、ことにあらためいはひたるけしきども、いとをかし。

堺本

第一八八段

正月ついたちには、空のけしきもうららかにすみわたりて、めのうちつけに、萬めづらしく見なさるるこそ、おかしけれ。「中略」あらぬさまにとつくろひたててこといみしつつ、ことにあらためなしたるけしきども、いとをかし。

漢文学との関係

『初学記』卷三

「歳時部 元日」

崔寔四民月令曰

正月一日是曰正日

『白氏文集』卷三四

「早春持齋答皇甫十見

贈」

正月晴和風景新

紛紛已有醉遊人

帝城花笑長齋客

三十年來負早春

三巻本

七日、雪間の若菜
摘み、青やかにて、
例は、さしも、さる
もの目近からぬ所
に、もてさわぎたる
こそをかしけれ。白
馬見にとて、里人は
車清げにしたてて
見に行く。中御門の
戸闕、引き過ぐるほ
ど、頭一所にゆるぎ
あひ、さし櫛も落ち、
用意せねば、折れな
どして笑ふもまた
をかし。

能因本

七日、雪間の若菜
摘み青やかに、例は、
さしも、さるもの目
近からぬ所に、もて
さわぎ、白馬見むと
て、里人は車清げに
したてて、見に行く。
中御門の戸闕、引き
出づるほど、頭ども
一所にまろびあひ
て、さし櫛も落ち、
よそいりなど、わづ
らふもをかし。

前田家本

七日は、雪間の若
菜、青やかに摘み出
でつつ、「中略」
白馬見るとて、里
人は車きよげにし
たてつつ行く。中の
御門のとじきみひ
き入るるほどに、か
しらどももひとと
ころにゆきあひて、
さし櫛も折れ、落ち
などしたるを、かた
みに笑ふも、またを
かし。

堺本

なぬかのひは、ゆ
きのまのわかなつ
みいでつつ、「中略」
あをむま見ると
て、さと人は車きよ
げにしたてつつゆ
く。なかのみかどの
とじきみひきいる
ほどに、かしらど
ももひとところに
ゆきあひてさしぐ
しもおれ、をちなど
したるを、かたみに
わらふも、またをか
し。

漢文学との関係

『初学記』巻四

『芸文類聚』巻四

「歳時部 人日」

荊楚歳時記曰 正月

七日為人日

七種菜為羹

董勛問禮俗曰

一日為鶏

二日為狗

三日為猪

四日為羊

五日為牛

六日為馬

七日為人

李充登安仁峯銘

曰 正月七日 厥日惟人

策我良駒 陟彼安仁

三巻本

いかばかりなる
人、九重をならすら
むなど思ひやらる
るに、うちにて見る
は、いとせばきほど
にて、舎人の顔のき
ぬにあらはれ、ま
くとに黒きに、白き
もの行きつかぬ所は、
雪のむらむら消え
残りたる心地して、
いと見苦しく、

能因本

いかばかりなる
人、九重をならすら
むと思ひやらるる
に、うちにも、見る
はいとせばきほど
にて、舎人が顔のき
ぬもあらはれ、白き
ものの行きつかぬ
所は、まことに黒き
庭に雪のむら消え
たる心ちし、いと見
苦し。

前田家本

いかばかりなる
人、九重をかく立ち
ならすらむと思ひ
やるをかし。〔中略〕
いとせばきほどに
舎人のかほのきぬ
きもあらはれ、白き
物のゆきつかぬと
ころは、まことに黒
き庭に雪のむらむ
ら消えのこりたる
こゝちして、いと見
ぐるし。

堺本

いかばかりなる
人、ここのえをかく
たちならすらんと、
おもひやらるかし。

漢文学との関係

『白氏文集』卷十二
「長恨歌」
九重城闕煙塵生
千乘萬騎西南行
『白氏文集』卷七
「早春」
雪消冰又釋
景和風復暄
滿庭田地溼
薺葉生牆根
官舍悄無事
日西斜掩門
不開莊老卷
欲與何人言

三卷本

十五日、節供まゐりすゑ、かゆの木ひき隠して、家の御達、女房などのうかがふを、打たれじと用意して、常にうしろを心づかひしたるけしきもいとをかしきに、いかにしたるにかあらむ、打ち当てたるは、いみじう興ありて、うち笑ひたるは、いとはええし。

能因本

十五日は餅かゆの節供まゐり、かゆの木ひき隠して、家の子の君達、若き女房のうかがふ、打たれじと用意して、常にうしろに心づかひしたるけしきもをかしきに、いかにしてけるにかあらむ、打ち当てたるは、いみじう興ありと、うち笑ひたるも、いとはええし。

前田家本

十五日には、もちの節供まゐり、粥の木ひき隠しつつ家の君達、若き女房ども打たむとうかがふを、打たれじと用意して、つねにうしろを心づかひしたるけしきどもも、をかし。

堺本

十五日には、もちのかゆのせくまいり、かゆべらひきかくしつつ、家のきむだちわかき女ぼうどもうかがふを、うたれじとよういして、つねにうしろを心づかひしたるけしきどもも、をかし。

漢文学との関係

『初学記』巻四

「歳時部」

正月十五日

玉燭宝典曰

正月十五日

作膏粥以祠門戸〔中

略〕

以楊枝挿門

随楊枝所指

仍以酒脯飲食及豆粥

挿箸而祭之

『芸文類聚』巻四

「歳時部」

荊楚歳時記曰

風俗望日

以楊枝挿門

随楊枝所指而祭

三巻本

三月三日は、うら
うらとかに照りた
る。桃の花の今咲き
はじむる。柳などを
かしきこそさらな
れ。それはまだ、ま
ゆにこもりたるは
をかし。

能因本

三月三日、うらう
らとのどかに照り
たる。桃の花の今咲
きはじむる。柳など
いとをかしくこそ
さらなれ。それもま
た、まゆにこもりた
るこそをかしけれ。

前田家本

第一九九段

三月三日は、のど
やかに照りたるこ
そよけれ。桃の花、
いま咲きはじめた
る。柳など、いとを
かし。それもまゆに
こもりたるこそを
かしけれ。

堺本

第一八九段

三月三日は、のど
やかにてりわたり
たるこそよけれ。も
もの花のいまさき
はじめたる。やなぎ
など、おかし。

漢文学との関係

『白氏文集』卷一〇

「春晚寄微之」

三月江水闊

悠悠桃花波

年芳與心事

此地共蹉跎

南國方譴謫

中原正兵戈

眼前故人少

頭上白髮多

通州更迢遞

春盡復如何

『白氏文集』卷一二

「長恨歌」

太液芙蓉未央柳

芙蓉如面柳如眉

三卷本

第五段

思はむ子を法師
になしたらむこそ、
心苦しけれ。ただ木
の端などのやうに
思ひたるこそ、いと
いとほしけれ。精進
物のいとあしきを
うち食ひ、寝ぬるを
も、

能因本

第五段

思はむ子を法師
になしたらむこそ
は、いと心苦しけれ。
さるはいとたのも
しきわざを、ただ木
の端などのやうに
思ひたらむ、いとい
とほし。精進の物の
あしきを食ひ、いぬ
るをも言ふ。

前田家本

第二六八段

思はむ子を法師
になさむこそいと
心ぐるしけれ。同じ
人ながら烏帽子・冠
のなきばかりに、木
の端などのやうに
人の思ひたるよ。
精進物のいとあ
はれなり。

堺本

第二四三段

おもはんこそほ
うしになさんこそ、
いと心ぐるしけれ。
をなじ人ながらゑ
ぼうし・かうぶりの
なきは、かぎりなき
のはしなどのやう
に人のおもひたる
よ。

漢文学との関係

*『入唐求法巡礼行記』

卷一 承和五年

尋常著棉襖子

嶺上谷裏

樹木端長

無一曲戾之木

『旧唐書』一

高祖李淵

守戒律者

〔中略〕

給衣食

勿令乏短

其不能精進

戒行有闕

不堪供養者

並令罷遣

各還桑梓

三卷本

第六段

大進生昌が家に

「中略」「家のほど、身のほどに合はせて侍るなり」といふ。「されど門の限りを高う造る人もありけるは」と言へば、「あらおそろし」とおどろきて、「それは于定国が事にこそ侍るなれ。古き進士などに侍らずは、うけたまはり知るべきにも侍らざりけり。」

能因本

第六段

大進生昌が家に

「中略」「家のほど、身のほどに合はせて侍るなり」といふ。「されど、門の限りを高く造りける人も聞ゆるは」と言へば、「あなおそろし」とおどろきて、「それは于公が事にこそ侍るなれ。古き進士などにはべらずは、うけたまはり知るべくも侍らざりけり。」

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『漢書』卷七一

始定国父于公 其間

門壞 父老方共治之 于

公謂曰 少高大閭門 令

容駟馬高蓋車 我治獄

多陰德 未嘗有所冤 子

孫必有興者

『蒙求』標題85

「于公高門」

前漢于定国字曼倩

東海郯人 其父于公〔中

略〕立祠始其間門壞〔中

略〕

『白氏文集』卷六

「酬吳七見寄」

莫忘蜉蝣內

進士有同年

三巻本

第七段

上に候ふ御猫は、かうぶりにて、命婦のおとどとて、いみじうをかしければ「中略」命婦のおとど食へ」と言ふに、まことかとして、痴れ者は走りかかりたれば、おびえまどひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の御前に、上おはしますに、「中略」「この翁まろ打ちてうじて、犬島へつかはせ、ただいま」と仰らるれば、

能因本

第七段

うへに候ふ御猫は、かうぶり給はりて、命婦のおとどとて、いとをかしければ、「中略」命婦のおとど食へ」と言ふに、まことかとして、痴れ者は走りかかりたれば、おびえまどひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の間に、うへはおはしますに「中略」「この翁まろ打ちてうじて、犬島にながしつかは」と仰せらるれば、

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『周礼』巻四三

「秋官司寇」

凡命夫命婦

不躬坐獄訟

『白氏文集』卷一

「過元家履信宅」

雞犬喪家分散後

林園失主寂寥時

落花不語空辭樹

流水無情自入池

風蕩醺船初破漏

雨淋歌閣欲傾欹

前庭後院傷心事

唯是春風秋月知

三巻本

あつまり狩りさわ
ぐ。「中略」犬は狩
り出でて、滝口など
して、追ひつかはし
つ。

「あはれ、いみじ
うゆるぎありきつ
るものを。三月三日、
頭弁の、柳かづら
せさせ、桃の花を挿
頭にさせ、桜腰に
さしなどして、「中
略」

何ぞの犬のかく久
しう鳴くにかあら
は、ただいま」

能因本

あつまりて狩りさ
わぐ「中略」犬は狩
り出でて滝口など
して、追ひつかはし
つ。

「あはれ、いみじ
くゆるぎありきつ
るものを。三月三日、
頭弁、柳のかづらせ
させ、桃の花かざし
にさせ、梅腰にさ
させなどして、あり
かせたまひし。かか
る目見むとは思ひ
かけけむや」と、あ
はれがる。「中略」

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『潜夫論』巻五

「賢難」

一犬吠形

百犬吠声

李至（九七四～一〇〇〇）

一「桃花犬歌呈修

史錢侍郎」

宮中有犬桃花名

絳繪罔頸懸金鈴

先皇為愛馴且昇

指顧之間知上意

珠帘未卷扇未開

桃花揺尾常先至

夜静不离香砌眠

朝飢只傍御床餒

彩云路熟不劳牽

三巻本

〔中略〕「あはれ昨日翁まろをいみじうも打ちしかな。死にけむこそあはれなれ。〔中略〕」涙をただ落しに落すに、いとあさましきは、翁まろにこそはありけれ。〔中略〕なほあはれがられて、ふるひ鳴き出でたりしこそ、世に知らず、をかしくあはれなりしか。人などに言はれて、泣きなどはすれ。

能因本

〔中略〕「あはれ昨日翁まろをいみじう打ちしかな。死にけむこそかなしけれ。〔中略〕」この寝たる犬ふるひわななきて、涙をただ落しに落す。〔中略〕ふるひ鳴き出でたりしほどこそ、世に知らず、をかしくあはれなりしか。人々にも言はれて、なきなどす。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

瑶草風微有時吠
无何軒后鑄鼎成
忽遺弓劍弃寰瀛
迢迢松闕伊川上
遠愛龍輜十数程
两毗漣漣似垂淚
骨見毛寒頓憔悴
万人見者倍傷心
微物感恩犹若是
韓廬備狩何足嘉
西旅充庭豈為瑞
聞君奉詔修実録
一字為褒応不曲
白魚赤雁且勿書
愿君書此懲浮俗

三卷本

第八段

正月一日、三月三日はいとうららかなる。

五月五日は、

曇りくらしたる。

七月七日は、曇り

くらしで、夕方は晴れたる空に、月よと明かく、星の数も見えたる。

能因本

第八段

正月一日、三月三日はいとうららかなる。

五月五日は、

曇りくらしたる。

七月七日は、曇り

て、七夕晴れたる空に、月いと明かく、星の姿も見えたる。

前田家本

第四段

正月一日・三月三日、いと空うららかなる。

五月五日は、やが

て日一日曇りくらしたる。

七月七日は、つと

めてがたまでは曇りて、夕つかた晴れたる。暮れはつれば、月いと明かく、星の姿あらはに見えたる。

堺本

第一〇六段

正月の一日、三月の三日、うららかにてりたる。

五月五日は、やが

てひしひしとくもりくらしたる。

七月七日は、つと

めて、ひるまではくもりて、ゆふかたよりはれと、やうやう空にくもなくなりもて行て、くれはつれば、月いとあかくてりてり、まして、夜ふくるままにほすたるこそをかけれ。

漢文学との関係

『初學記』卷四「歳時

部」正月一日 謂正日

三月三日 土人並出水

渚 五月五日端午

『全唐詩』卷二一六

杜甫「麗人行」

三月三日天氣新

長安水邊多麗人

『白氏文集』卷三三

「三月三日」

畫堂三月初三日

絮撲窗紗燕拂簷

『白氏文集』卷一二

「長恨歌」

七月七日長生殿

夜半無人私語時

三巻本

九月九日は、暁が
たより雨すこし降
りて、菊の露もこち
たく、おほひたる綿
などもいたく濡れ、
うつしの香ももて
はやされて、つとめ
てはやみにたれど、
なほ曇りて、ややも
せば降り立ちぬべ
く見えたるもをか
し。

能因本

九月九日は、暁が
たより雨すこし降
りて、菊の露もこち
たうそぼち、おほひ
たる綿など、もては
やされたる。つとめ
てはやみになれど、
曇りて、ややもすれ
ば降り落ちぬべく
見えたる、をかし。

前田家本

九月九日は、あか
つきがたより雨す
こし降りて、菊の露
もこちたく、おほひ
たる綿もいたうぬ
れて、うつしの香な
どしてもてはやさ
れたる。つとめては
やみにたれど、空は
なほ曇りて、やゝも
せば降りぬべく見
ゆる、をかし。

堺本

九月九日は、あか
つきがたより、雨す
こしふりて、きくの
つゆもこちたくを
ほひたるわたなど
いたうぬれたるぞ、
うつしのかまさり
てをかしき。つとめ
てはやみたれど、空
はなをくもりて、や
もせばふりをち
ぬべくみえたる、い
とをかし。

漢文学との関係

『初学記』巻四

「歳時部」九月九日

漢武帝宮人

佩茱萸食

餌飲菊花酒

『芸文類聚』巻四

「歳時中」九月九日

梁簡文帝

九日侍皇太子樂遊苑

詩曰

離光麗景

神英春裕

三卷本

第九段

よろこび奏する
こそをかしけれ。う
しろをまかせて、御
前の方に向ひて立
てるを。拝し舞踏し、
さわぐよ。

能因本

第九段

よろこび奏する
こそをかしけれ。う
しろをまかせて、笏
取りて、御前の方に
向ひて立てるを。拝
し舞踏し、さわぐよ。

前田家本

第二三五段

よろこび申すこ
そをかしけれ。うし
ろをまかせて、笏と
りて御前のかたに
むかひたるを。拜し、
舞踏し、さわぐよ。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『全唐詩』卷一七五

李白

「魯郡堯祠送吳五之

瑯琊」

送行奠桂酒

拜舞清心魂

『白氏文集』卷三

「新樂府」

「馴犀」

一朝得謁大明宮

歡呼拜舞自論功

『全唐詩』卷七〇四

黃滔

「送翁拾遺」

拜舞吾君後

青雲更有梯

三卷本

第一〇段

今内裏の東をば、
北の陣といふ。梨の
木のはるかに高き
を、「いく尋あらむ」
など言ふ。権中将
「もとよりうち切
りて、定澄僧都の枝
扇にせばや」との
たまひしを。山階寺
の別当になりて、よ
ろこび申す日、近衛
司にて、この君の出
でたまへるに、

能因本

第一〇段

今内裏の東をば、
北の門とぞいふ。櫓
の木のはるかに高
きが立てるを、常に
見て、「いく尋あら
む」など言ふに、権
中将の、「もとより
うち切りて、定澄僧
都の枝扇にせさせ
ばや」とのたまひし
を。山階寺の別当に
なりて、よろこび申
すの日、近衛づかさ
にて、この君の出で
たまへるに、

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷一五

「題盧祕書夏日新栽

竹二十韻」

湘竹初封植

盧生此考槃

久持霜節苦

新托露根難

等度雖當戶

疏稠要滿闌

買憐分薄俸

栽稱作閒官

葉翦藍羅碎

莖抽玉琯端

幾聲清淅瀝

一簇綠檀欒

未夜青嵐入

先秋白露團

三卷本

高き履子をさへは
きたれば、ゆゆうし
高し。出でぬる後に、
「などその枝扇を
ば持たせたまはぬ」
と言へば、「物忘れ
せぬ」と笑ひたまふ。
「定澄僧都に桂な
し。すくせ君に相な
し」と言ひけむ人こ
そをかしけれ。

能因本

高き履子をさへは
きたれば、ゆゆうし
く高し、出でぬる後
こそ、「などその枝
扇は持たせたまは
ぬ」と言へば、「物
忘れせず」と笑ひた
まふ。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

熨手弄琅玕
韻透窗風起
陰鋪砌月殘
炎天聞覺冷
窄地見疑寬
梢動勝搖扇
枝低好挂冠
碧籠煙幕幕
珠灑雨珊瑚
晚籀晴雲展
陰芽蟄虺蟠
愛從抽馬策
惜未截魚竿
松韻徒煩聽
桃夭不足觀
〔後略〕

三卷本

第一三段

峰は ゆづるはの
嶺。あみだの峰。い
や高の峰。

能因本

第一三段

峰は つるはの嶺。
あみだの峰。いや高
の峰。

前田家本

第一五段

峯は ゆづるはの
峯。弥高の峯。阿弥
陀の峯。

堺本

第一四段

みねは、ゆづるは
のみね。あみだのみ
ね。いやたかのみね。

漢文学との関係

『論語』卷九

「子罕」

顔淵喟然

歎曰

仰之弥高

鑽之弥堅

三卷本

第二一段

清涼殿の丑寅の隅の、北のへだてなる御障子は、荒海のかた、生きたる物どものおそろしげなる、手長足長などをぞかきたる。上の御局の戸を押し開けたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑、

能因本

第二〇段

清涼殿の丑寅の隅の、北のへだてなる御障子には、荒海のかた、生きたる物どものおそろしげなる、手長足長をぞかかれたる。うへの御局の戸押しあけたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふほどに、

前田家本

第三一〇段

清涼殿の丑寅の隅の北の隔なる御障子には、荒海のかた、生きたるものどものおそろしげなる、手長・足長などをぞ描かれたる。うえへの御局の戸おしあけたれば、つねに目に見ゆるを、にくみなどして笑ふほどに、

堺本

ナシ

漢文学との関係

『山海経』卷六

長臂国在其東

捕魚水中

両手各操一魚

『山海経』卷七

長股之國

在雄常北

被髮一曰

長脚女御物

御妻也

女御掌叙

御于王之燕寝

三巻本

昼の御座の方に
は、おものまゐる足
音高し。警蹕など、
「おし」と言ふ声聞
ゆるも、うらうらと
のどかなる日のけ
しきなど、いみじう
をかしきに、果ての
御盤取りたる蔵人
まゐりて、おもの奏
すれば、中の戸より
わたらせたまふ。

能因本

昼の御座の方に、
おものまゐる足音
高し。けはひなど、
「おしおし」と言ふ
声聞ゆ。うらうらと
のどかなる日のけ
しき、いとをかしき
に、果ての御盤持た
る蔵人まゐりて、お
もの奏すれば、中戸
よりわたらせたま
ふ。

前田家本

昼の御座のかた
に御膳まゐる足音
も高し。けはひなど、
「おしおし」といふ
こゑ聞ゆ。うらうら
とのどかなる日の
けしき、いみじうを
かしきに、はての御
盤とりたる蔵人ま
ゐりて、御膳奏すれ
ば、中の戸よりわた
らせたまふ。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『漢書』卷一〇

「本紀」成帝

白衣組幘 单騎出入

市里 不復警蹕

『漢書』卷四四

「列伝」淮南衡山濟北

王北王伝

厲王以此歸國益恣

不用漢法 出入警蹕 稱

制 自作法令 數上書不

遜順

『三国志』卷一

魏書 魏書武帝曹操

紀第一夏四月 天子命

王設天子旌旗出入稱警

蹕

三卷本

陪膳つかうまつる
人の、をのこどもな
ど召すほどもなく
わたらせたまひぬ。

「御硯の墨すれ」と
抑せらるるに、目は
そらにて、ただおは
しますをのみ見た
てまつれば、ほとつ
ぎめもはなちつべ
し。白き色紙押した
たみて、「これにた
だいまおぼえむ古
きこと一つづつ書
け」と抑せらるる。

能因本

陪膳つかまつる人
の、をのこどもなど
召すほどもなくわ
たらせたまひぬ。

「御硯の墨すれ」と
抑せらるるに、目は
そらにのみ、ただお
はしますをのみ見
たてまつれば、ほと
ほとつぎめもはな
ちつべし。白き色紙
を押したたみて、
「これにただいま
おぼえむ古ごと書
け」と抑せらるるに、

前田家本

陪膳つかうまつる
人の、男どもなど召
すほどもなくわた
らせたまひぬ。「御

硯の墨磨れ」とおほ
せらるるに、目はそ
らにて、ただおはし
ますをのみ見たて
まつれば、つきめも
もはなちつべし。白
き色紙おしたたみ
て、「これにただい
まおぼえむふるこ
と一つづつ書け」と
おほせらるるに、

堺本

ナシ

漢文学との関係

『全唐詩』卷一六七

李白

「草書歌行」

少年上人号懷素

草書天下称独歩

墨池飛出北溟魚

筆鋒殺盡中山兔

八月九月天氣涼酒

徒詞客滿高堂牋麻

素絹排數廂宣州石

硯墨色光

吾師醉後倚繩床須

臆掃盡數千張飄風

驟雨驚颯颯落花飛

雪何茫茫

〔後略〕

三巻本

ただいまの関白殿
の三位中将と聞え
けるとき、

しほの満ついつ

もの浦のいつもい

つも君をば深く思

ふはやわが

といふ歌の、末を、

『たのむはやわが』

と書きたまへりけ

るをなむ、いみじう

めで〔中略〕

能因本

ただいまの関白殿、
三位中将と聞えけ
るころ、

しほの満ついつ

もの浦のいつもい

つも君をば深く思

ふはやわが

といふ歌を、末を、

『たのむやはわれ』

と書きたまへりけ

るをなむ、いみじく

めでさせたまひけ

る〔中略〕

前田家本

ただいまの関白殿
の、三位中将と聞え
ける時、

潮の満ついつも

の浦のいつもいつ

も君をば深く思ふ

をやわが

といふ歌の、すゑを、

『たのむをやわが』

と書きたまへりけ

るをなむいみじう

めで〔中略〕

堺本

ナシ

漢文学との関係

『全唐詩』卷五七二

賈島

「寄顧非熊」

知君歸有處

山水亦難齊

猶去瀟湘遠

不聞猿狖啼

穴通茆嶺下

潮滿石頭城

獨立生遙思

秋原日漸低

三巻本

「村上の御時に、宣耀殿の女御と聞えけるは小一条の左の大殿の御むすめにおはしけると、誰かは知りたてまつらざらむ。

能因本

「村上の御時、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一条の左大臣殿の御むすめにおはしましければ、たれかは知りきこえざらむ。

前田家本

「村上の御時、宣耀殿の女御と申しけるは、小一条の左大臣殿の女におはしますと、誰かは知りきこえざらむ。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『後漢書』卷一〇

「皇后紀」

周礼王者立后

三夫人

九嬪

二十七世婦

八十一女御

以備内職焉

三巻本

第二段

生ひさまなく、
〔中略〕女房の従者、
その里より来る者、
長女、御厠人の従者、
たびしかはらとい
ふまで、いつかはそ
れを恥ぢ隠れたり
し。殿ばらなどは、
いとさしもやあら
ざらむ。

能因本

第二段

生ひさまなく、
〔中略〕女房の従者
ども、その里より来
る者ども、をさめ、
御厠人、たびしかは
らといふまで、いつ
かはそれを恥ぢ隠
れたりし。殿ばらな
どは、いとさしもあ
らやあらむ。

前田家本

第三一段

生ひさまなく、〔中
略〕従者ども、その
里より来る人、長女、
御厠までいつかは
それを恥ぢ隠れた
りし。殿ばらなどは、
さしもあらずやあ
らむ、それもあるか
ぎりは、さぞあるら
む。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『新唐書』卷二〇八

「宦者下 王守澄」

號人田元佐言有祕方

能化瓦礫為黃金詔

除號令 與董景珍

『全唐詩』卷四〇七

元稹

「獻榮陽公

詩五十韻」

瓦礫難追琢

芻蕘分棄捐

三巻本

第二三段

すさまじきもの
昼ほゆる犬。春の綱
代。三、四月の紅梅
の衣。牛死にたる牛
飼。ちご亡くなりた
る産屋。火おこさぬ
炭櫃、地火炉。博士
のうちつづき女兒
生ませたる。方違へ
に行きたるに、ある
じせぬ所。まして節
分などは、いとすさ
まじ。

能因本

第二二段

すさまじきもの
昼ほゆる犬。春の綱
代。三四月の紅梅の
衣。ちごの亡くなり
たる産屋。火おこさ
ぬ火桶、地火炉。牛
死にたる牛飼。博士
のうちつづき女子
うませたる。方違へ
に行きたるに、ある
じせぬ所。まして節
分はすさまじ。

前田家本

第一四三段

すさまじきもの
昼ほゆる犬。春の綱
代。三四月の紅梅の
衣。ちご亡くなりた
る産屋。火おこさぬ
炭櫃・火桶・地火炉。
持経者の、こゑなき。
牛死にたる牛飼。博
士のうちつづき女
子生ませたる。方違
に行きたるに、ある
じせぬ所。まして、
節分などは、いとす
さまじ。

堺本

第一四六段

すさまじきもの
はるのあじろ。ひる
ほゆるいぬ。四月ば
かりのこうばいの
きぬ。九月のしらが
さね。ひをこさぬす
びつ・ひをけ・わざ
とむかえたるに、ち
あらぬめのと。うし
しにたるしかひ。ち
ごなくなりたるう
ぶや。はかせの家の
おんなご。まして、
うちしきりてむま
れたるいふべきに
もあらずかし。

漢文学との関係

『白氏文集』卷一五

「渭村退居寄禮部崔侍

郎翰林錢舍人詩一百韻」

犬吠村胥鬧晚鳴織婦忙

『全唐詩』卷二

唐高宗「守歲」

薄紅梅色冷

淺綠柳輕春

『全唐詩』卷五四一

李商隱「行次西郊作

一百韻」

農具棄道旁

饑牛死空墩

『白氏文集』卷一二

「長恨歌」

生女勿悲酸

生兒勿喜歡

三巻本

ちこの乳母の、ただあからさまにとて出でぬるほど、とかくなくさめて、「とく来」と言ひやりたるに、「今宵はえまゐるまじ」とて、返しおこせたるは、すさまじきのみならず、いとにくくわりなし。

能因本

ちこの乳母の、「ただあからさま」とていぬるを、もとむれば、とかく遊ばしなくさめて、「とく来」と言ひやりたるに、「今宵はえまゐるまじ」とて、返しおこしたる、すさまじうのみにもあらず、にくさわりなし。

前田家本

ちこの乳母の、たゞあからさまとて出でぬるを、もとむれば、とかく遊ばし慰めて、「とく来」といひやりたるに、「今宵はえまゐるまじ」とてかへしおこせたる、すさまじうのみにもあらず、にくさもわりなし。

堺本

ちこのめのとのあからさまとていでぬれば、とかくあそばしまぎらはしくまつに、「こよひはえまいらじ」などいひたる、すさまじきのみならず、心地もいとむつかし。

漢文学との関係

『遊仙窟』一四

積愁腸已斷

懸望眼應穿

今宵莫閉戸

夢裏向渠邊

『白氏文集』卷二六

*「失婢」

宅院小牆庫

坊門帖榜遲

舊恩慚自薄

前事悔難追

籠鳥無常主

風花不戀枝

今宵在何處

唯有月明知

三巻本

驗者の、物の怪調
ずとて、いみじうし
たり顔に、独鈷や数
珠など持たせ、せみ
の声しぼり出だし
てよみゐたれど、い
ささか去りげもな
く、護法もつかねば、
あつまりゐ念じ
るに、男も女もあや
しと思ふに、時のか
はるまでよみ困じ
て、「さらにつかず。

能因本

驗者の、物の怪調
ずとて、いみじうし
たり顔に、独鈷や数
珠など持たせて、せ
み声にしぼり出だ
しよみゐたれど、い
ささか去りげもな
く、護法もつかねば、
あつまりて念じ
ゐたるに、男女あや
しと思ふに、時のか
はるまでよみ困じ
て、「さらにつかず。

前田家本

驗者の、もののけ
調ずとて、いみじく
したりがほに、独鈷
や数珠や持たせて、
せみごゑにしぼり
出だし読みゐたれ
ど、いさゝか去りげ
もなく、護法もつか
ねば、あつまりて念
じゐたる男女あや
しと思ふに、時のか
はるまで読み困じ
て、「さらにつかず。

堺本

げむじやのもの
のけうつすとて、い
みじうしたりがほ
に、とこ・ずずなど
うつるべきに人に
みたせて、せめごゑ
いだし、二ときばか
りかぢしいたるに、
いささかさりげも
なく、ごほふだにつ
かぬは、おほくのだ
らにをよみこうじ
て、「さらにつかず。
ふようなめり。

漢文学との関係

『漢書』卷八〇 「東
平思王宇」

諸子書

或反経術

非聖人

或明鬼神

信物怪

『史記』卷二七

天官書第五

古以來〔略〕

家占物怪

用合時應者

三巻本

立ちね」とて、数珠
取り返して、「あら
いと駭なしや」とう
ち言ひて、ざまに、
さくりあげ、
額より上
欠伸おのれよりう
ちして、寄り臥しぬ
る。いみじうねぶた
しと思ふに、いとし
もおぼえぬ人の、お
し起こしてせめて
物言ふこそ、いみじ
うすさまじけれ。

能因本

立ちね」とて、数珠
取り返して、「あな
いと駭なしや」とう
ち言ひて、ざまに、
かしらさく額より
上りあげて、欠伸を
おのれうちして、寄
り臥しぬる。

前田家本

立ちね」とて、数珠
とりかへして、「あ
な、いと駭なし」と
うちいひて、
額より
さくりあげて、あく
びをおのれうちし
て寄りふしぬる、い
とすさまじ。

堺本

はかなしや」とて、
とらせつるものと
もとりかへし、かみ
ざまにかしら
あいなくわれなが
やかにうちあくび、
うめきてひたひよ
りいただきざまに
さぐりあげてたち
ぬる、いといとをし
うすさまじげなり。

漢文学との関係

『儀礼』七
士相見禮第三
君子欠伸
問日之早晏
以食具告
『礼記』一曲禮
君子欠伸
撰杖屨
視日蚤莫
侍坐者請出矣
『白氏文集』卷一〇
「夢與李七庾三十三
同訪元九」
神合俄頃間
神離欠伸後

三卷本

第二六段

にくきもの「中略」また、酒飲みてあめき、口をさぐり、髯ある者は、それを撫で、杯、こと人に取りするほどのけしき、いみじうにくしと見ゆ。「また飲め」と言ふなるべし、身ぶるひをし、頭ふり、口わきをさへ引き垂れて、童べの「こう殿にまゐりて」などうたふやうにする。

能因本

第二五段

にくきもの「中略」また、酒飲みてあめきて、口をさぐり、髯あるは、それを撫でて、杯、人に取りするほどのけしき、いみじうにくし。なやみ、口わきさへ引き垂れ、「また飲め」など言ふなるべし、身ぶるひをし、童べの「こほ殿にまゐりて」などうたふやうにする。

前田家本

第一五〇段

にくきもの「中略」また、酒を飲みてあめき、口をさぐり、ひげあるは、それを撫でて、盃人にとらすほどのけしき、いみじうにくしとおぼゆ。「また飲め」などいふなるべし、身ぶるひもすかし、しぶりなやみ、口わきをさへひきたれて、わらはべの「こう殿まゐりて」などうたふやうにする。

堺本

第一四七段

にくきもの「該当する本文は」ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』巻八

「泛春池」

「中略」

主人過橋來

雙童扶一叟

恐汚清泠波

塵纓先抖擻

波上一葉舟

舟中一尊酒

「後略」

『白氏文集』巻二

「勸酒」

勸君一盃君莫辭

勸君兩盃君莫疑

勸君三盃君始知

面上今日老昨日

三卷本

物聞かむと思ふ
ほどに泣くちご。鳥
のあつまりて飛び
ちがひさめ鳴きた
る。しのびて来る人
見知りてほゆる犬。

能因本

物聞かむと思ふ
ほどに泣くちご。鳥
のあつまりて飛び
ちがひ鳴きたる。し
のびて来る人見知
りてほゆる犬は、打
ちも殺しつべし。

前田家本

もの聞かむと思
ふほどに泣くちご。
鳥のあつまりて飛
びちがひ鳴きさわ
ぎたる。しのびて来
る人見知り、吠ゆる
犬は、打ちも殺して
まほし。

堺本

ものきかむとす
るをり、かしがまし
くなくちご。からす
のあつまりて、さめ
きなくも、いとにく
し。しのびて来る人
みつけてほゆるい
ぬは、うちころさま
ほしくおぼゆ。

漢文学との関係

『全唐詩』卷一四七

劉長卿

「贈西鄰盧少府」

犬吠寒煙裏

鴉鳴夕照中

『白氏文集』卷七

「過李生」

〔中略〕

須臾進野飯

飯稻茹芹英

白甌青竹箸

儉潔無羶腥

欲去復裴回

夕鴉已飛鳴

何當重遊此

待君湖水平

〔後略〕

三巻本

ねぶたしと思ひ
て臥したるに、蚊の
細声にわびしげに
名のりて、顔のほど
に飛びありく。羽風
さへその身のほど
にあるこそいとに
くしけれ。

能因本

ねぶたしと思ひ
て臥したるに、蚊の
細声に名のりて、顔
のもとに飛びあり
くは、風さへさる身
のほどにあるこそ
いとにくけれ。

前田家本

ねぶたしと思ひ
て臥したるに、蚊の
ほそごゑにてわび
しげに名のりて、か
ほのほどに飛びあ
りく、風さへさる身
のほどにあるこそ
いとにくけれ。

堺本

ねぶたしとおも
ふに、かのほそごゑ
になのりて、かほの
本にとびありくだ
ににくきに、さるみ
のほどに、かぜさへ
いりてあたりたる
こそ、いとにくけれ。

漢文学との関係

『莊子』卷四「天運」

則天地四方易位矣蚊

虻嚙膚則通昔不寐矣

『白氏文集』卷一一

＊「蚊蠛」

巴徼炎毒早

二月蚊蠛生

啞膚拂不去

繞耳薨薨聲

斯物頗微細

中人初甚輕

如有膚受譖

久則瘡瘡成

瘡成無奈何

所要防其萌

麼蟲何足道

潛喻儆人情

三卷本

第二七段

心ときめきする
もの 雀の子飼。ち
ご遊ばする所の前
わたる。よき薫物た
きて一人臥したる。
唐鏡のすこし暗き、
見たる。よき男の、
車とどめて、案内し
間はせたる。頭洗ひ
化粧じて、香ばしう
しみたる衣など着
たる。〔後略〕

能因本

第二九段

心ときめきする
もの 雀の子。ちご
遊ばする所の前わ
たりたる。唐鏡のす
こし暗き、見たる。
よき男の、車とどめ
て、物の案内せさせ
たる。よき薫物たき
て一人臥したる。頭
洗ひ化粧じて、香に
しみたる衣着たる。
〔後略〕

前田家本

第一二四段

心ときめきする
もの 雀の子飼。又、
ちご遊ばする所の
前わたりたる。よき
たき物たきてひと
り臥したる。鏡のす
こし暗き、見たる。
よき男の、車とどめ
て案内せさせたる。
かしら洗ひ化粧じ
て香にしみたる衣
着たる。〔後略〕

堺本

第一四八段

心ときめきせら
るるもの。すずめの
こがひ。ちごあそば
しなどする所のま
へわたりする。よき
たきもののたきて、ひ
とりねなる。からか
がみのすこしくも
りたるみたる。
よきおとこの車
とどめてものあな
いしたる。かしらあ
らひけさうじて、か
うごにいらたるき
ぬなどきたる、〔後
略〕

漢文学との関係

*王度「古鏡記」

大業（六〇五～六一八）
五年四月一日
太陽虧度時在臺直晝
臥廳閣 覺日漸昏諸吏
告度以日蝕甚
整衣時 引鏡出自覺
鏡也昏昧 無復光色〔中
略〕度喜甚 其夜果遇天
地清密閉一室 無復脫
隙 與俠同宿 度亦出寶
鏡置于座側 俄而鏡上
吐光明照一室 相視如
晝劍橫其側 無復光彩
俠大驚曰
請内鏡於匣 度從其言
〔後略〕

三卷本

第二八段

過ぎにし方恋し
きもの 枯れたる葵。
雛遊びの調度。二籃、
葡萄染などのさい
での押しへされて、
草子の中などにあ
りける、見つけたる。
また、をりからあは
れなりし人の文、雨
など降りつれづれ
なる日、さがし出で
たる。去年の蝙蝠。

能因本

第三〇段

過ぎにし方恋し
きもの 雛遊びの調
度。をりかうし。二
籃、葡萄染などのさ
いでの押しへされ
て、草子の中にあり
けるを見つけたる。
あはれなりし人の
文、雨などの降りて
つれづれなる日、さ
がし出でたる。枯れ
た葵。去年の蝙蝠。
月の明かき夜。

前田家本

第一八七段

過ぎにしかた恋
しきもの 枯れたる
葵。雛遊びの調度。
二籃・葡萄染などの
さいでのおしへさ
れて、冊子の中にあ
りける、見つけたる。
あはれなりし人
の文、雨など降りて、
つれづれなる日、探
し出でたる。去年の
蝙蝠。月の明き夜。

堺本

第一四九段

見るにつけてす
ぎぬるかたこひし
きもの。かれたるあ
ふひ。おりかうし。
さうしの中などに
ありけるを見つけ
たる。おさなかりし
ときもたりしあそ
びもの。あはれなり
し人のふみのあり
けるを、雨などのふ
りたるひ、さがしい
でたる。こぞのかは
ほりもたる。

漢文学との関係

『白氏文集』卷二七「不

出門」

鶴籠開處見君子

書卷展時逢古人

『和漢朗詠集』卷下

雜 閑居

鶴籠開處見君子

書卷展時逢古人

『白氏文集』卷二三「得

湖州崔十八使

君書喜與杭越鄰郡

因成長句代賀兼寄

微之」

故情歡喜開書後

舊事思量在眼前

三卷本

第二九段

心ゆくもの よく
かいたる女絵の、こ
とばをかしうつけ
ておほかる。物見の
かへさに、乗りこぼ
れて、をのこどもい
とおほく、牛よくや
る者の、車走らせた
る。白く清げなるみ
ちのくに紙に、いと
いと細う書くべく
はあらぬ筆して、文
書きたる。

能因本

第三一段

心ゆくもの よう
かきたる女絵の、こ
とばをかしうつづ
けておほかる。「中
略」牛よくやる者の、
車走らせたる。白く
清げなるみちのく
に紙に、いと細くか
かへてはあらぬ筆
して、文書きたる。
調半に調おほくう
ちたる。河舟のくだ
りざま。齒黒めのよ
くつきたる。

前田家本

第一一六段

心ゆくもの よく
描いたる女絵の、詞
をかしくつけてお
ほかる。「中略」牛
よくやる者して車
はしらせてかへる。
白くきよげなるみ
ちのくに紙にいと
ほそかくべくは
あらぬ筆のよきし
て文書きたる。川舟
のくだりざま。齒ぐ
ろめのよくつきた
る。

堺本

第一五〇段

心ゆくもの。よく
かきたる女えのこ
とばぐしたる。「中
略」うしよくやるも
のして車はしらか
しかへりたる。しろ
くきよげなるみち
のくがみに、いとほ
そかくてにはあ
らぬふでして、くつ
ろかにきよげなる
てしてかきたるこ
そ、みるにすずろに
心ゆけ。

漢文学との関係

『白氏文集』卷一四

「開元九詩書卷」

紅牋白紙兩三束

半是君詩半是書

經年不展縁身病今日

開看生蠹魚

『山海經』下

「大荒東經第十四」

有黒齒之國 齒如漆

也 帝俊生黒齒

『史記』卷一一七

「司馬相如列傳」

湯谷在黒齒北 上有扶

桑木 水中十日所浴

『文選』卷一二

「江海」海賦

悠悠於黒齒之邦

三卷本

第三〇段

檳榔毛は、のどかにやりたる。急ぎたるはわるく見ゆ。網代は、走らせたる。人の門の前などよりわたりたるを、ふと見やるほどもなく過ぎて、供の人ばかり走るを、誰ならむと思ふこそをかしけれ。ゆるゆるとひさしく行くは、いとわろし。

能因本

第三二段

檳榔毛は、のどかにやりたる。走らせたるはかるがろしく見ゆ。網代は、走らせたる。人の門よりわたるを、ふと見るほどもなく過ぎて、供の人ばかり走るを、たれならむと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると行くは、いとわろし。

前田家本

第九二段

檳榔毛は、のどかにやりたる。はしらせたるは、かるがろしく見ゆ。網代は、はしらせたる。人の門の前よりわたるを、ふと見やるほどもなく過ぎて、供の人ばかりはしるを、誰ならむと思ふこそをかしけれ。ゆるゆるとひさしく行くは、いとわろし。

堺本

第七五段

びらうげは、のどかにやりたる。あじろは、はしらせたる。さきうちをいても、ただにても、人の家のかどのまへよりそとふとみやるほどもなくすぎて、と人ののはしるばかりぞみゆる。たれなりつらんとをもふこそ、をかしけれ。

漢文学との関係

『遊仙窟』一二

兩頭安綵縵

四角垂香囊

檳榔荳蔻子

蘇合綠沉香

『白氏文集』卷一八

「題郡中荔枝詩」

深於紅躑躅

大校白檳榔

『白氏文集』卷五

「常樂里閑居」

旬時阻談笑

旦夕望軒車

〔後略〕

三卷本

第三一段

説經の講師は、顔
よき。講師の顔をつ
とまもらへたるこ
そ、その説くことの
のたふときもおぼ
ゆれ。ひが目しつれ
ば、ふと忘るるに、
にくげなるは、罪や
得らむとおぼゆ。こ
のことはとどむべ
し。すこし年などの
よろしきほどは、か
やうの罪得方のこ
とは書き出でけめ、
今は罪、いとおそろ
し。

能因本

第三九段

説經師は、顔よき。
つとまもらへたる
こそ、説くことのた
ふときもおぼゆれ。
ほか目しつれば、忘
るるに、にくげなる
は、罪や得らむとお
ぼゆ。このことはと
どむべし。すこし年
などのよろしきほ
どこそ、かやうの罪
得方の事も書きけ
め、今は、いとおそ
ろし。

前田家本

第六三段

説經師は、かほよ
き。つとまもらへた
るこそ説く事のた
ふときもおぼゆれ。
ほか目しつれば、つ
と忘るるに、にくげ
なるは罪や得らむ
とおぼゆ。このこと
ばはとどむべし。す
こし年などのよろ
しきほどこそかや
うの罪得がたの事
は書きおけば、いま
は、いとおそろし。

堺本

第五一段

せ經のかうじは、
かほよき。つとまも
らるるほどこそ、と
くことのたうとき
もきこゆれ。ほかさ
まにむきぬれば、み
みにもいらぬ、つみ
のふかさなれば、あ
からめせじとゐい
りたるに、「中略」
わかきときこそか
やうのつみふかき
こともよかりしが、
をいてはいとをそ
ろし。

漢文学との関係

『漢書』卷三〇

「藝文志 春秋」

以失其真 故論本事
而作傳 明夫子不以空
言說經也

『舊唐書』卷一八九「李
玄植」

高宗時 屢被召見與
道士 沙門在御前講說
經義 玄植辨論甚美 申
規諷 帝深禮之

『新唐書』卷一九八「徐
文遠」

文遠說經 徧舉

先儒異論 分明是

非 乃出新意以折

衷 聽者忘勞

三卷本

さはあらで、講師
ゐてしばしあるほ
どに、さきすこし追
はする車とどめて
下るる人、蟬の羽よ
りもかるげなる直
衣、指貫、生絹の単
衣など着たるも、狩
衣の姿なるも、さや
うにて若うほそや
かなる三、四人ばか
り、侍の者、またさ
ばかりしていれば、
はじめあたる人々
も、すこしうち身じ
ろぎくつろい、

〔後略〕

能因本

第四〇段

蔵人おりたる人、
昔は、〔中略〕
さはあらで、講師
ゐてしばしあるほ
どに、さきすこしお
はする車とどめて
おるる人、蟬の羽よ
りもかるげなる直
衣、指貫、生絹の単
衣など着たるも、狩
衣姿にても、さやう
にては若くほそや
かなる三四人ばか
り、侍の者、〔後略〕

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷一

「夢仙」

羽衣忽飄飄

玉鸞俄錚錚

『白氏文集』卷一二

「長恨歌」

風吹仙袂飄飄舉

猶似霓裳羽衣舞

『白氏文集』卷二一

「霓裳羽衣」

君不見我歌云

驚破霓裳羽衣曲

『白氏文集』卷二五

「花酒」

香醕淺酌浮如蟻

雪鬢新梳薄似蟬

三卷本

第三二段

菩提といふ寺に、
結縁の八講せしに
詣でたるに、人のも
とより、「とく帰り
たまひね。いとさう
ざうし」と言ひたれ
ば、蓮の葉の裏に、
もとめてもかか
る蓮の露をおき
て憂き世にまた
は帰るものかは
と書きてやりつ。
〔中略〕さうちうが
家の人のもどかし
さも忘れぬべし。

能因本

第四一段

菩提といふ寺に、
結縁講するが聞き
に詣でたるに、人のも
とより、「とく帰
りたまへ。いとさう
ざうし」と言ひたれ
ば、蓮の花びらに、
もとめてもかか
る蓮の露をおき
て憂き世にまた
は帰るものかは
と書きてやりつ。
〔中略〕つねたうが
家の人のもどかし
さも忘るべし。

前田家本

第三一二段

菩提といふ寺に
て、結縁の八講する
ひゝきに、まうでた
るに、人のもとより、
「とく帰りたまへ。
いとさうざうし」と
いひたれば、蓮の花
の中に、
もとめてもかか
る蓮の露をおき
てうき世にまた
はかへるものか
〔中略〕上中が家
のもどかしさも
わすれぬべし。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』巻九

「新秋」

風池明月水

衰蓮白露房

『白氏文集』巻一八

「龍昌寺荷池」

冷碧新秋水

殘紅半破蓮

『列仙傳』巻六

「湘中老人」

湘中老人

読黄老 手援紫蘂

坐碧草 春至不知

湘水深 日暮忘却

巴陵道

三卷本

第三三段

小白川といふ所は、〔中略〕三位中将、「とく言へ。あまり有心過ぎて、しそこなふな」とのたまふに、「これもただ同じことになむはべる」と言ふは聞ゆ。藤大納言、人よりけにさしのぞきて、「いかが言ひたるぞ」とのたまふれば、三位中将、「いとなほき木をなむ押し折りためる」

〔後略〕

能因本

第四二段

小白川といふ所は、〔中略〕三位中将、「とく言へ。あまり有心過ぎて、しそこなふな」とのたまふに、「これもただ同じ事になむ侍る」と言ふは聞ゆ。藤大納言、人よりもけにさしのぞきて、「いかが言ひつる」とのたまふれば、三位中将、「いとなほき木をなむ押し折りたしめる」

〔後略〕

前田家本

第二九九段

小白河といふところは、〔中略〕三位中将、「とくいへ。あまり有心過ぎて、しそこなふな」とのたまふに、「これもただ同じ事になむ侍る」といへば、藤大納言は、人よりもけにさしのぞきて、「いかがいひつる」とのたまふれば、三位中将、「いとなほき木をなむにしをりためる」

〔後略〕

堺本

ナシ

漢文学との関係

『文選』卷四三

與山巨源絶交書

直木必不可以為輪曲

者不可以為桮

『孟子』卷一

「梁惠王上」

曰 然則王之所大欲

可知已 欲辟土地朝秦

楚蒞中國而撫四夷也

以若所為求若所欲 猶

緣木而求魚也 王曰 若

是其甚與 曰 殆有甚焉

緣木求魚 雖不得魚 無

後災 以若所為 求若所

欲 盡心力而為之 後必

有災

三卷本

第三五段

木の花は濃きも

薄きも、紅梅。桜は、
花びら大きに、葉の
色濃きが、枝はほそ
くて咲きたる。

藤の花は、しなひ
長く、色濃く咲きた
る、いとめでたし。

〔中略〕

能因本

第四四段

木の花は梅の、

桜の、花びら大きに、
色よきが、枝ほそう
かれはれに咲きた
る。

藤の花、しなひ長
く、色よく咲きたる、
いとめでたし。

〔中略〕

前田家本

第四四段

木の花は梅。

濃きも薄きも、梅。
まして、紅梅は、濃
きも薄きも、いとを
かし。桜の花びらお
ほきに、花の色濃き
が、枝はほそく、葉
はまれに咲きたる。

〔中略〕

堺本

第七段

木の花は、むめ。

まして、こうばいは、
うすきもこきも、い
とおかし。さくらは、
はなびらおほきに、
はなのいろいろいと
きが、えだほそくて、
かれはにさきたる。
藤は、しなひながく、
いろこくさきたる、
いとおかしうめで
たし。〔中略〕

漢文学との関係

『全唐詩』卷二二二

杜甫

「留別公安太易沙門」

沙村白雲仍含凍

江縣紅梅已放春

『白氏文集』卷二

「有木詩八首」

有木名櫻桃

得地早滋茂

葉密獨承日

花繁偏受露。

迎風闇搖動

引鳥潛來去

鳥啄子難成

風來枝莫住

〔後略〕

三巻本

四月のつごもり、
五月のついたちの
ころほひ、橘の葉の
濃く青きに、花のい
と白う咲きたるが、
雨うち降りたるつ
とめてなどは、世に
なう心あるさまに
をかし。〔中略〕

能因本

四月のつごもり、
五月ついたちなど
のころほひ、橘の濃
く青きに、花のいと
白く咲きたるに、雨
の降りたるつとめ
てなどは、世になく
心あるさまにをか
し。〔中略〕

前田家本

四月つごもり・五
月ついたちなどの
ころほひ、橘の、葉
はいと濃く青きに、
花のいと白う咲き
たるに、雨降りたる
つとめてなどは、よ
になう心あるさ
めては、なべてなら
ぬさまにおかし。
〔中略〕

堺本

四月つごもり、五
月ついたちころの、
たちばなのいとし
ろくさきて、あめう
になう心あるさめ
ては、なべてならぬ
さまにおかし。
〔中略〕

漢文学との関係

『白氏文集』卷一

「紫藤」

藤花紫蒙茸

藤葉青扶疏

誰謂好顔色

而為害有餘

〔後略〕

三巻本

花の中より黄金の
玉かと見えて、いみ
じうあざやかに見
えたるなど、朝露に
濡れたるあさぼら
けの桜におとらず。
郭公のよすがとさ
へ思へばにや、なほ
さらに言ふべうも
あらず。〔中略〕

能因本

花の中より黄金の
玉かと見えて、いみ
じくきはやかに見
えたるなどは、朝露
に濡れたる桜にお
とらず。郭公の寄る
とさへ思へばにや、
なほさらに言ふべ
きにもあらず。
〔中略〕

前田家本

花のなかより黄金
の鈴かといみじう
きはやかに見えた
るなどは、朝露にね
れたる桜におとら
ず、ほととぎすのよ
すがとさへ思へば
にや、なおさらにい
ふべきにあらず。
〔中略〕

堺本

花のなかより、みの
こがねのたまと見
えて、いみじうきは
やかにみえたるな
どは、春のあさぼら
けのさくらにもお
とらずぞおぼゆる。
ほととぎすのよす
がとさへおもへば、
なをさらにいふべ
きもあらず。〔中略〕

漢文学との関係

『白氏文集』卷二四

「宿湖中」

水天向晚碧沉沉

樹影霞光重疊深

浸月冷波千頃練

苞霜新橘萬株金

『和漢朗詠集』卷上

「夏」花橘

後中書王

枝繁金鈴春雨後

花薰紫麝凱風程

〔後略〕

三巻本

楊貴妃の、帝の御使
に会ひて、泣きける
顔に似せて、「梨花」
一枝、春、雨を帯び
たり」など言ひたる
は、おぼろげならじ
と思ふに、なほいみ
じうめでたき事は、
たぐひあらじとお
ぼえたり。

能因本

楊貴妃、御門の御使
に会ひて、泣きける
顔に似せて、「梨花」
一枝春雨を帯びた
り」など言ひたるは、
おぼろげならじと
思ふに、なほいみじ
うめでたき事は、た
ぐひあらじとおぼ
えたり。

前田家本

楊貴妃の、帝の御使
にあひて泣きける
かほにたとへて、
「梨花ひと枝春の
雨に帯びたり」など
いひたるはおぼろ
げならじと思ふに、
なほいみじうめで
たき事はたぐひあ
らじとおぼえたり。

堺本

楊貴妃の、みかどの
御つかひにあひて、
なげきたたるほど
のにほひにとへて、
「梨花一枝、春帶雨」
といひたるは、おぼ
ろけならじとおぼ
ゆるに、よろづのは
なよりめでたし。

漢文学との関係

『白氏文集』卷一二

「長恨歌」

玉容寂寞淚闌干

梨花一枝春帶雨

〔後略〕

『白氏文集』卷一四

「江岸梨花」

梨花有意綠和葉

一樹江頭惱殺君

最似嬌閨少年婦

白粧素袖碧紗裙

三巻本

桐の木の花、紫に咲きたるは、なほをかしきに、葉のひろごりさまぞうたてこちたけれど、こと木どもとひとしう言ふべきにもあらず。唐土に名つきたる鳥の、選りてこれにのみあるらむ、いみじう心ことなり。まいて琴に作りて、さまざまなる音の出で来るなどは、をかしなど、世の常に言ふべくやはある。

〔中略〕

能因本

桐の花、紫に咲きたるは、なほをかしきまうたてあれども、また、こと木どもとひとしう言ふべきにあらず。唐土にはことごとしき名つきたる鳥の、選りてこれにしもあるらむ、いみじう心ことなり。まして琴に作りて、さまざまなる音の出で来るなど、〔中略〕

前田家本

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごりたるさまこそうたてこちたけれ。されど、またこと木とひとしうはいふべきにあらず。唐土にはことごとしき名つきたる鳥の、選りてこれにしもあるらむ、いみじう心ことなり。まして琴に作りて、さまざまに鳴る音の出で来るなど、〔中略〕

堺本

きりのはなは、むらさきたるはをかしきを、はのひろごりたるさまぞ、うたてくこちたき。されど、こと木どもにひとしくいふべきにはあらず。もろこしにて、ことごとしき名つきたるらんとりの、これにしもすむらんこころことなり。まして、ことにつくりてさまざまなるねどもいでくるは、をかし

〔中略〕

漢文学との関係

『白氏文集』巻二

「答桐花」

為君長高枝

鳳凰上頭鳴

一鳴君万歳

寿如山不傾

〔後略〕

『初學記』巻三〇

「鳥部」鳳

非梧桐不棲

非竹實不食

『芸文類聚』巻八八

「木部」桐

桐寔嘉木

鳳凰所棲

爰伐琴瑟

八音克諧

三巻本

木のさまにくげ
なれど、棟の花、い
とをかし。かれがれ
にさまことに咲き
て、かならず五月五
日にあふもをかし。

能因本

木のさまぞにく
けれど、棟の花いと
をかし。かれわれに
さまことに咲きて、
かならず五月五日
にあふもをかし。

前田家本

木のさまぞにく
けれど、あふちの花
こそいとをかしけ
れ。こと木の花には
さまことに咲きて、
かならず五月五日
にあふもをかし。

堺本

また、木のさまぞ
にくけれども、あふ
ちのはないとをか
し。こと木のはなに
はにず、いとかれ葉
にさきて、かならず
五月五日にあふこ
ろ、いとをかし。

漢文学との関係

『管子』「地員」

沃土之次曰五位

五位之物

五色雜英

各有異章〔中略〕

種木胥容

榆桃柳棟

『全唐詩』卷七九六

「句」無名氏

棟花開後風光好

梅子黃時雨意濃

三卷本

第三七段

節は、五月にしく
月はなし。菖蒲、蓬
などのかをりあひ
たる。いみじうをか
し。九重の御殿の上
をはじめて、言ひ知
らぬたみのすみか
まで、〔中略〕

紫紙に棟の花、青き
紙に菖蒲の葉ほそ
くまきて結び、また
白き紙を根してひ
き結ひたるもをか
し。〔後略〕

能因本

第四六段

節は、五月にしく
はなし。菖蒲、蓬な
どのかをりあひた
るも、いみじうをか
し。九重の内をはじ
めて、言ひ知らぬた
みしかはらの住み
かまで、〔中略〕

紫の紙に棟の花、青
き紙に菖蒲の葉ほ
そうまきてひき結
ひ、また白き紙を根
にして結ひたるも
をかし。〔後略〕

前田家本

第三段

節は、五月五日に
しくはなし。菖蒲・
蓬などのかをりあ
ひたる、いみじうを
かし。九重の内をは
じめて、いひ知らぬ
民の住処まで、

〔中略〕

紫の紙にあふちの
花、青き紙に菖蒲を
ほそうまきてひき
結ひ、また白き紙を
ねして結ひたるも
をかし。〔後略〕

堺本

第一九三段

せちは、五月五日
にしくはなし。ここ
のへのをほとんよ
りはじめて、いひし
らぬたみのすみか
まで、〔中略〕

むらさきのかみ

にあふちのはなつ
け、あをきかみにさ
うぶのはほそくて
ひきゆひ、

〔後略〕

漢文学との関係

『漢書』卷二二

「樂志第二」樂

郊祀歌 練時日一

九重開靈之旂 師古

曰 天有九重 言皆開

門而來 降厥福

『白氏文集』卷一二

「長恨歌」

九重城闕煙塵生

千乘萬騎西南行

『芸文類聚』卷四

歲時中 五月五日

今若有惠 可以

以棟樹葉

塞其上

以五采絲

縛之此

三卷本

第三八段

花の木ならぬは

楓。桂。五葉、たそ
ばの木、しななき心
地すれど、花の木ど
も散り果てて、おし
なべて緑になり
たる中に、時もわか
ず、濃き紅葉のつや
めきて、思ひもかけ
ぬ青葉の中よりさ
し出でたる、めづら
し。〔中略〕

能因本

第四七段

木は桂。五葉。

柳。橘。そばの木、
はしたなき心ちす
れども、花の木ども
の散り果てて、おし
なべたる緑になり
たる中に、時もわか
ず、濃き紅葉のつや
めきて、思ひかけぬ
青葉の中よりさし
出でたる、めづらし。
〔中略〕

前田家本

第四五段

木は桂。五葉。

橘。柳。
そばの木は、しな
なきこころしたれ
ど、花の木ども散り
はてて、おしなべた
る緑になりたる中
に、時もわかず濃き
もみぢのつやめき
て、思ひもかけぬ青
葉のなかよりさし
出でたる、いとめづ
らし。〔中略〕

堺本

第八段

花の木ならぬは、

ごよふ。かつら。や
なぎ。そばの木。し
ななきこころすれ
ども、はなの木ども
ちりはてて、をしな
べてみどりたる中
に、ときもわかずこ
きもみぢのつやめ
きてあをきはのさ
しいでたる、いとを
かし。〔中略〕

漢文学との関係

『白氏文集』卷一二

「琵琶引」

潯陽江頭夜送客

楓葉荻花秋索索

『白氏文集』卷二

「有木詩八首」

有木名丹桂

四時香馥馥

『全唐詩』卷六二五

陸龜蒙

「奉和襲美謝友人惠

人參」

五葉初成椶樹陰

紫團峰外即雞林

三巻本

檜の木、またけ近
からぬ物なれど、
「みつばよつばの
殿づくり」もをかし。
五月に雨の声を
まなぶらむも、あは
れなり。楓の木の、
ささやかなるに、も
えも出でたる、葉末
の赤みて、同じ方に
ひろごりたる葉の
さま、花もいとも
はかなげに、虫など
の枯れたるに似て
をかし。〔中略〕

能因本

檜の木、人近から
ぬ物なれど、「みつ
ばよつばの殿づく
り」もをかし。五月
に雨の声まねぶら
むも、いとをかし。
かへでの木、ささや
かなるにも、もえ出
でたる、木末の赤み
て、同じ方にさしひ
ろごりたる葉のさ
ま、花もいと物はか
なげにて、虫などの
枯れたるやうにて
をかし。〔中略〕

前田家本

檜、人のけぢかか
らぬものなれど、
「三つば四つばの
殿づくり」もをかし。
五月に、雨のこゑを
まねぶらむもいと
をかし。
かへでの木の、
さゝやかなるなか
にもえ出でたる葉
末の赤みて、同じ方
にさしひろごりた
る葉のさま、花もい
とものはかなげに
て、虫などの枯れた
るやうにてをかし。
〔中略〕

堺本

ひの木、けぢかか
らねど、「みつば、
よつばにとのつく
り」にも、これこそ
すれとおもふにも、
をかし。五月のあめ
のこゑをまねぶら
んも、あはれなり。
かえでの木、わかや
かにもえいでたる
はすゑのおなじか
たさまにさしひろ
ごりたる、はなばな
どもいとはかなげ
にむしなどのかれ
つきたるやうにて、
をかし。〔中略〕

漢文学との関係

『全唐詩』卷二二八
杜甫「絶句四首」
欲作魚梁雲復湍
因驚四月雨聲寒
青溪先有蛟龍窟
竹石如山不敢安
『全唐詩』卷三九九
元稹「蟲豸詩 虻」
〔序〕巴山谷間 春秋
常雨 自五六月至八九
月 雨則多虻
道路群飛
陰深山有瘴
溼墊草多虻
眾噬錐刀毒
群飛風雨聲

三卷本

姿なけれど、すろ
の木、唐めきて、わ
るき家の物とは見
えず。

能因本

姿なけれど、すろ
の木、唐めきて、わ
る家の物とは見え
ず。

前田家本

姿なけれど、棕櫚
の木、唐めきて、わ
る家のものとは見
えず

堺本

すがたなけれど、
すろの木、からめき
て、わろきいゑのか
どはみえず。なにと
なけれど、やどり木
といふなは、からだ
ちていとををかし。

漢文学との関係

『後漢書』卷八六

桃根木 外皮有毛 似栟

櫚而散生 其木剛 作鋤

鋤 利如鐵中石更利

『白氏文集』卷二十

「西湖晚歸回望孤山

寺贈諸客」

柳湖松島蓮花寺

晚動歸櫓出道場

盧橘子低山雨重

棕櫚葉戰水風涼

煙波澹蕩搖空碧

樓殿參差倚夕陽

到岸請君回首望

蓬萊宮在海中央

三卷本

第三九段

鳥は こと所の
ものなれど、鸚鵡い
とあはれなり。人の
言ふらむことをま
ねぶらむよ。

〔中略〕

能因本

第四八段

鳥は こと所の物
なれど、鸚鵡はいと
あはれなり。

〔中略〕

前田家本

第四八段

鳥は 〔中略〕
こと所なれど、鸚
鵡、いといとあはれ
なり。〔中略〕

堺本

第一段

とりは、ほかのと
りなれど、あふむい
とをかし。人のいふ
らんことをまねぶ
らんよ。〔中略〕

漢文学との関係

『漢書』卷六

能言鳥 師古曰 即鸚鵡
也 今隴西及南海並有
之

『文選』卷一三

「鸚鵡賦」 山海經曰 黃

山有鳥 其狀如鴉 青

羽赤喙 人舌能言 名

鸚鵡也

『初學記』卷三〇

魏曹植鸚鵡賦

雖處安其若危

永哀鳴以報德。

『白氏文集』卷一五

「紅鸚鵡」

安南遠進紅鸚鵡

色似桃花語似人

三巻本

山鳥、友を恋ひて、
鏡を見すれば、なぐ
さむらむ、心わかう、
いとあはれなり。谷
へだてたるほどな
ど、心苦し。

〔中略〕

能因本

山鳥は、友を恋ひ
て鳴くに、鏡を見せ
たれば、なぐさむら
む、いとわかう、あ
はれなり。谷へだて
たるほどなど、いと
心苦し。〔中略〕

〔中略〕

前田家本

山鳥、友を恋ひて
鳴くに、鏡を見せた
れば慰むらむ、心わ
かくあはれなり。谷
隔てたるほどなど、
いと心ぐるし。

〔中略〕

堺本

やまどりは、とも
こひてなぐに、かげ
をみてなぐさむら
んこそ、心わかうあ
はれなれ。たにをへ
だてたらんほども、
こころぐるし。

〔中略〕

漢文学との関係

『芸文類聚』卷九一

山雞異苑曰 山雞愛

其毛 映水則舞魏武時

南方獻之帝欲其鳴舞而

無由 公子蒼舒令以大

鏡著其前雞鑒形而舞

不知止 遂乏死

『白氏文集』卷一六

「遊寶稱寺」

竹寺初晴日

花塘欲曉春

野猿疑弄客

山鳥似呼人

酒嫩傾金液

茶新碾玉塵

可憐幽靜地

堪寄老慵身

三卷本

鶴は、いとこちた
きさまなれど、鳴く
声雲居まで聞ゆる、
いとめでたし。

〔中略〕

能因本

鶴は、こちたきさ
まなれども、鳴く声
の雲居まで聞ゆら
む、いとめでたし。

〔中略〕

前田家本

鶴は、こちたきさ
まなれど、鳴く声の
雲居まで聞ゆらむ、
いとめでたし。

〔中略〕

堺本

つるは、みめもな
つかしからず、おほ
のかにうちなきさ
まなれど、さはかり
にて、なくこゑの雲
ゐにきこゆなるほ
どおもひやるに、い
とけだかし。

〔中略〕

漢文学との関係

『詩経』「小雅」

鶴鳴九皋 聲聞于天

『史記』卷一二六

鼓鍾于宮 聲聞于外

鶴鳴九皋 聲聞于天

『北堂書鈔』卷一

天部 鶴鳴九皋

聲聞于天

『初学記』卷一

天部 鶴鳴九皋

聲聞于天

『芸文類聚』卷一

天部 鶴鳴九皋

聲聞于天

三巻本

鶯は、文などにも
めでたきものに作
り、声よりはじめて、
さまかたちもさば
かりあてにうつく
しきほどよりは、九
重のうちに鳴かぬ
ぞいとわろき。

〔中略〕

能因本

鶯は、世になくさ
ま、かたち、声もを
かしきものの、夏秋
の末まで老い声に
鳴きたると、内裏の
うちに住まぬぞ、い
とわろき。

〔中略〕

前田家本

うぐひすは、よに
なくさま・かたちも
こゑもをかしきも
のの夏秋の末まで
同じこゑに鳴きた
ると内裏の内にす
まねぞいとわろき。
又、夜鳴かぬこそ寝
ぎたなくおぼゆれ。

〔中略〕

堺本

うぐひすは、さま
かたちよりはじめ
て、うつくしくこそ。
はじめてたにより
いでたるこゑなん
ど、かばかりあてに
めでたきほどより
は、夏秋のすへまで
ありて、しらこゑに
なくと、だいのう
ちにすまぬとぞ、い
とわろき。

〔中略〕

漢文学との関係

『初学記』巻三
歳時部「春」
二月鶯聲纔欲斷
三月春風已復流
『白氏文集』卷三
「上陽白髮人」
日遲獨坐天難暮
宮鶯百轉愁厭聞
『白氏文集』卷三六
「送王卿使君赴任」
鶯入故宮含意思
花迎新使生光彩

三巻本

十年ばかり候ひて
聞きしに、まことに
さらに音せざりき、
さるは、竹近き紅梅
もいとよく通ひぬ
べきたよりなりかし。
聞けば、あやし
き家の見どころも
なき梅の木などに
は、かしがましきま
でぞ鳴く。

能因本

十年ばかり内に候
ひて聞きしかど、さ
らに音もせざりき。
さるは、竹もいと近
く、通ひぬべき枝の
たよりもありかし。
まかでて聞けば、あ
やしの家の梅の中
なぞ鳴き出でたる
や。

前田家本

十年ばかりうちに
さぶらひて聞きし
かど、さらにおとも
せざりき。さるは、
竹もいと近く、通ひ
ぬべき枝のたより
もありかし。まかり
出でて聞けば、あや
などには、はなやか
にぞ鳴き出でたる
や。

堺本

十年ばかりさぶら
ひてきしに、まこ
とにさらにをとせ
ざりき。さるは、た
けもちかく、こうば
いもちかく、いとよ
くかよひぬべきえ
だのたよりなめり
かし。まかでてきけ
ば、あやしき家のみ
どころなきむめの
木などにも、いとは
なやかにぞなき
でたるや。

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷上

「鶯」菅原文時

西楼月落花間曲

中殿灯残竹裏声

三巻本

夜鳴かぬもいぎた
なき心地すれども、
今はいかがせむ。夏
秋の末まで老い声
に鳴きて、「むしく
ひ」など、ようもあ
らぬ者は名をつけ
かへて言ふぞ、くち
をしくくすしき心
地する。

能因本

鶯は、世になくさま、
かたち、声もをかし
きものの、夏秋の末
まで老い声に鳴き
たると、内裏のうち
にすまぬぞ、いとわ
ろき。

前田家本

又、夜鳴かぬこそ寝
ぎたなくおぼゆれ。

堺本

また、よるなかぬも、
いぎたなき心地す

漢文学との関係

『和漢朗詠集』巻下
「老人」菅原文時
林霧校声鶯未老
岸風論力柳猶強
『和漢朗詠集』巻上
「落花」大江朝綱
落花浪籍風狂後
啼鳥竜鐘雨打時
『和漢朗詠集』巻上
「惜残春」右同
樹欲枝空鶯也老
此情須附一篇詩

三巻本

第四〇段

あてなるもの
薄色に白襲の汗衫。
かりのこ。削り氷に
甘葛入れて、あたら
しき鉢に入れたる。
水晶の数珠。藤の花。
梅花に雪の降りか
かりたる。いみじう
うつくしきちごの
いちごなど食ひた
る。

能因本

第四九段

あてなるもの
薄色に白襲の汗衫。
削り氷の甘葛に入
りて、あたらしき鉢
に入れたる。梅の花
に雪の降りたる。い
みじううつくしき
ちご食ひたる。かり
のこ割りたるも。水
晶の数珠。

前田家本

第一一段

あてなるもの
薄色に白がさねの
汗衫。かりのこ。わ
りたる削氷にあま
づら入れて、あたら
しきかなまりに入
れたる。いみじくう
つくしきちごのい
ちご食ひたる。梅の
花に雪の降りたる。
水晶の数珠。さしか
け。藤の花。

堺本

第一七五段

あてなるもの。う
すいろにしらがさ
ね。かざみもとあ
てなり。むめのはな
にゆきのふりかか
りたる。かりのこ。
けぶりひにあまづ
らいれて、かねのつ
きにもりたる。すい
さうのずず。ふちの
はな。うつくしきち
ごのいちごくひた
る。さじかげ。

漢文学との関係

『全唐詩』卷四八二

李白「白胡桃」

紅羅袖裏分明見

白玉盤中看卻無

疑是老僧休念誦

腕前推下水晶珠

『全唐詩』卷四二二

元稹「離思五首」

山泉散漫繞階流

萬樹桃花映小樓

閒讀道書慵未起

水晶簾下看梳頭

『全唐詩』卷五三九

李商隱「碧城三首」

若是曉珠明又定

一生長樹水晶盤

三卷本

第四一段

虫は〔中略〕

蠅こそにくき物のうちに入れつべく、愛敬なきものはあれ。人々しうかたきなどにすべき物のおほきさにはあらねど、秋などただよろづの物にぬ。顔などに濡れ足してゐるなどよ。人の名につきたる、いとうとまし。

能因本

第五〇段

虫は〔中略〕

蠅こそにくき物のうちに入れつけれ。愛敬なくにくき物は、人々しく書き出づべき物のさまにはあらねど、よろづの物にぬ、顔などに濡れたる足してゐたるなどよ。人の名につきたるは、かならずかたし。

前田家本

第四九段

虫は〔中略〕

蠅こそにくきもののうちに入れつべきこちすれ。愛敬なく、きたなきものなり。人人しくかたきにすべきさまにはあらねど、よろづのものにぬ、かほなどにぬれたる足してゐたるなどよ。人の名などにつきたるは、かならずかたし。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『尔雅』九「釋蟲」

蠅醜

『列子』五「湯問」

甘蠅 古之善射者

穀弓而獸伏鳥下 弟子

名飛衛 學射於甘蠅

『蒙求』「179」

「紀昌貫風」列子曰甘

蠅古之善射者

『呂氏春秋』「有始覽」

造父始習於大豆

蜂門始習於甘蠅

『白氏文集』卷二

「反鮑明遠白頭吟」

炎炎者烈火

營營者小蠅

〔後略〕

三卷本

第四二段

七月ばかりに、風
いたう吹きて、雨な
どさわがしき日、お
ほかたいと涼しけ
れば、扇もうち忘れ
たるに、汗の香すこ
しかかへたる綿衣
の薄きを、いとよく
引き着て、昼寝した
るこそをかしけれ。

能因本

第五一段

七月ばかりに、風
のいたう吹き、雨な
どのさわがしき日、
おほかたいと涼し
ければ、扇もうち忘
れたるに、汗の香す
こしかかへたる衣
の薄きを引きかづ
きて、昼寝したるこ
そをかしけれ。

前田家本

第二一四段

七月つごもりが
たに、にはかに風い
たく吹き手、雨の脚
の横さまにさわが
しく降り入りて、い
と涼しきこそをか
しけれ。扇もうち忘
れて、ただ綿薄き衣
の萎えたるが、日ご
ろうちかけておき
たりつるをひきお
として、いとよくひ
き着て昼寝したる
に、〔後略〕

堺本

第二〇九段

七月つごもりが
たに、にはかにかぜ
いたうふきて、あめ
のあしよこざまに
さはがしうふりい
りて、いとどすずし
きこそをかしけれ。
あふぎもうちわす
れて、わたうすきき
ぬのなへたるが、ひ
ごろうちかけてを
きたりつるをひき
おとして、〔後略〕

漢文学との関係

『白氏文集』卷三四

* 「雨後秋涼」

夜來秋雨後

秋氣颯然新

團扇先辭手

生衣不著身

更添砧引思

難與簾相親

此境誰偏覺

貧閒老瘦人

三卷本

第四七段

職の御曹司の西
面の立蔀のもとに
て、「中略」また、
さ知ろしめしたる
を、常に『女はお
のれをよろこぶ者
のために顔づくり
す。士はおのれを知
る者のために死ぬ』
となむ言ひたる」と、
言ひ合はせたまひ
つつ、よう知りたま
へり。

能因本

第五七段

職の御曹司の西
面の立蔀のもとに
て、「中略」また、
さ知ろしめしたる
を、常に『女はお
のれをよろこぶ者
のために顔づくり
す。士はおのれを知
る者のために死し
ぬ』と言ひたる」と、
言ひ合はせつつ申
したまふ。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『史記』卷八六

「刺客列傳」豫讓

豫讓者 晋人也

〔中略〕

豫讓遁逃山中曰

嗟乎士為知己者死

女為說己者容 今

智伯知我 我必為

報讎而死 以報智

伯 則吾魂魄不愧

矣

三巻本

「あるにしたがひ、定めず、何事ももてなしたるをこそ、よきにすめれ」とうしろ見きこゆれど、「わがもとの心の本性」とのみのたまひて、「改まらざるものは心なり」とのたまへば、「さて『はばかりなし』とは、何を言ふにか」とあやしがれば、笑ひつつ、「仲よしなども人に言はる。

能因本

「あるにしたがひ、定めず、何事ももてなしたるをこそ、よきにはすれ」とうしろ見きこゆれど、「わがもとの心の本性」とのみのたまひつつ、「改まらざる物は心なり」とのたまへば、「さて『はばかりなし』とは、いかなる事を言ふにか」とあやしがれば、笑ひつつ、「仲よしなど人々にも言はるる。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』巻六

「詠拙」

所稟有巧拙

不可改者性

所賦有厚薄

不可移者命

『白氏文集』巻一二

「同韓侍郎遊鄭家池

吟詩小飲」

齒髮雖已衰

性靈未云改

『論語』卷一

「学而」

主忠信

無友不如己者

過則勿憚改

三卷本

第六四段

草は〔中略〕

あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げにたのもしからず。いつまで草は、またはかなくあはれなり。岸の額よりも、これはくづれやすからむかし。まことの石灰などには、え生ひずやあらむと思ふぞわろき。

〔中略〕

能因本

第六七段

草は〔中略〕

あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げにたのもしげなくあはれなり。いつまで草は、生ふる所いとはかなくあはれなり。岸の額よりも、これはくづれやすげなり。まことの石灰などには、え生ひずやあらむと思ふぞわろき。

〔中略〕

前田家本

第四七段

草は〔中略〕

あやふ草は、岸のひたひに生ふらむも、げにたのもしげなくあはれなり。いつまで草、生ふる所いとはかなくあはれなり。岸の額よりもこれはくづれやすかりなむかし。まことの石灰などには生ひずやあらむと思ふぞわろき。

堺本

第一〇段

はななき草は〔中略〕あやふぐさ、きのひたいにねを

はなれて、げにたのもしうなく、あはれなり。いつまで草、かべにおふるらん、またいとはかなくあはれなり。きしのひたいよりも、いますこしくづれやすからんかし。まことのいしばいぬりたるには、えおひずやあらんとおもふ、いとわろけれ。

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷下

「無常」羅維（嚴維）

觀身岸額離根草

論命江頭不繫舟

『周礼』卷二四

「鞮鞻氏」

言象萬物生株離

惠校本生株離作

生離根株也

『漢書』卷二三

「刑法志」

李奇曰 命逃亡也

復於論命 中有罪也

三巻本

また花なきころ、緑なる池の水に紅に咲きたるも、いとをかし。翠翁紅とも詩に作りたるこそ。

唐葵、日の影にしたがひて傾くこそ草木といふべくもあらぬ心なれ。さしも草。

能因本

ナシ

第七〇段

草の花は〔中略〕

唐葵は、取りわきて見えねど、日の影にしたがひてかたぶくらむぞ、なべての草の心とおぼえでをかしき。

前田家本

ナシ

第四六段

草の花は〔中略〕

唐葵は、花のさま、色あひ、とりわきても見えぬを、日のかげにしたがひてかたぶくらむこそ、なべて草の心ともいふべくもあらず、いみじうあはれなれ。

堺本

また、はななきころ、みどりなるいけの水に、くれなゐにさきたるも、いとをかし。翠翁紅ともしにつくりたるこそ。からあふひの、かげにしたがひてかたぶくにこそ、草木といふべくもあらぬころなれ。

漢文学との関係

『和漢朗詠集』巻上

「蓮」許渾

煙開翠扇清風曉

水泛紅衣白露衣

『白氏文集』一三

「代書詩一百韻寄微之」

負氣衝星劍

傾心向日葵

『初學記』卷一

太宗文皇帝賦

藿葉隨光轉

葵心逐照傾

『芸文類聚』卷四

「歲時」春

梁聞人蒨春日詩

綠葵向光轉

翠柳逐風斜。

三卷本

七一段

懸想人にて来た
るは〔中略〕供なる
をのこ、童など、と
かくさしのぞき、け
しきみるに、「斧の
柄も朽ちぬべきな
めり」と、いとむつ
かしめれば、長や
かにうちあくびて、
みそかにと思ひて
言ふらめど、「あな
わびし。煩惱苦悩か
な。夜は夜中になり
ぬらむかし」と言ひ
たる、いみじう心づ
きなし。

能因本

第七六段

懸想文にて来た
るは〔中略〕供なる
をのこ、童など、「斧
の柄も朽しつべき
なめり」と、むつ
かしければ、長やか
にうちながめて、み
そかにと思ひて言
ふらめども、「あな
わびし。煩惱苦悩か
な。今は夜中にはな
りぬらむ」など言ひ
なる。

前田家本

第二七二段

人の従者は、「中
略」供なる男ども・
わらはなどのとか
くさしのぞき、けし
きばめるに、斧の柄
も朽たしつべきな
めり。むつかしけれ
ば、ながやかに、し
めにあくびて、みそ
かにと思ひて、いふ
らめど、「あな、わ
びし。煩惱・苦悩か
な。夜中にはなりぬ
らむかし」などつぶ
やき、〔後略〕

堺本

第二四二段

ひとりずきは〔中
略〕けしきみるに、
をののえもくたし
つべきなめり。むつ
かしければ、ながや
かにしめきあくび
て、みそかにおも
ひていふらめど、
「あな、わびし。ぼ
なうくなうかな。よ
はながくなりぬら
んかし」などつぶや
き、〔後略〕

漢文学との関係

『述異記』上

「晋王質故事」

晋王質 石室山見数

童子困碁 与質一物如

棗核 人含之不飢 局未

終 斧柯腐尽 既帰無旧

時人

『初学記』卷二三

「道釋部」觀

陳陰鏗 遊始興道館詩

徒教斧柯爛

會自不凌虛

『芸文類聚』卷七八

陳周弘正和庾肩吾詩

逆愁歸舊里

追問斧柯年

三巻本

第七四段

職の御曹司にお
はしますころ、木立
などの〔中略〕我も
我もと問ひつぎて
行くに、殿上人あま
た声して、「なにが
し一声秋」と誦して
まゐる音すれば、逃
げ入り、物など言ふ。
「目を見たまひけ
り」などめでて歌よ
むもあり。

能因本

第八〇段

職の御曹司にお
はしますころ、木立
など〔中略〕われも
われもと追ひつぎ
て行くに、殿上人あ
またして、「なにが
し一声秋」と誦んじ
て入る音すれば、逃
げ入りて、物など言
ふ声。「月見たまひ
ける」などめでたま
ふもあり。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷上

源英明

「納涼」

池冷水無三伏夏

松高風有一声秋

『全唐詩』卷二六七

顧況

「臨海所居三首」

江上故居

家在雙峰蘭若邊

一聲秋磬發孤煙

山連極浦鳥飛盡

月上青林人未眠

三卷本

第七七段

御仏名のまたの
日「中略」ひとわたり遊びて、琵琶弾きやみたるほどに、大納言殿、「琵琶、声やんで、物語せむとする事おそし」と誦したまへりしに、隠れ臥したりしも起き出でて、「なほ罪はおそろしけれど、ものめでたさは、やむまじ」とて笑はる。

能因本

第八五段

御仏名ノ朝、地獄絵の御屏風取りわたして、「中略」ひと遊び遊びては、琵琶を弾き乱れ遊ぶほどに、大納言殿の、「琵琶の声やめて、物語する事おそし」といふ事を誦んじたまひしに、隠れ臥したりしも起き出でて、「罪はおそろしけれど、なほ物のめでたさは、えやむまじ」とて笑はる。

前田家本

第三一五段

御佛名のまたの日、「中略」いとおもしろうひとたびあそびては、琵琶を弾きやみたるほどに、大納言殿、「琵琶声やみて、物語すること遅し」といふことを誦じたまへりしにこそ、隠れ臥したりしも起き出でて、「罪はおそろしけれど、なほものめでたさは、えやむまじ」とて、笑はる。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷一二

「琵琶引」「中略」

主人下馬客在船
舉酒欲飲無管弦
醉不成歡慘將別
別時茫茫江浸月
忽聞水上琵琶聲
主人忘歸客不發
尋聲暗問彈者誰
琵琶聲停欲語遲
移船相近邀相見
添酒迴燈重開宴
千呼萬喚始出來
猶抱琵琶半遮面
轉軸撥弦三兩聲
未成曲調先有情
〔後略〕

三卷本

第七八段

頭中将のすずて

〔中略〕

いと清げに書き
たまへり。心ときめ
きしつるさまにも
あらざりけり。「蘭
省花時錦帳下」と書
きて、「末はいかに、
末はいかに」とある
を、「〔中略〕ただそ
の奥に、炭櫃に、消
え炭のあるして、
「草の庵を誰かた
づねむ」と書きつけ
て取らせつれど、ま
た返事も言はず。

能因本

第八六段

頭中将のそぞろ

〔中略〕真名にいと

清げに書きたへる
を、心ときめきしつ
るさまにもあらざ
りけり。「蘭省の花
の時の錦の帳のも
と」と書きて、「末
はいかにいかに」と
あるを、「〔中略〕た
だその奥に、炭櫃の、
消えたる炭のある
して、「草の庵をた
れかたづねむ」と書
きつけて取らせつ
れど、返事も言はず。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷一七

「廬山草堂夜雨獨宿寄

牛二李七庾三十二員外」

丹霄攜手三君子

白髮垂頭一病翁

蘭省花時錦帳下

廬山雨夜草庵中

終身膠漆心應在

半路雲泥跡不同

唯有無生三昧觀

榮枯一照兩成空

三卷本

第七九段

返る年の二月二十日余日〔中略〕垣などもみな古りて、苔生ひてなむ』など語りつれば、宰相の君の、『瓦に松はありつるや』といらへたるに、いみじうめでて、『西の方、都門を去れる事いくばくの地ぞ』と口ずさみつること」など、かしがましきまで言ひしこそ、をかしかりしか。

能因本

第八七段

返る年の二月二十五日に〔中略〕垣などもみなやぶれて、苔生ひて』など語りつれば、宰相の君の、『瓦の松はありつや』といらへたりつるを、いみじうめでて、『西の方去れる事いくばくの御いのちぞ』と口ずさみしつるみにしつること」など、かしがましきまで言ひしこそ、をかしかりしか。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』巻四

「驪宮高」

高高驪山上有宮

朱樓紫殿三四重

遲遲兮春日

玉磬暖兮溫泉溢

嫋嫋兮秋風

山蟬鳴兮宮樹紅

翠華不來歲月久

牆有衣兮瓦有松

吾君在位已五載

何不一幸於其中

西出都門幾多地

吾君不遊有深夜

一人出兮不容易

〔後略〕

三卷本

第九〇段

上の御局の御簾

の前にて〔中略〕人にさし寄りて、「なにかば隠したりけむ、えかくはあらざりけむかし。あれはただ人にこそはありけめ」と言ふを、道もなきに、分けまゐりて申せば、笑はせたまひて、「別れは知りたりや」となむ仰せらるるも、いとをかし。

能因本

第九八段

うへの御局の御

簾の前にて〔中略〕人にさし寄りて、「なにかば隠したりけむも、えかうはあらざりけむかし。」

前田家本

第三二七段

うへの御局の御

簾の前に〔中略〕『『半ば隠したり』けむ人は、えかうはあらざりけむかし。それは、ただ人にこそはありけめ』といふを聞きて、道もなきを、わりなくわけ入りて、啓すれば、「笑はせたまひて、『われは知りたりや』となむ、おほせらるる」と傳ふを、

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷十二

「琵琶引」〔中略〕

主人下馬客在船
舉酒欲飲無管弦
醉不成歡慘將別
別時茫茫江浸月
忽聞水上琵琶聲
主人忘歸客不發
尋聲暗問彈者誰
琵琶聲停欲語遲
移船相近邀相見
添酒迴燈重開宴
千呼萬喚始出來
猶抱琵琶半遮面
轉軸撥弦三兩聲
未成曲調先有情
〔後略〕

三卷本

第九三段

あさましきもの
さし櫛すりてみが
くほどに、物につき
さへて折りたる心
地。車のうち返りた
る。さるおほのかな
る物は、所せくやあ
らむと思ひしに、た
だ夢の心地してあ
さましう、あへなし。

能因本

第一〇二段

あさましきもの
さし櫛みがくほど
に、物にさへて折り
たる。車のうち返さ
れたる。さるおほの
かなる物は、所せう
久しくなどやあら
むとこそ思ひしか、
ただ夢の心ちして
あさましう、あやな
し。

前田家本

第一二六段

あさましきもの
さし櫛すりて磨く
ほどに、突きさへて
折りたるこち。車
のうち覆されたる。
さるおほのかなる
ものは、ところせう、
ひさしうなどやあ
らむとこそ思ひし
に、ただ夢のこち
してあへなく、あさ
まし。

堺本

第一一三段

あへなきもの。さ
しぐしすりはてて
みがくほどに、をり
たる。のりたる車
のうちかへしたる。さ
るおほのかなるも
のはところせくや
あらんとをもひし
に、ただゆめの心地
して、あさましうあ
へなかりき。

漢文学との関係

『白氏文集』卷四

「新樂府 井底引銀餅
止淫奔也」

井底引銀餅

銀餅欲上絲繩絕

石上磨玉簪

玉簪欲成中央折

餅沈簪折知奈何

似妾今朝與君別

憶昔在家為女時

人言舉動有殊姿

嬋娟兩鬢秋蟬翼

宛轉雙蛾遠山色

笑隨伴戲後園中

此時與君未相識

〔後略〕

三巻本

第九六段

職におはします
ころ、「中略」これ
かれ物言ひ、笑ひな
どするに、廂の柱に
寄りかかりて物も
言はで候へば、「な
ど、かう音もせぬ。
物言へ。さうざうし
きに」と仰せらるれ
ば、「ただ秋の月の
心を見はべるあり」
と申せば、「さも言
ひつべし」と仰せら
る。

能因本

ナシ

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷一二

「琵琶引」〔中略〕

水泉冷澀弦疑絕

疑絕不通聲暫歇

別有幽愁暗恨生

此時無聲勝有聲

銀鉸乍破水漿迸

鐵騎突出刀槍鳴

曲終收撥當心畫

四弦一聲如裂帛

東舟西舫悄無言

唯見江心秋月白

沈吟放撥插弦中

整頓衣裳起斂容

自言本是京城女

家在蝦蟆陵下住

〔後略〕

三卷本

第九七段

御方々、君達、上人など、御前〔中略〕
「一乗の法なり」など人々も笑ふ事の筋なめり。筆、紙など給はせたらば、「九品蓮台の間には、下品といふとも」など、書いてまゐらせたれば、「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。

能因本

第一〇五段

御方々、君達、上人など、御前〔中略〕
「一乗の法なり」と人々笑ふ事の筋なめり。筆、紙給はれたれば、「九品蓮台の中には、下品といふとも」と書いてまゐらせたれば、「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。

前田家本

第三二九段

御方々・君達・うへなど、御前〔中略〕
「一乗の法なり」など、人人も笑ふ事のすぢなめり。
筆・紙など賜はせたらば、宮「九品蓮台の間には下品といふとも」と書いてまゐらせたるを御覧じて、清「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷下
「仏事」慶滋保胤
十方仏土之中
以西方為望
九品蓮台之間
雖下品応足

三卷本

第一〇一段

殿上より、梅の花
散りたる枝を、「こ
れはいかが」と言ひ
たるに、ただ、「早
く落ちにけり」とい
らへたれば、その詩
を誦じて、殿上人黒
戸にいとおほくみ
たる、上の御前に聞
しめして、「よろし
き歌などよみて出
るだしたらむより
は、かかる事はまさ
りたりかし。よくい
らへたる」と仰せら
れき。

能因本

第一〇九段

殿上より、梅ノ花
の散りたるに、その
詩を誦して、黒戸に
殿上人いとおほく
みたるを、うへの御
前聞かせおはしま
して、「よろしき歌
などよみたらむよ
りも、かかる事はま
さりたりかし。よう
いらへたり」と仰せ
らる。

前田家本

第三一六段

殿上より梅の花
のみな散りたる枝
を「これは、いかに」
といひたるに、「中
略」ただ「はや落ち
にけり」といひたる
を。その詩を誦じて、
黒戸より殿上人い
とおほくまゐりた
るを、うへの御前に
聞しめして、「よろ
しき歌などよみた
るよりは、かかるこ
とはまさりたりか
し。よくいらへたり」
とおほせらる

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷上

大江維時「柳」

大庾嶺之梅早落

誰問粉粧

匡廬山之杏未開

豈珍紅艷

『全唐詩』卷六七六

鄭谷

「將之瀘郡旅次遂州遇

裴晤員外謫居於此話舊

淒涼因寄二首」

〔中略〕

黃鳥晚啼愁瘴雨

青梅早落中蠻煙

不知幾首南行曲

留與巴兒萬古傳

〔後略〕

三卷本

第一〇二段

二月つごもりごろに、風いたう吹き
て、空いみじう黒き
に、雪すこしうち散
りたるほど、黒戸に
主殿司来て、「かう
て候ふ」と言へば、
寄りたるに、「これ、
公任の宰相殿の」と
あるを見れば、懷
紙に、すこし春ある
心地こそすれと
あるは、げに今日の
けしきに、いとう
あひたる。

能因本

第一一〇段

二月つごもり、風
いたく吹きて、空い
みじく黒きに、雪す
こしうち散りほど、
黒戸に主殿司来て、
「かうして候ふ」と
言へば、寄りたるに、
「公任の君、宰相中
将殿の」とあるを見
れば、懷紙に、ただ、
すこし春ある心ち
こそすれ
とあるは、げに今
日のけしきに、
〔後略〕

前田家本

第三一三段

二月つごもりに、
風いたう吹きて、空
いみじく曇り、雪す
こしうち散るほど、
黒戸に主殿づかさ
来て、「かうてさぶ
らふ」といへば、寄
りたるに、「これ公
任の君なりけり。宰
相中将の」とて、見
れば、懷紙に、
すこし春あるこ
ちこそすれ
とあるを、
〔後略〕、

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷十四

「酬和元九東川時十二
首 十二篇皆因新境追
憶舊事 不能一一曲敘
但隨而和之 唯余與元
知之耳」

南秦雪

往歲曾為西邑吏
慣從駱口到南秦
三時雲冷多飛雪
二月山寒少有春
我思旧事猶惆悵
君作初行定苦辛
仍賴愁猿寒不叫
若聞猿叫更愁人

三卷本

第一〇四段

方弘は、いみじう

〔中略〕

人の使ひ来て、

「御返事とく」と言

ふを、「あのにくの

男や。などかうまど

ふ。竈に豆やくべた

る。この殿上の墨筆

は、何の盗み隠した

るぞ。飯、酒ならば

こそ、人もほしがら

め」と言ふを、また

笑ふ。

能因本

第一一三段

方弘は、いみじく

人に笑はるる者。

〔中略〕人の使にて、

「御返事とく」と言

ふを、「あなにくの

をのこや。竈に豆や

くべたる。この殿上

の墨筆は、何者の盗

み隠したるぞ。飯、

酒ならば、ほしうし

て人の盗まめ。と言

ふを、また笑ふ。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『蒙求』五五八

「陳思七步」

世説曰 魏文帝 嘗

令東阿王 七步作詩 不

也 当行法 即応声為詩

曰 煮豆持作羹 漉鼓以

為汁 其在釜底然豆在

釜中泣 本是同根生

相煎何太急 帝深有慙色

『初學記』卷一〇

魏文帝令東阿王七步

成詩布成將行大法遂作

詩曰 煮豆燃豆其 豆在

釜中泣 本是同根生 相

煎何太急 文帝大有慙

色

三卷本

第一二九段

故殿の御ために

〔中略〕

果てて、酒飲み、

詩誦じなどするに、

頭中将齊信の君の

「月秋と期して身

いづくか」といふ事

をうち出だしたま

へりし、はたいみじ

うめでたし。

能因本

第一三八段

故殿の御ために

〔中略〕

果てて、酒など飲

み、詩誦じなどする

に、頭中将齊信の君、

「月秋として身い

まいづくにか」とい

ふ事を、うち出だし

たまへりしかば、い

みじうめでたし。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷下

「懷旧」

『本朝文粹』卷一四

「為謙徳公報恩修善願

文」

菅原文時

金谷醉花之地

花毎春句

而主不帰

南楼嘲月之人

月与秋期

而身何去

三卷本

第一三〇段

頭弁の、職にまゐりたまひて〔中略〕
「いと夜深くはべりける鳥の声は、孟嘗君のにや」と聞えたれば、立ち返り、
『孟嘗君の鶏は函谷関をひらきて、三千の客わづかに去れり』とあれども、これども、これは逢坂の関なり」とあれば、〔中略〕

能因本

第一三九段

頭弁の、職にまゐりたまひて〔中略〕
「いと夜深くはべりける鳥の声は、孟嘗君のかや」と聞えたれば、立ち返り、
『孟嘗君の鶏函谷関をひらきて、三千の客わづかに去れり』といふ。これは逢坂の関の事なり」とあれば、〔中略〕

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『史記』卷七五

「孟嘗君列伝」

孟嘗君得出 即馳去
更封傳 變名姓以出関
夜半至函谷関 秦昭王
後悔出孟嘗君 求之已
去 即使人馳傳逐之 孟
嘗君至関 関法鶏鳴而
出客 孟嘗君恐迫至
客之居下者有能為鶏鳴
遂発傳出 出如食頃 秦
追果至関 已後孟嘗君
出 乃還
〔中略〕遇客無所敢失
心 食客三千有余人 先
生所知也 客見文一日
廢〔後略〕

三卷本

第一三一段

五月ばかり、「中略」「出でて見よ。例ならず言ふは誰ぞとよ」「中略」物は言はで、御簾をもたげて、そよろとさし入るる、呉竹なりけり。「おい。この君にこそ」と言ひわたるを聞きて、「いざいざ、これまづ殿上に行きて語らむ」とて、式部卿宮の源中将、六位どもなどありけるは、いぬ。

能因本

第一四〇段

五月ばかりに、「中略」「出でて見よ。例ならず言ふはたれぞ」「中略」物も言はで、簾をもたげて、そよろとさし入るるは、呉竹の枝なりけり。「おい。この君にこそ」と言ひたるを聞きて、「いざや。これ殿上に行きて語らむ」とて、中将、新中将、六位どもなどありけるは、いぬ。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』

卷下

「竹」藤原篤茂

晋騎兵参軍王子猷

猷 種而称此君

唐太子賓客白樂天

愛而為我友

『扶桑集』卷七

「贈答」源英明

栽竹多年对此君

含情想像七賢群

劉伶常有紅顔色

阮籍応無白眼文

〔後略〕

三卷本

御前の竹を折りて、
歌よまむとてしつ
るを、『同じくは、
識にまゐりて、女房
など呼び出できこ
えて』と持て来つる
に、呉竹の名を、い
ととく言はれてい
ぬるこそいとほし
けれ。〔中略〕まめ
ごとなども言ひ合
はせてゐたまへる
に「裁ゑてこの君と
称す」と誦して、
〔後略〕

能因本

御前の竹を折りて、
歌よまむとしつる
を、『職にまゐりて、
同じくは女房など
呼びて出でてを』と
言ひて来つるを、呉
竹の名を、いととく
言はれていぬるこ
そをかしけれ。〔中
略〕ゐたまへるに、
「この君と称す」
といふ詩を誦して、
〔後略〕

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『江吏部集』卷上
大江匡衡
「八月十五夜
陪員外藤納言
書閣同賦 月照牕前
竹心教」
加此君於三友之外
雨声晴而風襟不静
『本朝無題詩』
釈蓮禪
唐蘆岸古何春露
吳竹籬荒只暮煙
〔中略〕

三卷本

第一三七段

殿などのおはしまさで後〔中略〕
御前の草のいとしげきを、『などか。かきはらはせてこそ』と言ひつれば、『ことさら露置かせて御覽ずとて』と、宰相の君の声にていらへるが、をかしうもおぼえつるかな。〔中略〕台の前に植ゑられたりける牡丹などの、をかしき事』などのたまふ。

能因本

第一四六段

故殿などおはしまさで、〔中略〕
御前の草のいと高きを、『などか、これはしげりてはべる。はらはせてこそ』と言ひつれば、『露置かせて御覽ぜむとて、ことさらに』と、宰相の君の声にていらへつるなり。〔中略〕露台の前に植ゑられたりける牡丹の、唐めきをかしき事』などのたまふ。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷九

秋題牡丹叢

晚叢白露夕

衰葉涼風朝

紅豔久已歇

碧芳今亦銷

幽人坐相對

心事共蕭條

三卷本

第一三八段

正月十余日のほど、〔中略〕「われに毬打切りて」などこふに、また、髪をかしげなる童の、相どもほころびがちにて袴萎えたれど、よき桂着たる三、四人来て、「卯槌の木のよからむ切りておろせ。御前にも召す」など言ひて、

〔後略〕

能因本

第一四七段

正月十日、〔中略〕「われによき木切りて。いで」などこふに、また、髪をかしげなる童べの、相どもほころびがちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち着たる三四人、「卯槌の木のよからむ切りてをこそ。ここに召すぞ」など言ひて、〔後略〕

前田家本

第一九七段

正月一日は〔中略〕「毬打切りて。いでなど乞ふに、また髪をかしげなる女わらはべなどの、相ほころびがちな袴の色よきがなよゝかなるなど着たるも、三四人出て来て、「卯槌の木のよからむ、切りておろせ。御まえにも召すぞ」などいふに、

〔後略〕

堺本

第一八八段

正月ついたちには、〔中略〕木の本にたちて、「ぎちやうきりて、いで」などこふに、またかみをかしげなるおんなわらべなどの、あこめのほころびがちなるはかまのなよよかなるなどきたるも、三、四人いできて『うづちの木のよからむ、きりておろせ』など御まへにもめすぞ」といふに、〔後略〕

漢文学との関係

『全唐詩』

卷八〇四

魚玄機

「打毬作」

堅圓淨滑一星流
月杖爭敲未擬休
無滯礙時從撥弄
有遮欄處任鉤留
不辭宛轉長隨手
卻恐相將不到頭
畢竟入門應始了
願君爭取最前籌

三卷本

第一三九段

清げなるをのこの、双六を日一日打ちちて、なほ飽かぬにや、短き灯台に火をともしていと明かうかかげて、かたきの賽を責めこひて、とみにもいれねば、〔後略〕

能因本

第一四八段

清げなるをのこの、双六を日一日打ちちて、なほ飽かぬにや、短き燈台に火を明かくかかげて、かたきの賽をこひ責めて、とみにもいれねば、〔中略〕

前田家本

第二五五段

きよげなる若きをとこの、碁、雙六うつとて、あつまりゐたるも、をかし。日一日ちちて、なほあかぬにや、短き燈臺に火をいとあかくかゝげてうつを、簾のうちにて人見るなどは知りながら、これに心を入れて、かたきの、賽をこひて、〔後略〕

堺本

第二四九段

きよげなるおとこどもの、ご・すぐろくうつとてあつまりていたるも、をかし。日ひとひうちてなをあかぬや、〔後略〕

漢文学との関係

『遊仙窟』七

十娘曰少府亦應太飢即喚桂心盛飯下官日向來眼飽不覺身飢十娘笑曰莫相弄且取雙六局來共少府賭酒

『宋書』卷八

「明帝」上失履跣至

西堂 猶著烏帽 坐定

『南齊書』卷八 本紀

帝烏帽袴褶 備羽儀登

南掖門臨望

『隋書』卷一一

礼儀在上省則烏帽永福

省則白帽云

三卷本

第一四三段

いやしげなるもの
式部丞の笏。黒
き髪の筋わろき。布
屏風のあたらしき。
古り黒みたるは、さ
る言ふかひなきも
のにて、なかなか何
とも見えず。あたらし
うしたてて、桜の
花おほく咲かせて、
胡粉、朱砂など、色
りたる絵どもかき
たる。

能因本

第一五三段

いやしげなるもの
式部丞の爵。黒
き髪の筋ふとき。布
屏風のあたらしき。
古り黒みたるは、さ
る言ふかひなき物
のにて、なかなか何と
も見えず。あたらし
くたてて、桜の花お
ほく咲かせて、胡粉、
朱砂など色りたる
絵かきたる。

前田家本

第一五六段

いやしげなるもの
式部の丞のし
やく。黒き髪の筋わ
ろき。布屏風のあた
らしき。ふり黒みた
るは、さるいふかひ
なきものにて、なか
な何とも見えず。
あたらしくたてて、
梅の花おほく咲か
せ、胡粉、朱砂など
にて絵描きたる。

堺本

第一一七段

いやしげなるもの。
しきぶのせうの
しやく。くろきかみ
のすぢあしき。くろ
ぬりのだい。むしろ
はりのくるまの、を
そひしげううちた
る。ぬのびやうぶの
あたらしき。ふりく
ろみたるは中々な
にともみえず。した
てていろどりゑか
きたるが、さみゆる
なり。

漢文学との関係

『博物志』

焼錫成胡粉

又和牧蠣為

『後漢書』卷六三

「李固 子燮」

大行在殯

路人掩涕

固獨胡粉飾貌

搔頭弄姿

『漢書』卷九三 列傳

「董賢」

師古曰

「以朱砂塗之

而又雕畫也」

四時之色

三卷本

第一四五段

うつくしきもの
瓜にかきたるちご
の顔。雀の子のねず
鳴きするにをどり
来る。二つ三つばか
りなるちごの、いそ
ぎて這ひ来る道に、
いと小さき塵のあ
りけるを、目ざとに
見つけて、いとをか
しげなる指にとら
へて、大人ごとに見
せたる、いとうつく
し。

能因本

第一五五段

うつくしきもの
瓜にかきたるちご
の顔。雀の子のねず
鳴きするにをどり
来る。また、〔中略〕
二つばかりなるち
ごの、いそぎて這ひ
来る道に、いと小さ
き塵などのありけ
るを、目ざとに見つ
けて、いとをかしげ
なる指にとらへて、
大人などに見せた
る、いとうつくし。

前田家本

第一〇九段

うつくしきもの
うりに描きたるち
ごのかほ。雀の子の、
鼠鳴するにをどり
来る。又、〔中略〕
二つばかりなるち
ごの、いそぎてはひ
来る道に、いとちひ
さき塵などのあり
けるを見つけて、い
とをかしげなるお
よびにとらへて、お
とななどに見せて
笑みたる、いとうつ
くし。

堺本

第一一〇段

うつくしきもの。
うりにかきたるち
ごのかほ。すずめの
この、ねずなきする
に、をどりくる。二
つばかりのちごの、
いそぎてはいくる
みちに、いとちひさ
きちりなどのあり
けるをみつけて、い
とをかしげなるを
よびにとらへて、お
とななどに見せて
えみたる、いとをか
しうつくし。

漢文学との関係

『白氏文集』卷一〇

*「観児戯」

髻鬢七八歳

綺紈三四児

弄塵復闘草

尽日楽嬉嬉

堂上長年客

鬢間新有絲

一看竹馬戲

每憶童騃時

童騃饒戲楽

老大多憂悲

静念彼與此

不知誰是痴

三卷本

第一五二段

うらやましげなるもの〔中略〕よき人の御前に女房いとあまた候ふに、心にくき所へつかはす仰せ書などを、誰もいと鳥のあとにしも、などかはあらむ。されど、下などにあるを、わざと召して、御硯取りおろして書かせさせたまふも、うらやまし。

能因本

第一六二段

うらやましきものの〔中略〕よき人の御前に女房いとあまた候ふに、心にくき所へつかはすべし仰せ書などを、たれも鳥のあとのように、などかはあらむ。されど、しもなどにあるを、わざと召して、御硯取りおろして書かせたまふ、うらやまし。

前田家本

第一一八段

うらやましきものの〔中略〕よき人の御前に女房いとあまたさぶらふをおきて、心にくき所へつかはすべきおほせ書などを誰も鳥の跡のやうにはなどかはあらむ。されど、しもなどにあるをわざと召して、御硯とりおろして書かせさせたまふ、うらやまし。

堺本

第一二五段

うらやましきものの〔中略〕はづかしところなどに、つかはすべきおほせがきなど、御まへにあまたさぶらふをさしをきて、しもなるをめして御すずりとりをろし、かみなどたまはせて、かかせさせたまふなどは、いとうらやましかりぬべきことぞかし。

漢文学との関係

『晋書』卷八〇

書契之興肇乎中古

繩文鳥跡不可足觀

『初学記』卷二一

「文字」

書契之興始自頡皇

寫彼鳥跡以定文章

隋江總借劉太常說文

詩碩學該蟲篆

奇文秀鳥跡

晉成公綏隸書體皇頡

作文因物構思

觀彼鳥跡遂以成意

『白氏文集』卷二六

「觀幻」

更無尋覓處

鳥跡印空中

三卷本

第一五五段

故殿の御服のころ〔中略〕前栽に、萱草といふ草を、籬結ひて、いとおほく植ゑたりける。花のきはやかにふさなりてさきたる、むべむべしき所の前栽には、いとよし。

能因本

第一六五段

故殿の御服のころ〔中略〕前栽には、萱草といふ草を、籬結ひて、いと、おほく植ゑたりける、花のきはやかにふさなりて咲きたる、むべむべしき所の前栽にはよし。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『初学記』巻一四

禮部 婚姻

臨軒種萱草

中庭植合歡

『初学記』巻二七

寶器 萱

甘棗令人不惑

萱草可以忘憂

『白氏文集』卷三四

酬夢得比萱草見贈

杜康能散悶

萱草解忘憂。

借問萱逢杜

何如白見劉

老衰勝少夭

閒樂笑忙愁

三卷本

殿上人日ごとに
まゐり、夜もゐ明か
して、物言ふを聞き
て、「あにはかりき
や、太政官の地の、
いまやかうの庭と
ならむ事を」と誦じ
出でたりしこそを
かしかりしか。

能因本

殿上人日ごとに
まゐり、夜もゐ明か
し、物言ふを聞きて、
「秋ばかりにや、太
政官の地の、今やか
ゐにならむ事を」と
誦し出でたりし人
こそをかしかりし
か。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『全唐詩』卷一七三

*李白

「江夏寄漢陽輔録事」

誰道此水廣 狹如一

匹練 江夏黃鶴樓

青山漢陽縣 大語猶可

聞 故人難可見 君草陳

琳檄 我書魯連箭 報國

有壯心 龍顏不迴眷 西

飛精衛鳥 東海何由填

鼓角徒悲鳴 樓船習征

戰 抽劍步霜月

夜行空庭遍 長呼結浮

雲 埋沒顧榮扇 他日觀

軍容 投壺接高宴

三巻本

宰相中将齊信、宣
方の中將、道方の少
納言などまゐりた
まへるに、人々出
物など言ふに、つ
いでもなく、「明日
はいかなる事をか」と
言ふに、いささか思
ひまはし、とどこほ
りもなく、「人間の
四月をこそは」とい
らへたまへるが、い
みじうをかしきこ
そ。

能因本

(第一六六段)

宰相中将齊信、宣
方の中將、とまゐり
たまへるに、人々出
て物など言ふに、つ
いでもなく、「明日
はいかなる詩をか」と
言ふに、いささか
思ひまはし、とどこ
ほりもなく、「人間
の四月をこそは」と
いらへたまへる、い
みじうをかしきこ
そ。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷一六

「大林寺桃花」

人間四月芳菲尽

山寺桃花始盛開

長恨春歸無覓處

不知轉入此中來

三巻本

やうやうすべり
失せなどして、ただ
頭中将、源中将、六
位一人残りて、よろ
づの事言ひ、経よみ、
歌うたひなどする
に、「明け果てぬな
り。帰りなむ」とて、
「露は別れの涙な
るべし」といふ事を、
頭中将のうち出だ
したまへれば、源中
将ももろともにい
とをかしく誦んじ
たるに、〔後略〕

能因本

やうやうすべり
失せなどして、ただ
頭中将、源中将、六
位一人残りて、よろ
づの事言ひ、経よみ
歌うたひなどする
に、「明け果てぬな
り。帰りなむ」とて、
「露は別れの涙な
るべし」といふ事を、
頭中将うち出だし
たまへれば、源中将
もろともに、いとを
かしう誦んじたる
に、〔後略〕

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』

卷上「七夕」

『菅家文草』卷五

七月七日

代牛女惜曉更

年不再秋夜五更

料知靈配曉來情

露応別涙珠空落

雲是残粧髻未成

三卷本

宰相になりたま
ひしころ、上の御前
にて、「詩をいとを
かしう誦じはべる
ものを。『蕭会稽が
古廟を過ぎし』など
も、誰か言ひはべら
むとする。

能因本

宰相になりたま
ひしを、うへの御前
にて、「詩をいとを
かしう誦んじはべ
りしを。『蕭会稽の
古廟をも過ぎし』な
ども、たれか言ひは
べらむとする。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷下

交友

大江朝綱

晩春

陪上州 大王臨水閣

同賦香乱花難識応教

詩序

蕭会稽之過古廟

託帝累代之交

張僕射之重新才

推為忘年之友

三卷本

源中将、おとらず
思ひて、ゆゑだち遊
びありくに、宰相中
将の御上を言ひ出
でて、『いまだ三十
の期におよばず』と
いふ詩を、さらにこ
と人に似ず誦じた
まひし」など言へば、
「などてかそれ
おとらむ。まさりて
こそせめ」とてよむ
に、「さらに似るべ
くだにあらず」と言
へば、〔後略〕

能因本

源中将、おとらず
と思ひて、ゆゑだち
ありくに、宰相中將
の御上を言ひ出で
て、『いまだ三十の
期におよばず』とい
ふ詩を、こと人には
似ずをかし誦した
まふ」など言へば、
「などかそれにお
とらむ。まさりてこ
そせめ」とてよむ。
「さらにわろくも
あらず」と言へば、
〔後略〕

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『本朝文粹』卷一

源英明

「見二毛」

顔回周賢者

未至三十期

潘岳晋名士

早著秋興詞

彼皆少於我

可喜初見遅

三卷本

朱買臣が妻を教へけむ年にはしも」と書きてやりたりしを、またねたがりて、上の御前にも奏しければ、宮の御方にわたらせたまひて、「いかでさる事は知りしぞ。『三十九なりける年こそさはいましめけれ』とて、宣方は『いみじう言はれにたり』と言ふめるは」と仰せられしこそ、〔後略〕

能因本

朱買臣が妻教へけむ年には」、ここにしも書きてやりたりしを、またねたがりて、うへの御前にも奏しければ、宮の御方にわたらせたまひて、「いかでかかる事は知りしぞ。『四十九になりける年こそいましめけれ』とて、宣方は『わびしう言はれにたり』と言ふめるは」と笑はせたまひしこそ、〔後略〕

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『蒙求』

標題二二七

「買妻恥醜」

前漢

朱買臣

字翁

子家貧

好學

不治産業

其妻求去

買臣謂妻曰

余年五十

當富貴

今三十九矣

妻不聽

遂去

三卷本

第一六一段

遠くて近きもの

極樂。舟の道。人の
仲。

能因本

第一七一段

遠くて近きもの

極樂。舟の道。男女
の仲。

前田家本

第一六九段

遠くて近きもの

極樂。舟の道。をと
こ女の中。ゆもき。

堺本

第一三〇段

とをくてちかき

もの。ごくらく。く
らまのつづらをり。
しはすのつごもり
と正月の一日と。宮
のべのまつり。

漢文学との関係

『漢書』卷八一

「張禹」

禹將崇入後堂飲食婦

女相對優人箏弦鏗鏘

極樂昏夜乃罷

師古曰極樂盡其歡樂

之情

『晋書』卷九二

「嘯賦」

總八音之至和固極樂

而無荒若乃登高臺以

臨遠披文軒而聘望

『後漢書』卷四〇

「班固」

撫鴻幢御增繳

方舟並驚俛仰極樂

三巻本

第一七四段

雪のいと高うは
あらで〔中略〕明け
暗れのほどに、帰る
とて「雪なにの山に
満てり」と誦したる
は、いとをかしきも
のなり。女の限りし
ては、さもえゐ明か
さざらましを、ただ
なるよりはをかし
う、好きたるありさ
まなど言ひ合はせ
たり。

能因本

第一七九段

雪のいと高くは
あらで〔中略〕明け
暗れのほどに、帰る
とて、「雪のなにの
山に満てり」とうち
誦んじたるは、いと
をかしきものなり。
女の限りして、さも
えゐ明かさざらま
しを、ただなるより
はいとをかしう、好
きたるありさまな
どを言ひ合はせた
り。

前田家本

第二二一段

雪はいと高うし
も降らず〔中略〕あ
けぐれのほどに帰
るとて、「雪群山に
満てり」とうち誦じ
たるは、いとをかし
おぼゆべし。女どち
は、えさてもやゐ明
さざらましとこそ
おぼゆれ。

堺本

第二一六段

ゆきはいたうた
かうもふらず、〔中
略〕あけぐれのほど
にかへるとて、「雪
くうさんにみてり」
とうちずむじたる
は、いとをかし、と
おぼゆべし。女どち
のかぎりにては、さ
てもやゐあかさざ
らましとこそ、おぼ
ゆれ。

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷下

「冬」雪 賈嵩

「白賦」

暁入梁王之苑

雪満群山

夜登庾公之楼 月明

千里

『文選』卷一四

「賦庚 鳥獸」

「舞鶴賦」鮑明遠

巖巖苦霧

皎皎悲泉

氷塞長河

雪満群山

三巻本

第一八五段

大路近なる所に
て聞けば、車に乗り
たる人の、有明のを
かしきに簾あげて、
「遊子なほ残りの
月に行く」といふ詩
を、声よくて誦した
るもをかし。馬にて
も、さやうの人の行
くはをかし。

能因本

ナシ

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷下

「暁」賈嵩

佳人尽飾於晨粧

魏宮鐘動

遊子猶行於残月

函谷鷄鳴

三卷本

第一九八段

文は

文集。

文選。

新賦。

史記、

五帝本紀。

願文。

表。

博士の申文。

能因本

第一九三段

文は

文集。

文選。

博士の申文。

前田家本

第八二段

書は

文集。

文選。

論語。

史記。

ごだい本紀。

願文。

博士の申文。

堺本

第四三段

文は、

文選。

文集。

論語をももしろ

し。

漢文学との関係

『賦譜』(五島美術巻

蔵)

* 故曰新賦之体 項

者 古賦之頭也 借如謝

惠連雪賦 歲將暮 時既

昏 寒風積 愁云繁是古

賦頭 欲近雪先叙時候

物候也瑞雪賦云聖有作

兮德動天 雪為瑞而表

豐年 匪君臣之合契豈

感応之昭室 若乃玄律

將暮 曾氷正堅 是新賦

先近瑞雪了 項叙物類

也 入胸已後 縁情体物

縦横成綺

三卷本

第二〇三段

舞は駿河舞。求
子、いとをかし。太
平樂、太刀などぞう
たてあれど、いとお
もしろし、唐土にか
たきどちなどして
舞ひけむなど聞く
に。

能因本

第二〇〇段

舞は駿河舞。求
子、太平樂は、さま
あしけれど、いとを
かし。太刀などうた
てあれど、いとおも
しろし、唐土にかた
きに具して遊びけ
むなど聞くに。

前田家本

第七七段

舞は駿河まひ。
もとめこ、太平樂は、
さまあしけれど、い
とをかし。太刀など
うたてあれど、いと
おもしろし、唐土に
かたきに具してあ
そびけむなど聞く
に。

堺本

第八八段

まひは、たいへい
ちく。たちぞうたて
あれど、らくけんふ
たりしてまふは、ま
さりてをもしろし。
崑崙。ばとう、かみ
ふりかけたるほど
は心にくくて、あふ
ぎたるまみ、いとう
とまし。されど、が
くのをもしろきな
り。また、もとめこ。
するがまひ、いみじ
くおもしろし。

漢文学との関係

『史記』卷七

「項羽本紀」

項羽拔劍起舞

項伯亦拔劍起舞常以身

翼蔽沛公 莊不得

擊

『北堂書鈔』

卷一〇七

「樂部」舞

君王為人不忍若入前

為壽壽畢請以劍舞因擊

沛公于坐殺之莊則入為

壽壽畢曰君王與沛公飲

軍中無以為樂請以劍舞

項王曰諾項莊拔劍起舞

項伯亦拔劍起舞

三卷本

第二二三段

三条の宮におは
しますころ、〔中略〕
青ざしといふ物を、
持て来たるを、青き
薄様を、艶なる硯の
蓋に敷きて、「これ
籬越しに候ふ」とて
まゐらせたれば、
みな人の花や蝶
やといそぐ日も
わが心をば君ぞ
知りける
この紙の端を
引き破らせたまひ
て書かせたまへる、
いとめでたし。

能因本

第二一六段

四条ノ宮におは
しますころ、〔中略〕
青ざしといふ物を、
人の持て来たると、
青き薄様を、艶なる
硯の蓋に敷きて、
「これ籬越しに候
へば」とて、まゐら
せたれば、
みな人の花や蝶
やといそぐ日も
わがこころをば
君ぞ知りける
と紙の端を破り
て書かせたまへる
も、いとめでたし。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷一一

* 「歩東坡」

朝上東坡歩

夕上東坡歩

東坡何所愛

愛此新成樹

種植當歲初

滋榮及春暮

信意取次栽

無行亦無數

綠陰斜景轉

芳氣微風度

新葉鳥下來

萎花蝶飛去

閒攜斑竹杖

徐曳黃麻屨

〔後略〕

三卷本

第二二七段

社は〔中略〕昔、
おはしましける帝
の、ただ若き人を
みおぼしめして、四
十になにぬるをば
失はせたまひけれ
ば、人の国の遠きに
行き隠れなどして、
さらに都のうちに
さる者のなかりけ
るに、〔後略〕

能因本

第二二五段

社は〔中略〕昔、
おはしましける御
門の、ただ若き人を
みおぼしめして、
四十になにぬるを
ば失はせたまひけ
れば、人の国の遠き
に行き隠れなどし
て、さらに都のうち
にさる者のなかり
けるに、〔後略〕

前田家本

第四二段

社は〔中略〕昔お
はしましける帝の、
たゞ若き人をのみ
おぼしめして、四十
になりぬるをばう
しなはせたまひけ
れば、人の國の遠き
に行き隠れなどし
て、さらに都のうち
にさる者のなかり
けるに、〔後略〕

堺本

ナシ

漢文学との関係

『雑宝藏経』一

「棄老國縁」

佛言

過去久遠

有國名棄老

彼國土中

有老人者

皆遠驅棄

有一大臣

其父年老

依如國法

應在駢遣

三卷本

唐土の帝、この国の帝をいかではかりて、この国打ち取らむとて、常にころみ事をし、あらがひ事をして、おそりたまひけるに、つやつやとまろにうつくしげに削りたる木の二尺ばかりあるを、『これが本末いづ方』と問ひにたてまつれたるに、すべて知るべきやうなければ、帝おぼしわづらひたるに、いとほしくて、〔後略〕

能因本

唐土の御門、この国の御門をいかではかりて、この国打ち取らむとて、常にころみ、あらがひをして送りとまひけるに、つやつやとまろにうつくしく削りたる木の二尺ばかりあるを、『これが本末いづ方ぞ』と問ひたてまつりたるに、すべて知るべきやうなければ、御門おぼしめしわづらひたるに、いとほしくて、〔後略〕

前田家本

唐土の帝、この國の帝を、いかではかりて、この國うちとらむとて、つねにころみ、あらがひをしておくりたまひけるに、つやつやとまろにうつくしげに削りたる木の二尺ばかりあるが、『これが本末いづかたぞ』と問ひにたてまつりたるに、すべて知るべきやうなければ、帝おぼしめしわづらひたるに、〔後略〕

堺本

ナシ

漢文学との関係

『漢書』卷二二

「天馬」

沫者 言汗流沫出也
字従水傍 本末之末 音亦如之 然今書字多作沫面之沫也

『漢書』卷二三卷

「刑」

刑罰不可廢於國

征伐不可偃於天 用之

有本末 行之有逆順耳。

三卷本

第二三七段

雪は白き。紫。

黒きもをかし。風吹くをりの雨雲。明けはなるるほどの黒き雲の、やうやう消えて、しろうなり行くも、いとをかし。「朝にさる色」とかや、文にも作りたなる。

月のいと明かき面に薄き雲、あはれなり。

能因本

第二三〇段

雪は白き。紫。

黒き雲あはれなり。風吹くをりのあま雲。

前田家本

第一〇段

雪は白き。紫。

風吹くをりのあま雲。いま明けはなるほど、黒き雲のやうやう明けてしろくなりゆく、をかし。「朝にさる色」とかや、ふみにも作りためる。

堺本

第九四段

雲は、むらさき。

風ふく日のあまぐも。ひいりはてたるやまのはの、まだなごりとまれるに、うすきばみたる雲の、ほそくたなびきたる、いとあはれなり。あけはななほど、くろきくものやうやうきゑて、しろくなり行をかし。「あしたにさるいろ」とかや、ふみにもつくりためり。

漢文学との関係

『芸文類聚』

卷四二

「楽部」楽府

*「朝雲曲曰」

陽臺氛氲多異色

巫山高高上無極

雲來雨去長不息

長不息

夢來游

經萬世

度千秋

『白氏文集』卷十二

「花非花」

花非花 霧非霧

夜半來 天明去

來如春夢幾多時

去似朝雲無覓處

三卷本

第二五七段

大蔵卿ばかり耳
とき人はなし。まこ
とに蚊の睫の落つ
るをも聞きつけた
まひつべうこそあ
りしか。

能因本

第二一八段

大蔵卿ばかり耳
とき人はなし。まこ
とにまつ毛の落つ
るほども聞きつべ
くぞありし。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『列子』第五

「湯問」

江浦之間生麼蟲

其名曰焦螟

群飛而集於蚊睫弗相

觸也

『全唐詩』卷三九九

元稹

* 「蟲多詩」浮塵子

乍可巢蚊睫

胡為附蟒鱗

已微於蠹蠹

仍害及人人

動植皆分命

毫芒亦是身

哀哉此幽物

生死敵浮塵

三卷本

第二六〇段

関白殿、二月二十一日に、法興院の積善寺といふ〔中略〕「いますこし近うなりてを」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう常よりものどかに照りたる昼つ方、「花の心ひらけざるや。いかに、いかに」とのたまはせたらば、「秋はいまだしく侍れど、夜に九度のぼる心地なむしはべる」と聞えさせつ。

能因本

第二五六段

関白殿、二月十のほどに、法興院の尺泉寺といふ御堂にて〔中略〕「いますこし近うなして」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう常よりも照りたる昼つかた、「花の心ひらけたりや。いかに言ふ」とのたまはせたらば、「秋かうまだしく侍れど、夜にここのたびなむのぼる心ちして侍る」など聞えさせたり。

前田家本

第三一九段

関白殿、二月十日のほど、法興院の積善寺といふ御堂にて〔中略〕「いますこし近うなして出でよ」などおほせらるれど、出でぬ。いみじう、つねよりものどかに照りたる昼つかた、「花の心は開けたりや、いかに」とのたまはせたらば、「秋はまだしく侍れど、夜に九度なむ廻るこちし侍る」と聞えさせつ。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』卷二一

「長間思」

九月西風興 月冷露
華凝 思君秋夜長 一夜
魂九升 二月東風來 草
拆花心開 思君春日遲
一日腸九迴 妾住洛橋
北君住洛橋南 十五即
相識 今年二十三
有如女蘿草 生在松之
側 蔓短枝苦高 縈迴上
不得 人言人有願 願至
天必成 願作遠方獸 步
步比肩行 願作深山木
枝枝連理生

三卷本

第二七四段

成信の中将は、入道兵部卿宮の御子にて、「中略」月の明かき見るばかり、ものの遠く思ひやられて、過ぎにし事の、憂かりしも、うれしかりしも、をかしとおぼえしも、ただ今のやうにおぼゆるをりやはある。

能因本

第二七一段

成信の中将は、入道兵部卿宮の御子にて、「中略」月の明かきばかり、遠く物思ひやられ、過ぎにし事、憂かりしも、うれしかりしも、をかしとおぼえしも、ただいまのやうにおぼゆるをりやはある。

前田家本

第三二一段

なりふさの中将は、入道兵部卿の宮の御子にて、「中略」月の明き見るばかりもの遠う思ひやられ、過ぎにし事、憂かりし、うれしかりしも、をかしとおぼえしも、ただいまのやうにおぼゆるをりやはある。

堺本

第二七五段

あめいみじくふりたらんとき、「中略」すべて、すぎぬるかたのあはれも、人のこひしきことなりとも、月にこそまさりおもひいでるなれ。こまのものがたりのあはれなることは、なによりういものとおもひながされ、きしかたゆくさきのことまで、月にはおもひあかしつるものを、雨にはさやはある。

漢文学との関係

『白氏文集』卷十四

「贈内」

漠漠闌苔新雨地

微微涼露欲秋天

莫对月明思往事

損君顔色減君年

三卷本

第二七八段

坤元録の御屏風
こそ、をかしうおぼ
ゆれ。漢書の屏風は
おぼしくぞ聞えた
る。月次の御屏風も
をかし。

能因本

第二七六段

坤元録の御屏風
こそ、をかしうおぼ
ゆる名なれ。かむな
んきう御屏風は、お
ぼしくぞ聞えたる。
月次の御屏風もを
かし。

前田家本

第二三三段

坤元録の御屏風
こそ、をかしうおぼ
ゆる名なれ。漢書の
御屏風を、をしう聞
ゆる。月次の御屏風
も、をかし。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『後漢書』卷三三
每正朔朝見 弘曲
躬而自卑帝問知其
故 遂聽置雲母屏
風 分隔其閒
『旧唐書』卷二二
「禮儀」
所以採坤策之玄
妙 法甲乙之精微
環迴契辰象之規
結構準陰陽之數
又基以象地故叶策
於坤元 柱各依方
復規模於甲子

三卷本

第二八〇段

雪のいと高う降りたるを例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

能因本

第二七八段

雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

前田家本

第三二二段

雪のいたう降りたるを、例ならず御格子もまゐらで、炭櫃に火おこして、物語しつつ、並みゐたまへれば、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」とおほせらるれば、御簾を高くまきあげたれば、笑わせたまふ。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』

卷一六

「香炉峰下

新卜山居

草堂初成

偶題東壁」

重題

日高睡足猶慵起

小閣重衾不怕寒

遺愛寺泉欹枕聽

香炉峰雪撥簾看

三卷本

第二八三段

十二月二十四日、
宮の〔中略〕うしろ
ざまにすべり入る
を、常に引き寄せ、
あらはになされて
わぶるもをかし。

「凜々として氷鋪
けり」といふことを、
かへすがへす誦し
ておはするは、いみ
じうをかしうて、夜
一夜もありかまほ
しきに、行く所の近
うなるも、くちをし。

能因本

第二八二段

十二月二十四日、
宮の〔中略〕うしろ
ざまへすべり出で
たるを、常に引き寄
せあらはになされ
てわぶるもをかし。

「凜々として氷鋪
けり」といふ詩を、
かへすがへす誦ん
じておはするは、い
みじうをかしうを
かしうて、夜一夜も
ありかまほしきに、
行く所の近くなる、
くちをし。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』卷上

「秋」

十五夜付月

公乘億

「長安八月

十五日夜賦」

秦甸之一千余里

凜々氷鋪

漢家之三十六宮

澄々粉飾

三巻本

第二九三段

大納言殿まゐり
たまひて、「中略」
上もうちおどろか
せたまひて、「いか
でありつる鶏ぞ」な
どたづねさせたま
ふに、大納言殿の、
「声明王のねぶり
をおどろかす」とい
ふことを、高ううち
出だしたまへる、め
でたうをかしきに、
ただ人のねぶたか
りつる目もい大き
になりぬ。

能因本

第二九二段

大納言殿まゐり
て、「中略」うへも
うちおどろかせお
はしまして、「いか
にありつるぞ」とた
づねさせたまふに、
大納言殿の、「声明
王のねぶりをおど
ろかす」といふ詩を、
高ううち出だした
まへる、めでたうを
かしきに、一人ねぶ
たかりつる目もい
と大きになりぬ。

前田家本

第三〇二段

大納言殿まゐら
せたまひて、「中略」
うへもうちおどろ
かせおはしまして、
「いかでありつる
ぞ」など、たづねさ
せたまふに、大納言
殿の「こゑ明王の眠
をおどろかす」とい
ふ詩を高ううち出
だしたまへる、めで
たうをかしきに、た
だ人のねぶたかり
つる目も、い大きに
なりぬ。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』巻下

「禁中」

都良香

「漏刻策」

鶏人曉唱

声驚明王之眠

鳧鐘夜鳴

響徹暗天之聴

三巻本

夜中ばかりに、廊に出でて人呼べば、「下るるか。いで、送らむ」とのたまへば、裳、唐衣は屏風にうちかけて行くに、月いみじう明かく、御直衣のいと白う見ゆるに、指貫を長う踏みしだきて、袖をひかへて、「中略」「遊子なほ残りの月に行く」と誦したまへる、またいみじうめでたし。

能因本

夜中ばかりに、廊に出でて人呼べば、「おるるか。われ送らむ」とのたまへば、裳、唐衣は屏風にうちかけて行くに、月のいみじく明かくて、直衣のいと白う見ゆるに、指貫のなから踏みくくまれ、袖をひかへて、「中略」「遊子なほ残りの月に行くは」と誦したまへる、また、いみじうめでたし。

前田家本

夜中ばかりに、廊に出でて、人呼べば、「おるるか。いで、われ送らむ」とのたまへば、裳、唐衣は屏風にうちかけて行くに、月いみじう明かくて、御直衣のいと白う見ゆるに、指貫を長く踏みしだきて、袖を控へて、「中略」「なほ、残りの月にゆく」と誦したまへる、またいみじうめでたし。

堺本

ナシ

漢文学との関係

『和漢朗詠集』下

「暁」

賈島

「暁賦」

佳人尽飾於晨粧

魏宮鐘動

遊子猶行於残月

函谷鶏鳴

三巻本

一本の二九段

宮の御前に、内の大臣の奉りたまへりけるを、「これに何を書かまし。上の御前には史記といふ文をなむ、書かせたまへる」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ」と申ししかば、「さは得てよ」とて給はせたりしを、「中略」と物おぼえぬ事ぞおほかるや。

能因本

第三二一段

宮の御前に、内の大殿の奉りたまへりし御草子を、「これに何を書かまし」と、「うへの御前には史記といふ文をなむ、書かせたまへる」とのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ」と申ししかば、「さは得てよ」とて給はせたりしを、「中略」と物おぼえぬ事ぞおほかるや。

前田家本

ナシ

堺本

ナシ

漢文学との関係

『白氏文集』一二

* 「初與元九別後」

〔中略〕

覺來未及說

叩門聲瑟瑟

言是商州使

送君書一封

枕上忽驚起

顛倒著衣裳

開緘見手札

一紙十三行

上論遷謫心

下說離別腸

心腸都未盡

不暇敘炎涼

〔後略〕

四系統本文における漢文学に関わる章段を対照させたものは『枕草子』研究においては、初めてのことである。通観して分かるように、関連性が高いものは、『白氏文集』と『和漢朗詠集』である。したがって、これらが多く引用された章段に留意することが必要であろう。

そこで、まず、本論の第二部「詩句と典籍をめぐる問題」の第一章と第二章では、それぞれ『枕草子』における『白氏文集』の引用」と『枕草子』における『和漢朗詠集』の引用」を中心に述べた。特に『和漢朗詠集』との関係については、古注釈を利用し、『枕草子』と『和漢朗詠集』とで重なる漢詩句に関する訓読表現に注目し、その異なる表現から、四系統本文の古さを検証することを試みた。

次に、第二部「第三章」では、「文は」章段を中心に考察した。「文」は漢籍を指すことは間違いないが、いくつかの謎がある。例えば、『史記』の第一巻「五帝本紀」と書名『史記』を並べて併記することについて考察を深めた。

最後に、前掲の表の「漢文学との関係」で、「＊」を示した部分である。これは、本論によって新たに考察を試みた所である。ただし、本論に収録したものは、その一部の箇所にとどまるが、以て自身の方法論の典型を提示したものと受けとめていただければ幸甚である。

〔参考文献〕

(A) 四系統『枕草子』本文に関する参考文献は以下の通りである。

三卷 本 『枕草子』陽明叢書国書篇「枕草子 徒然草」(思文閣 一九七五)

『枕草子』大東急記念文庫蔵(古梓堂文庫旧蔵)複製本(日本古典文学刊行会 一九七四)

『枕草子』松尾聰・永井和子 新編日本古典文学全集(小学館 二〇〇四)

『枕草子』渡辺実 新日本古典文学大系(岩波書店 一九九九)

『枕草子』増田繁夫 和泉古典叢書一(和泉書院 二〇〇一)

能因 本 『能因本枕草子』(上)学習院大学蔵「影印シリーズ」(笠間書院 二〇〇五)

『能因本枕草子』(下)学習院大学蔵「影印複製本」(笠間書院 一九九五)

『枕草子』松尾聰・永井和子 日本古典文学全集(小学館 一九七九)

前田家本 『前田家本枕草子』前田家尊経閣文庫蔵の写本の複製資料(一九二七)

『枕冊子新註(前田家本)』田中重太郎(古典文庫 一九七二)

堺 本 『堺本枕草子』吉田幸一(古典文庫 一九九六)

『堺本枕冊子』改定版 田中重太郎(古典文庫 一九五六)

『校本枕冊子』 田中重太郎 一〇五（古典文庫 一九五三～一九七四）

（B）漢文学の引用に関する主な注釈書は以下のようにある。

加藤盤斎 『清少納言枕草紙抄』 枕草子古註釈大成（誠進社 一九七八）

北村季吟
岩崎美隆 『枕草子春曙抄 扛園抄』 枕草子古註釈大成（誠進社 一九七八）

岡西惟中 『枕草子旁註』 枕草子古註釈大成（誠進社 一九七八）

金子元臣 『枕草子評釈』（明治書院 一九四二）

田中重太郎 『枕冊子全注釈』 一〇五（角川書店 一九七二～一九八三）

萩谷朴 『枕草子解環』 一〇五（同朋舎 一九八一～一九八三）

雨海博洋等 『枕草子大事典』 枕草子研究会編『（勉誠出版 二〇〇二）

（C）漢文学の引用に関して主な参考論文は以下のものである

桜井秀 『清少納言の性格と素行』 『わか竹』 第一二巻・九号（一九一九）

千葉亀雄 「「義山雜纂」その他」 『国語と国文学』 第三巻・四号（一九二六）

山岸徳平 「清少納言と斑子女王」 『国語と国文学』 第六巻・九号（一九二九）

大島庄之助 「清少納言と漢文」 『斯文』 第一二巻・一〇号（一九三〇）

池田亀鑑 「無名の琵琶（枕草子）」 『国文学解釈と鑑賞』 第一巻・一号（一九三六）

桜井祐三 「平安朝文学と白氏文集」 『むらさき』 第二巻・二号（一九三八）

金子彦二郎 「白氏文集と日本文学——主として平安朝の和歌との関係について——」 『国語と国文学』 第一五巻・四号（一九三八）

池田亀鑑 「知性の文学としての枕草子——特に外国文学への関心について——」 『国語と国文学』 第二三巻・一二号（一九四六）

金子彦二郎 「枕草子と千載佳句」 『諸橋博士古稀祝賀記念論文集』 諸橋轍次先生古稀祝賀記念会（一九五三）

目加田さくを 「清少納言の漢才」 『平安文学研究』 第一七巻（一九五五）

山内益次郎 「十列と枕草子」 『平安朝文学研究』 第一巻（一九五六）

池田亀鑑 「枕草子にみる思想とその変貌——大陸的知性から日本の情趣へ——」 『国文学』 第二巻・一号（一九五六）

中西清 「枕草子と漢文学」 『漢文学会会報』 第一七巻（一九五七）

玉木弘 「枕草子と白氏文集」 『王朝文学』 第一巻（一九五八）

杉本重治 「清少納言と漢籍」 『国語国文学』 第八巻（一九五八）

宇尾野潔 「枕草子の文芸の詞の原則的表現法」 『平安文学研究』 第二三巻（一九五九）

田中重太郎 「枕冊子に投影した海外文学」 『国文学』 第六巻・三号（一九六一）

松本治久 「平安時代女性の漢籍の教養について——枕草子を中心として——」 『跡見学園国語科紀要』 第

九卷（一九六一）

川口久雄 「唐代民間文学と枕草子の形成」 『平安朝日本漢文学史の研究』下（一九六一）

岩城秀夫 「遺愛寺の鐘は枕を歌てて聴く」 『国語教育研究』第八卷（一九六三）

小松茂美 「宮廷女房と白詩の享受」 『平安朝伝来の白氏文集と三蹟の研究』（一九六五）

柏谷嘉弘 「枕草子の漢語」 『国語と国文学』第四二卷・一一号（一九六五）

矢作武 「清少納言の漢才と古本蒙求」 『国文学研究』第三四卷（一九六六）

大曾根章介 「枕草子と漢文学」 『国文学』第一二卷・七号（一九六七）

丸山キヨ子 「漢学（三才女）」 『解釈と鑑賞』第三二卷・三号（一九六七）

森三千代 「平安朝と白楽天」 『日本文学の歴史』第三卷「宮廷サロンと才女」（一九六七）

柏谷嘉弘 「『枕草子』の漢語表現」 『月刊 文法』第三卷・四号、また（一九七一）

山岸徳平 「枕草子について、清少納言と斑子女王、清少納言の自然描写」 『物語随筆文学研究』（一九七二）

松田豊子 「清女の表現と漢籍の出典」 『光華女子大・同短大研究紀要』（一九七三）

川口久雄 「李商隠雜纂と清少納言枕草子について」 『西域の虎——平安朝比較文学論集——』（一九七四）

岩淵匡 「『枕草子』にあらわれた漢字意識の一例——「見るにことなる事なき物」の段の場合——」 『学

術研究』第二三卷（一九七四）

木越隆 「枕草子の源泉——日本漢詩文」「言語・源泉・影響・研究」 『枕草子講座』第四卷（一九七六）

矢作武 「枕草子の源泉——中国文学」「言語・源泉・影響・研究」 『枕草子講座』第四卷（一九七六）

目加田さくを 「清少納言の教養の源泉」 『解釈と鑑賞』第四二卷・一三号（一九七七）。

- 林紀美子 「『枕草子』の漢語表現——字音語「自然」を中心に——」『米沢国語国文』第五卷（一九七八）
- 川口久雄 「唐代民間文学と枕草子の形成」『三訂 平安朝日本漢文学史の研究』中（一九八二）
- 大曾根章介 「清少納言の漢文素養について」『枕冊子全注釈』四「月報三〇」（一九八三）
- 松岡紀子 「漢籍の引用から見た『枕草子』」『広島女学院大学 国語国文学誌』第一四卷（一九八四）
- 近藤春雄 「枕草子と漢文学」『日本漢文学大事典』（一九八五）
- 西村富美子 「平安女流文学と漢詩文——清少納言と紫式部の場合——」『四天王寺国際仏教大学文学部紀要』第一七卷（一九八五）
- 今井源衛 「平安朝の物語と漢詩文」『中古文学と漢文学』和漢比較文学叢書 第四卷（一九八七）
- 長尾高明 「清少納言は漢文が読めたか」『言語』第一七卷・一二号（一九八八）
- 松島芳昭 「清少納言の漢才とその意義」『解釈学』第六卷（一九八八）
- 柏谷嘉弘 「『枕冊子』の漢語の漢字表記」『漢字講座』第一二卷（一九八八）
- 伊藤倫厚 「『枕草子』「少し春ある心ちこそすれ」と『白氏文集』「二月寒少有春」」『竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢』（一九九一）
- 木村初恵 「『枕草子』の漢詩文に関する一考察」『国文学論叢』第三七卷（一九九二）
- 藤原浩史 「平安和文における漢語サ変動詞による感情表現」『日本語学』第一二卷・一号（一九九三）
- 後藤昭雄 「文は、願文・表・博士の申文——『枕草子』と漢文学」『源氏物語と漢文学』和漢比較文学叢書 第一二卷（一九九三）
- 藤本宗利 「『木の花は』の漢籍典拠の特質——読書行為における「典拠」の問題」『語学と文学』第三〇卷

(一九九四)

相田満 「『枕草子』漢故事考——『蒙求』故事とのかかわりを通して——」『東洋文化』第七五卷（一九九五）

陳安麗 「『枕草子』と漢籍——白居易・李白の受容を巡って——」『日本文芸学』第三三卷（一九九六）
鄭順粉 「中宮定子と「琵琶行」の女——『枕草子』漢詩受容の問題をめぐって——」『国文学研究』第一二五卷（一九九八）

相田満 「幼学・注釈の世界と説話——『蒙求』・『職原抄』の注釈学を例として」『説話文学研究』（一九九九）
柳沢良一 「清少納言の漢詩文の才について——『本朝麗藻』の詩人と比較して——」『日本文学研究年誌』第一二二卷（二〇〇三）

李曉梅 「『枕草子』の「木の花は」段における「桐の木の花」条について」『言語文化論叢』広島女学院大学 第七卷（二〇〇四）

相田満 「幼学書のひろがり——台湾故宫博物院藏平安朝古鈔本『蒙求』の意義と特質」『アジア遊学』（二〇〇四）

麻生由希子 「『枕草子』と漢籍——「水晶」という言葉を巡って」『筑紫語文』第一三卷（二〇〇四）
中島和歌子 「枕草子「風は」の段「黄なる木の葉ど……」と和漢の伝統」『札幌国語研究』第一〇卷（二〇〇五）

伊藤禎子 「引用漢籍通覧——『源氏物語』以前」『古代中世文学論考』第一三卷（二〇〇五）
張培華 「枕草子における「新賦」の新解」『古代中世文学論考』第一六卷（新典社 二〇〇五）

増田繁夫 「中国文学の平安女流文学への影響」 『関西文化への視座』（二〇〇六）

張培華 「枕草子「雲は」章段中の「朝さる色」 『古代中世文学論考』第一八卷（新典社 二〇〇六）

小森潔 「古典文学研究から「比較文化」研究へ」——『枕草子』を手がかりに—— 『比較文化研究』
第八四卷（二〇〇八）

沼尻利通 「枕草子」と孟嘗君の「三千の客」 『二松大学院紀要』第二二卷（二〇〇八）

張培華 「『枕草子』に見える「和」と「漢」——「九月二十日あまりのほど」章段を中心に—— 『国
文学研究資料館紀要』第三五卷（二〇〇九）

大洋和俊 「枕草子の「家」——詩歌を生きる身体」 『静岡英和学院大学紀要』第一七卷（二〇〇九）

張培華 「『枕草子』における「唐鏡」考——「心ときめきするもの」の章段を中心に—— 『総研大文化科
学研究』第6号（二〇一〇）

中島和歌子 「『枕草子』の五月五日——「三条の宮におはしますころ」の段が語る本書の到達点—— 『枕草
子 創造と新生』「第一部 創造する枕草子【和漢典籍】」（翰林書房 二〇一一）

第二部

詩句と典籍をめぐる問題

第一章 『枕草子』における『白氏文集』の引用

一 はじめに

前掲した第一部「四系統『枕草子』本文と漢文学の関係」に示したように、『枕草子』に最も多く引用された漢詩句は『白氏文集』である。

平安時代における『白氏文集』の影響の甚大さについては、今さら論を考える必要はないかもしれない。受容について、すでに多くの論考が積み重ねられてきた。^①例えば、『源氏物語』と『白氏文集』との考察にも多くの論考、専著がある。^②『源氏物語』より先に成立した『枕草子』と『白氏文集』と関係についても、論は少ない。しかし、本章では、『枕草子』に見える『白氏文集』の詩句について、少し視点を変えて、次のような問題を考察したい。

まず、『枕草子』に見える白樂天の詩句は、『白氏文集』の四種類の諷諭詩、閑適詩、感傷詩、雜律詩の中で、どのような部分なのか、また、どの部分に注目したのか。この点に視点をあてて、『源氏物語』における白樂天の詩句の比較と併せて、『枕草子』と『源氏物語』の引用の異同を明らかにしてみたい。そして、具体的に白樂天の詩句引用におりる特徴的な詩句の引用を取り上げて、『枕草子』と『源氏物語』の引用手法を考えたい。

二 『枕草子』に引用した詩句と『白氏文集』の分類

まず『白氏文集』の分類について説明しておきたい。

白樂天（七七二～八四六）の親友元稹（七七九～八三一）は、長慶年間（八二一～八二四）までの白樂天（白居易）が書かれた詩文を集めて、五十巻に分け、『白氏長慶集』を編纂した。その後、白樂天本人が、二十巻の新たな詩文を加えて、また諷諭、閑適、感傷、律詩の四種に分けて、『白氏長慶集』の後集として、五十巻である『白氏文集』を編集された。その後、さらに白樂天が、五巻を加え、「続後集」として、七十五巻の『白氏文集』を編集されたのである。

日本に輸入されたものは、藤原佐世（八四七～八九七）『日本国見在書目録』に記された『白氏長慶集』二十巻、『白氏文集』七〇巻であった。^③

平安時代には、『白氏文集』は『文集』と呼ばれている。『枕草子』「文は」章段も、「文集」と明記されており、している。また紫式部が中宮彰子に「文集」を教えて差上げた記録が『紫式部日記』「宮の、御前にて文集のところでろどろ読ませ給ひなどして、」（日本古典文学大系『紫式部日記』五〇一頁）にも残されている。また、『枕草子』の記述などから、『白氏文集』は、一条天皇時代、宮廷女性貴族にも熱心に読まれているといえる。

では、前述したように、七〇巻の詩文集の中で、彼女らはどの部分に注目したのか。そこで、前掲した第一部『枕草子』における漢文学受容の総覧^④から、最も多くの漢詩句に見える三卷本本文（新編日本古典文学全集）の章段数と章段名を取り上げ、『白氏文集』（和刻本漢詩集成）に基づいて、巻数、詩題名及び四分類の諷諭、閑適、感傷、律詩を示す（なお引用は上海古籍出版社『白居易集箋校』に拠る^④）。

番号	枕草子章段号・章段名	『白氏文集』卷数・題名・「四分類」	諷諭・閑適・感傷・律詩
1	第一段 春はあけぼの	第三一卷 早春憶蘇州寄夢得	雜律詩
2	第一段 春はあけぼの	第一四卷 禁中聞蛩	雜律詩
3	第一段 春はあけぼの	第二二卷 閒夕	雜律詩
4	第一段 春はあけぼの	第二六卷 秋思	雜律詩
5	第一段 春はあけぼの	第二九卷 秋日与張賓客舒著作同遊	雜律詩
6	第一段 春はあけぼの	第一〇卷 送兄弟迴雪夜	感傷詩
7	第三段 正月一日は	第三四卷 早春持齋答皇甫十見贈	雜律詩
8	第三段 正月一日は	第一二卷 長恨歌	感傷詩
9	第三段 正月一日は	第七卷 早春	閑適詩
10	第三段 正月一日は	第一〇卷 春晚寄微之	感傷詩
11	第三段 正月一日は	第一二卷 長恨歌	感傷詩
12	第六段 大進生昌が家に	第六卷 酬吳七見寄	閑適詩
13	第七段 上に候ふ御猫は、かうぶりにて	第一卷 過元家履信宅	諷諭詩
14	第八段 三月三日、七月七日、	第三三卷 三月三日	雜律詩
15	第八段 三月三日、七月七日	第一二卷 長恨歌	感傷詩
16	第九段 よろこび奏するこそをかしけれ	第三卷 新樂府 馴犀	諷諭詩
17	第一〇段 今内裏の東をば、	第一五卷 題盧祕書夏日新栽竹二十韻	雜律詩

18	第二三段	すさまじきもの昼ほゆる犬	第一五卷	渭村退居寄禮部崔侍郎	雜律詩
19	第二三段	すさまじきもの昼ほゆる犬	第一二卷	長恨歌	感傷詩
20	第二三段	すさまじきもの昼ほゆる犬	第二六卷	失婢	雜律詩
21	第二三段	すさまじきもの昼ほゆる犬	第一〇卷	夢與李七庾三十三同訪元九	感傷詩
22	第二六段	にくきもの	第八卷	泛春池	閑適詩
23	第二六段	にくきもの	第二一卷	勸酒	雜律詩
24	第二六段	にくきもの	第七卷	過李生	閑適詩
25	第二六段	にくきもの	第一一卷	蚊蟻	感傷詩
26	第二八段	過ぎにし方恋しきもの	第二七卷	不出門	雜律詩
27	第二八段	過ぎにし方恋しきもの	第二三卷	得湖州崔十八使	雜律詩
28	第二九段	心ゆくもの	第一四卷	開元九詩書卷	雜律詩
29	第三〇段	檳榔毛は、のどかにやりたる	第一八卷	題郡中荔枝詩	雜律詩
30	第三〇段	檳榔毛は、のどかにやりたる	第五卷	常樂里閒居	閑適詩
31	第三一段	説經の講師は、顔よき	第一二卷	長恨歌	感傷詩
32	第三一段	説經の講師は、顔よき	第二一卷	霓裳羽衣	雜律詩
33	第三一段	説經の講師は、顔よき	第二五卷	花酒	雜律詩
34	第三二段	菩提といふ寺に	第九卷	新秋	感傷詩
35	第三二段	菩提といふ寺に	第一八卷	龍昌寺荷池	雜律詩

36	第三五段	木の花は	第二卷	有木詩八首	諷諭詩
37	第三五段	木の花は	第一卷	紫藤	諷諭詩
38	第三五段	木の花は	第二四卷	宿湖中	雜律詩
39	第三五段	木の花は	第一二卷	長恨歌	感傷詩
40	第三五段	木の花は	第一四卷	江岸梨花	雜律詩
41	第三五段	木の花は	第二卷	答桐花	諷諭詩
42	第三七段	節は、五月にしく月はなし	第一二卷	長恨歌	感傷詩
43	第三八段	花の木ならぬは	第一二卷	琵琶引	感傷詩
44	第三八段	花の木ならぬは	第二卷	有木詩八首	諷諭詩
45	第三八段	花の木ならぬは	第二〇卷	西湖晚歸回望孤山寺贈諸客	雜律詩
46	第三九段	鳥は	第一五卷	紅鸚鵡	雜律詩
47	第三九段	鳥は	第一六卷	遊寶稱寺	雜律詩
48	第三九段	鳥は	第三卷	上陽白髮人	諷諭詩
49	第三九段	鳥は	第三六卷	送王卿使君赴任	雜律詩
50	第四一段	虫は	第二卷	反鮑明遠白頭吟	諷諭詩
51	第四二段	七月ばかりに、風いたう吹きて	第三四卷	雨後秋涼	雜律詩
52	第四七段	職の御曹司の西面の	第六卷	詠拙	諷諭詩
53	第四七段	職の御曹司の西面の	第一二卷	同韓侍郎遊鄭家池	感傷詩

54 第六四段	草は	第一三卷	代書詩一百韻寄微之	雜律詩
55 第七七段	御仏名のまたの日	第一二卷	琵琶行	感傷詩
56 第七八段	頭中將のすずろなるそらごとを	第一七卷	廬山草堂雨夜独宿	雜律詩
57 第七九段	返としの二月余日	第四卷	驪宮高	諷諭詩
58 第九〇段	上の御局の御簾の前にて	第一二卷	琵琶行	感傷詩
59 第九三段	あさましきもの	第四卷	井底引銀瓶	諷諭詩
60 第九六段	職におはします比	第一二卷	琵琶行	感傷詩
61 第一〇二段	二月つごもり比	第一四卷	酬和元九東川路詩	雜律詩
62 第一三七段	殿などのおはしまさで後	第九卷	秋題牧丹叢	感傷詩
63 第一四五段	うつくしきもの	第一〇卷	觀兒戲	感傷詩
64 第一五二段	うらやましげなるもの	第二六卷	觀幻	雜律詩
65 第一五五段	故殿の御服のころ	第三四卷	酬夢得比萱草見贈	雜律詩
66 第一五五段	故殿の御服のころ	第十六卷	大林寺桃花	雜律詩
67 第一七五段	村上の前帝の御時	第二五卷	寄殷協律	雜律詩
68 第二三三段	三条の宮におはしますころ	第一一卷	歩東坡	感傷詩
69 第二三七段	雪は	第一二卷	花非花	感傷詩
70 第二五〇段	男こそ、なほいとありがたく	第一二卷	長恨歌	感傷詩
71 第二六〇段	関白殿、二月廿一日に	第一二卷	長相思	感傷詩

72 第二七四段	成信の中將は	第一四卷	贈内	雑律詩
73 第二八〇段	雪のいとたかう降たる	第一六卷	香炉峰下新卜山居草堂初成	雑律詩
74 跋文	宮の御前に、内の大臣の奉り	第一二卷	初與元九別後	感傷詩

右1〜74箇所までに、諷諭詩は、一〇箇所（それぞれ13、16、36、37、41、44、48、50、57、59番）ある。閑適詩は（9、12、22、24、30、52番）、感傷詩は、二四箇所（6、8、10、11、15、19、21、25、31、34、39、42、43、53、55、58、60、62、63、68、69、70、71、74番）、雑律詩は、三四箇所であり、（1、2、3、4、5、7、14、17、18、20、23、26、27、28、29、32、33、35、38、40、45、46、47、49、51、54、56、61、64、65、66、67、72、73（がある）。

これらを見ると、『枕草子』中には、『白氏文集』の四種の諷諭詩、閑適詩、感傷詩、雑律詩のいずれの部類が見えることが分かる。ただし七〇卷『白氏文集』によると、『枕草子』に見えた何の最後の巻数は「第三六卷」であることから考えて、『枕草子』に引かれた『白氏文集』の全体量は半分くらいにとどまっている。

では、『源氏物語』における『白氏文集』の引用実態はいかがであろう。そこで、節を変えて、前掲した方法で、整理しておく。

三 『源氏物語』に引用した詩句と『白氏文集』の分類

次に、同じ方法で、『源氏物語』における『白氏文集』との引用関係をまとめてみよう。この作成に際しては、新

編日本古典文学全集『源氏物語』「漢籍・史書・仏典引用一覧」^⑤を参考にした。

番号	源氏物語	卷名	『白氏文集』卷数・題名	「四分類」	諷諭・閑適・感傷・律詩
1	桐壺		第一二卷	長恨歌	感傷詩
2	桐壺		第一二卷	長恨歌	感傷詩
3	桐壺		第一二卷	長恨歌	感傷詩
4	桐壺		第一二卷	長恨歌	感傷詩
5	帚木		第六九卷	偶吟	雜律詩
6	帚木		第二卷	秦中吟 議婚	諷諭詩
7	夕顔		第一九卷	聞夜砧	雜律詩
8	夕顔		第六六卷	酬夢得霜夜對月見懷	雜律詩
9	夕顔		第二卷	秦中吟 不致仕	諷諭詩
10	夕顔		第一二卷	長恨歌	感傷詩
11	夕顔		第一卷	凶宅	諷諭詩
12	夕顔		第一九卷	聞夜砧	雜律詩
13	末摘花		第六二卷	北窓三友	雜律詩
14	末摘花		第二卷	秦中吟 重賦	諷諭詩
15	紅葉賀		第一〇卷	夜聞歌者	感傷詩

16	紅葉賀	第一二卷	琵琶行	感傷詩
17	葵	第一二卷	長恨歌	感傷詩
18	賢木	第三卷	上陽白髮人	諷諭詩
19	賢木	第一七卷	薔薇正開春酒初熟因招劉十九	雜律詩
20	須磨	第二六卷	草堂記	雜律詩
21	須磨	第二卷	統古詩十首 第二首	諷諭詩
22	須磨	第一三卷	冬至宿楊梅館	雜律詩
23	須磨	第一六卷	香炉峰下新卜山居草堂初成	雜律詩
24	須磨	第一四卷	八月十五夜 禁中	雜律詩
25	須磨	第一六卷	香炉峰下新卜山居草堂初成	雜律詩
26	須磨	第一七卷	十年三月三十日 別微之	雜律詩
27	明石	第一二卷	琵琶引	感傷詩
28	朝顏	第五三卷	贈皇甫庶子	雜律詩
29	少女	第一九卷	贈駕部吳郎中七兄	雜律詩
30	玉鬢	第三卷	縛戎人	諷諭詩
31	胡蝶	第二卷	秦中吟 傷宅	諷諭詩
32	胡蝶	第三卷	海漫漫	諷諭詩
33	行幸	第二卷	不致仕	諷諭詩

34 梅枝	第五一卷	故元少尹集後題	雜律詩
35 藤裏葉	第一三卷	三月三十日題慈恩寺	雜律詩
36 若菜上	第一六卷	庾樓曉望	雜律詩
37 若菜上	第三卷	纏宮高	諷諭詩
38 若菜下	第一二卷	長恨歌	感傷詩
39 若菜下	第四卷	采詩官	諷諭詩
40 若菜下	第六四卷	楊柳枝詞	雜律詩
41 若菜下	第一二卷	長恨歌	感傷詩
42 柏木	第五八卷	自嘲	雜律詩
43 橫笛	第一二卷	琵琶引	感傷詩
44 夕霧	第六四卷	微之敦詩晦叔相次長逝歸然自傷因成二絕	雜律詩
45 夕霧	第二卷	秦中吟 不致仕	諷諭詩
46 夕霧	第四卷	李夫人	諷諭詩
47 幻	第四卷	牡丹芳	諷諭詩
48 幻	第三卷	上陽白髮人	諷諭詩
49 幻	第一二卷	長恨歌	感傷詩
50 幻	第一二卷	長恨歌	感傷詩
51 句兵部卿	第一二卷	琵琶引	感傷詩

69 浮舟	68 浮舟	67 宿木	66 宿木	65 宿木	64 宿木	63 宿木	62 宿木	61 総角	60 総角	59 橋姫	58 竹河	57 竹河	56 竹河	55 竹河	54 紅梅	53 匂兵部卿	52 匂兵部卿
第一五卷	第一卷	第一二卷	第一二卷	第二六卷	第一四卷	第一四卷	第一六卷	第四卷	第一二卷	第一六卷	第一七卷	第六二卷	第一八卷	第三卷	第一六卷	第六七卷	第一五卷
渭村退居寄禮部崔侍郎翰林錢舍人	凶宅	長恨歌	長恨歌	草堂記	贈内	暮立	官舎閑題	李夫人	生離別	香炉峰下新卜山居草堂初成	十年三月三十日 別微之	六十六	春江	上陽白髮人	北亭招客	杪秋独夜	放言五首
雜律詩	諷諭詩	感傷詩	感傷詩	雜律詩	雜律詩	雜律詩	雜律詩	諷諭詩	感傷詩	雜律詩	雜律詩	雜律詩	雜律詩	諷諭詩	雜律詩	雜律詩	雜律詩

70 蜻蛉	第一二卷	長恨歌	感傷詩
71 蜻蛉	第四卷	李夫人	諷諭詩
72 蜻蛉	第四卷	李夫人	諷諭詩
73 蜻蛉	第一四卷	暮立	雜律詩
74 手習	第四卷	陵園妾	諷諭詩

『源氏物語』には、『枕草子』引用で示したものと様相がやや異なり、「閑適詩」は見えない。最も多くに引用された部分は、三三箇所（5、7、8、12、13、19、20、22、23、24、25、26、28、29、34、35、36、40、42、44、52、53、54、56、57、58、59、62、63、64、65、69、73）である。また感傷詩は、一九箇所（1、2、3、4、10、15、16、17、27、38、41、43、49、50、51、60、66、67、70）、諷諭詩は、二三箇所（6、9、11、14、18、21、30、31、32、33、37、39、45、46、47、48、55、61、68、71、72、74）となっている。

以上『枕草子』と『源氏物語』に見える引用はともに七四箇所で、『白氏文集』の四分類のうち、それぞれの諷諭詩、閑適詩、感傷詩、雜律詩に当たる数を一覧にすると次表のようになる。

白氏文集		枕草子		源氏物語	
諷諭詩	10	2	2		
閑適詩	6	0			
感傷詩	24	19			
雜律詩	34	33			

まとめると、合計数は『枕草子』も『源氏物語』もいずれも七四であるが、『源氏物語』には「閑適詩」は見えず、また、雑律詩は、『枕草子』と『源氏物語』とで、ほぼ同じ数である。『枕草子』による感傷詩は、『源氏物語』より多く、諷諭詩は、『枕草子』より『源氏物語』の方が多い。

では、これらのは、具体的に、『枕草子』と『源氏物語』の中で、どのように引かれているのだろうか、次に『白氏文集』の諷諭詩、閑適詩、感傷詩、雑律詩による引用頻度数を基準にして、『枕草子』章段数と『源氏物語』巻名を対応せて、次節で分析してみよう。

四 引用した詩句による『枕草子』と『源氏物語』の差異

左表は、上段では『枕草子』と『源氏物語』に見える『白氏文集』詩句を、A 諷諭詩、B 閑適詩、C 感傷詩、D 雑律詩のように第一巻から順に取り上げて置く。中段には、上段に対応して、『枕草子』に見える引用の頻度数と該当する章段数を示す。下段では、上段に対応して、『源氏物語』に見える引用の頻度数と巻名を明記する。

『白氏文集』巻数		詩題名	頻度	枕草子段数	頻度	源氏物語巻名
A 諷諭詩						
第一巻	過元家履信宅	……………	1	(1)	第七段	
第一巻	紫藤	……………	2	(2)	第三五段	
第一巻	凶宅	……………	1	(1)	夕顔	

第一卷	供託……………	2	(2)	浮舟
第二卷	有木詩八首(第二首)……………	3	(3)	第三五段
第二卷	有木詩八首(第八首)……………	4	(4)	第三八段
第二卷	答桐花……………	5	(5)	第三五段
第二卷	反鮑明遠白頭吟……………	6	(6)	第四一段
第二卷	秦中吟 議婚……………	3	(3)	帚木
第二卷	秦中吟 不致仕……………	4	(4)	夕顏
第二卷	秦中吟 不致仕……………	4	(5)	胡蝶
第二卷	秦中吟 不致仕……………	4	(6)	行幸
第二卷	秦中吟 傷宅……………	5	(7)	夕霧
第二卷	秦中吟 重賦……………	6	(8)	末摘花
第二卷	統古詩十首 第二首……………	7	(9)	須磨
第三卷	上陽白髮人……………	7	(7)	第三九段
第三卷	新樂府 馴犀……………	8	(8)	第九段
第三卷	上陽白髮人……………	8	(10)	賢木
第三卷	上陽白髮人……………	8	(11)	幻
第三卷	上陽白髮人……………	8	(12)	竹河
第三卷	縛戎人……………	9	(13)	玉鬢

第三卷	海漫漫……………	10	(14)	胡蝶
第四卷	纏宮高……………	11	(15)	若菜上
第四卷	驪宮高……………	9	(9)	第七九段
第四卷	井底引銀瓶……………	10	(10)	第九三段
第四卷	采詩甘……………	12	(16)	若菜下
第四卷	李夫人……………	13	(17)	夕霧
第四卷	李夫人……………	13	(18)	総角
第四卷	李夫人……………	13	(19)	蜻蛉
第四卷	李夫人……………	13	(20)	蜻蛉
第四卷	牡丹芳……………	14	(21)	幻
第四卷	陵園妾……………	15	(22)	手習
B 閑適詩				
第五卷	常樂里閒居……………	1	(1)	第三〇段
第六卷	酬吳七見寄……………	2	(2)	第六段
第六卷	詠拙……………	3	(3)	第四七段
第七卷	過李生……………	4	(4)	第二六段
第七卷	早春……………	5	(5)	第三段
第八卷	泛春池……………	6	(6)	第二六段

C 感傷詩

第九卷	新秋……………	1	(1)	第三二段
第九卷	秋題牡丹叢……………	2	(2)	第一三七段
第一〇卷	送兄弟迴雪夜……………	3	(3)	第一段
第一〇卷	春晚寄微之……………	4	(4)	第三段
第一〇卷	夢与李七庾三十三……………	5	(5)	第二三段
第一〇卷	觀兒戲……………	6	(6)	第一四五段
第一〇卷	夜聞歌者……………	7	(7)	第二六段
第一卷	蚊蟆……………	8	(8)	第二三三段
第一卷	步東坡……………	9	(9)	第三段
第一二卷	長恨歌……………	9	(10)	第八段
第一二卷	長恨歌……………	9	(11)	第三段
第一二卷	長恨歌……………	9	(12)	第二三段
第一二卷	長恨歌……………	9	(13)	第三一段
第一二卷	長恨歌……………	9	(14)	第三五段
第一二卷	長恨歌……………	9	(15)	第三七段
第一二卷	長恨歌……………	9	(16)	第二五〇段

1
(1) 紅葉賀

第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	第一二卷	
同韓侍郎遊鄭家池	琵琶行	琵琶行	琵琶行	琵琶引	長恨歌	長恨歌	長恨歌	長恨歌	長恨歌	長恨歌	長恨歌	長恨歌	長恨歌	長恨歌	長恨歌	長恨歌	
11	10	10	10	10													
(21)	(20)	(19)	(18)	(17)													
第四七段	第九六段	第九〇段	第七七段	第三八段													
					2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	
					(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)
					蜻蛉	宿木	宿木	幻	幻	若菜下	若菜下	葵	夕顏	桐壺	桐壺	桐壺	桐壺

第一二卷	花非花……………	12	(22)	第二三七段		
第一二卷	長相思……………	13	(23)	第二六〇段		
第一二卷	初與元九別後……………	14	(24)	跋文		
第一二卷	琵琶行……………				3	(15) 紅葉賀
第一二卷	琵琶引……………				3	(16) 明石
第一二卷	琵琶引……………				3	(17) 橫笛
第一二卷	生離別……………				4	(18) 勾兵部卿
第一二卷	生離別……………				4	(19) 總角
D 雜律詩						
第一三卷	代書詩一百韻寄微之……………	1	(1)	第六四段		
第一三卷	冬至宿楊梅館……………				1	(1) 須磨
第一三卷	三月三十日題慈恩寺……………				2	(2) 藤裏葉
第一四卷	禁中聞蛩……………	2	(2)	第一段		
第一四卷	開元九詩書卷……………	3	(3)	第二九段		
第一四卷	江岸梨花……………	4	(4)	第三五段		
第一四卷	酬和元九東川路詩……………	5	(5)	第一〇二段		
第一四卷	贈內……………	6	(6)	第二七四段		
第一四卷	暮立……………				3	(3) 宿木

第一四卷	暮立……………	3	(4)	蜻蛉
第一四卷	贈內……………	4	(5)	宿木
第一四卷	八月十五夜 禁中……………	5	(6)	須磨
第一五卷	題盧祕書夏日新栽竹……………	7	(7)	第一〇段
第一五卷	渭村退居寄禮部崔侍郎……………	8	(8)	第二三段
第一五卷	紅鸚鵡……………	9	(9)	第三九段
第一五卷	放言五首……………	6	(7)	勾兵部卿
第一五卷	渭村退居寄禮部崔侍郎……………	7	(8)	浮舟
第一六卷	遊寶稱寺……………	10	(10)	第三九段
第一六卷	大林寺桃花……………	11	(11)	第一五五段
第一六卷	香垆峰下(第四首)……………	12	(12)	第二八〇段
第一六卷	香垆峰下(第四首)……………	8	(9)	須磨
第一六卷	香垆峰下(第一首)……………	9	(10)	須磨
第一六卷	香垆峰下(第一首)……………	9	(11)	橋姬
第一六卷	庾樓曉望……………	10	(12)	若菜上
第一六卷	北亭招客……………	11	(13)	紅梅
第一六卷	官舍閑題……………	12	(14)	宿木
第一七卷	廬山草堂雨夜獨宿……………	13	(13)	第七八段

第一七卷	十年三月三十日……………	13	須磨
第一七卷	十年三月三十日……………	13	賢木
第一七卷	薔薇正開春酒初熟……………	14	竹河
第一八卷	題郡中荔枝詩……………	14	(14)
第一八卷	龍昌寺荷池……………	15	(15)
第一八卷	春江……………	15	竹河
第一九卷	聞夜砧……………	16	(19)
第一九卷	聞夜砧……………	16	夕顏
第一九卷	贈駕部吳郎中七兄……………	17	(20)
第二〇卷	西湖晚歸回望孤山寺……………	16	(21)
第二一卷	勸酒……………	17	少女
第二一卷	霓裳羽衣……………	18	(18)
第二二卷	閒夕……………	19	(17)
第二三卷	得湖州崔十八使……………	20	(16)
第二四卷	宿湖中……………	21	(15)
第二五卷	花酒……………	22	(14)
第二五卷	寄殷協律……………	23	(13)
第二六卷	秋思……………	24	(12)

第二六卷	失婢……………	25	(25)	第二三段	
第二六卷	觀幻……………	26	(26)	第一五二段	
第二六卷	草堂記……………				18
第二六卷	草堂記……………				18
第二六卷	不出門……………	27	(27)	第二八段	(23)
第二九卷	秋日与張賓客舒著作……………	28	(28)	第一段	
第三一卷	早春憶蘇州寄夢得……………	29	(29)	第一段	
第三三卷	三月三日……………	30	(30)	第八段	
第三四卷	早春持齋答皇甫十見贈……………	31	(31)	第三段	
第三四卷	雨後秋涼……………	32	(32)	第四二段	
第三四卷	酬夢得比萱草見贈……………	33	(33)	第一五五段	
第三六卷	送王卿使君赴任……………	34	(34)	第三九段	
第五一卷	故元少尹集後題……………				19
第五三卷	贈皇甫庶子……………				20
第五八卷	自嘲……………				21
第六二卷	北窓三友……………				22
第六二卷	六十六……………				23
第六四卷	楊柳枝詞……………				24
					(29)
					若菜下
					竹河
					末摘花
					柏木
					朝顏
					梅枝
					(24)
					梅枝
					(25)
					朝顏
					(26)
					柏木
					(27)
					末摘花
					(28)
					竹河
					(29)
					若菜下

第六四卷	微之敦詩晦叔相次……………	25	(30)	若菜下
第六六卷	酬夢得霜夜対月見懷……………	26	(31)	夕顔
第六七卷	杪秋独夜……………	27	(32)	匂兵部卿
第六九卷	偶吟……………	28	(33)	帚木

右の頻度数は、二種がある。一種は詩作によって数える数字であり、もう一つカッコが付いた数字は、引用箇所
の数字である。つまり同様の詩作を重複して引用する箇所を数える数字である。この二種の数字を比べてみると、
『枕草子』と『源氏物語』における『白氏文集』の引用の特徴が見えてくる。

例えば、『枕草子』ではA諷諭詩10首(10)箇所、B閑適詩6首(6)箇所、C感傷詩14首(24)箇所、D雑律詩34種(34)箇
所で、合計74箇所、64首である。重複する引用は、感傷詩だけである。

一方、『源氏物語』では、A諷諭詩は15首(22)箇所、B閑適詩はなし、C感傷詩は4首(19)箇所、D雑律詩は28首(33)
箇所、合計74箇所、47首である。重複する引用は、いずれも諷諭詩、感傷詩、雑律詩に見られる。

引用詩作の数から見ると、『源氏物語』より『枕草子』のほうが多く見える。しかし七一巻『白氏文集』(『日本国
見在書目録』による)の巻数から見ると、『枕草子』では「第三六巻」までしか見えず、『源氏物語』では「第六九
巻」まで見えることから考えて、『枕草子』より『源氏物語』のほうが幅広く文集に深く触れたと言うことも可能で
ある。

ところが、感傷詩の引用は、『源氏物語』より、『枕草子』の方は、深めるところが見える。
例えば、数から見ると、『源氏物語』では、四首しか見えず、『枕草子』では、一四が見える。また、同じ感傷詩

「長恨歌」に対して、『枕草子』の引用数は、八回、『源氏物語』の引用は、一三回であった。

しかしながら、白詩を取り扱って、具体的には、『枕草子』と『源氏物語』どのように処理したのか、この点について、次の節に分析してみたい。

五 『枕草子』の『白氏文集』引用特徴

次に、『枕草子』と『源氏物語』の引かれた『白氏文集』詩句の表現差異を考えてみたい。

まず両作品とも引かれた白詩を取り上げておきたい。

『白氏文集』第一六卷「雜律詩」「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁（香炉峰の下に新たに山居を卜し、草堂初めて成る。偶たま東壁に題す）」「重題」である。

日高睡足猶慵起 日高く 睡り足りて 猶ほ起くるに慵し、

小閣重衾不怕寒 小閣 衾を重ねて 寒を怕れず。

遺愛寺鐘欹枕聽 遺愛寺の鐘は 枕の欹てて聽き、

香炉峯雪撥簾看 香炉峯の雪は 簾を撥げて看る。

匡廬便是逃名地 匡廬は便ち是れ 名を逃るる地、

司馬仍為送老官 司馬は仍ほ 老を送るの官為り。

心泰身寧是歸処　心泰かに　身寧きは　是れ歸処なり、
故郷可独在長安　故郷　何ぞ独り　長安に在るのみなんや。^⑥

元和一二年（八一七）、四六歳の白樂天は江州の司馬として、現地（江西省）名所の「廬山」の「香炉峰」と、「遺愛寺」という寺の間に、「新草堂」を構築した。詩人は「新草堂」を完成した後に、「重題」という題目で、五首の詩を書く、これはその第四首目である。

これを引く『枕草子』第二八〇段「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」の章段はあまりに有名である。^⑦

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などしてあつまりさぶらふに、
「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせた
まふ。人々も「さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人にはさべきな
めり」と言ふ。

傍線のように、中宮定子は、実に簾を上げてほしかったが、それを直接言わず、ただ、『白氏文集』の詩句（前掲した律詩の二聯の対句の下句「**香炉峯雪撥簾看**」）の前の部分から、「香炉峰の雪」はいかがであろうかと女房達に聞き、応答した清少納言の機知に定子が感服したという。

これを清少納言の「自讃」と見る説は従来より多かったが、その話を成り立たせた基盤は、中宮定子と清少納言

の漢詩文の実力である。また、中宮定子が、なぜこの詩作を思い出したのかということにも注目される。この点について、引用された白樂天の詩句によって自然描写を考えてみたい。

白樂天は、寒くなる冬日の朝、遅めに起きて、寺の鐘を聞きながら、簾を上げて香炉峯の雪を見る。雪、寒さ、鐘の声などの冬に関する情景がそこには詠み込まれている。

同じように、清少納言が書いた『枕草子』も、最初は、雪がたいへん降って積った冬の日で、火を起こしたり、物語をしたり、簾を下ろした状態で、中宮定子は、簾をあげてもらうために、その場で、白氏の詩句を取り込んだ。遣り取りをもちかけたのである。このように、白詩の作品世界と現実の自然背景が一致することが、『枕草子』の描写により分かる。

一方、『源氏物語』の方はいかがであろう。

前述の如く、『源氏物語』では、右『枕草子』に引かれた白詩「重題」系列詩を三回取り込んでいる。すなわち「須磨」巻に二回、「橋姫」巻に一回である。ここでは「須磨」の一回の場面を掲げてみよう。（本文は新編日本古典文学全集による。⁸⁾）

須磨には、いとど心づくしの秋風、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかかる所の秋なりけり。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりなりにけり。

傍線の如く、この描写は、前掲した白樂天の律詩の「香炉峰下新卜山居草堂」第四首の第二聯の上句「遺愛寺鐘欹枕聽」である。前述のように、これは『枕草子』の中で、中宮定子が取り込んだ対句の下句「香炉峯雪撥簾看」の上句である。

都を離れた源氏は、須磨ではひとしおものを思わせる秋風が吹いて、海は少し離れていると、行平の中納言が、関吹き越ゆると詠んだという浦風に荒れる波音が、夜ごとにいかにもすぐ近く聞こえて、またと鳴く心にしみるのは、こういう所の秋なのであった。源氏は、その夜ひとり目を覚まして、枕から頭をもたげて四方のはげしい風を耳にする。

『枕草子』の引用する場面を比べてみると、『源氏物語』の引用する手法とは異なることが見える。

例えば、前に分析したように、『枕草子』の場合、自然の風景は、白詩の内容と『枕草子』の場面には冬、雪などの自然背景は、一致する。しかし、『源氏物語』の場面では、季節としては秋の風、海から少し離れており、嵐の音、及び源氏が夜に眠れない姿、その時、ただ枕の上に聞こえる音から連想して、白詩の秀句「遺愛寺鐘欹枕聽」と取り込んでいる。白詩の自然背景には、特に雪の風景は見えない。

次の例に『源氏物語』と『枕草子』の引用の手法は同じと考える。

例えば、前掲した「香炉峰下」の五首のうち、第一首の詩は、『枕草子』に見えないが、『源氏物語』では二回を引用されている。そのうち、一回目の、須磨巻に関する引用を取り上げてみよう。

白詩の内容は次のようである。

重題 第一首

五架三間新草堂 五架 三間の新草堂

石階桂柱竹編牆

石階 桂柱の竹編の牆

南簷落日冬天暖

南簷日を納れて 冬天暖かに

北戸迎風夏月涼

北戸風を迎えて 夏月涼し

灑砌飛泉纔有点

砌に灑ぐ飛泉は 纔かに点有り

扨窓斜竹不成行

窓を扨ふ斜竹は 行を成さず

来春更葺東廂屋

来春 更に東廂の屋を葺き

紙閣蘆簾著孟光

紙閣蘆簾 孟光を著けん⁽⁹⁾

四六歳の白樂天は、都を離れた新たな場所で詠んだ詩である。

『源氏物語』須磨卷での場面は次の通りである。(本文は前同)⁽¹⁰⁾

住まひたまへるさま、言はむ方なく唐めいたり。所のさま絵に描きたらむやうなるに、竹編める垣しわ炊いて、石の階、松の柱、おろそかなるものからめづらかにをかし。

右に掲げた白氏の詩句「石階桂柱竹編牆」を訓読みし、傍線を付けたように、『源氏物語』の「石の階」や「竹編める垣」になる表現と見える。注目したいのは、単なる白詩の秀句から翻案するだけだとどまらず、作者白樂天が都の長安を離れ新たな場所に住む背景が、光源氏の京都を離れ、須磨に住む背景と一致していることである。

このように、白詩の全体的な背景から引用する把握した上で場面は、『枕草子』にも見られる。例えば、前掲した

『白氏文集』第一七卷「廬山草堂雨夜独宿」の律詩の詩句が引かれた三卷本『枕草子』第七八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」の場面が同趣の引用といえるだろう。

まず白詩を示すと次の通りである。

廬山草堂、夜雨獨宿、
廬山草堂に、夜雨獨り宿し、

寄牛二 李七 庾三十二員外 牛二・李七・庾三十二員外に寄す

丹霄攜手三君子 丹霄 手を攜ふ 三君子、

白髮垂頭一病翁 白髮 頭に垂る 一病翁。

蘭省花時錦帳下 蘭省の花時 錦帳の下、

廬山雨夜草庵中 廬山の雨夜 草庵の中。

終身膠漆心應在 終身 膠漆 心應に在るべし、

半路雲泥迹不同 半路 雲泥 迹同じからず。

唯有無生三昧觀 唯だ無生三昧の觀有り、

榮枯一照兩成空 榮枯は一照にして 兩ながら空と成る。
(11)

前述の香炉峰の雪の詩の翌年、元和十三年（八一八）、四十七歳の白樂天は廬山の下にある草堂で、雨の音を聞きながら、都の長安に住む友人（特に三人の牛二、李七及び庾三十二員外であった）に手紙を書いた。

友人を思い出して手紙を書くという状況により、『枕草子』第七八段に引かれたのである。それは藤原齊信が清少

納言の状況を尋ねる時に、右の白詩の第二聯の対句の上句の真名で、「**蘭省花時錦帳下**」を清少納言に送った場面である。

『枕草子』第七八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」の記事は、次のようになる。

「あやし。いつのまに何事のあるぞ」と問はすれば、主殿司なりけり。「ただここもとに人づてならで申すべき事なむ」と言へば、さし出でて、言ふ事、「これ頭の殿の奉らせたまふ。御返事とく」と言ふ。いみじくにくみたまふに、いかなる文ならむと思へど、ただいまいそぎ見るべきにもあらねば、「いね。いま聞こえむ」とて、懷に引き入れて、なほなほ人の物言ふ、聞きなどする、すなはち帰り来て、『さらば、そのありつる御文を給はりて来』となむ仰せらるる。とくとく」と言ふが、「いをの物語」なりやとて、見れば、青き薄様に、いと清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「**蘭省花時錦帳下**」と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ。御前おはしまさば、御覽ぜさすべきを、これが末を知り顔に、ただたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に、消え炭のあるして、「**草の庵を誰かたづねむ**」と書きつけ取らせつれど、また返事も言うはず。⁽¹²⁾

役人から手紙が送られてきたが、忙しく、見る時間がなかった。そして、役人が「ご返事がないのならば、さっきの手紙を頂戴して来い」命じ、見てみると、青い薄様の紙に、大変きれいにお書きになっている。胸をどきどきさせ、開いて見ると、白詩の「**蘭省花時錦帳下**」書かれていた。この対句の下句は覚えているのが、漢字で書くのがいかにも見苦しいなどのあれこれ考えて、結局、漢字と仮名を混ぜて、「草の庵を誰かたづねむ」と返信するとい

う。

清少納言と男性貴族の間の典型的な白詩の遣り取りの有名な場面である。この白詩は『源氏物語』には見えないが、ただ引用方法は『源氏物語』と同じと考えられるだろう。すなわち全体的な白詩の背景から、引用が導かれる点で共通する。

以上、いささか例を取り上げて、『枕草子』と『源氏物語』における白詩を引用の異同について比較した。白詩の背景を把握した上で、その秀句の意味を受容する方法は、清少納言と紫式部が一致する。たが、白詩の自然描写を、引用する時に、取り込むことについては、『源氏物語』より『枕草子』の方ははっきり見える。これは、清少納言が白詩を受容する際、紫式部と異なる独自の手法と言えるであろう。

六 おわりに

以上、『枕草子』に見える『白氏文集』の詩句と『源氏物語』に見える『白氏文集』の詩句を総合的に整理して、撰取の様相を述べてみた。

具体的には、『日本見在書目録』に見える七十巻『白氏文集』の分類に従って、四種類の諷諭詩、閑適詩、感傷詩、雑律詩が引用される状況を、『枕草子』と『源氏物語』とて比較したのだがその結果、次の特徴が見えた。

まず、『源氏物語』には、閑適詩の引用は見えなかった。また『源氏物語』では同じ白詩が繰り返し使われることは『枕草子』より頻度が高かった。また『源氏物語』では、諷諭詩が注目され、『枕草子』では、感傷詩が注目されていたことが分かった。ただし、いずれも感傷詩『長恨歌』と『琵琶引』が繰り返し引用されることは、『枕草子』

も『源氏物語』も同様である。

白詩が秀句として引用される際、詩の自然描写や場面の背景が考慮されていることは、『源氏物語』より『枕草子』の方が明白に表現されている。また引用方法として、詩句の内容を単に翻案するのではなく、当時の白樂天が該当する詩を書いた背景が、引用される場面にも同様に見られる。このことは、『枕草子』と『源氏物語』両作品での手法は一致していると考ええる。

なお、『枕草子』に見える注目した感傷詩については、本論の第三部の「表現の基層」でも、幾つかの実例を考察した。この点とあわせて、今後の『枕草子』における白詩の受容については、より深く述べる必要があるだろう。

〔注〕

- (1) 平安時代における『白氏文集』に関わる代表的な考察は、次のようにある。①水野平次『白樂天と日本文學』（目黒書店 一九三〇）。②金子彦次郎『白氏文集の渡来について』（松井博士古稀記念論文集）（目黒書店 一九三二）、後に②には、『平安時代文学と白氏文集』（第一巻、第二巻）（講談社 一九四三～一九四八）があり、また増補版『平安時代文学と白氏文集』（培風館 一九五五）がある。③小松茂美『平安朝伝来の白氏文集と三跡の研究』（『小松茂美著作集』第一巻、第二巻、第三巻）（旺文社 一九九六～一九九七）④静永健『漢籍伝来 白樂天の詩歌』（勉誠出版 二〇一〇）。

- (2) 例えば、丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』（東京女子大学学会 一九六四）。古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』（桜楓社 一九六四）。中西進『源氏物語と白樂天』（岩波書店 一九九七）。新聞一美

『源氏物語と白居易の文学』（和泉書院 二〇〇三）がある。このように『枕草子』と『白氏文集』の専著はまだ見えない。

- (3) 矢島玄亮『日本国見在書目録』——集証と研究——（汲古書院 一九八四）二三三頁。
- (4) 三卷本『枕草子』本文、章段数などは、松尾聰・永井和子『枕草子』新編日本古典文学全集（小学館 二〇〇四）により、また、田中重太郎『校本枕冊子』（一〜五）（古典文庫 一九五七〜一九七四）を参考にした。
- 『白氏文集』の分類及び巻数等は、『和刻本漢詩集成』第九輯（汲古書院 一九七七）により、朱金城『白居易集箋校』一〜六（上海古籍出版社 二〇〇三）を参照し、漢文の書き下し文は、岡村繁『白氏文集』（三）（明治書院 一九九五）に参考した。
- (5) 『源氏物語』巻名等は、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『源氏物語』（全六冊）による参考した。
- 『白氏文集』の分類及び巻数等は、前掲（4）と同じである。
- (6) 前掲（4）の『白氏文集』に従う。
- (7) 松尾聰・永井和子『枕草子』（小学館 二〇〇四）四三三頁。
- (8) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男『源氏物語』②（小学館 二〇〇六）一九九頁。
- (9) 前掲（4）の『白氏文集』に従う。
- (10) 前掲（8）同、二一三頁。
- (11) 前掲（4）の『白氏文集』に従う。
- (12) 前掲（7）同、一三五〜一三六頁。

第二章 『枕草子』における『和漢朗詠集』の引用

一 はじめに

本章では、『枕草子』に見える『和漢朗詠集』に収録される秀句の表現を通して、四系統『枕草子』本文の表現の問題を考えてみたい。

周知の如く、藤原公任（九六六―一〇四一）の編による『和漢朗詠集』は、日本と中国の漢詩句と、和歌の秀句を収めたアンソロジーである。これら内の幾つかの漢詩秀句は、『枕草子』に引用された漢詩句と重なっている。しかもこれら漢詩句が、四系統『枕草子』本文において異なった表記法で引用されていることは、注目に値しよう。例えば、三巻本は漢字のみで表記、能因本は仮名交じり文で表記。また堺本は他の三系統独自の「追加詩句」がある。これらの表記の異なりに着目し、『和漢朗詠集』諸本、特に古注釈を利用して、四系統『枕草子』本文と対照させ、漢詩句によって訓読みから、各『枕草子』の本文の古さと特徴を考えてみたい。

しかしながら、『和漢朗詠集』本文に対する付訓資料は多く散逸し、十全の情報を得ることは難しい状況にある。そこで、比較的古訓の様態をとどめる古注釈を利用して、検討の材料としたい。

なお、ここでは『和漢朗詠集』と『枕草子』が共時的に存在するので、『和漢朗詠集』に収録された秀句と『枕草子』における漢詩句の重なる部分に着目して、平安時代の漢詩句が和文学に与えた影響という視点で考察する。

二 『枕草子』における『和漢朗詠集』引用箇所

まず、『枕草子』に引用された詩句と、『和漢朗詠集』における秀句と一致するものを含めた代表的な一九箇所を、1～19の番号を付け、一覧表にする。「○」は、該当する本文があるもの、「×」は該当する本文がないことを示す。

凡 例

- 一 四系統『枕草子』本文の底本、引用文は、本論の第一章に前掲した諸本に拠る。
- 一 排列順は、朗詠句、出典、訓読、三卷本、能因本、前田家、堺本にする。朗詠句の句頭番号、章段番号及び章段名を示す、引用文末にページ数を明示する。該当する章段がない場合、「ナシ」と記す。
- 一 『和漢朗詠集』本文の引用は、新編日本古典文学全集に拠り、訓読みを付け、ページ数を明示する。
- 一 『和漢朗詠集』本文の底本は、御物の伝藤原行成り粘葉本『倭漢朗詠集』上下二冊を使用した。
- 一 『和漢朗詠集』本文の古注釈の本文は、『和漢朗詠集古注釈集成』に拠る。

和漢朗詠集		漢詩句	作者	三卷本	能因本	前田本	堺本
1	卷下 山家	蘭省花時錦帳下	廬山雨夜草庵中	白居易	○	○	×
2	卷下 山下	遺愛寺鐘欹枕聽	香爐峰雪撥簾看	白居易	○	○	×

3	卷上	花橘	枝繫金鈴春雨後	花薰紫麝凱風程	具平親王	○		○		○		○	
4	卷上	鶯	西樓月落花間曲	中殿燈殘竹裏音	菅原文時	○		○		○		○	
5	卷下	老人	林霧校聲鶯不老	岸風論力柳猶強	菅原文時	○		○		○		○	
6	卷上	落花	落花狼籍風狂後	啼鳥龍鐘雨打時	大江朝綱	○		○		○		○	
7	卷下	無常	觀身岸額離根草	論命江頭不繫舟	羅維（嚴維）	○		○		○		○	
8	卷上	蓮	煙開翠扇清風曉	水泛紅衣白露秋	許渾	○		×		×		○	
9	卷上	納涼	池冷水無三伏夏	松高風有一声秋	源英明	○		○		×		×	
10	卷下	仙事	十方仙土之中	以西方為望	慶滋保胤	○		○		×		×	
			九品蓮台之間	雖下品忘足									
11	卷上	柳	大庾嶺之梅早落	誰問粉粧	大江維時	○		○		○		×	
			匡廬山之杏未開	豈趁紅艷									
12	卷下	懷旧	金谷醉花之地	花每春句而主不歸	菅原文時	○		○		×		×	
			南樓嘲月之人	月与秋期而身何去									
13	卷下	竹	晉騎兵參軍王子猷	栽稱此君	藤原篤茂	○		○		×		×	
			唐太子賓客白樂天	愛為吾友									
14	卷上	七夕	露宖別淚珠空落	雲是殘粧鬢未成	菅原道真	○		○		×		×	
15	卷下	交友	蕭会稽之過古廟	託締異代之交	大江朝綱	○		○		×		×	
			張僕射之重新才	推為忘年之友									

16	卷上 雪	曉入梁王之苑	雪滿群山	賈嵩	○	○	○	○
		夜登庾公之樓	月明千里					
17	卷下 曉	佳人尽飾於晨粧	魏宮鐘動	賈島（賈嵩）	○	×	×	×
18	卷上 十五夜	秦甸之一三余里	凜凜冰鋪	公乘億	○	○	×	×
		漢家之三十六宮	澄澄粉飴					
19	卷下 禁中	鷄人曉唱	声驚明王之眠	都留香	○	○	○	×
		鳧鐘夜鳴	響徹暗天之聽					

これらの秀句の表現は、四系統『枕草子』本文において、どのように関わっているといえるか、朗詠句の訓読みを対照させて、検証してみたい。番号順に従って排列する。

- 1 『和漢朗詠集』卷下 山家 **蘭省花時錦帳下** 廬山雨夜草庵中（555・二九二頁）
- 出典…『白氏文集』卷十六 廬山草堂夜雨獨宿寄牛二李七庾三十二員外 白居易
- 訓読…**蘭省**（らんしやう）の花の時錦帳（きんちやう）の下 廬山（ろざん）の雨の夜草庵（よさうあん）の中
- 三卷本…第七八段 頭中将のすずろなるそら言を聞きて
- 蘭省花時錦帳下（中略）** 草の庵を誰かたづねむ

能因 本…第八六段 頭中将のそぞろなるそら言にて

蘭省の花の時の錦の帳のもと（中略）草の庵をたれかたづねむ

（二七一頁）

前田家本.. ナシ

堺 本.. ナシ

2 『和漢朗詠集』卷下 山下 遺愛寺鐘欹枕聽 香爐峯雪撥簾看（554・二九二頁）

出 典.. 『白氏文集』卷十六 重題 白居易

訓 読.. 遺愛寺の鐘は枕を欹（ソバダ）てて聽く 香爐峯の雪は簾を撥（か）けて看（み）る

三 卷 本.. 第二八〇段 雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて

「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

（四三三頁）

能 因 本.. 第二七八段 雪のいと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて

「少納言よ。香炉峰の雪はいかならむ」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。

（四二七頁）

前田家本.. 第三三二段 雪のいたう降りたるを、例ならず御格子もまゐらで、

「少納言よ、香炉峯の雪、いかならむ」とおほせらるれば、御簾を高うまきあげたれば、笑はせた

まふ。

(三一九～三二〇頁)

堀 本… ナシ

3 『和漢朗詠集』卷上 橘花 枝繁金鈴春雨後 花薰紫麝凱風程 (172・一〇二頁)

出 典… 「集註」、「私注」等「花橘詩」、後中書王。

訓 読… 枝に金鈴きんれいを繫かけたり春雨しゆんう(ハルノアメ)の後のち 花はなは紫麝しじやを薰くず豈が十風いふう風の程ほど

三卷 本… 第三五段 木の花は

五月のついたちのそこほひ、橘の葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、雨うち降りたるつとめてなどは、世になう心あるさまにをかし。花の中より黄金の玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露に濡れたるあさぼらけの桜におとらず。

(八六～八七頁)

能因 本… 第四四段 木の花は

五月ついたちなどのところほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より黄金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなどは、朝露に濡れたる桜におとらず。

(一二六頁)

前田家本… 第四四段 木の花は

五月ついたちなどのころほひ、橘の、葉はと濃く青きに、花のいと白う咲きたるに、雨降りたる
つとめてなどは、よになう心あるさま、をかし。花のなかより黄金の鈴かといみじうきはかに見え
たるなどは、朝露にぬれたる櫻におとらず。

(二四頁)

堀 本.. 第七段 木の花は、むめ

五月ついたちころの、たちばなのいとしろくさきて、あめうちふりたるつとめては、なべならぬさ
まにおかし。花のなかより、みのこがねの、たまと見えて、いみじうきはやかにみえたるなどは、
春のあさぼらけのさくらにもおとらずぞおぼゆる。

(四頁)

4 『和漢朗詠集』卷上 鶯 西樓月落花間曲 中殿燈殘竹裏音 (71・五四頁)

5 『和漢朗詠集』卷下 老人 林霧校聲鶯不老 岸風論力柳猶強 (729・三八一頁)

6 『和漢朗詠集』卷上 落花 落花狼籍風狂後 啼鳥竜鐘雨打時 (129・八一頁)

出 典.. 5 「菅三品^{かんさんぽん}」一説、また「未詳」。

6 『日本詩紀』卷二十七 菅原文時^{すがわらのふみとき}「暮春藤亜相山莊齒会詩」。

7 大江朝綱^{おおえのあさつな}「惜殘春」。

訓 読 ..

5 西樓に月落（オリヌ）ちて花の間の曲 中殿（テン）に灯残（ノコル）つて竹の裏の音

6 林霧に声を校ぶれば鶯は老いず 岸風に力を論ずれば柳は猶ほ強し

7 落花狼籍たり風狂（キヤウシテ）後 啼鳥竜鐘たり雨の打つ時

三 卷 本 ..

第三九段 鳥は

鶯は、文などにもめでたきものに作り、声よりはじめて、さまかたちもさばかりあてにうつくしきほどよりは、九重のうちに鳴かぬぞいとわろき。人の、「さなむある」と言ひしを、「さしもあらじ」と思ひしに、十年ばかり候ひて聞きしに、まことにさらに音せざりき。さるは、竹近き紅梅もいとよく通ひぬべきたよりなりかし。

（九六頁）

能 因 本 ..

第四八段 鳥は

鶯は、世になくさま、かたち、声もをかしきものの、夏秋の末まで老い声に鳴きたると、内裏のうちに住まぬぞ、いとわろき。また、夜鳴かぬぞいぎたなきとおぼゆる。十年ばかり内に候ひて聞きしかど、さらに音もせざりき。さるは、竹もいと近く、通ひぬべき枝のたよりもありかし。まかでて聞けば、あやしの家の梅の中などには、はなやかにぞ鳴き出でたるや。

（一二四頁）

前田家本 ..

第四八段 鳥は

うぐひすは、よになくさま・かたちもこゑもをかしきものの夏秋の末まで同じこゑに鳴きたると内裏の内に住まぬぞいとわろき。又、夜鳴かぬこそ寝ぎたなくおぼゆれ。十年

ばかりうちにさぶらひて聞きしかど、さらにおともせざりき。さるは、竹もいと近く、通ひぬべき枝のたよりもありかし。まかり出でて聞けば、あやしの家に梅の木などには、はなやかにぞ鳴き出でたるや。

(三二頁)

堀 本.. 第一段 鳥は

うぐひすは、さまかたちよりはじめて、うつくしくこそ。はじめてたによりいでたるこゑなど、かばかりあてにめでたきほどよりは、夏秋のすへまでありて、しらこゑになくと、だいのうちにすまぬとぞ、いとわろき。人の「さなんある」といひしを、さしもあらじとおもひしに、十年ばかりさぶらひてききしに、まことにさらにをとせざりき。さるは、たけもちかく、こうばいもちかく、いとよくかよひぬべきえだのたよりかし。またでてきけば、あやしき家のみどころなきむめの木なども、いとはなやかにぞなきいでたるや。また、よるなかぬも、いぎたなき心地す。

(一四〇一五頁)

7 『和漢朗詠集』卷下 無常 観身岸額離根草 論命江頭不繫舟 (789・四一〇頁)

出典.. 作者は「羅維」であり、異説がある。『考証』に「羅維は嚴維の誤なるべし」としている。

訓読.. 身を観みずれば岸くわんの額しに根ねを離はな (ハナ) れたる草 命いのち (メイ) を論ろんずれば江えの頭ほとりに繫つながざる舟

三卷 本.. 第六四段 草は

あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げにたのもしからず。

(一一九頁)

能因 本.. 第六七段 草は

あやふ草は、岸の額に生ふらむも、げにたのもしげなくあはれなり。

(一五三頁)

前田家本.. 第四七段 草は

あやふ草は、岸のひだひに生ふらむも、げにたのもしげなくあはれなり。

(三〇頁)

堺 本.. 第一〇段 はななき草は

「あやふぐさ、きしのひたいにねをはなれて、げにたのもしうなく、あはれなり。」

(一二頁)

8 『和漢朗詠集』卷上 夏蓮 煙開翠扇清風曉 水泛紅衣白露秋 (177・一〇四頁)

出典.. 『丁卯集』「秋晚雲臥西亭蓮池 許渾きよこん

訓読.. 煙けぶりは翠扇すいせんを開く清風せいふうの曉あかつき 水みづは紅衣こういを泛うかぶ白露はくろの秋

三卷 本.. 第六四段 草は

蓮葉、よろづの草よりもすぐれてめでたし。妙法蓮華のたとひにも、花は仏にたてまつり、実は数

珠に貫き、念仏して往生極樂の縁とすればよ。また花なきころ、緑なる池の水に紅に咲きたるも、いとをかし。翠翁紅とも詩に作りたるにこそ。

(一一九～一二〇頁)

能因 本.. ナシ

前田家本.. ナシ

堀 本.. 第一〇段 はななき草は

はちすは、よろづの草よりもすぐれてめでたし。妙法蓮花のたとひにも、はなはほとけにたてまつり、みはずにつらぬき、念仏して往生極樂のゑんとすればよ。また、はななきころ、みどりなるいけの水に、くれなるにさきたるも、いとをかし。翠翁紅もしにつくりたるこそ。

(一二一～一二三頁)

9 『和漢朗詠集』卷上 納涼 池冷水無三伏夏 松高風有一声秋 (164・九八頁)

出典.. みなものふさあきら 源英明「夏日閑適」

訓読.. すさま 池冷(スサマシウシテハ)じくしては水_{みづ}無_ニ三伏_{さんぷく}の夏無し 松高(ウ)くしては風_{ふう}有_ニ一声_{いつせい}の秋_あ有り
三卷 本.. 第七四段 職の御曹司におはしますころ、木立などの

「左衛門の陣にまかり見む」とて行けば、我も我もと問ひつぎて行くに、殿上人あまた声して「なにがし一声秋」と誦してまゐる音すれば、逃げ入り、物など言ふ。

(一二三頁)

能因 本.. 第八〇段 職の御曹司におはしますころ、木立など

「左衛門の陣まかりて見む」とて行けば、われもわれもと追ひつぎて行くに、殿上人あまたして、
「なにがし一声秋」と誦んじて入る音すれば、逃入りて、物など言ふ声。

(一六六頁)

前田家本.. ナシ

堺 本.. ナシ

10 『和漢朗詠集』卷下 仏事 十方仏土之中 以西方為望 九品蓮台之間 雖下品応足 (590・三一〇頁)

出典.. 慶滋保胤「極樂寺建立願文」

訓読.. 十方仏土の中には 西方を以て望みと為す 九品蓮台の間には 下品(ほん)と雖も足べし(イフ

トモタンヌベシ)

三卷 本.. 第九七段 御方々、君達、上人など、御前に

筆、紙など給はせられたれば、「九品蓮台の間には、下品といふとも」など、書いてまゐらせられたれば、「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。言ひとちめつることは、さてこそあらめ」とのたまはす。「それは人にしたがひてこそ」と申せば、「そがわろきぞかし。第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ」と仰せらるるいとをかし。

(一九五頁)

能因 本.. 第一〇五段 御方々、君達、上人など、御前に

筆、紙給はりたれば、「九品蓮台の中には、下品といふとも」と書いてまゐらせられたれば、「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。言ひそめつる事は、さてこそあらめ」とのたまはすれば、「人にしたがひてこそ」と申す。「それがわるきぞかし。第一の人に、また一に思はれむとこそ思はめ」と仰せらるるいとをかし。

(二二九頁)

前田家本.. 第三二九段 御方方・君達・うへなど、

筆・紙など賜はせられたれば、「九品蓮臺の間には下品といふとも」と書いてまゐらせたるを御覧じて、「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。いひとちめつる事は、さてこそあらめ」とおほせらるれば、「人にしたがひてこそは」と申せば、「それがわるきぞかし。第一の人にまた一に思はれむ。とこそは思はめ」とおほせらる。いとをかし。

(三三四〜三三五頁)

堺 本.. ナシ

11 『和漢朗詠集』卷上 柳 大庾嶺之梅早落 誰問粉粧 匡廬山之杏未開 豈趁紅艷 (106・七〇頁)

出典.. 大江維時「停盃見柳色」詩序

訓読.. 大庾嶺の梅は早く落(オツ)ちぬ 誰か粉粧を問はん 匡廬山の杏は未だ開けず

豈に紅艷を趁め

三卷 本.. 第一〇一段 殿上より

殿上より、梅の花散りたる枝を、「これはいかが」と言ひたるに、ただ、「早く落ちにけり」といらへたれば、その詩を誦じて、殿上人黒戸にいとおほくゐたる、上の御前に聞しめして、「よろしき歌などよみて出だしたらむよりは、かかる事はまさりたりかし。よくいらへたる」と仰せられき。

(二〇八頁)

能因 本.. 第一〇九段 殿上より

殿上より、梅ノ花の散りたるに、その詩を誦して、黒戸に殿上人いとおほくゐたるを、うへの御前聞かせおはしまして、「よろしき歌などよみたらむよりも、かから事はまさりたりかし。よういらへたり」と仰せらる。

(二四一頁)

前田家本.. 第三一六段 殿上より

殿上より梅の花のみな散りたる枝を「これは、いかに」といひたるに、「誰誰かおはする」と主殿づかさに問へば、「公任の宰相中将・俊賢の宰相。殿上人いとおほくおはす」といふに、なかなかならむよろし歌詠み出でて笑はれむこそいと恥ぢがましかるべけれ。いかにせむと思ひわづらひて、ただ「はや落ちにけり」といひたるを、その詩を誦じて、黒戸より殿上人いとおほくまゐりたるを、うへの御前に聞しめして、「よろしき歌などよみたるよりは、かかることはまさりたりかし。よくいらへたり」とおほせらる。

(二八一頁)

堀 本.. ナシ

12 『和漢朗詠集』卷下 懷旧 金谷醉花之地 花每春匂而主不帰 南樓嘲月之人 月与秋期而身何去 (745・三八七)

く三八八頁)

出 典.. 『本朝文粹』卷十四 「右大臣報恩御音」菅三品

訓 読.. 金谷花に酔(エツシチ)ふの地 花(ハ)春毎に匂う(ツ)て主歸らず 南樓(ニ)月を嘲るの人

(アザケリシヒト) 月秋と期して身何くにか去(サツシ)る

三 卷 本.. 第一二九段 故殿の御ために、月ごとの十日

果てて、酒飲み、詩誦などするに、頭中将齊信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふ事をうち出だしたまへりし、はたいみじうめでたし。

(二四二頁)

能 因 本.. 第一三八段 故殿の御ために、月ごとの十日

果てて、酒など飲み、詩誦などするに、頭中将齊信の君、「月秋として身いまいづくにか」といふ事を、うち出だしたまへりしかば、いみじうめでたし。

(二七一頁)

前田家本.. ナシ

堀 本.. ナシ

13 『和漢朗詠集』卷下 竹 晋騎兵參軍王子猷 裁稱此君 唐太子賓客白樂天 愛爲吾友（432・二三一頁）

出典… 『本朝文粹』卷十一 篤茂とくぼ

訓読… 晋しんの騎兵きへい參軍さんぐん王子猷わうしいう 裁うゑて此この君きみと称しやうす 唐とうの太子賓客たいしひんかく白樂天はくらくてん 愛わが吾ともが友なすと爲す

三卷 本… 第一三一段 五月ばかり、月もなういと暗きに

まめごとなども言ひ合はせてゐたまへるに、「裁ゑてこの君と称す」と誦して、またあつまり来たれば、「殿上にて言ひ期しつる本意もなくては、など帰りたまひぬるぞとあやしくこそありつれ」とのたまへば、「さる事には、何のいらへをかせむ。なかなかならむ。殿上にて言ひののしりつるは。上も聞しめして、興ぜさせおはしました」と語る。

（二四八〜二四九頁）

能因 本… 第一四〇段 五月ばかりに、月もなくいと暗き夜

まめごとなど言ひ合はせてゐたまへるに、「この君と称す」といふ詩を誦して、またあつまり来たれば、「殿上にて言ひ期しつる本意もなくては、など帰りたまひぬるぞ。いとあやしくこそありつれ」とのたまへば、「さる事には、何のいらへをかせむ。いとなかなかならむ。殿上にて言ひののしりつれば、うへも聞しめして、興ぜさせたまひつる」と語る。

（二七七頁）

前田家本… ナシ

堺 本… ナシ

14 『和漢朗詠集』卷上 七夕 露応別涙珠空落 雲是残粧鬢未成（214・一二三頁）

出典… 『菅家文草』卷五 菅原道真

訓読… 露は別れの涙なるべし珠空しく落つ 雲は是れ残（ザン）んの粧（サウ）ひ鬢

未だ成らず

三卷 本… 第一五五段 故殿の御服のころ

やうやうすべり失せなどして、ただ頭中将、源中将、六位一人残りて、よろづの事言ひ、経よみ、歌うたひなどするに、「明け果ててぬなり。帰りなむ」とて、「露は別れの涙なるべし」といふ事を、頭中将のうち出だしたまへれば、源中将ももろともにいとをかしく誦んじたるに、「いそぎける七夕かな」と言ふを、いみじうねたがりて、

（二八五〜二八六頁）

能因 本… 第一六六段 宰相中将斉信、宣方の中將と

やうやうすべり失せなどして、ただ頭中将、源中将、六位一人残りて、よろづの事言ひ、経よみ歌うたひなどするに、「明け果ててぬなり。帰りなむ」とて、「露は別れの涙なるべし」といふ事を、頭中将らち出だしたまへれば、源中将ももろともに、いとをかしう誦んじたるに、「いそぎたる七夕かな」と言ふを、いみじうねたがりて、

（三一二頁）

前田家本… ナシ
堀 本… ナシ

15 『和漢朗詠集』卷下 交友 蕭会稽之過古廟 託締異代之交 張僕射之重新才 推為忘年之友 (736・三八四)

出典… 「晩春」 大江朝綱

訓読… 蕭会稽せうくわいけいの(ガ)古廟こべうを(ニ)過よぎるに(ヨギルトキ)託たく(ツケテ)して異代いだい(タイ)の交まじは

りを締しめぶ 張僕射ちやうぼくやが新才しんさいを重おもん(オモンゼシ)じて 推おして忘年ぼうねんの友ともと為なす

三卷本… 第一五五段 故殿の御服のころ

宰相になりたまひしころ、上の御前にて、「詩をいとをかしう誦じはべるものを。『蕭会稽が古廟を過ぎし』なども、誰か言ひはべらむとする。

(二八八頁)

能因本… 第一六六段 宰相中將齊信、宣方の中將と

宰相になりたまひしを、うへの御前にて、『詩をいとをかしう誦んじはべりしを。』蕭会稽の古廟をも過ぎにし』なども、たれか言ひはべらむとする。

(三一四～三一五頁)

前田家本… ナシ

堺本… ナシ

16 『和漢朗詠集』卷上 雪 曉入梁王之苑 雪滿群山 夜登庾公之樓 月明千里 (374・一九九頁)

出典… 「白賦」 典拠未詳

訓読… 曉あかつき(ニ)梁王りやうわうの苑そのに入い 雪群りやうぐん(クン)山に満てり 夜庾公よるゆうこうの(ガ)樓ろうに登れば、月千里つきせんりに明あきららか

なり

三卷 本.. 第一七四段 雪のいと高うはあらで

明け暗れのほどに、帰るとて、「雪ななにの山に満てり」と誦したるは、いとをかしきものなり。

(三〇四頁)

能因 本.. 第一七九段 雪のいと高くはあらで

明け暗れのほどに、帰るとて、「雪のなにの山に満てり」とうち誦んじたるは、いとをかしきものなり。

(三二六頁)

前田家本.. 第二二一段 雪はいと高うしも降らず

あけぐれのほどに歸るとて、「雪群山に満てり」とうち誦じたるは、いとをかしうおぼうべし。

(二七六頁)

堺 本.. 第二一六段 ゆきはいたかうもふらず

あけぐれのほどにかへるとて、「雪くうさんにみてり」とうちずむじたるは、いとをかし、とおぼ
ゆべ」。

(一七二頁)

17 『和漢朗詠集』巻下 暁 佳人尽飾於晨粧 魏宮鐘動 遊子猶行於残月 函谷鷄鳴 (416・二二三頁)
出典.. 「暁賦」①賈島 ②賈嵩

訓 読… 佳人^{かじん}尽^{つく}く晨粧^{しんじやう}（サウ）を飾る 魏宮^{ぎきう}に鐘動^{かね}く 遊子^{いうし}猶ほ残^{ざん}（サン）月^{げつ}に行^{いく}く 函谷^{はこたに}に鶏鳴^{とり}く
三卷 本… 第一八五段 大路近なる所にて聞けば

大路近なる所にて聞けば、車に乗りたる人の、有明のをかしきに簾あげて、「遊子^{いうし}なほ残りの月に行^{いく}く」といふ詩を、声よくて誦したるもをかし。馬にても、さやうの人の行くはをかし。

（三二三頁）

能因 本… ナシ

前田家本… ナシ

堺 本… ナシ

18 『和漢朗詠集』卷上 十五夜 秦甸^{しんでん}之一三余里 凜凜^{りんりん}氷鋪^{ひし} 漢家^{かんか}之三十六宮 澄澄^{ちやうちやう}粉飴^{ふんかざ}（240・一三五頁）

出 典… 「十五夜賦」公乗億

訓 読… 秦甸^{しんでん}（テン）の一千余里 凜凜^{りんりん}として氷鋪^{ひし}けり 漢家^{かんか}の三十（シフ）六宮^{りくきう} 澄澄^{ちやうちやう}として粉飴^{ふんかざ}れり
三卷 本… 第二八三段 十二月二十四日、宮の御仏名の

月の影のはしたなさに、うしろざまにすべり入るを、常に引き寄せ、あらはになされてわぶるもをかし。「凜々^{りんりん}として氷鋪^{ひし}けり」といふことを、かへすがへす誦しておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行く所の近うなるも、くちをし。

（四三七〜四三八頁）

能因 本… 第二八二段 十二月二十四日、宮の御仏名の初夜

月影のはしたなさに、うしろざまへすべり出でたるを、常に引き寄せあらはになされてわぶるもをかし。「凜々として氷鋪けり」といふ詩を、かへすがへす誦んじておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行く所の近くなる、くちをし。

(四三二頁)

前田家本.. ナシ

堺 本.. ナシ

19 『和漢朗詠集』卷下 禁中 鶏人曉唱 声驚明王之眠 鳧鐘夜鳴 響徹暗天之聴 (524・二七八頁)

出典.. 「漏刻策」都良香みやこのよし

訓読.. 鶏人曉けいじんあかつきに唱となふ 声明王こゑめいわうの眠ねむりを驚おどろかす 鳧鐘ふしやう夜鳴よるる 響暗天ひびきあんてんの聴ききを (三) 徹てつす

三卷 本.. 第二九三段 大納言殿まゐりたまひて

上もうちおどろかせたまひて、「いかでありつる鶏ぞ」などたづねさせたまふに、大納言殿の、「声明王のねぶりをおどろかす」といふことを、高ううち出だしたまへる、めでたうをかしきに、ただ人のねぶたかりつる目もいと大きになりぬ。

(四四七頁)

能因 本.. 第二九二段 大納言殿まゐりて、文の事など奏したまふに

うへもうちおどろかせおはしまして、「いかにありつるぞ」とたづねさせたまふに、大納言殿の、「声明王のねぶりをおどろかす」といふ詩を、高ううち出だしたまへる、めでたうをかしきに、一人ね

ぶたがりつる目もいと大きになりぬ。

(四四〇頁)

前田家本… 第三〇二段 大納言殿まゐらせたまひて

うへもうちおどろかせおはしまして、「いかでありつるぞ」など、たづねさせたまふに、大納言殿の「こゑ明王の眠をおどろかす」といふ詩を高ううち出したまへる、めでたうをかしきに、ただ人のねぶたかりつる目も、いと大きになりぬ。

(二五八頁)

堺 本… ナシ

右に示したように、「19」箇所のうち、「8」番の詩句は、三卷本と堺本にしか見えず一箇所、また「17」番の三卷本のみしか見えない。この二箇所以外、三卷本、能因本、前田家本に見える四箇所(2、10、11、19)、四系統(三卷本、能因本、前田家本、堺本)本文すべてに見える六箇所(3、4、5、6、7、16)で、最も多いのは、三卷本と能因本にしか見えない七箇所(1、9、12、13、14、15、18)である。

これらの四系統本文における漢詩句の引用によって、次の三節で、三卷本と能因本の表記の違い、三卷本と前田家本の類似表現、堺本に見える「加筆」について考えてみたい。

三 漢詩句にみる三卷本と能因本の相違

ここでは、代表として前掲の「1」番の詩句を取り上げて、三巻本と能因本本文との間の、漢詩句の表現法の差を分析してみたい。

該当する内容は、三巻本では第七八段であり、能因本では第八六段の「頭中將のすずるなるそら言を聞きて」章段である。ここには、『和漢朗詠集』卷上「山家」と同じ「蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中」詩句が現われるが、これは『白氏文集』第一七卷の律詩の「廬山草堂夜雨独宿寄牛二李七庾三十二員外」中の詩句である。

元和十三（八一八）年、四七歳の白樂天は、江州司馬を務めた。ある雨の日に、都の友人牛二（牛僧儒）、李七（李宗閔）、庾三十二員外（庾敬休）三人を思いやる心情を詠んだ詩である。一方、本章段における頭中將の藤原齊信（九六七―一〇三五）は、根拠のない讒言を信じ、清少納言を悪く言っていた。清涼殿の中で、清少納言の声を聞くと、見えないふりで、藤原齊信の態度は冷たい。

しかし、二月のすぐ雨が降った日に、藤原齊信から清少納言への手紙が届く。ひどく私をお憎みになるのに、いったいどんな手紙だろう清少納言が心ときめきして、手紙を開けてみると、真名で漢詩句のままで書いた『白氏文集』の対句の前句がある。清少納言はすぐに返信する。この場面を三巻本と能因本では、それぞれ次のように記している。

三巻本 「あやし、いづのまに何事のあるぞ」と問はすれば、主殿司なりけり。「ただここもとに人づてならで申すべき事」と言へば、さし出でて、言ふ事、「これ頭の殿の奉らせたまふ。御返事とく」と言ふ。いみじくにくみたまふに、いかなる文ならむと思へど、ただ今いそぎ見るべきにもあらねば、「いね。いま聞えむ」とて、懷に引き入れて、なほなほ人の物言ふ、聞きなどする、すなはち歸り来て、『さらば、そのありつる御文を賜

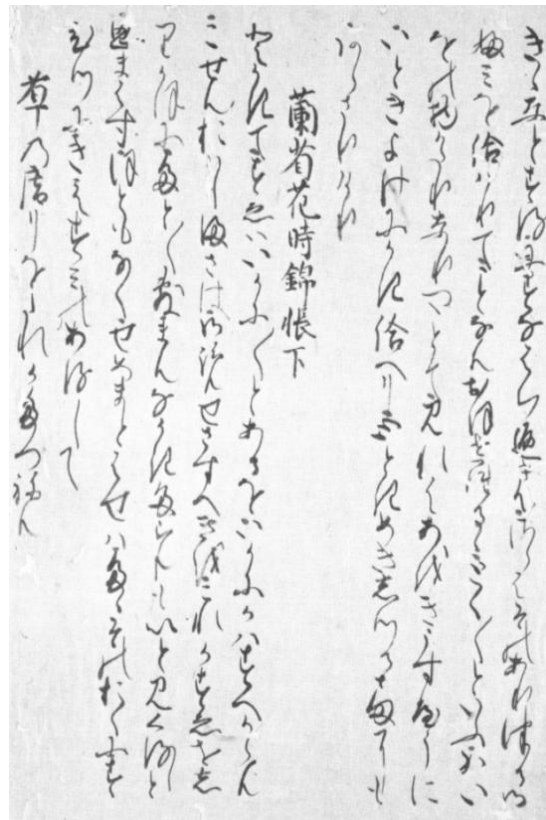
はりて来』となむ仰せらるる。とくとく」と言ふが、「いの物語」なりやとて、見れば、青き薄様に、いと清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「**蘭省花時錦帳下**」と書きて、「末はいかに、末はいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ。御前おはしまさば、御覽ぜさすべきを、これが末を知り顔に、ただたどしき真名書きたらむもいと見ぐるし」と思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃に、消え炭のあるして、「**草の庵を誰かたづねむ**」と書きつけて取りとらせつれど、また返事もいはず。

(一三四～一三六頁)

能因本 「あやしく、いづのまに何事のあるぞ」と問はすれば、主殿司なり。「ただここもとに人づてならで申すべき事なむ」と言へば、さし出でて問ふに、「これ頭中将殿の奉らせたまふ。御返りとく」と言ふに、いみじくにくみたまふを、いかなる御文ならむと思へど、ただいまいそぎ見るべきにあらねば、「いま聞えむ」とて、ふところに引き入れて、ふと入りぬ。なほ人の物言ひなどする聞くに、すなはち立ち歸りて、『さらば、そのありつる文を給はりて来』となむ仰せられつる。とくとく」とは言ふにぞ、あやしく「いせの物語」なりやとて、見れば、青き薄様に、真名にいと清げに書きたまへるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「**蘭省の花の時の錦の帳のもと**」と書きて、「末はいかにいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ。御所のおはしまさば、御覽ぜさすべきを、これが未知り顔に、ただたどしき真名に書きたらむも見苦し」など思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃の、消え炭のあるして、「**草の庵を誰方づ寝む**」と書きつけて取り取らせ連れ度、また返事も言はず。

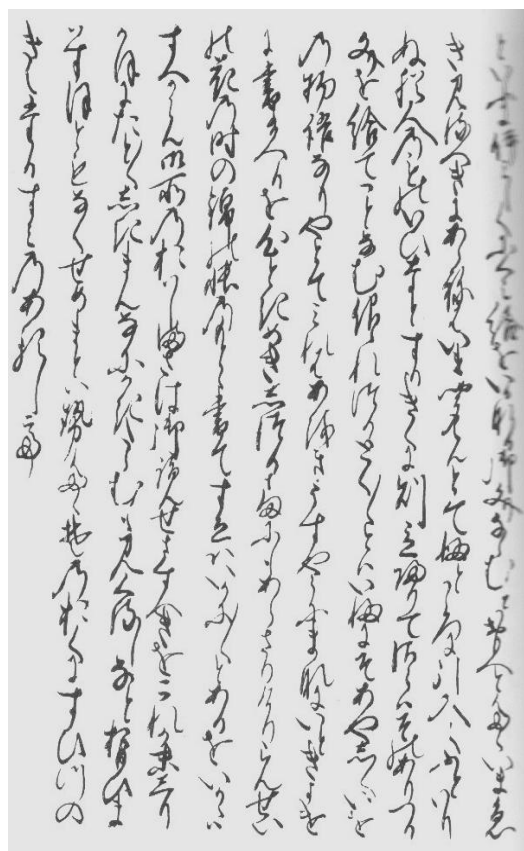
(一六九～一七〇頁)

三卷本では、藤原齊信の手紙は、真名で書いた『白氏文集』卷一七の詩句「蘭省花時錦帳下」であるが、能因本では、漢字と仮名を混せて、「蘭省の花の時の錦の帳のもと」と表記されている。念のため、三卷本と能因本の該当する章段の写本を取り上げてみよう。まず三卷本本文は左の通り。（影印文は陽明文庫蔵三卷本『枕草子』（思文閣）による）



蘭省花時錦帳下

次に、能因本本文を示す。（影印文は学習院大学蔵底本能因本『枕草子』（笠間文庫）による）



蘭省の花の時の錦の帳のもと

右の写本に見えるように、三巻本と能因本の本文における漢詩句の引用法は異なる。三巻本本文では、漢詩句の「真名」で表現され、一方、能因本本文では、仮名と漢字を混せて表現されている。

これらの異なる表現については、どちらが清少納言の原文に近いかと言う問いに対する答は簡単ではない。これは、三巻本本文と能因本本文の、どちらが古いのかという問題にも関わるであろう。この点に関しては、先行研究における幾つかの論考がある。例えば、田中重太郎氏は、次のように述べている。

『枕冊子』四系統本における地位については、池田亀鑑博士をはじめ、楠（旧姓光明）道隆教授、岸上慎二博

士、林和比古博士、それにわたくしも何回か論じている。かつてわたくしは『枕草子』伝本研究の現段階^①を説いて、その論中つぎのように書いた。

岸上博士は三卷本善説を採られ、楠教授・林博士はともに能因本善本説を採られる。いずれも、比較的問題であり、なぜこれが善本であるかについての根拠理由はそれぞれ異なるが結論としてこのようである。〔中略〕『枕草子』の本文語彙考証を三十年間つづけて三卷本本文の古態説を主張して来たわたくしが、『校本枕冊子』の主底本を能因本にしたことについて奇異に感じられる人は、岡博士以外にも多いであろう。それはもともとであるが、それについて三卷本善本説を採る態度は小著『枕冊子本文の研究』（昭和三十五年十二月刊）に明らかであるし、善本であると考えていることには変わりはない。しかし、江戸時代から流布本であった能因本にも長所があり、特色があることだから、これを中心として研究することも肝要であろう^①。

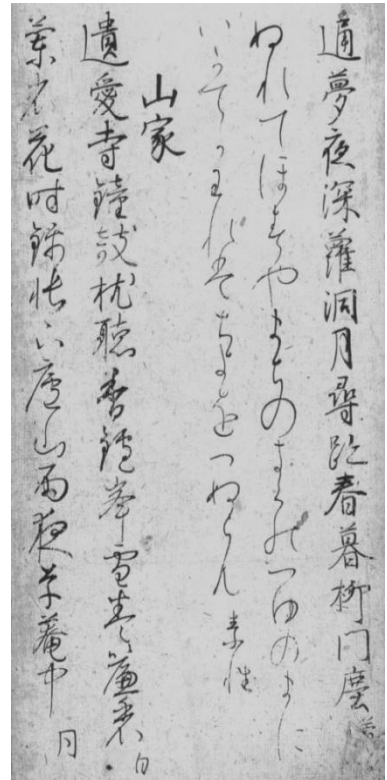
田中氏は、『校本枕冊子』の底本は、能因本系統本文としたけれども、善本としては、三卷本本文の方が良いという結論は変わっていない。また石田穰二氏も、前掲した『白氏文集』の詩句を引用する三卷本と能因本の差異を踏まえ、能因本本文より三卷本本文の方が良いと次のように論じている。

能因本をもとにしては、かなり大胆な校訂の手を加えない限り、それだけでは読みがたい。それだけでなく、たとえば人物の官位呼称など、杜撰な点も多々目につき、優劣を言うならば、季吟も『春曙抄』巻頭の解題に「其文意あざやかにて」と言うように、三卷本の優秀性は動かないことのように思われる。さらに問題なのは、両本の語彙、文体であつて、三卷本は、無造作で乾いた日常語的性格が強く、能因本は、よりなだらかで情緒

的な雅文的性格が強い。加えて、能因本には、少なくともその形に後から手を加えたかと思われる箇所が目につく。一例だけを挙げるが、本書七八段、頭の中將齊信からの手紙について、三卷本には「青き薄様にいきよげに書きたまへり。……蘭省花時錦帳下」とあるのが、能因本には「青き薄様に真名にいきよげにかきたまへるを、……らんせいの花の時の錦の帳のもと」とある。三卷本から能因本のような改訂への過程は考えられても、能因本のような形から三卷本への改訂ということは考えがたい。また、能因本の「らんせいの」以下の訓が、朗詠の訓として古形を伝えたものとも考えがたい節がある。「書きたまへり」と「書きたまへるを」の差も、三卷本の無造作、簡素な文体から、より柔軟な、あるいはより屈折した文体へという過程が考えられ、その逆の過程は考えがたい。全体的に見て、三卷本→能因本という過程は考えられても、能因本→三卷本という逆の過程は考えがたい。⁽²⁾

傍線を示したように、石田氏の三卷本文が能因本文より優れていると論じている。その理由は、三卷本における人物の官位の表記は正しい。三卷本文は自然。能因本文における漢詩文の訓読は、『和漢朗詠集』の古注と異なる。この三番目に注意したい。能因本文の訓読みは、どのような『和漢朗詠集』訓読と異なるのか、この点を分析してみたい。

まずこの漢詩句の表現を、『和漢朗詠集』の写本で確認してみたい。（影印文は宮内庁三の丸尚蔵館蔵『粘葉本和漢朗詠集』伝藤原行成筆（二玄社）による）



右の如く、三卷本における該当段では「蘭省花時錦帳下」と漢字で書かれ、その表現は、『和漢朗詠集』の表現と一致する。

一方、能因本における「蘭省の花の時の錦の帳のもと」の表記を、『和漢朗詠集』古注と比べてみたい。ここで注目したいことは、「錦帳」の訓読である。つまり「錦帳」は、二つの訓読がある。一つは「錦帳の」(東京大学本『和漢朗詠集私注』など)であり、もうひとつは「錦の帳の」(『和漢朗詠集永濟注』)である。「錦」と「帳」の間にある「の」の有無が異なる。

もちろん、『和漢朗詠集』本文に対する付訓資料は多く散逸し、十全の情報を得ることは難しい状況にある。ここでは、比較的古訓の様態が見える古注を利用する。主に参考とする古注の訓読みは、『和漢朗詠集古注集成』による。⁽³⁾ 分かりやすくするため、影印の方法で、該当する秀句の訓読みの表記、また原文を取り上げて置く、頭注番号は筆者が施したものである。

① 東京大学本『和漢朗詠集私注』（古注参照）

396 蘭省^{ラムセイノ}花時錦帳^{ハナトキニシヨウ}下 廬山^{ロサムノ}雨夜草庵^{アメノサウアン}中

廬山^{ロサムノ}草堂雨夜独宿。白。蘭省^{ラムセイノ}、禁中歟。言、白氏初仕^{ハハシ}趨^{ツク}朝廷^{テイテイ}、後住^{ハス}廬山下^{ロサムノモトニ}。

一 廬山草堂雨夜独宿——[㊦]
ナシ、[㊧]雨夜独宿
二 下——[㊨]下也

（五一九頁）

② 黒木文庫本『和漢朗詠註抄』（古注参照）

356 蘭省^{ラムセイノ}花時錦帳^{ハナトキニシヨウ}下 廬山^{ロサムノ}雨夜草庵^{アメノサウアン}中 白

蘭省者^ハ、禁中歟。言^ハ、白氏初仕^{ハハシ}趨^{ツク}朝廷^{テイテイ}。後^{ニハ}住^{ハス}廬山下^{ロサムノモトニ}云々。有云、蘭殖^{ランシキ}后前庭^{コノマエニワ}、云——也。省者^ハ、八省也。謂^ハ、中^ニ・式^ニ・治^ニ・民^ニ・兵^ニ・刑^ニ・大^ニ・宮^ニ、是也。

（七九八頁）

③ 国会図書館本『和漢朗詠注』（古注参照）

434 555 蘭省者^ハ、内裏^{ウツリ}ノ異名也。是^ハ、樂天廬山^{ロサムノ}ト云所^ニ、建草庵^{ケンサウアン}、孤住^{コジュ}給^ル時^ニ、雨ノ降^フタリシカハ、昔^{ムカシ}ノ城^{シロ}ニテ、錦帳^{ニシヨウ}ノ本^ニ住^スシカト、今^{イマ}ハ廬山^{ロサムノ}ノ草庵^{サウアン}ニ、サヒシキ雨^{アメ}ヲキク也。

④ 広島大学本『和漢朗詠集仮名注』（古注参照）

432 蘭省^{シヤウノ} 花時錦帳^ノ下^ト 廬山^ノ雨^ノ夜^ノ草庵^ノ中^チ 草堂 白楽天 夜^ノ雨獨宿

蘭省へ、禁中ノ事也。此へ、白居易、昔シ、若クシテ給仕シ玉シ時、禁中ニシテ、花ノ時錦帳ノ本ナントニ詠吟^{ゼン}シテ、遊樂シ玉フノミ也。爾トモ、今、老後ノ時、廬山ノ麓ニ草庵ヲ結テ住シ玉シ時、雨ノ夜ノ心細クシテ、昔ノ事ヲ思ヒ出シ、作玉ヘリ。謂ク、春ノ時、彼ノ錦帳ノ下ニシテ詠樂セシコトヲ思ヘハ、夢ノ樂^{タノシ}ミ也。今此草庵ノ内ニ、心ヲスマスニハ不^ツレ如、一感^ツヲ作ル也。一義へ、昔ニ替^{*}テ、今幽居ノ体、物ノスコキト作レル也。此レ、吉也。

⑤ 『和漢朗詠集和談抄・詩注』（古注参照）

249 蘭省^{ランセイノ} 花時錦帳^ノ下^ト 廬山^ノ雨^ノ夜^ノ草庵^ノ中^チ 「帳」、底本「帳」に作る

此へ、白居易、夜雨独宿^{スト}云心ヲ述タル詩ノ胸句也。蘭省者、内裏也。上句心、内裏ニ侍シ時へ、錦帳ノ下ニテ雨ヲ聞シト云義也。廬山者、匡廬山也。下句ノ心へ、廬山ニ隱居シテ、今ハ草屋ノ中ノ雨ヲ聞クト云ヘル也。

⑥ 書陵部蔵『朗詠抄』（古注参照）

393 555 蘭省^ノ―、蘭省へ、禁中ノコト也。白居易、若シテ宮仕セシ時、花比、錦ノ帳ノ下ニ、詠吟シテ有シ樂ミ也シカトモ、

老後ニハ、草庵ヲ結テ住シ、雨夜ノ心細キニ、昔ヲ思出テ作り。

(四六一頁)

⑦『和漢朗詠集永濟注』(古注参照)

393 蘭省^{ランセイ}花時錦帳^{ハナトキニシヨ}下^{モト} 廬山^ロ雨夜^ノ草菴^ノ中^チ 白

此詩、文集ノ第十七ニアリ。白居易、廬山ノ草堂ニ、アメノ夜、ヒトリ宿シテ、作タマヘル也。上句ハ、昔^ミ、ミヤコニアリテ、朝^{アサ}ニツカヘシトキノアリサマナリ。蘭省トイハ、内裏也。花ノサカリニハ、筆ヲソメテ、ニシキノ帳ノ下ニ、ハヘリシモノヲ思ヒ出ル也。下句ハ、今、ヨヲノカレテ、カ、ルヤマノナカ、草ノイホリニ、アメニッ^ニホチテ、ヨヲアカスコト、云也。古人伝云、此句、文集ノ第一ノ秀句也^{云々}。故源右相府ノ云ク、此句、三連ヲサラス。規模トイヒカタシ。

(二二七頁)

右①～⑦の古注には、「錦帳」の訓読みが二種に見える。ひとつは、「錦帳の」(キンチャウノ)①②③④⑤⑦である。もう一つは、⑦の『和漢朗詠集永濟注』の注釈や、また⑥の「書陵部藏『朗詠抄』」の注釈のように、「錦の帳の」(ニシキノチャウノ)と注釈内で、「ニシキノ帳」と訓む解釈である。これは、句自体は「錦帳ノ」と訓むが、それをさらに意味を解する訓みとなっている。

二種の異なる部分に焦点すると、漢字「錦」の音読みが違ふところである。すなわち前者の「錦」は、いずれも

漢音も、呉音も「キン」と読み、後者の「錦」は漢音、呉音で読むのではなく、訓読で「ニシキ」である。

⑦のように、句のものには「錦帳ノ」しかない、注釈の中でだけ「ニシキの帳ノ」とある。能因本は、より和文に近づいた表現で、古注では注釈の中でしか見えない表記となっている。

四 前田家本と三巻本の類似表記

かつて池田亀鑑により、『枕草子』本文については、「雑纂」の「三巻本」と「能因本」、「類纂」の「前田家本」と「堺本」に分類され、二種の四系統本文と呼ばれている。これらの四系統本文のうちどれが最も原文に近いかについて、様々な視点から論じられてきた。そのうち代表的な論に、最も古い『枕草子』の写本と認められてきた前田家本文は、能因本と堺本から編纂されたという次の説がある。

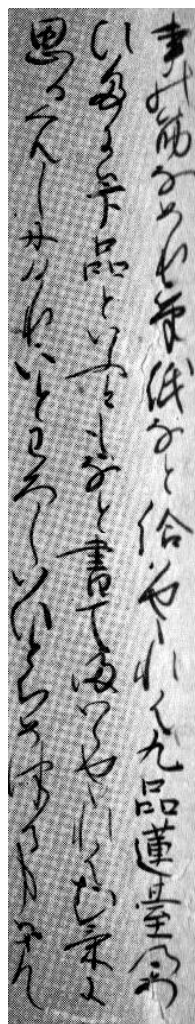
仮説「前田家本は伝能因本と堺本とを底本として集成して作られた後人による改修本である。」⁽⁴⁾

前田家本文は最も古いと言われているが、前田家本文に関する研究の少なさ、乏しさにより、この「仮説」を検証することは、これまででなされてこなかった。よって、この点について、漢詩句を引用する視点から前掲の「10」番の慶滋保胤の詩句に関する引用について、検討してみたい。

該当する詩句の「十方仏土之中、以西方為望、九品蓮台之間、雖下品為足」のうち、「九品蓮台之間」の詩句は、いずれも三巻本、能因本、前田家本の中で引用されているが、堺本では、該当する章段はない。

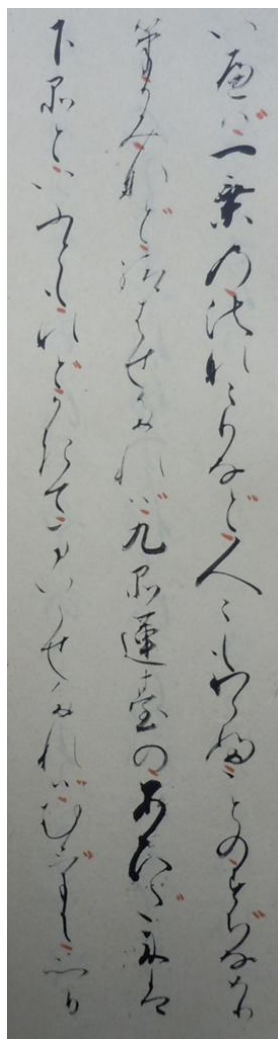
では、三巻本、能因本、前田家本の表現はどうなるう。それぞれの代表的な写本の該当する部分を扱っておく。まず、三巻本である。影印資料は陽明文庫蔵と大東旧記念文庫蔵による。

① 陽明文庫蔵三巻本『枕草子』⁽⁵⁾



詩句翻字「九品蓮臺のあいたには下品といふとも」

② 大東急記念文庫蔵三巻本『枕草子』⁽⁶⁾



詩句翻字「九品蓮臺のあいたには下品といふとも」

③ 学習院大学蔵能因本『枕草子』⁽⁷⁾

もろあかり筆うと緒うりたれ九品蓮臺の仲し下品を
 不さむもてまうせされしきふねひくろふかりい！
 日ういふまほの事いふとも何れもふたふたれ人

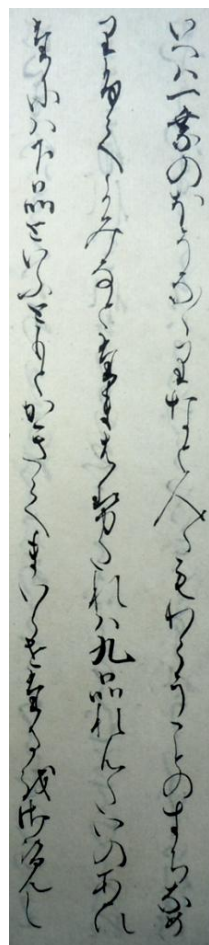
詩句翻字「九品蓮臺の中には下品といふとも」

④ 富岡家旧蔵能因本『枕草子』⁽⁸⁾

くさふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 九品蓮臺の仲し下品といふとも
 日ういふまほの事いふとも何れもふたふたれ人

詩句翻字「九品蓮臺の中には下品といふとも」

⑤ 前田家尊経閣文庫蔵前田家本『枕草子』⁽⁹⁾



詩句翻字「九品れんたいのあひたには下品といふとも」

右①から⑤までの該当する詩句の引用を、次に示してみよう。

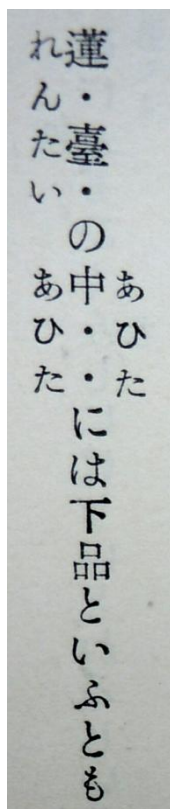
- ① 「九品蓮臺の**あ**いたには下品といふとも」 (陽明文庫蔵三卷本『枕草子』)
- ② 「九品蓮臺の**あ**いたには下品といふとも」 (大東急記念文庫蔵三卷本『枕草子』)
- ③ 「九品蓮臺の**中**には下品といふとも」 (学習院大学蔵能因本『枕草子』)
- ④ 「九品蓮臺の**中**には下品といふとも」 (富岡家旧蔵能因本『枕草子』)
- ⑤ 「九品れんたいの**あ**ひたには下品といふとも」 (前田家尊経閣文庫蔵前田家本『枕草子』)

右ゴシック字に示したように、⑤前田家本『枕草子』本文は、能因本本文と違って、三卷本と一致することは一

目瞭然であろう。

もし従来の仮説、「前田家本は伝能因本と堺本とを底本として集成して作られた後人による改修本である」という仮説が成立すれば、堺本はないから、前田家本は能因本を踏襲すべきであろう。しかしながら、右の例に示した如く、⑤前田家本は、能因本本文と異なっており、三巻本の表記と合致することは否定めないであろう。換言すれば、前田家本文は、能因本と堺本によつて後人が作られた本という仮説は成立し難い。

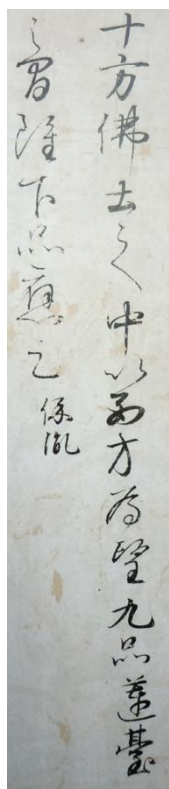
ちなみに『校本枕冊子』には、次のように纏められている。⁽¹⁰⁾



蓮・臺・の中・には下品といふとも
あひた
れんたい

では、なぜ能因本本文は異なるのか。この点について、『和漢朗詠集』古注釈を検証してみたい。

一 宮内庁三の丸尚蔵館蔵粘葉本 伝藤原行成筆『和漢朗詠集』⁽¹¹⁾



十方佛土く中へある望九品蓮臺
智降下品意こ
係風

詩句翻字「九品蓮臺之間雖下品應足」

十方佛土之中 以西方爲望 九品蓮臺之間 雖下品應足^ス 保胤^ユ、シウヨキ

462
590
十方仏土ノ中ニハト者、是ハ、保胤入道ノ舎利講文也。十方仏土ノ中ニ、西方ノ勝タル事ハ、仏、阿闍世王ノ御母、韋提希夫人ノ爲ニ、二百一十億ノ諸仏ノ浄土ヲ現シテ見セ給シ時キ、夫人、其ノ諸仏ノ浄土ノ中ニ、西方ノ浄土ヲ撰テ取リ給シカハ、以西方ニ爲望ニ云也。而レハ、尺ニモ、諸教所讃多在弥陀故以西方而爲一准^ト。下品応足者、安養世界往生人ト云ハ、一期ノ間、盜ニ十惡五逆ヲ作レハ者、至^テ臨終ニ、阿防羅刹、火ノ車ヲ持テ来ル時、病人恐テ、狂イ顛倒スル時ニ、善知識ノ僧来

テ教テ云、自レ是西方十万億土ノ西ニ、有浄土。名極樂。彼ニ仏御座ス。彼ノ仏ノ願トシテ、十惡五逆ノ罪人也トモ、我名ヲ十返唱ヘハ、則浄土ヘ迎ヘント誓給ヘリ。汝止^メ三日来惡心、念仏ヲ申セト勸メラレテ、十念ニ及フ時、火車ハ自然ニ去リ、自西方ニ日輪ノ如クナル蓮花来テ、病者ヲ乗セテ、須臾ノ間ニ、至^ル極樂世界。八功德池ノ中ナル蓮花ノ中ニ腹レテ、常ニ聞^キミタ觀音說法、經十二大劫、アミタ仏ノ御前ニ参リ、新生ノ菩薩云ハレテ、次第ニ開^キ覺、觀音勢至ノ如ク菩提ナル故ニ、下品ト云トモ応足ニ云ナリ。

書陵部本『朗詠抄』⁽¹³⁾

420
590

十方仏――、昭宣公建立シ玉ヘル、極樂寺ニテ作文アリシ、慶保胤序者ニテ、書レシ序句也。彼極樂寺ハ、貞慎公
ノ建立有シ、法性寺ノ傍ニアリ。言、乃往過去ノ昔、世自在王如来ノ出世ノ時、冊提ノ蘭国王、離垢淨王、或ハ、
無上全王、十善ノ王位ヲソムキ、万乘ノ政ヲ捨テ、如来ニ随イ來テ、出家修道シ玉イテ、其名ヲ曇摩訶ト申ス。此ニ
ハ、法藏比丘ト云ヘリ。即、五劫思惟、万劫具足ス。此ヲ哀愍シテ、二百十億ノ諸仏ノ国土ヲ撰シメ玉フニ、西方淨
土ヲエラヒ取テ、定メ玉ヘリ。仍テ、勝レタル故ニ、云爾也。又、下品トハ、蓮花ノ中ニハラマレテ、劫ヲ経ト云ヘ

トモ、蓮花中ニ、一大三千界ノ如クニ、広ケレハ、下品ト云フトモ足ヘシト云ヘリ。

＜ 広島大学本『和漢朗詠集仮名注』⁽¹⁴⁾

459 十方佛土之中^{ニハテ}以^ヲ西方^ヲ為^スレ望^ミ 九品蓮臺之間^{ニハトセ}雖^{タリト}三下品^ニ應^シレ足^{タシヌ} 極樂寺^ノ願文序句 慶保(胤)作

京ヨリ巽ノ角ニ、貞信公ノ建立セシ、法性寺ト云寺アリ。此寺ノ傍ラニ、又、貞信公ノ父ノ、^{*}照宣公ノ建立ノ極樂寺ニシテ、作文セラレケル時、保胤、序者ニテ書タル序ノ句也。言ハ、乃往過去ノ昔シ、世自在王ハ、如来出世ノ時、十善ノ王位ヲソムギ、^{*}万乗ノ政ヲ捨テ、如来ニ随イ奉テ、出家修道シ玉キ。其ノ名ヲ、曇摩訶ト云。此ニハ、法藏比丘ト云ヘリ。即、五劫思惟シ、万行具足スル。如来、此ヲ哀愍シテ、二百万億ノ諸仏ノ国土ヲエラハシメ玉フニ、西方淨土ヲ取ツテ、我カ国ト定メ玉ヘリ。仍テ、西方淨土、勝レタリシカ故ニ、以ニ西方ニ為望ニ云ヘリ。下ノ句ハ、又此モ、九品ノ間ニハ、下品ハ劣也ト云ヘトモ、見仏聞法ノ義アレハ、即足メヘシト云ヘリ。極樂寺ノ願文ナレハ、諸ノ仏土ニ勝レテ西方ニ辟ヘ、下品ト云フトモ、余ノ土ニハ勝レリト、西方淨土ヲ讚テ、作玉フ也。又一義ハ、下品ト生ハ、合蓮花ノ中ニハラマレテ、劫ヲ經ルト云ヘトモ、蓮花ノ中カ、即チ一大三千界ノ如ニ広ケレハ、下品ト云ヘトモ、足メヘシト云也。

VI 『和漢朗詠集永濟注』 (15)

420 十方佛土中以ニ西方ニ為望 九品蓮臺之間雖下品應足 保胤

此レハ、或説ニハ、諷誦ノ文ナリトイヘリ。或説ニハ、タ、此一句許ヲツクリテ、居処ノ壁ニ、書付タリケルトモイヘリ。可尋。上句、有深キ意。此土ノ衆生ハ弥陀ニ契深ク、弥陀如

来ハ亦、此土、縁厚ク坐マス。故ニ如此云ナリ。下句ハ、スヘテ大乘善根ノ境ヒ、一向不退ノクニナレハ、縦ヒ雖生何品、有テ進ノミ無ム退ニ故ニ、下品ナリトモ可足ト云ナリ。

『校異和漢朗詠集』⁽¹⁶⁾

595
 ジツハウブツドノナカニハサイハウチモテノゾミトス クホレンダイノ
 十方佛土之中以西方爲望、九品蓮臺⁽¹⁾

アヒダニハグホントイフトモ タンヌベシ
 之間雖下品應足。保胤⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾

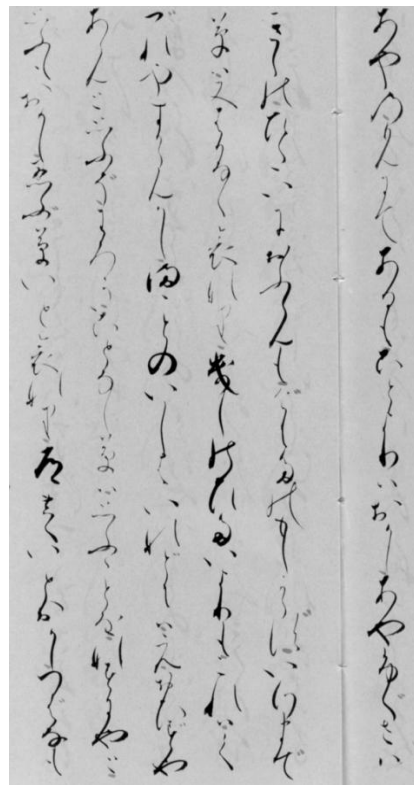
右「く」までの『和漢朗詠集』古注釈の表現で確認できるように、詩句「九品蓮臺之間」の「中」の言葉は、注釈の中から導き出される可能性を残している。能因本のような「中」の表現は特異表記であろう。ただし、この特異な表現を、前田家本では、従ってこなかった点に注意するべきであろう。やはり従来の前田家本が堺本と能因本に基づいて編纂された説は揺れるのではないだろうか。

五 堺本本文に見える「加筆」

次に、堺本本文に見える後人の「加筆」を考えたい。前掲の「7」番の四系統『枕草子』「草は」章段における『和漢朗詠集』巻下「無常」の漢詩句「観身岸額離根草」に関わるものである。

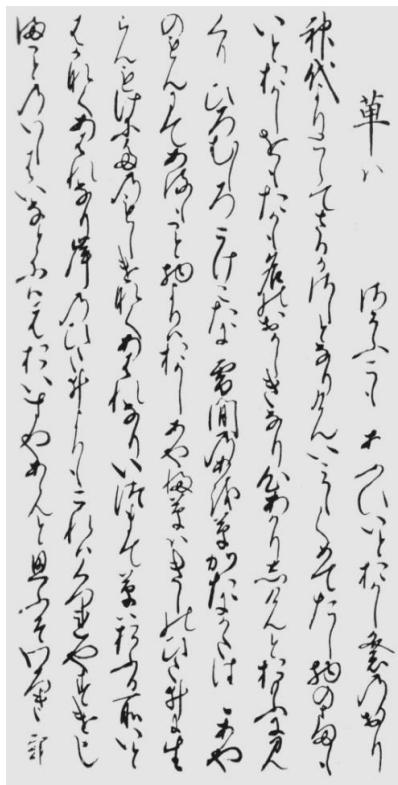
まず四系統本文の代表的な写本を取り上げておきたい。

三卷本『枕草子』（影印本は大東急記念文庫蔵複製本（日本古典文学刊行会）による）



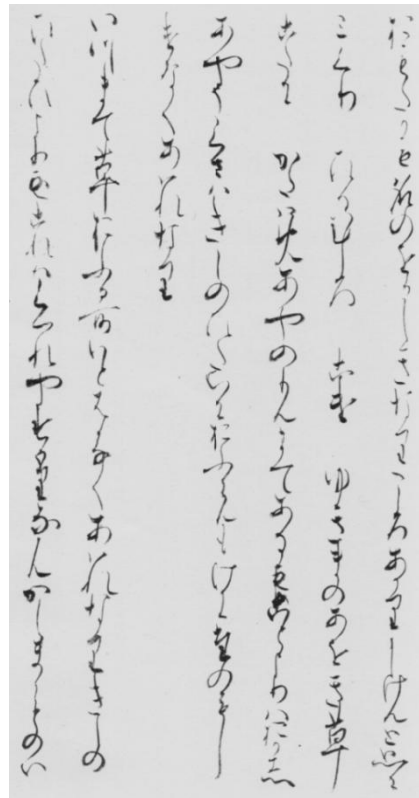
「ポイント」 きのひたいにおふらんも

能因本『枕草子』（影印本は学習院大学蔵（笠間文庫）による）



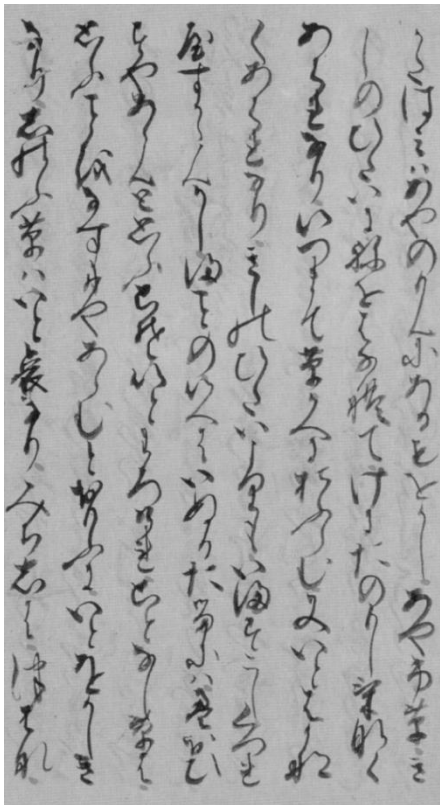
「ポイント」 きのひたぬに生らんも

前田家本『枕草子』（影印本は尊経閣蔵複製本（育徳財団）による）

A photograph of a page from the Maeda family copy of 'Makura no Sōshi'. The text is written in a cursive Japanese calligraphic style (sōsho) on a light-colored background. The characters are dark and fluid, with some variations in stroke thickness and spacing between characters and lines.

「ポイント」 きしのひたいにおふらんも

堺本『枕草子』（影印本は高野辰之旧蔵（古典文庫）による）

A photograph of a page from the Sakai copy of 'Makura no Sōshi'. The text is written in a cursive Japanese calligraphic style (sōsho) on a light-colored background. The characters are dark and fluid, with some variations in stroke thickness and spacing between characters and lines.

「ポイント」 きしのひたいにねをはなれ

では、四系統本文（8番参考）「ポイント」を一覧にしてに比べてみよう。

三卷 本 きしのひたいにおふらんも、げにたのもしからず。

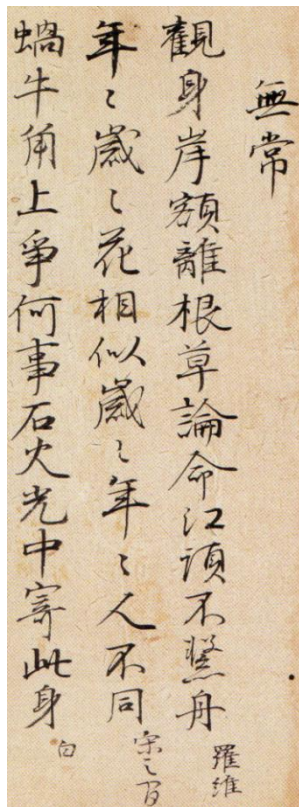
能因 本 きしのひたゐに生らんも げにたのもしげなくあはれなり。

前田家本 きしのひたいにおふらんも げにたのもしげなくあはれなり。

堺 本 きしのひたいにねをはなれ げにたのもしうなく、あはれなり、

右のように、三卷本、能因本、前田家本の本文のうち「観身岸額離根草」の、「観身岸額」の部分は一致している。しかし、堺本本文は、三卷本、能因文、前田家本と違って、「生ふらむも」ではなく、「ねをはなれて」という表現である。この「ねをはなれて」部分は、どういう意味なのか。『和漢朗詠集』及び古注釈に注目して解説したい。

まず、『和漢朗詠集』を取り上げておきたい。（影印本は『粘葉本和漢朗詠集 伝藤原行成筆』（二玄社）による）



また論述の便宜上、該当する漢詩句の『校異和漢朗詠集』（大学堂書店）本文も取り上げる。

ミタクワンズレバキシノヒタヒニネヲハナレタルクサイノチヲロンズレバエノホトリニツナガザルフネ
 觀^レ身岸額離^レ根草論^レ命江頭不^レ繫舟。⁽¹⁾ 羅維⁽²⁾
 イ白

(五六〇)粘・近・關・雲・公・寂・爲・延・尹・嘉・尊・古。この句、古(五六一)の次にあり。(1)「廬」、寂「鑪」。(2)「白」、粘・近・關・雲「同」。寂ナシ。(3)爲・嘉「廬山草堂夜雨獨宿」(爲「宿」を「居」に作る)。尹・延「夜雨獨宿堂」(延「堂」ナシ)。

右によると、漢詩句「觀身岸額離根草」の訓読は、「ミタクワンズレバキシノヒタヒニネヲハナレタルクサイ」である。注意して頂きたいことは、訓読の「ネヲハナレタルクサ」は、そもそも漢詩句の「離根草」である。この部分は、三卷本、能因本、前田家本ではいずれも採れなかったが、堺本のみに見える「ねをはなれて」という表現には、実にもとの漢詩句の「離根草」に、「離根」を加えた表現であることは明らかである。

漢詩句の最後の三文字「離根草」の訓読については、『和漢朗詠集』古注釈では幾つかの種類で確認することができる。

① 『和漢朗詠集』(『和漢朗詠集古注集成』 大学堂書店、以下「古注」に呼称する。)

807 千^ニ無^{スレ} 觀^{スレ}身岸額離^{ヒタヒ}根草 論^{スレ}命江頭不^ホ繫舟 羅維^ニ
 五十六

② 東京大学本『和漢朗詠集私注』⁽¹⁷⁾（古注参照）

584 観^レ身^ハ岸^ノ額^ニ離^ル根^ヲ草 論^レ命^ヲ江^リ頭^ニ不^レ繫^ツ船^カ

③ 国会図書館本『和漢朗詠注』⁽¹⁸⁾（古注参照）

623
790 観身^ト者、岸額^トハ、此^ハ、涅槃^ノ心^ヲノヘタリ。彼^ノ経^ニ、有^ク者、狩^ノ為^ニ山^ハ入^リタリシ^ニ、思^モ不^ル懸^ニ所^{ヨリ}、猛虎
出^テ追^ケレハ、遁^ル方^ノ無^サニ、谷深^キ岸^ハ迎^テ飛^入ス。中^間茂^草ノ有^シニ、取^ツキ居^{タリ}。草^ノ根^ヲヌケハ、身^モ危^カ
リシ^ニ、黒^白ノ二^鼠、^{*}□^ノ草^ノ根^ヲ食^ル。草^ノ根^ノカル、ニ随^テ、命^ノツ、マ^ル事^ヲ知^ス。法^ニ合^{スル}□^ハ、^{*}狩^人トハ、我^等也。
山^ハ入^ト云^ハ、山^野ニ交^ルヒツメ^ヲ害^シテ、食^{スル}故^也。虎^トハ、無^常ノ虎^{、即}、炎魔^王ノ使^也。草^ノ根^ト者、我^等カ且^ク
娑婆^ノ住^ニタ^ル所^也。黒^白ノ鼠^ト者、日^月也。々々^ノ立^チ行^ニ随^テ、歳^老行^{、命}ノツ、マ^ルニ譬^ヘタリ。此^心ヲ、哥^ニモ、草^ノ
根^ニツ^クノ命^ノカ、レ^ルヲ月^ノネ^スミ^ノサ^ハカシ^キ哉^文。不^繫船^ト者、主^無キ船^也。

④ 書陵部本『朗詠抄』（古注参照）
(19)

578 親身——此、日月ノ風ノ因縁ヲ作り。或人、広野ヲ行クニ、虎アリ、追フ。ニゲ走テ行ニ、岩ノ岸ニ行付ヌ。下ヲ
790 見レハ、遥ニカケテ、可^{*}レ遁道ナシ。上ヘ帰ントスレハ、虎競居テ、喰ントス。只下ヘ落ントスレハ、鰐ト云者、口
ヲアケテ、待カケタリ。岸ノ山ニ取付テ居レハ、白キ鼠ト黒キ鼠ト二ツシテ、其根ヲカブル。山根モ既ニ浮テ、憑ム
方ナシ。此、世間ノ無常ヲ、摩耶經ニ説レタリ。虎ハ、無常ノ虎、天也。鰐ハ、地也。二ツノ鼠ハ、月日也。山ハ、
命也。岸ハ、仮ノ宿リ也。無常虎、隙ナク責テ、冥途ニ至ラントスル、纔ナル仮ノ宿リ、露命限アレハ、日月二鼠、
草根ヲカブリ、既ニ断ントスルニ喩也。下句、海士ノ、身ヲ捨テ、舟ノ波ニユラレテ、何クトモ定メナキアリサマ、
只、生死ノ波ニ浮テ、菩提ノ岸ニ不^ルレ寄事ヲ、悲ムニ似タリ。羅虬作也。

⑤ 広島大学本『和漢朗詠集仮名注』（古注参照）
(20)

617 親^レ身^ハ岸^ノ額^{イニ}離^{タル}根^ヲ草
論^レ命^ハ江^ノ頭^{リニ}不^ル繫^{ツナ}舟^カ
羅維^{*}

此ハ、有為無常ヲ作也。謂ク、吾身ヲ觀レハ根ヲ離レタル草、岸ノ頭リニ浪ニユラル、体也。額ハ、ホトリ也。此モ、裏心ハ、經ノ説ヲ含ム也。或人、カタキヲ持タリ。昼夜ネラフコト、無隙。サレハ、用心キヒシクシテ、更ニ無油断。或時、大切ノ用アリテ、知人ノ方ヘ忍テ行処ニ、毎年心カケタル敵人、道ニ行相ス。カタキ、年月ノ念願ヲ遂コト、喜悅ナリト、刀ヲ抜テカ、リケル。此人、不^{シテ}叶^{シテ}奔逃^{シテ}。カタキハ不^ト逃逐程ニ、不^レ叶、山ノソハヘ逃下ケル処ニ、飢^{タル}虎アツテ、此ヲ悦ビ、飧^シテ逐程ニ、アル細道ヲ行ク。カクテ細道絶ス。或谷ノ岸ニ行付ス。下ヲ見レハ、遥ナルカケノ沢ニテ、遁^{ノカル}ヘキ道無

シ。カヘラントスレハ、上ニハ、虎キラツテ飧^シトス。下ハ、落^シトスレハ、鰐^{ワニ}ト云物アツテ、ロヲハツテ待リ。更ニ逃ヘキ様ナシ。思切テ、向ノ岸ヘ眼ヲ閉テ飛^トリ。サスカ向ノ岸遥ニシテ、トヒ不^レ及^フ。岸ノ半ニ、草三筋アルニ取付テ、サカリヌ。時ニ、力ト頼ム草ヒカレテ、一筋ハハヤ切ス。一筋ヲ頼ム処ニ、穴ノアルヨリ、黒白ノ二ノ鼠出来テ、草ノ根ヲカジリ、切ントス。此ヲ思フニ、辟^ハヲトルニ、無言^{常歟}ノカ、ル危^キ身体、無常生死ノ四顛倒ヲ、广耶經ニ説ケリ。謂ク、敵ハ、生死、虎ハ、無常ノ病也。鰐ハ、地獄也。二ノ鼠ハ、日月也。――ハ、命ヲセムルナルヘシ。草ハ、命也。岸ハ、カリノ宿也。生死ノカタキ、無常ノ虎、ヒマナク責テ、命途ニ至ント云コト、ワツカノ、カリノ住家ト云也。サレハ、花山院ノ御哥ニ曰、草ノ葉ニ露ノ命ノカ、レルヲ月ノ風ノサワカシキ哉トヨメリ。下ノ句、海土ノ捨舟ノ、波ニユラレテ、何トモ定ナキ有様ハ、只、我等カ命ノ、波ニウカレテ、菩提^{サシ}ノ岸ニヨリツカサル悲也ト云々。

⑥ 『和漢朗詠集永濟注』(古注参照)
(21)

577 観^{レハ}身^ヲ一岸^ノ額^ニ離^{タル}根^ニ草 論^{レハ}命^ヲ江^ノ頭^リ不^ル繫^{ツナ}二舟^カ 羅虬

此詩、上句ハ、月ノ風ノ意歟。下句、可知。

また林和比古が編纂された『堺本枕草子本文集成』(日本書房)による十五首の堺本の異本にも「離根」を訓読されている。次のような一覧表を取り上げておきたい。

I										10
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	
彰	乙	京	宮	群	多	無	鈴	朽	甲	
あやのもんにて	あやのもんにて	あやのもんにて	あやのもんにて	あやのもんにて	あやのもんにて	あやのもんにて	あやのもんにて	あやのもんにて	あやのもんにて	あやのもんにて
あるも	あるも	あるも	あるも	あるも	あるも	あるも	あるも	あるも	あるも	あるも
おかし	おかし	おかし	おかし	おかし	おかし	おかし	おかし	おかし	おかし	おかし
あやふくさ	あやふくさ	あやふくさ	あやふくさ	あやふくさ	あやふくさ	あやふくさ	あやふくさ	あやふくさ	あやふくさ	あやふくさ
きしの	きしの	きしの	きしの	きしの	きしの	きしの	きしの	きしの	きしの	きしの
ひたひに	ひたひに	ひたひに	ひたひに	ひたひに	ひたひに	ひたひに	ひたひに	ひたひに	ひたひに	ひたひに
ねをはなれて	ねをはなれて	ねをはなれて	ねをはなれて	ねをはなれて	ねをはなれて	ねをはなれて	ねをはなれて	ねをはなれて	ねをはなれて	ねをはなれて
けに	けに	けに	けに	けに	けに	けに	けに	けに	けに	けに

③あやふ草
 ④あやう草
 ⑤あやふ草は
 ⑥あやふ草は

右の如く、一〜一八までの翻字によつて、「離根」は訓読されている。これは堺本の典型的な「加筆」ではないかと考えている。三巻本、能因本、前田家本には、このような加える説明は見えないのである。

六 おわりに

以上、『枕草子』における『和漢朗詠集』の漢詩句を考察してきたものである。漢詩句の表現によって、『枕草子』各系統本文の訓読みを対照してみた。主な三点を纏めておこう。

一つは、三卷本文と能因本本文では、漢詩句を引用する方法は異なる。三卷本は漢字のまま書き、能因本文では、『和漢朗詠集』古注「永済注」と一致している。「永済注」の成立時期は、「室町以前」⁽²²⁾である。

二つ目は、前田家本文は必ずしも能因本と堺本の本文を踏襲するとは言えない。つまり従来の「前田家本文」は、「能因本」と「堺本」の本文に基づいて後人が再編したものであるという「仮説」は、再考することが必要であろう。三つ目は、堺本本文は、三卷本、能因本、前田家本より自主的に加筆したものが見える。『和漢朗詠集』古注によって、その加筆された部分の跡を確認することができる。

〔注〕

- (1) 田中重太郎『枕冊子全注釈』一（角川書店 一九七二）一四〇―一五頁。
- (2) 石田穰二『枕草子』上（角川文庫 二〇〇六）四〇七―四〇八頁。
- (3) 伊藤正義・黒田彰・三木雅博『和漢朗詠集古注釈集成』第一巻―第三巻（大学堂書店 一九八九―一九九七）
具体的な書名及び頁数を、次の注に示す。
- (4) 楠道隆『枕草子異本研究』（笠間書院 一九七八）六頁。
- (5) 陽明文庫蔵三卷本枕草子『枕草子・徒然草』（思文閣 一九七五）七三頁。

- (6) 大東急記念文庫蔵(古梓堂文庫旧蔵)本の複製三卷本(第二類)『枕草子』三冊(日本古典文学刊行会 一九七四)第一冊による。
- (7) 学習院大学蔵能因本『枕草子』上(笠間書院 二〇〇五)一八一頁。
- (8) 柿谷雄三・山本和明「富岡家旧蔵能因本『枕草子』」(和泉書院 一九九九)
- (9) 前田家尊經閣文庫蔵の写本の複製『前田家本枕草子』四冊(育徳財団 一九二七)第四冊による。
- (10) 田中重太郎『校本枕冊子』上(古典文庫 一九六七)三一五頁。
- (11) 宮内庁三の丸尚蔵館蔵粘葉本 伝藤原行成筆『和漢朗詠集』(二玄社 一九九三) 頁。
- (12) 前掲(3) 同、第一卷、二二二頁。
- (13) 前掲(3) 同、第二卷上、二五二〜二五三頁。
- (14) 前掲(3) 同、第二卷下、四六九〜四七〇頁。
- (15) 前掲(3) 同、第二卷下、七八〇頁。
- (16) 前掲(3) 同、第三卷、二四二頁。
- (17) 堀部正二・片桐洋一『校異和漢朗詠集』(大学堂書店 一九八一) 頁。
- (18) 前掲(3) 同、五九二頁。
- (19) 前掲(3) 同、第二卷上、三一二頁。
- (20) 前掲(3) 同、第二卷下、八七二頁。
- (21) 前掲(3) 同、第三卷、五一七頁。
- (22) 黒田彰「朗詠古注」管見——永濟注について——『国語と国文学』(一九八三年一月)五一頁。

第三章 『枕草子』 「文は」 の章段の問題

はじめに

「文は」章段は、『枕草子』では四系統すべてに見えるが、各系統の内容と表現は異なる。すなわち次の通り。

「三卷本」文は 文集。文選。**新賦。史記、五帝本紀。**願文。表。博士の申文。

松尾聰・永井和子『枕草子』新編日本古典文学全集 (三三六頁)

「能因本」文は 文集。文選

松尾聰・永井和子『枕草子』日本古典文学全集 (三四三頁)

「前田家本」書は 文集。文選。論語。**史記。ごだい本紀。**願文。博士の申文。

田中重太郎『前田家本枕冊子新註』(四九〇五〇頁)

「堺本」文は、文選。文集。論語もをもしろし。

堺本速水博司『堺本 枕草子 評釈』(三一頁)

ここで問題になるのは、次の二点である。一点目は三卷本にしか見えない漢籍の「新賦」という表現、二点目は、三卷本と前田家本にしか見えないの書名『史記』と第一巻「五帝本紀」の表現である。この二つの問題について、

二節に分けて論じる。第一節で、「新賦」を、第二節で、「史記五帝本紀」を扱う。

第一節 「新賦」について

「新賦」は、三卷本『枕草子』の当該段に一回だけ現われ、前田本、能因本及び堺本にはない。しかも、その「新賦」の意味は、私見によればかなり不明瞭であった。そこで、本節は、三卷本にある「新賦」について、新資料に基づいて、究明を試みる。

一 先行研究による問題点

まず、現存の四種類の三卷本文の表現を掲げ、比べて分析してみたい。特に、その章段の中の、文節の間にある「。」と「。」の点について十分注意してほしい。

(1) 書は、文集。文選、新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。

萩谷朴『枕草子』下 新潮社 一九七七(一〇五―一〇六頁)

(2) 書は 文集。文選。新賦。史記。五帝本紀。願文。表。博士の申文。

石田穰二『新版 枕草子』下 角川書店 一九八〇(八六頁)

(3) 文は 文集。文選、新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。

渡辺実『枕草子』岩波書店 一九九一(二四五頁)

(4) 文は 文集。文選。新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。

松尾聡・永井和子『枕草子』小学館 一九九七(三三六頁)

右記、四つの注釈を見ると、萩谷朴氏と渡辺実氏の「文選、新賦。」と、石田穰二氏と松尾總氏・永井和子氏の「文選、新賦。」に分けられる。萩谷朴氏と渡辺実氏は「新賦」が「文選」の中の一部と解し、石田穰二氏と松尾總氏・永井和子氏は「文選」と「新賦」は別々なものと理解しているようである。

では、「新賦」が「文選」の一部であるならば、どういう「部分」なのだろうか。また「新賦」と「文選」が別々な物であるならば、具体的に「新賦」とはどんな物だろう。前述の各注釈書における「新賦」をめぐる解釈を次に示してみよう。なお、文頭に付した番号は先のものと対応している。

(1) 諸注は「新賦」^{しんぶ}を別個独立の書名と見て、未詳としているが、『史記』の中の「五帝本紀」を挙げるのと同じく、『文選』^{もんぜん}の中の「新賦」を特に指したものと考える。つまり、『文選』の賦の中で、漢代蒼古^{そうこ}の作品を「古賦」と通称するのに対して、通例「俳賦」^{へんぶ}または「駢賦」^{べんぶ}と呼ばれる六朝の華麗清新な作品を「新賦」とも称したと考える。『文選』の中でも、六朝の新賦が好まれたことは、第百五十四段に、晋の潘安仁^{はんあんじん}の「秋興賦」(『文選』卷十三)を引いた源英明の詩句が見え、第百七十三段に、宋の鮑明遠^{ほうめいえん}の「舞鶴賦」(『文選』卷十四)から「雪滿群山」を取った詩句を朗詠した事実が描写されている点からも首肯される。

(一〇六頁)

(2) 未詳。〔補注一五〇〕(八六頁頭注) 賦は、叙事、詠物を主とする韻文の一体。荀子にはじまり、漢代より盛行を見、『文選』に多くの作例を見る。漢代の作を古賦、対句を多く用いる六朝の作を俳賦もしくは駢賦、修辞上の典型の定まった唐代のを律賦、散文的になった宋代の作を文賦と呼ぶ分類が後世にあるから、新賦というのも、そうした時代による作風の差に基づいた呼称なのであろう。

(二二四～二二五頁)

(3) 梁の昭明太子撰の詩文集。その中の六朝の賦。漢代のを「古賦」と呼ぶ、その対だとされる。

(二四五頁)

(4) 未詳。一説、『文選』中の六朝時代の作品を「新賦」と称したか。

(三三六頁)

(1)、(2)、(3) は類似の観点を持つと思われる、つまり(1)のように、「古賦」は、漢代の賦であり、「新賦」は、六朝の賦である。(4)の文は(1)～(3)の説を参考までに引用しているが特に賛成しているわけではないらしい。なぜ(1)は、このような観点を出てくるのか。それは同じく(1)の萩谷朴氏が五年後(一九八三年)に書いた『枕草子解環』の中の第百九十七段、「問題点(一)」に、さらに詳しく述べられているので見てみよう。但し、A、B、Cの記号は説明の便宜のために筆者が付けた。

A『文選』に収録せられた賦の中、漢代の作を「古賦」と通称するのに対して、六朝の作を、「俳賦」又は「駢

賦」などと呼んでいるが、平安の詞人が特に好んだのは六朝駢驪の華麗な対句であるから、清少納言は、これを極く常識的に、「古賦」に対する「新賦」の名を以って呼んだのであろう。或いは、当時、「新賦」という呼称が、一般に通用していたかも知れない。ともかく、清少納言が『枕草子』の中で紹介した、第百五十四段の晋の潘安仁の「秋興賦」(『文選』卷十三)を引いた源英明の詩句、第百七十三段の宋の鮑明遠の「舞鶴賦」(『文選』卷十四)から、「雪滿群山」を取った詩句を朗詠した事実などは、漢代の「古賦」ではなく、まさしく、この「新賦」に該当するものであったからである。(略)

B右は、漢籍・詩賦に関する歴史的規準と、本段の文章構造を分析する文脈的規準との綜合判断によって得た新解釈であり、集成がこれを用いたことは言うまでもない。というよりは、右の新見は、集成執筆の過程において得られたものであった。

C古賦・駢賦(俳賦)・律賦・文賦というような全体的な分類は、宋代以後の後世の所為であって、北宋の太宗至道二年に相当する、原初狭本類纂型『枕草子』執筆の長徳二年当時にあつては、まだ、漢代の古賦、六朝の新賦と、『文選』所収の賦を新旧二派にのみ分類する唐代の批評意識が伝来していたに過ぎなかったと考えてもよからう。唐代が過ぎ、宋代にもなれば、六朝のものを新賦と呼ぶ習わしは消滅したであらうから、今日の漢文学史に「新賦」の名が残らないことも当然といえよう。

『枕草子解環』四 同朋舎 一九八三(二四八頁)

萩谷朴氏の『枕草子解環』の解説文は『新潮日本古典集成 枕草子』の頭注文よりもっと詳しく論述されたが、筆者には次の疑問が浮かび上がって来る。第一に、「古賦」と「新賦」の区別が不明である。第二に、『文選』の「賦」

はどれが「古賦」、どれが「新賦」であるか、分類基準の解説がない。第三に、『文選』卷十三、十四の潘安仁「秋興賦」と、鮑明遠「舞鶴賦」が「新賦」であつたという証拠も不明である。これらの点を確認しておく必要があるだろう。

二 「古賦」と「新賦」の区別及び『文選』の「賦」の分類

まず、「古賦」と「新賦」の区別が不明ゆえ、「古賦」と言う言葉は何時から使われていたかという疑問を解決しなければならぬ。C段の文の推定、「古賦・駢賦（俳賦）・律賦・文賦」というような全体的な分類は、宋代以後の後世の所為であつて」とあるが、確かに、賦の内容と形式の分類として四つの種類に分けられた時代は明代の呉訥の『文章辨体』五十五巻であつた、歴代の名詩文を集めて、各種文体の作法などを解説し、その中の「古賦」に関して、宋代景文公の話を引用し、「離騷為詞賦祖、後人為之、如至方不能加矩、至円不能過規。」つまり、「古賦」の源泉は「離騷」であつたと指摘した。呉訥と同時代の、徐師曾は『文章辨体』に基づいて新しく『文体明辨』を編纂し、はつきり「賦」を四種に分け、古賦、俳賦、律賦、文賦とした。⁽¹⁾

これらの四種の賦に関わる時期の区分を、鈴木虎雄氏は『賦史大要』の中で、次のように述べている。（表記は現代漢字を用いる）

賦史の時期の区分は凡そ六期となすことを得。第一は騷賦の発生、成立の時期にして、周末の屈原・宋玉等の前後より漢の文帝・景帝の時に至る期間は之に属す。第二は騷賦が変化して漢の辞賦となり、漢代特有の賦を

生じたる時期にして、漢の武帝時代より魏・晋の交に至るまでの期間は之に属す。昔人の所謂「古賦」の時代は是なり。第三は晋宋以後、声律・对法・字句の用法、漸く工整に趨きたる時期にして、晋・宋より唐初に至る期間はこれに属す。昔人の所謂「俳賦」或は「駢賦」の時代は是なり。第四は声律对偶に重きを置くは固よりなる上に、韻法・字数・其他に於て制限を設け、之を官吏登用の試験場に於いて課することによりて上じたる賦の存在する時期にして、唐及び宋は之に属する。昔人の所謂「律賦」の時代は是なり。第五は对法は对法なるも、或は長句を用い、或は成語を用い、偶語にして散文単行の氣勢を帯ぶる者の生じたる時期にして、宋代は之に属する。昔人の所謂「文賦」の時代は是なり。⁽²⁾

鈴木氏が解説したように、「古賦」の時代は、漢から魏晋までの時期にあたる。しかし、晋以後、賦の形式によって、「俳賦」と「駢賦」となり、唐代では「律賦」、宋代では「文賦」へと移行する。鈴木氏の分類は、宋の徐師曾の『文体明辨』の分類と一致している。

このように、漢代の賦が、古賦と呼ばれていることは、確実であるが、魏晋の六朝時代の賦は、「俳賦」或は「駢賦」と言つて、特に「新賦」とは言わない。萩谷朴氏は、「六朝の作を、「俳賦」又は「駢賦」などと呼んでいるが、平安の詞人が特に好んだのは六朝駢賦の華麗な对句であるから、清少納言は、これを極く常識的に、「古賦」に対する「新賦」の名を以つて呼んだのであろう。」(前掲Aの引用文による)という推測をすることは難しい。なぜなら、なぜ清少納言は六朝の「俳賦」と「駢賦」を「新賦」に定義したのか、その理由は示されていない。

第二に、『文選』の「賦」はどれが「古賦」、どれが「新賦」であるかという問題である。

いったい、『文選』の中の賦は幾つあるのか、どのような基準で、賦を分類したのかという問題について押えてお

かなければならない。それについて、萩谷朴氏は、次のように書かれている。

『文選』六十巻に収められた七百五十三首（序二編を含む）の作品の中、賦は第一巻から第十九巻の半ばまでに五十六首（他に序二編）を収めるのみであるから、これ亦、一帙二帙を握玩する類いであつたと言えよう。この五十六首の賦の中、漢魏以前の古賦に属するものは、戦国楚の宋玉四首、前漢の楊子雲・司馬長卿各三首、班叔夜・賈誼・王子淵各一首、後漢の張平子五首、班孟堅三首（他に序一篇）、曹大家・王文考・禰正平・傅武仲・馬季長各一首、後魏の王仲宣・何平叔・曹子建各一首、計二十九首であるのに対して、六朝の新賦と言ふべき物は、東晋の潘安仁八首、左太冲三首（他に序一篇）、陸子衡二首、孫興公・郭景純・木玄虚・張茂先・向子期・嵇叔夜・成公子安各一首、宋の鮑明遠二首、謝惠連・謝希逸・顔延年各一首、梁の江文通二首、計二十七首であるから、より狭い範囲に好尚を限定したものと言えよう。⁽³⁾

傍線に引いたように、萩谷朴氏は、時代に基づいて、『文選』の中の賦を、「古賦」と「新賦」に分類したのである。結果「漢魏以前の古賦」計「二十九首」であり、「六朝の新賦」計「二十七首」である。しかし、本当に『文選』の中の賦は「古賦」と「新賦」に分かれていたのか。次にその問題について考察してみよう。

『文選』の中には詩、賦、文合わせて七百数篇以上あるが、どのような基準で集められたのだろうか。『文選』の「序文」を確認してみたい。

事出於沈思、義歸乎翰藻、故與夫篇什、雜而集之。遠自周室、迄于聖代、都為三十卷、名曰文選云耳。凡次文

之體、各以彙聚、詩賦體不一、又以類分、類分之中、各以時代相次。⁽⁴⁾

『文選』の「序文」にも、の選別規準として「古賦」「新賦」という語が無いことが分かる。念のため、賦の目錄を掲げると次の通りである。

『文選』目錄（賦のみ。首数、番号は見やすいように私に付した）

第一卷 二首 賦甲 京都上 1 班孟堅「西都賦」、2 班孟堅「東都賦」

第二卷 一首 京都上 1 張平子「西京賦」

第三卷 一首 賦乙 京都中 1 張平子「東京賦」

第四卷 三首 京都中 1 張平子「南都賦」 2 左太冲「三都賦並序」 3 左太冲「蜀都賦」

第五卷 一首 賦丙 京都下 1 左太冲「吳都賦」

第六卷 一首 京都下 1 左太冲「魏都賦」

第七卷 三首

賦丁

郊祀

1 楊子雲「甘泉賦並序」

耕籍

2 潘安仁「籍田賦」

畋獵上

3 司馬長卿「子虛賦」

第八卷 二首

畋獵中

1 司馬長卿「上林賦」 2 楊子雲「羽獵賦並序」

第九卷 四首

賦戊

畋獵下

1 楊子雲「長楊賦並序」 2 潘安仁「射雉賦」

紀行上

3 班叔皮「北征賦」 4 曹大家「東征賦」

第十卷 一首

紀行下

1 潘安仁「西征賦」

第十一卷 五首

賦己

遊覽

1 王仲宣「登樓賦」 2 孫興公「遊天台山賦並序」 3 鮑明遠「蕪城賦」

宮殿

4 王文考「魯靈光殿賦並序」 5 何平叔「景福殿賦」

第十二卷 二首

江海

1 木玄虛「海賦」 2 郭景純「江賦」

第十三卷 七首

賦庚

物色

1 宋玉「風賦」 2 潘安仁「秋興賦並序」 3 謝惠連「雪賦」 4 謝希逸「月賦」

鳥獸上

5 賈誼「鵬鳥賦並序」 6 禰正平「鸚鵡賦並序」

7 張茂先「鷦鷯賦並序」

第十四卷 三首

鳥獸下

1 顏延年「楮白馬賦並序」 2 鮑明遠「舞鶴賦」

志上

3 班孟堅「幽通賦」

第十五卷 二首

賦辛

志中

1 張平子「思玄賦」 2 張平子「歸田賦」

第十六卷 八首

志下

1 潘安仁「閑居賦並序」

哀傷

2 司馬長卿「長門賦並序」 3 向子期「思舊賦並序」 4 陸士衡「歎逝賦並序」

5 潘安仁「懷舊賦並序」 6 潘安仁「寡婦賦並序」 7 江文通「恨賦」 8 江文通

「別賦」

第十七卷 三首

賦壬

論文

1 陸士衡「文賦並序」

音樂上

2 王子淵「洞簫賦」 3 傅武仲「舞賦並序」

第十八卷 四首

音樂下

1 馬季長「長笛賦並序」 2 嵇叔夜「琴賦並序」 3 潘安仁「笙賦」 4 成公子安

「嘯賦」

第十九卷 四首 賦癸 情

1 宋玉「高唐賦並序」 2 宋玉「神女賦並序」 3 宋玉「登徒子賦並序」 4 曹子建「洛神賦並序」^⑤

『文選』の中の賦は第一巻から第十九巻にかけて、併せて五十七首である。賦の分類は、先ず、賦甲、賦乙、賦丙、賦丁、賦戊、賦己、賦庚 賦辛、賦壬、賦癸の十類に分かれているが、これは賦という部類が複数挙に分れるため、賦甲ゝ賦癸と別に順序を示したのである。それから、京都（上・中・下）、郊祀、耕籍、畋獵（上・中・下）、紀行（上・下）、遊覧、宮殿、江海、物色、鳥獸（上・下）、志（上・中・下）哀傷、論文、音楽（上・下）情。あわせて十五種に分類されている。最後に、同一類の中に多くの作者がある場合は、作者の時代によって、前後に並ぶ。例えば、第十三巻の「賦庚」の中の「物色」篇、1 宋玉「風賦」 2 潘安仁「秋興賦」 3 謝惠連「雪賦」 4 謝希逸「月賦」である。1 宋玉の年は今でもはっきりわからないが、『史記』の「楚有宋玉」によると、紀元前の人物に違いない。2 潘安仁は晋の人（二四七ゝ三〇〇）であり、3 謝惠連は南朝の人（三九七ゝ四三三）であり、4 謝希逸も南朝の人（四二一ゝ四六六）であった。このように、『文選』の賦の分類は、標題の意味から見ると、宮廷の都、高級貴族の行為、自然の風景、動物、こころざし、文論、音楽等の移行が明白に見えるであろう。特にどちらが古賦、どちらが新賦という分類は見えないのである。

第三に、『文選』巻十三、十四の潘安仁「秋興賦」と、鮑明遠「舞鶴賦」が「新賦」であったという証拠も不明である。

前掲した『枕草子解環』の文のA段に書かれた「ともかく、清少納言が『枕草子』の中で紹介した、第百五十四段、晋の潘安仁「秋興賦」（『文選』巻十三）を引いた源英明の詩句、第百七十三段、宋の鮑明遠「舞鶴賦」（『文選』

卷十四）から、「雪滿群山」を取った詩句を朗詠した事実などは、漢代の「古賦」ではなく、まさしく、この「新賦」に該当するものであったからである」という点では、次の疑問点が浮かび上がる。本当に『枕草子』に『文選』を引用したのかということである。

まず、第百五十四段、晋の潘安仁の場合であるが、萩谷氏も言っているように、『文選』を引用したのは、源英明であり、『枕草子』で引用したのは、その詩の『文選』引用部分ではない箇所である。したがって、清少納言が直接『文選』を見たかという点は疑問であると言いたいようがない。

次に、「第百七十三段の宋の鮑明遠の「舞鶴賦」（『文選』卷十四）から、「雪滿群山」を取った詩句を朗詠した事実」というのはさらに問題があり、現に氏も『枕草子解環』四に、次のように書いている。

雪、なにのやまにみてり「群山」というのを「某の山」と臆化している。原拠本文は、『文選』卷十四、鮑明遠の「舞鶴賦」に、

冰塞長河、雪滿群山。

とあるのよりも、むしろ、『和漢朗詠集』上、雪に入れられた、

暁入梁王之苑、雪滿群山。夜登庾公之樓、月明千里。

とあるのが、よりふさわしいのであろう。但し、後者の出典は、覚明の『和漢朗詠集私註』に「雪賦、謝観」とし、『江談抄』卷六に「白賦、賈嵩」とするが、いずれも原典は所在不詳である。福田俊昭氏の教示によれば、『唐書芸文志』『宋書芸文志』に、「謝観賦八卷」「賈嵩賦三卷」の名を見出だが、既に佚書となったものと思われる。⁽⁶⁾

因みに、他の註釈書を参照したい。

- 一 池田亀鑑『全講枕草子』 「和漢朗詠集上に見える唐の謝観の詩」(至文堂 一九六三年 三七〇頁)
- 二 松尾聡・永井和子『枕草子』 「和漢朗詠集・雪」(小学館 一九七九年 三二六頁)(能因本)
- 三 渡辺実校注『枕草子』 「和漢朗詠集・雪」(岩波書店 一九九一年 二二〇頁)
- 四 石田穰二訳注『枕草子』 「和漢朗詠集、冬」(角川書店 一九九九年 六三頁)

△は必ずしも萩谷氏説を踏襲していないのである。先の萩谷氏の書き方からしてもそれは無理からぬところだとすれば、△のようにそれを『文選』と断定する推定は根底から覆る可能性がある。

以上述べて来たように、萩谷朴氏『枕草子解環』の文に書かれた「漢魏以前の古賦」と「六朝の新賦」という、単純的な時代前後を条件とした「古賦」と「新賦」の判断は根拠が無いと言える。ということは、清少納言が書いた「新賦」は全く別な物ではなからうか。

三 『賦譜』の成立及び日本への輸入

いったい、「新賦」はどのような物だろう。その手がかりが『賦譜』という中国の書物にある。『賦譜』を読んでいるうちに、「新賦」についての解説を見つけた。それによれば、確かに、当時、賦は「古賦」と「新賦」の二つの

種類分けられていたのは事実だったらしい。しかしその判断基準は賦の作者の時代ではなく、賦本体、つまり、賦の構造が基準であつたらしい。

しかしながら、『賦譜』を利用すると、新しい疑問が浮かんて来る。『賦譜』とはどのような本か、どこにあるのか、信憑性はあるのだろうか。『賦譜』の中の「新賦」という言葉と清少納言の書いた「新賦」とは同じだろうか。『賦譜』の成立時代はいつなのか、簡単に言えば、清少納言は『賦譜』を読む時代に生きた可能性があるのか。これらのような疑問が解けなくては議論が進まないと思う。そこで、以上の問題を解決するために、次のような説明をする必要が有る。

『賦譜^ッ』という唐代の書物は「天下の孤本」（小西甚一）である。『賦譜』の原本は「重要文化財」として、五島美術館に所蔵されている。周知のごとく、奈良時代に伝来した唐代伝奇小説の『遊仙窟』は、中国では紛失したが、日本の文学に多くの影響を与えた。『賦譜』も中国では早く散逸し、諸文学史にも見えない。しかし幸いなことに日本に残った。平安時代における賦に関わる問題を解決する場合、この本は、極めて高い価値があると考えている。『賦譜』が発見されたことについて、かつて、元五島美術館、大東急記念文庫理事川瀬一馬氏が、五島慶太氏の回想文で、次のように述べている。

幕末からの本草家、伊藤圭介（有不為斎）の蔵書が、大阪府立図書館に寄托されていたのを子孫が引き取って入札してしまった。それは和漢の古写・古版・古文書など善本に満ちていて、その中に「賦譜・文筆要訣」の古筆本があつた。それを京都の佐々木竹苞楼が落札したが、どういう風の吹き廻しか、五島さんが求めたのである。⁽⁷⁾

右の傍線を付けた「賦譜・文筆要訣」の原文は、現在、五島美術館に、卷子本、一軸、二卷所蔵されている。

『賦譜』は、「紙数四枚 全長 十尺七寸七分 縦 九寸一分」である。『文筆要訣』は「紙数三枚 全長 五尺二分 縦 九寸一分」である。

『文筆要訣』は『日本国見在書目録』に記載している。作者は唐の杜正倫である。『賦譜』は『日本国見在書目録』には見えない。作者も不明である。

『賦譜』はいつ成立したのか。先行の研究は、必ずしも統一していない。主な説は以下のようなになる

- (1) 小西甚一氏「晩唐」⁽⁸⁾
- (2) 中沢希男氏「中唐〜晩唐」⁽⁹⁾
- (3) 柏夷氏（アメリカ）「八五〇年以前」⁽¹⁰⁾
- (4) 張伯偉氏（中国）「文宗太和、開成年間（八二七〜八四〇）」⁽¹¹⁾

右『賦譜』に関する成立(1)〜(4)の説は、まだ考慮の余地があるだろう。

(1)『賦譜』の内容から見ると、唐代の律賦の書き方から考えて、「晩唐」の「復古」の運動と必ずしも合うとは言えない。(2)中唐から晩唐まで、もつと縮める必要がある。(3)『賦譜』の中の用例中、一番最後の年次は浩虚舟の「木鶏賦」で年次が八二二年であることから推算すると、柏夷氏が指摘された「八五〇年」までの二八年間、新しい賦の用例を取り上げないことは、受験生のための参考書として、実効性から考え難い。(4)「洪邁《容齋續

筆》卷十三、「試賦用韻」によって、自太和（八二七～八三五年）以後、一首の賦のうち、八韻を押すといわれている。詞貸し、太和以前でも、一首の賦には、八韻を使用した賦例が多々見える。例えば、李程（七九六年進士）の二五篇律賦の中には、八韻の作が二一篇あり、張仲素（七九八年進士）の十九篇の律賦の中には、八韻の作が十五篇あり、白行簡（八〇七年進士）の十八篇律賦の中には、八韻の作が十五篇ある。⁽¹²⁾

このように、前掲の（１）～（４）の『賦譜』に関する成立の論考を踏まえて、改めて考えた結果は、『賦譜』の成立時期について、西暦八二二年から八二七までの間の時期と考える。なぜなら、八二八年、科挙の試験（進士）に合格した有名な詩人杜牧の賦を取りあげなかったことから見ると、八二七年までに成立したと考えている。

さらに、この期間の八二四年十二月頃、白楽天の友人元稹は、長慶二年（八二二）までに、白楽天が書いた二二五一首の作品を集めて、五十一巻の『白氏長慶集』を編集し、その中でも、元稹が「序文」で、大変賞賛した白楽天の賦「性習相近遠」である。『賦譜』の中で繰り返し引用されている。しかも、一時ではあれ、科挙試験の受験生の為の参考書として、『賦譜』が流行していた点から考えて、遣唐使が『賦譜』を『白氏長慶集』と同じ時期に日本に持って帰ったと考えられよう。唐代の科挙の試験と同じように、平安時代にも、省試によって、賦の試験があつて、受験に必要だったからである。この点について、田坂順子氏は、次のように述べている。

わが国で文章生を選ぶ省試の初見は延暦頃（七八九年頃）、そして試験への賦の採用が確認できるのが弘仁十一年（八二〇）である。⁽¹³⁾

日本で、『賦譜』を発見してから、日本の文学に与えた影響については、小西甚一氏が、『作文大体』の編者藤原

宗忠（一〇六二～一一四一年）が、『賦譜』を参考にしたことについて次のように指摘されている。

説明の字句が『賦譜』に酷似するのみでなく、例句までも多く共通している。⁽¹⁴⁾

また、小西氏は、中世の賦式書『悉曇輪略図抄』、五山の法式書「禪儀外文集」（師鍊）、『虎関和尚四六法』（同）、『仲芳四六法』（円伊）、『江西四六法』（龍派）、『江西蒲室四六講時口傳』（同）、『天隱四六図』（龍沢）、『策彦和尚四六図及法』（周良）、『常庵和尚四六転語』（龍崇）などの所説は『作文大体』と同じ例句であることを指摘している。小沢正夫氏は『作文大体注解』にも指摘している。

柏夷（アメリカ）は、八九〇年前に編纂された都良香（八三四～八七九）の『都氏文集』中の「洗硯賦」には、『賦譜』の影響があると指摘している。⁽¹⁵⁾

これらの背景から見ると、『賦譜』が、当時の文学理論から個人の創作に至るまで、与えた影響は端的に示されているといえよう。これゆえ、平安時代における「賦」に関わる問題は、この貴重な資料を参考にしなければならぬ。その意味で、三卷本『枕草子』の中の、一箇所「新賦」を説明する手がかりは、『賦譜』にある可能性は高い。では、いったい、『賦譜』の中の「新賦」は、どのようなものなのか。『枕草子』に書かれた「新賦」とどのような関係があるのか。節を換えて検証してみたい。

四 『賦譜』の「新賦」と『枕草子』の「新賦」

『賦譜』は、賦の文章を書けるように、必要な規則を身にける参考書である。主な内容は、賦句、賦段、賦題などのに分けれる。「賦句」というのは、文字通り、賦の句法について、「賦段」は、賦の段落について「賦題」は、賦という文章の題目について表述している。さて、「新賦」については説明の都合上ひとまず措き、「古賦」という語が『賦譜』に最初に出て来る箇所が、次の賦の段落に関する文があるので見てみよう。（影印文は国会図書館『賦譜』複製本による）

凡賦辭分限各有所歸但古賦段或多少或分或合
三限天台四限之類是也至今新體分爲四段
初三對物卅字爲頭次三對物卅字爲頂次二百
餘字爲腹寂末物卅字爲尾就腹中文字分爲五初
物卅字爲胸次物卅字爲上腹次物卅字爲中腹
次物卅字爲下腹次物卅字爲腰都八段之類韻發
語爲常辭

凡賦體分段、各有所歸。但古賦段或多或少、若『登樓』三段、『天台』四段之類是也。至今新體、分爲四段…

初三、四對、約卅字爲頭、次三對、約卅字爲項、次二百
余字爲腹、最末約卅字爲尾。就腹中更分爲五…初

約冊字為胸、次約冊字為上腹、次約冊字為中腹、

次約冊字為下腹、次約冊字為腰。都八段、段転韻発

語為常體。⁽¹⁶⁾

つまり「古賦」は段落に分ける時、非常に自由で、多くても、少なくとも良いという。例えば、『登楼』は三つの段落に分かれる、『天台』は四つの段落に分けられる。しかし、新体の賦としての段落は大体四つの段落に分かれると決まっているらしい。それは、(1)「頭」、(2)「項」、(3)「腹」、(4)「尾」である。しかし、「腹」は、なおまた(①)「胸」、(②)「上腹」、(③)「中腹」、(④)「下腹」、(⑤)「腰」に分けられている。

まとめると、次の通りとなろう、

(1) 「頭」は賦の初めの三と四の対句で文字数は三〇文字。

(2) 「項」は次の対句の文字数が約四〇文字。

(3) 「腹」は合わせて約二百字である。内訳は更に次のように分かっている。

① 「胸」は約四〇文字。

② 「上腹」は約四〇文字。

③ 「中腹」は約四〇文字。

④ 「下腹」は約四〇文字。

⑤ 「腰」は約四〇文字。

(4)「尾」は約四〇文字。

なのである。換言すれば、新体の賦は八段であり、段落毎に換韻するのを通例とする。

だが、この「新体」の賦が枕草子の「新賦」と同じかどうかはこれだけでは決められない。それについては同じく「賦段」の五ページほど後に手がかりがある。(影印文前同)

又陶母截髮賦頃原夫蘭

容方未惠、斯以願中、寧而無取、是類既盡、
截髮之義、項更微、截後、由未故曰新賦、
終項者、言賦之類、也、借如謝惠連雪賦、當時
時既為寒、已積愁雲、整是、已賦頭、欲近雪
先叙時、情物、後臨雪、賦之聖有作、其德勸、
為臨而表、豈不匪若、且合契、宜感應、
此室若乃、言律、情景、曾冰、正、新賦、先近臨
雪、下項叙物、類、入物、已後、緣情、物、類、成
終、六義、倫、於、其、同、至、尾、末、舉、一、賦、大、統、而、結、
具如上說

又『陶母截髮賦』項、「原夫蘭

客方来、蕙心斯至。顧中橐而無取、」是頭既尽

截髮之義、項更徵截髮之由来。故曰**新賦**之

體、項者、**古賦**之頭也。借如謝惠連『雪賦』：「歲將暮、

時既昏。寒風積、愁雲繁。」是**古賦**頭、欲近雪、

先叙時候物候也。『瑞雪賦』云：「聖有作兮德動天、雪

為瑞而表豐季。匪君臣之合契、豈感応之昭

室。若乃玄律將暮、曾冰正堅。」是**新賦**先近瑞

雪了、項叙物類也。入胸已後、縁情體物、縱橫成

綺。六義備於其間、至尾末舉一賦之大統而結之、

具如上説。^(1/2)

□で囲んだように、「新賦」と「古賦」の区別は、「古賦」の「頭」は「新賦」の「項」になる。前に分析した如く、「頭」は、三〇文字で、「項」は、四〇文字である。文の長さは違う。また、「古賦」と「新体」の賦、あるいは「新賦」は書き方も異なる。例えば、古賦としての謝惠連『雪賦』と新賦としての『瑞雪賦』の冒頭文を比べてみると、「雪」に関する描写について、古賦の『雪賦』の書き方は、先ず「雪」に関しては何もいわず、ただ「天氣の狀態」を表現する。「歲將暮、時既昏。寒風積、愁雲繁。」のように、雪の降る前の、その周りの自然狀況を表すのである。しかしながら、新賦としての『瑞雪賦』の書き方は、まず先に直接雪を表現すること、「聖有作兮德動天、雪為瑞而表豐年」である。これを見れば、「古賦」と「新賦」の表現方法による相違が分かる。

さらに『賦譜』の中では、多くの唐代の賦を取り扱って、新賦として用例に使われていることから見ると、『賦譜』における「新体の賦」、すなわち「新賦」は、実に唐代の律賦を指すことが相応しいであろう。

五 おわりに

以上、三卷本『枕草子』「文は」の章段における「新賦」について考察してきた。従来の研究では、多くの注釈書で「未詳」と書かれた「新賦」は、萩谷朴氏が、『文選』において六朝時代の後の賦であったと指摘されている。しかし、賦に関する変遷の歴史を参考にし、また『文選』の目次を詳しく分析した結果は、文選の中の賦に、「新賦」は見当たらない。

一方、中国の唐代の書物『賦譜』を検証して見た結果は、当時では、賦の文章に関しては、確かに「古賦」と「新賦」があった。また「古賦」と「新賦」の区別する基準は文字数や段数等の規則であり、「新賦」の字数と段数は、「古賦」と異なる。さらに『賦譜』では、「新賦」の用例として、多くの唐代の作者、例えば白樂天、元稹等の賦作を引用されていることから見ると、「新賦」は、実に唐代の律賦を指すと考えられるのである。

では、「新賦」の書き方が、『枕草子』に与えた影響について、本論の第三部第五章「春はあけぼの」の章段考」のところにも論じる。

〔注〕

(1) 北京大学中国文学史教研室選注 『兩漢文学史参考資料』上（中華書局 一九九〇）一一二～一一三頁。

- (2) 鈴木虎雄『賦史大要』()
- (3) 萩谷朴『枕草子解環』四(同朋舎 一九八三)二五〇頁。
- (4) 〔梁〕蕭統編〔唐〕李善注『文選』(上海古籍出版社 一九八六)九頁。
- (5) 前掲(4)の目録に参考した。
- (6) 前掲(3)同、八八頁。
- (7) 川瀬一馬「五島慶太翁の古経執心」『久能寺経と古経楼』(五島美術館 一九九一)九二頁。
- (8) 小西甚一『文鏡秘府論』研究篇 下(講談社 一九五一)一四〇頁。
- (9) 中沢希男「賦譜校箋」『群馬大学教育学部紀要』(人文・社会科学編)第一七卷(一九六七)二一八頁。
- (10) 柏夷『賦譜』略述』『中華文史論叢』第四九輯(上海古籍出版社 一九九二)一四九～一六四頁。
- (11) 張伯偉『全唐五代詩格彙考』(江蘇古籍出版社 二〇〇二)五五四頁。
- (12) 趙俊波『中晚唐賦文体研究』(中国社会科学出版社・華齡出版社 二〇〇六)二四〇頁。
- (13) 田中順子「平安時代における賦の変遷」『和漢比較文学研究の諸問題』(汲古書院 一九八八)三三頁。
- (14) 小西甚一『文鏡秘府論考研究篇』下 (講談社 一九五一)一四六頁。
- (15) 柏夷『賦譜』略述』『中華文史論叢』第四九輯 (上海古籍出版社 一九九二)一五六頁。
- (16) 『賦譜』の本文は、五島美術館蔵原文による写真による。また、以下の文献を参考した。張伯偉『全唐五代詩格彙考』(江蘇古籍出版社 二〇〇二)に拠る。中沢希男「賦譜校箋」『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編(一九六八)、柏夷『賦譜』略述』『中華文史論叢』第四九輯(上海古籍出版社 一九九二)、詹杭倫『賦譜』校注』『唐宋賦学研究』(中国社会科学出版社・華齡出版社 二〇〇四)に参考した。

(17) 前掲 (16) 同。

(18) ここでは、参考のために『賦譜』に引用された唐代の賦作と『全唐文』（中華書局版）にあたる巻数と頁数を合わせて一覧にする。

『賦譜』引例

題目

全唐文巻数・頁数

〔唐〕喬琳	灸輶賦	卷三百五十六	一五九八頁
〔唐〕王太真	朱絲繩賦	卷四百八	一八五二頁
〔唐〕喬潭	群玉山賦	卷四百五十一	二〇四二頁
〔唐〕崔損	霜降賦	卷四百七十六	二一五四頁
同右	五色土賦	同右	二一五三頁
〔唐〕黎逢	人不學不知道賦	卷四百八十二	二一八〇頁
〔唐〕楊宏真	月中桂樹賦	卷七百二十二	三二九四頁
同右	溜穿石賦	同右	同右
〔唐〕裴度	簫韶九成賦	卷五百三十七	二四一六頁
〔唐〕浩虛舟	木雞賦	卷六百二十四	二七八九頁
同右	舒姑泉賦	同右	同右
同右	陶母栽髮賦	同右	二七八八頁
〔唐〕李程	竹箭有筠賦	卷六百三十二	二八二七頁

	〔唐〕席夔	冬日可愛賦	卷六百三十三	二八三一頁
	〔唐〕張仲素	三復白圭賦	卷六百四十四	二八八四頁
	同右	千金市駿骨賦	卷六百四十四	二八八八頁
	〔唐〕元稹	郊天日五色祥雲賦	卷六百四十七	二九〇一頁
	〔唐〕白居易	省試性習相近遠賦	卷六百五十六	二九五七頁
	同右	汎渭賦	同右	
	同右	求元珠賦	同右	二十五八頁
	〔唐〕皇甫湜	鶴処鷄群賦	卷六百八十五	三一〇七頁
	〔唐〕白行簡	望夫化為石賦	卷六百九十二	三一四三頁
	〔唐〕陳仲師	土牛賦	卷七百十六	三二五九頁
	同右	駟不及舌賦	同右	三二六〇頁
	〔唐〕蔣防	螢光照字賦	卷七百十九	三二七五頁
	同右	隙塵賦	同右	三二七六頁
	同右	獸炭賦	同右	同右
	〔唐〕独孤鉉	碎琥珀枕賦	卷七百二十二	三二九一頁
	〔唐〕師貞	秋露如珠賦	卷九百四十六	四三五四頁

第二節 「史記五帝本紀」について

一 問題の所在

もう一度「文は」の章段をとり上げておきたい。

〔三卷本〕文は 文集。文選。新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。

松尾聰・永井和子『枕草子』新編日本古典文学全集 (三三六頁)

〔能因本〕文は 文集。文選

松尾聰・永井和子『枕草子』日本古典文学全集 (三四三頁)

〔前田家本〕書は 文集。文選。論語。史記。ごだい本紀。願文。博士の申文。

田中重太郎『前田家本枕冊子新註』 (四九〇五〇頁)

〔堺本〕文は、文選。文集。論語^おももしろし。

速水博司『堺本 枕草子 評釈』 (三二頁)

本節では、右のゴシック字に示したように、「文は」の章段における「史記五帝本紀」に関する問題を考察する。右の如く、「史記五帝本紀」は、能因本と堺本には見えず、三卷本と前田家本本文にしか見えないものである。ただ、両系統本文の表記は、陽明文庫蔵三卷本第一類写本では、「史記」と「五帝本紀」であるが、前田家本では、「史

記」と「こたい本紀」である。

この「こたい本紀」については、田中重太郎が、「ごだい」は五帝か五代か（『前田家本枕冊子新註』・古典文庫）と疑問視するように、問題は、「史記五帝本紀」は、「史記」と「五帝本紀」か、それとも「史記」と「五代本紀」かということにかかるだろう。「五帝本紀」は、『史記』の第一巻に相当するので、「五代本紀」であつた場合、『史記』の第一巻をいうのではなく、別な書物と考えられる。その場合、「五代本紀」はいかなるものだろうか。一方、「五帝本紀」は『史記』第一巻を指すことで問題なければ、なぜ書名『史記』と第一巻「五帝本紀」を並記するのか。これらのことについて考えてみたい。

二 「こたいほんき」の意味

まず、平仮名で書かれた前田家本文の「こたいほんき」について考察してみたい。つまり、「ごだいほんき」は、書名としての「五代本紀」か、それとも『史記』第一巻「五帝本紀」かという問題である。この点を解明するためには、「五代本紀」と「五帝本紀」の書物の存否を確認しなければならない。

平安時代中期の藤原佐世（八四七～八九七）が編纂した『日本国見在書目録』にも「五代本紀」は記されないが、「第十一部類正史家」中の「千三百七十二巻 如本」で、『史記』に関する記録は次のようにある。（本文は、矢島玄亮『日本国見在書目録——集証と研究——』（汲古書院 一九八四）を参考した。）

史記八十卷

漢中書令司馬遷
宋南中郎外兵參軍裴駰
集解

史記音三卷

梁輜車録事參軍鄭誕生撰

史記音義廿卷

唐太中大夫劉伯莊撰

史記索隱卅卷

唐朝散大夫司馬貞撰

史記新論五卷

強蒙撰

太史公史記問一卷

(八四頁)

右のように、当時の『史記』や『太史公史記』のような書名の採り上げられ方をしてはいても、「ごだい本紀」と「五帝本紀」と記されたことはない。平安末期の藤原通憲(一一〇六―一一五九)の『通憲入道藏書目録』も同様である。

また、「ご」と「五」で始まる「ごだい本紀」、「五代本紀」、「五帝本紀」のような書名は『日本国見在書目録』には見当たらない。さらに中国の正史にも、『五代本紀』や「五帝本紀」のような書名はない。

すなわち、『五代本紀』という書物は存在せず、前田家本本文に見える「こたいほんき」は、三巻本の「五帝本紀」と理解してよいであろう。

しかし、これが「五帝本紀」となると、「五帝本紀」は書名ではなく、百三十巻『史記』中の第一巻の内容であることから書名と第一巻の巻名を併記したことが問題となる。前章に挙げた「文は」の章段にあげられた漢籍には、他に「文集」（『白氏文集』）や「文選」（『文選』）がある。『日本見在書目録』によれば、『白氏文集』は「七十巻」であり、『文選』は三十巻だが、『白氏文集』も『文選』も「第一巻」の内容と書名を併記していない。なぜ清少納言は、『史記』と「五帝本紀」を併記したのだろうか。

三 先行の研究による「史記五帝本紀」の解釈

ここで、「史記五帝本紀」について、先行の研究を確認しておきたい。（なお、ここでは代表的な解説を取りあげておく。）

① 前田家本『前田家本枕冊子新註』（古典文庫）

史記。こたい本紀。

「こたい」は五帝か五代か。三巻本には「五帝」とある。

② 三卷本『枕草子』日本古典文学大系（岩波書店）

史記、五帝本紀。

漢の司馬遷の著した史書。約百三十卷。

史記の五帝紀。前田本「ごだいほんぎ」。

（二四九頁）

③ 三卷本『枕草子』新日本古典文学大系（岩波書店）

史記、五帝本紀。

前漢の司馬遷著の史書。その第一卷。黄帝から堯・舜までの五帝の事蹟を扱った卷。底本「五帝本紀」。表記を改む。

（二四五頁）

④ 三卷本『枕草子』新編日本古典文学全集（小学館）

史記、五帝本紀。

『史記』の第一卷の黄帝から堯・舜までの五帝を記した部分。

（三三六頁）

⑤ 三卷本『枕草子』新潮日本古典文学集成（新潮社）

史記、五帝本紀。

前漢の司馬遷著の一大史書。「五帝本紀」はその第一巻に当たり、皇子生誕に際しての読書の儀にも、紀伝道第一の聖典として読まれることとなっていた。

(一〇六頁)

⑥ 三巻本『枕草子』和泉古典叢書（和泉書院）

史記、五帝本紀。

「五帝本紀」は、史記第一巻に黄帝より帝舜までの、中国の上古の伝説的な帝王の事蹟を叙した部分を特にとり出したもの。この部分は、当時皇子誕生の時、文章博士や明経博士が読書の博士になって、祝意をこめて読むものとしても知られていた（御産部類記）。

(三〇三頁)

ここで注意したいことは、諸注釈における読点「、」と句点「。」の諸注書における使い方である。①と②は、「史記」と「五帝本紀」の間に句点「。」を使い、ようするに、「ごだい本紀」と「五帝本紀」とは、『史記』と分かれ、別な書物と考えていると思われる。しかし、前述のように、「ごだい本紀」と「五帝本紀」というような書物は見当たらない。③④⑤⑥の本文では、「史記」と「五帝本紀」の間には、句点ではなく、読点である。ようするに、「五帝本紀」は、『史記』第一巻の「内容」で、「五帝本紀」は「史記」の冒頭部と考えられよう。

ただし、⑤萩谷朴氏は、また『紫式部日記』に記載される「史記の一巻」を取り上げられ、次のように証左に示された。（筆者が傍線を施した）

『紫式部日記』寛弘五年九月十一日条にも、

文よむ博士、藏人の弁広業、高欄のもとに立ちて、史記の一卷をよむ。弦打廿人、五位十人、六位十人、

ふたなみ

二行にたちわたれり。

とある。⁽³⁾

しかし、「寛弘五年九月十一日」に読まれた書物は、「史記の一卷」でなく、『孝経』であることは、藤原道長（九六六―一〇二七）の『御堂関白記』の記録は残されている。

寛弘五年（一〇〇八）九月

十一日、戊辰、午時平安男子産給、候僧・陰陽師等賜禄、各有差、同時御乳付、切臍緒、造御湯殿具初、酉時右少弁広業読書、**孝経**、朝夕同、従内賜御釵、右近中将頼定、賜禄、依触穢人也、御湯鳴弦五位十人、六位十人、十二日、己巳、御湯殿読書朝致時、明、経 夕挙周、⁽⁴⁾（後略）

右のように、右少弁広業は、朝も夕方も同じく『孝経』を読んだとあり、『紫式部日記』のように「史記の一卷」という記録は見えない。

では、どちらが正しいであろうか。この点について、まず『紫式部日記』の代表的な解釈を取り上げおこう。

『御産部類記』『敦記』△元永二年五月廿九日条▽にも、「相具御注孝経（中略）皇子令浴御湯給。大夫目之。予

進自本列二三尺許摺笏上披文讀之二遍、欲讀今一遍之間、皇子令上給。大夫被目之。予拔笏取副書、過列前退出」とある。これ等によれば、最初の御湯殿に於ては、『孝経』が読まれるのが普通のものであつて、ここへ日記も『孝経』の方がよいかも知れない。(中略)又『栄花』の一本へ富岡本Vに、「広業高欄のもとに立ちてよむ、なりちかへ挙周V(たかちか)の誤は史記の第一の巻をぞ読む」へ上・263-10Vとある由である。これによると、広業は『孝経』、挙周は『史記』をよむことになる。しかし、二人読む例は見えない。やはり式部の誤解か。⁽⁶⁾

最初の御湯殿については、『孝経』が読まれることが普通であり、また二人読む例は見えないことから、やはり『御堂関白記』によつて、広業が読んだものは「孝経」であるという記録が相応しいと考える。そうすると『紫式部日記』の記載には問題があるのではないかと考えられる。

では、『紫式部日記』の記載と『御堂関白記』の違った記録は、どちらに信憑性があるのか。この点に関しては、山中裕氏は、次のように論じられている。

読書 御湯殿の儀で新生児に湯浴みさせている間、新生児が男子の場合は、読書博士が『孝経』『史記』『漢書』などの祝意を含む一節を読み上げる。『御産部類記』四所引不知記では、朝は広業が『御注孝経』を読み、夕べも同じとするが、『御産部類記』四所引不知記『紫式部日記』『栄花物語』では、朝は広業が『史記』の五帝本紀を読み、夕べは致時が『孝経』、挙周が『史記』文帝紀を読んだとする。『御堂関白記』四所引不知記に従うべきであらう。⁽⁶⁾

興味深いことは、『枕草子解環』を出版された二年後、萩谷朴氏は『校注紫式部日記』の中で、やはり紫式部が間違えた、次のように記している。

夜さりの御湯殿とても、さまばかりしきりてまゐる。儀式おなじ。御書の博士ばかりやかはりけむ。伊勢守致時の博士とか。例の孝経なるべし。又、挙周は、史記文帝の巻をぞよむなりし。七日の程、かはるがはる。

○史記文帝の巻——第五夜の夕時に挙周が『漢書』文帝紀を読んだことを誤り伝えている。読書博士名と漢籍の書目は紫式部に伝聞の誤りが多い。読書博士名と漢籍の書目は紫式部に伝聞の誤りが多い。⁽⁷⁾

以上、いくつかの考察から見ると、従来の諸注では、皇子の御誕生の時、「五帝本紀」が唯一読まれた書物ではなく、ほかの漢籍、例えば『孝経』、『漢書』なども読まれるのである。

このように従来の諸注のように、皇子の御生誕に読まれた漢籍という理由で、清少納言が「史記」と「五帝本紀」を併記したのでは不十分であろう。すなわち「史記」と「五帝本紀」を併記したことは、他にも理由があるはずと考える。

四 「史記五帝本紀」に関する古記録

では、いったい清少納言が「史記五帝本紀」を並べて書いた理由は何であろう。引き続き、「史記五帝本紀」に関して古記録を考察する。

いったい、古来日本で、『史記』における「五帝本紀」はどのように表記されているのか。まず、「六国史」を検討してみたい。『六国史』では、『史記』に関する表現は、次のように見られる。

一『続日本紀』卷卅神護景雲三年（七六九）十月甲辰十 甲辰。（中略）
未有三史正本。涉獵之人。其道不廣。伏乞。列代諸史。各給一本。傳習管内。以興學業。詔賜**史記**。漢書。後漢書。三國志。晉書各一部。

二『日本後紀』卷十一逸文（『類聚国史』）延暦二十二年（八〇三）十一月戊寅朔
老人星見。臣等勤案元命苞曰。老人星者、瑞星也。見則治平主寿。**史記**曰。漢武帝、德辛巳朔旦冬至。

三『三代実録』卷二七貞観十七年（八七五）四月廿八日庚辰 庚辰廿八日。
是日。帝始讀**史記**。參議從三位行左衛門督兼近江權守大江朝臣音人侍讀。

四『続日本紀』卷二大宝二年（七〇二）正月癸未十五
癸未。宴群臣於西閣。奏**五帝**太平樂。極歡而罷。賜物有差。

五『文徳実録』卷六斉衡元年（八五四）十一月辛亥卅
欲使曠代禎符及萬邦以共慶。隨時德政逐**五帝**而齊衡。

「一は、三史の一つとしての『史記』に関する記録、二は、『史記』の内容を引用、三は、清和天皇の『史記』を読む記載である。四は、音楽に関連の記事、五は五帝の道徳に関する引用である。

次に、平安時代の漢詩文における『史記』に関する表現は幾つか確認することができる。ただし、ほとんど書名『史記』として使われている。例えば、『凌雲集』では、播磨守である賀陽朝臣は、「**史記**竟宴賦」があり、『文華秀麗集』に収録された嵯峨天皇の「**史記**講竟」であり、また菅原道真（八四五～九〇三）も、貞観六年（八六四）八月十五日の竟宴に関する詩作にも、「司馬遷之修**史記**」と記され、島田忠臣（八二八～八九二）の『田氏家集』に「**史記**竟宴詠史」の詩作も見える。大江匡衡（九五二～一〇一二）は、「述懷」のテーマで、古風な趣で「古調」の詩としての「一百韻」を詠まれている。『江吏部集』『人倫部』に収録された「**搜史記**滯義」の詩句がある。次に、藤原実資（九五七～一〇四六）『小右記』、藤原道長（九六六～一〇二七）『御堂関白記』における『史記』の記録を見てみよう。

『小右記』では、

① 長元二年（一〇二九）七月十六日、

上陵有忌諱、亦非成文、**史記**云、壞山襄陵者、止上陵、可書例紙之由仰之返給、⁽⁸⁾

② 長元四年（一〇三二）七月二五日、

藏人右少弁經長傳綸旨、實關白消息、舉周奉授文選、**史記**已了、可加一級、⁽⁹⁾

とあるように、①②には、『史記』と記している。「五帝本紀」は見えないが、『御堂関白記』では、「史記五帝本紀」が見える。

たとえば、寛弘六年（一〇〇九）十一月二五日から十二月二日までの一週間に、次のようにある。

廿五日、〔前略〕辰三刻、男皇子降誕〔中略〕読書右少弁広業朝臣、御注孝経天子章、〔中略〕夕御湯同朝臣、読書大博士惟宗為忠、礼記文王世子篇、

廿六日、丁丑、水除、御湯如昨日、読書東宮学菅原宣義、後漢書章帝紀、夕広業、**史記五帝本紀**篇、

廿七日、戊寅、土満、読書、朝為忠、尚書堯典篇、夕宣義、漢書文帝紀、

廿八日、己卯、土平、読書、朝広業、後漢書明帝紀、夕為忠、毛詩大明詩、

廿九日、庚辰、金定、〔雨下〕読書宣義、漢書昭帝紀、夕広業、千字文推位讓国篇、

一日、辛巳、金執、読書宣義、漢書成帝紀、夕為忠、論語大伯篇、

二日、癸未、木危、〔雨下〕読書広業、**史記五帝本紀**帝堯篇、夕為忠、左伝莊公卅一年伝、〔後略〕¹⁰

これは、一条天皇の第三皇子（朱雀天皇）御生誕後の一週間の読書の記録である。十一月二十五日から翌月の二日まで、一週間で、以下のような十種類の漢籍が読まれたとある。

1 『孝経』 孝経天子章

- 2 『礼記』 礼記文王世子篇
- 3 『後漢書』 後漢書明帝紀
- 4 『史記』 ①史記五帝本紀篇 ②史記五帝本紀帝堯篇
- 5 『尚書』 尚書堯典篇
- 6 『漢書』 漢書文帝紀
- 7 『毛詩』 毛詩大明詩
- 8 『千字文』 千字文推位讓国篇
- 9 『論語』 論語大伯篇
- 10 『左伝』 左伝莊公卅一年伝

例えば、十一月二六日には、「史記五帝本紀篇」が読まれ、十二月二日は「史記五帝本紀篇」の最後の「帝堯篇」を読んでいる。これは具体的に読んだ内容の記録である。

このように、平安時代では、『史記』の冒頭部「五帝本紀」は、重視されよく読まれたと考えられる。平安以後も、『史記』『五帝本紀』が読まれ、その内容を引用した文献が残されている。例えば、『和漢朗詠集私注』における『史記』の「五帝本紀」の援用について、相田満氏は次のように述べている。

通例、「詩」の淵源については、『古今和歌集』真名序への影響が指摘されることで著名な『詩経』（毛詩）大序の、詩は志の之く所なり。心に在れば心と為り、言を發すれば詩となる。（詩者。志之所_レ之也。在_レ心為_レ志

発言為詩。）

は引かれるものだが、朗詠私注の世界では、その説は採られず、『史記』五帝本紀からの表現が援用している。

（唐家は）詩を以て、彼の志を言ふ（以詩言^ヲ彼^ノ志^ヲ。）

とある句は、同じ私注の春興「歌酒家家处处」の注にも引かれており、

史記曰詩言志歌詠言^{（永）}。

と、本来は、「歌」と対する表現であつたことがわかる^{（一）}。

右のように、朗詠集の古注の世界では、「五帝本紀」ではなく、「史記」と言われている。つまり「五帝本紀」は「史記」表されていたと考える。この点については、中国では紛失した『群書治書』第十一卷「史記上」の冒頭に載った「五帝本紀」からも考えられる。宇多天皇が醍醐天皇のために記した『寛平御遺戒』には、『群書治要』における典籍が教示されている。一条天皇時代にも、『史記』「五帝本紀」は重要な位置付けだったのである。また後に詳しく述べたいのは、『枕草子』跋文の、一条天皇が『史記』を書写した記録についてのである。

一方、室町期になっても、「史記五帝本紀」が重視されている。例えば『実隆公記』（一四七四〜一五三六）の、永正七年（一五一〇）十月に、次のような記事がある。

永正七年十月一日 二日

二日、乙酉、三條西實隆、史記ヲ書写ス、

〔実隆公記〕四十三 九月廿二日、乙亥、天晴、風吹、

史記十二本紀大有和尚被借送之、

十月二日、乙酉、晴、入夜雨、

史記五帝本紀今日立筆、

十七日、庚子、陰、雨濺、

眞光（尊海）院僧正来談、遊仙窟本被持来、**五帝本紀終書功**、^{（一〇）}

三条西実隆（一四五五―一五三七）は、二日に「史記五帝本紀」の書写を始め、十七日に終った。およそ半月で、「史記五帝本紀」を書写したという計算になる。

以上、書名『史記』と『史記』第一巻「五帝本紀」を通時的に扱うことは、三つの理由を考えられる。一つは、『史記』の第一巻「五帝本紀」を読んだということを明記すること。もう一つは、『史記』の第一巻「五帝本紀」は『史記』を指す可能性があること、三つ目は、「史記五帝本紀」を書写したということである。

五 おわりに

以上、「文は」の章段における「史記五帝本紀」に関する表現を考察してきた。まず前田家本における「こたいほんき」の表現を考察した。その結果、「五帝本紀」と同じと理解される。いわゆる『史記』の第一巻による「五帝本紀」である。しかし、なぜ書名である『史記』と第一巻「五帝本紀」を並列して、「史記五帝本紀」のように記したのかという問題に関して考察した結果は、幾つかの可能性がある。一つは、『史記』の中のその部分だけを読んだ可

能性、もう一つは、「史記五帝本紀」は、「史記」を指す可能性、また「史記五帝本紀」の内容を書写した可能性である。

いずれしにせよ、「五帝本紀」は、昔の古代の皇帝の道徳を称賛した主な内容で、清少納言が、当代の天皇の一条の美徳を称賛するために、特に重視したと考えることが、相応しいであろう。

〔注〕

(1) 大庭脩・王勇『日中文化交流史叢書 典籍』第九卷(大修館書店 一九九六) 五八頁。

(2) 『五代史記』に関わり南宋の補刻については、尾崎康氏の『正史宋元版の研究』(汲古書院 一九八九)がある。日本とも、次のような興味深い帝王の物語が見える。「群書類従卷第三十七、帝王部九、五代帝王物語記者未考」(『群書類従』・第三輯・帝王部・続群書類従完成会 一九六六) 四二五頁。「一冊。歴史物語。著者未詳。別称「五代帝王記」「五代王記」「五代記」。本文中に「徳大寺大相国公孝公」とあり、公孝任太政大臣の乾元元年(一三〇二)十一月以降、写本本奥書に「近頃流布」という嘉暦二年(一三二七)八月以前の、後二条・花園・後醍醐の三代二十五年間に成立。著者は鎌倉末期宫廷公家の一人か。【内容】承久三年(一二二一)七月の後堀河天皇践祚から、四条・後嵯峨・後深草の三帝を経て龜山帝時代の文永九年(一二七二)五月後嵯峨法皇百日忌まで、五代五十二年間の宫廷史ならびに幕府方の大事件を、不完全な編年体で平易な和文を用いて綴る物語風史書。『日本古典文学大辞典』第二卷(岩波書店 一九八四) 六二六頁。

(3) 萩谷朴『枕草子解環』四(同朋舎 一九八三) 二五一頁。

- (4) 山中裕『御堂関白記全注釈』（思文閣出版 二〇〇七）一二一頁。
- (5) 前田惟義『紫式部日記古注集成』（桜楓社 一九九一）二〇八頁。
- (6) 山中裕『御堂関白記全注釈』（思文閣出版 二〇〇七）一二五頁。
- (7) 萩谷朴『校注紫式部日記』（新典社 一九九九）三三頁。
- (8) 『大日本古記録 小右記』八（岩波書店 一九七六）一四三頁。
- (9) 『大日本古記録 小右記』九（岩波書店 一九七九）一一頁。
- (10) 『大日本古記録 御堂関白記』中（岩波書店 一九七七）三〇～三一頁。
- (11) 相田満『和漢古典学のオントロジ』（勉誠出版 二〇〇七）二二四～二二五頁。
- (12) 『大日本史料』第九編之二（東京大学出版会 一九三一）八九四頁。

第三部

表現の基層

第一章 『枕草子』 「青ざし」、「ませごし」、「花や蝶や」の表現考

——「三条の宮におはしますころ」の章段を中心に——

一 はじめに

まず、論述の便宜上、該当する三卷本と能因本の本文を掲げ、両系統本文の相違点を次のように示す。「()」の中の部分は能因本、「〔 〕」の中の部分は能因本にない箇所とする。引用は、『新編日本古典文学全集』（三卷本）と『日本古典文学全集』（能因本）に拠り、傍線と括弧は筆者が施した。^①

三（四）条の（ノ）宮におはしますころ、五日の菖蒲の輿^{さうぶ}など持^も（ち）てまゐり、薬玉^{くすたま}まゐらせなど「す」。若き人々、御匣^{みくしげどの}殿など薬玉して、姫宮、若宮につけ（させ）たてまつ（り）「らせたまふ」。いとをかしき薬玉「ども」、ほかよりまゐらせたるに、青ざしといふ物を、（人の）持て来たる「を」（と）、青き薄^{うすやう}様を、艶^{えん}なる硯^{すずり}の蓋^{ふた}に敷きて、「これ籬^{ませ}越^こしに候^{まひ}（へば）「ふ」とてまゐらせたれば、

定子

みな人の花や蝶^{てふ}やといそぐ日もわが心（こころ）をば君ぞ知りける

（と）「この」紙の端^{はし}を「引き」破^や（り）「らせたまひ」て書かせたまへるも、いとめでたし。

両者間に、若干違う表記が見えるが、一条天皇と中宮定子の皇女「姫宮」(脩子内親王)と皇子「若宮」(敦康親王)のために、菖蒲、薬玉などが贈られた場面の内容は一致している。

三卷本の勘物⁽²⁾「長保元年八月九日自式御曹司移生昌三条宅、二年五月」によると、本段冒頭の「五日」は、長保二年(一〇〇〇)五月であった。また脩子内親王が長徳二年(九九六)十二月十六日に誕生したこと(『日本紀略』、敦康親王が、長保元年(九九九)十一月六日に誕生したこと(『日本紀略』)を照らし合わせると、本段の年次は勘物の記載通り、長保二年(一〇〇〇)五月五日のことであることは間違いないだろう。

この年、二月二十五日、藤原彰子は新中宮となり、元中宮の定子は皇后に代わった。⁽³⁾本段に関する歴史的背景は、当時の皇后定子の心情および『枕草子』を理解するために、重要な章段と認識されており、これまでも色々な視点から論じられてきた。⁽⁴⁾

しかし、それでも未解決の問題が、残されているといえよう。たとえば①「青ざし」は具体的にどのような物か。②皇后定子の和歌の下句「わが心をば君ぞ知りける」は、自分の心情を理解してくれる天皇に対して、感謝の気持ちを表していることは分かるが、上句「みな人の花や蝶⁽⁵⁾やといそぐ日も」にある「花や蝶や」については、皇后定子は何を念頭に置いたものか、等である。

この二点については、先行研究の解釈でも揺れているようで、いまだ定説をみていない。そこで、本稿では、まず「菖蒲」、「薬玉」、「興」、「艶」、「硯」、「蓋」、「蝶」などの、中国渡来の五月五日

の端午節の風物に関わる漢語から連想される事項を、改めて考え、とりわけ「青ざし」、「花や蝶や」の表現を分析することを通じて、清少納言と中宮定子との応答の意味を考察したい。

二「青ざし」について

〈1〉問題の所在

「青ざし」は、平安時代では、『枕草子』にしか見えず、三卷本写本には（陽明文庫本）「あをさし」と表記されるが、歴代の翻刻を纏めてみると次のようになる。

- ① 「あをざし」 加藤盤斎『清少納言枕双紙抄』（延宝二年〈一六七四〉五月）
- ② 「青刺」 北村季吟『春曙抄』（延宝二年〈一六七四〉七月）
- ③ 「あをさし」 武藤元信『枕草紙通釈』（有朋堂書店、一九一一）
- ④ 「あをざし」 金子元臣『枕草子評釈』（明治書院、一九二一〜一九二四）
- ⑤ 「青ざし」 池田亀鑑『全講枕草子』（至文堂、一九五六〜一九五七）
- ⑥ 「青刺」 岸上慎二『校訂三卷本枕草子』（武蔵野書院、一九六一）
- ⑦ 「青ざし」 松尾聰・永井和子『枕草子』（小学館、一九七四）
- ⑧ 「青稜子」 萩谷朴『枕草子』（新潮社、一九七七）

- ⑨ 「青ざし」 石田穰二『新版枕草子』（角川書店、一九八〇）
- ⑩ 「青刺」 田中重太郎『枕冊子全注釈』（角川書店、一九八三）
- ⑪ 「あをざし」 萩谷朴『枕草子解環』（同朋舎、一九八一～一九八三）
- ⑫ 「初熟麦」 増田繁夫『枕草子』（和泉書院、一九八七）
- ⑬ 「青ざし」 渡辺実『枕草子』（岩波書店、一九九一）
- ⑭ 「青ざし」 中島知明・中島和歌子『新編枕草子』（あうふう、二〇一〇）

これらを大別すると、「あをざし」（①③④⑪）、「青刺」（②⑥⑩）、「青ざし」（⑤⑦⑨⑬⑭）が最も多く、他に「青稜子」（⑧）と「初熟麦」（⑫）の五種にまとめられよう。そのうち、「青刺」については後述するが、これは漢語である可能性が高い。そして最も多い表記は、「青ざし」である。

では、この「青ざし」は、どのような物であろうか。前述の諸本から代表的な解釈を取り上げてみよう。

1 『枕草子』「新日本古典文学大系」（前掲⑬番）

青麦をついて作った菓子

（二六三頁）

2 『枕草子』「日本古典文学全集」（前掲⑦番）

青麦の粉で作った菓子、という。

（三五八頁）

3 『枕草子』「新潮日本古典集成」（前掲⑧番）

『食物知新』に「初熟^ノ麦（和制）^{ツテ} 积名青稜子（和名アヲザシ）^{取ニ} 初熟麦青者^ノ」^{ツイテ} 春食。故名。氣味^ニ 鹹^{カラク} 温^{ニシテ} 無^シ 毒。平^{タビラカニシ} 胃益^ヲ 氣^ヲとある。当時皇后は妊娠三カ月、惡阻^{ツワリ}の劇しい時期で、このような目先の変った、胃に受け

つけやすい食物を献じた人がいたものか。」

（一三五頁）

4 『枕草子』（前掲⑫番）

青麦の粉製の細長い形の菓子。「初熟麦（ザシ）」（書言字考節用、服食）。

（一八三頁）

5 『枕草子』（前掲⑭番）

青麦粉製の唐菓子。^{アラザシ}「初熟麦」（書言字考節用集）、「胃を平かにし氣を益す」（食物知新）。

（二三五頁）

1と2は、いずれも「青麦」で作った「菓子」と解釈し、3には、「菓子」と明記はされないが、『食物知新』から、「初熟麦」による「青麦」と同種と考える。また4は、3と同じ「初熟麦」と記し、ただ『食物知新』ではなく、『書言字考節用』を引く。5も、3、4と同じように、『書言字考節用集』や『食物知新』を援用したものである。しかし、3、4、5に指摘された『書言字考節用集』と『食物知新』という辞書の書物は、いずれも江戸の出版物で、前者の成立は、元禄十一年（一六九八）、後者は、享保一一（一七二六）であったように、平安時代のものを

考える際に、同列として扱えないだろう。

また、1～5までの「青麦」、「初熟麦」を採る説は、次に示す通り、江戸時代の注釈に見える。

6 『清少納言枕双紙抄』（前掲①番）

【あをざし】とは、今の世も、青麦の芽にてする也。今日の御祝儀の薬玉などに取そえ、姫宮若宮を祝ひ奉りて、捧る成べし。⁽⁶⁾

7 北村季吟『枕草子春曙抄』（前掲②番）

青麦にて調子たる菓子なり。⁽⁷⁾

6 盤斎は「青麦の芽」、7 季吟は、「青麦の菓子」とする。6、7は、いずれも「青麦」を材料としており、現在の諸注に引き継がれる。

近年は、「青ざし」が、「青麦で作った菓子」と断定された観もあるが、過去に疑問も出されていた。例えば、田中千恵子氏は、「その詳細はわかっていない」⁽⁹⁾と疑義を呈し、藤本宗利氏⁽¹⁰⁾や山田利博氏も、実体が必ずしも明らかでないことを問題としているのである。⁽¹¹⁾

では、「青ざし」をどのように考えるべきであろうか。これを解決するために、本章段における五月五日の端午節に関する風物に注目したい。

〈2〉「青ざし」の実態

まず、従来の説にあるように、「青麦」で作った「菓子」は、五月五日にあるものなのかを確認しておく。たとえば、『角川古語大辞典』では、

あをむぎ【青麦】

名 まだ熟していないで色の青い麦(むぎ)。『毛吹・二』には「四月…青麦」とあり、季語、夏。『年浪草』には「今式に曰、青麦は三月なり」とあり、春の季語となる。「なは手を下りて青麦の出来(Ⅱ季語、春)」「炭俵・上」

と、「青麦」を「三月」と「四月」の物とする。当時の暦の宣明暦に従えば、長保二年五月五日(辛巳)は、ユリウス暦一〇〇〇年六月九日にあたり、また『大日本百科事典』には、「青麦 あおむぎ 麦青むともいう。寒いうちに芽を出した麦は、春暖の訪れに力強く生長する。」(小学館 一九六七・七二頁)と記されている。このことから、六月に「青麦」があるとは考えにくいであろう。

では、本章段の五月五日には、青麦以外に、何があるのだろうか。確認のため、『枕草子』における数箇所の「五月」に関する描写を示してみると、次のような描写がある。(本文は『新編日本古典文学全集』による)

① 第三七段「節は」(八八頁)

節は、五月にしく月はなし。菖蒲、蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。

② 第二〇七段 「五月ばかりなどに山里にありく」(三四六頁)

五月ばかりなどに山里にありく、いとをかし。草葉も水もいと青く見えわたるに、上はつれなくて、草生ひしげりたるを、ながながと、たたざまにいけば、下はえならざりける水の、深くはあらねど、人などの歩むに、走りあがりたる、いとをかし。

③ 第二〇九段 「五月四日の夕つ方」(三四八頁)

五月四日の夕つ方、青き草おほく、いとうるはしく切りて、左右になひて、赤衣着たる男の行くこそ、をかしけれ。

①は、五月の節会を最上とし、菖蒲、蓬などの香に深い興味を感じと言い、②は、五月頃、山里歩きの興を述べ、山の上方と下方の盛んに生える方のコントラストや、水辺の風情をたたえ、③は、端午節の前日の「五月四日」の夕方に、赤い衣を着た五位の官人達は、青き草を束ねて担いで行く宮廷の情景に興を感じている。

留意したいのは、「青き草」を諸注は「菖蒲」と解釈するが、蓬や別の青い草も「おほく」あったと考えられることである。

例えば、平安中期に惟宗公方が編纂した『本朝月令』五月五日に関する記事には、

と、菖蒲、蓬が大量に盛られることが述べられ、また、『小右記』「治安三年」（一〇二三）五月四日の条では、

東宮庁進菖蒲蓬等⁽¹⁴⁾

と、菖蒲、蓬等と他にも進上されるものがあつたことが記されている。

また、本章段でも、「五日の菖蒲の興^{さうぶ}など持^{こし}（ち）てまゐり」と、「など」が記されていることや、異本表記ではあるが、「薬玉〔ども〕と一緒に進上されたことも考え合せると、「青ざし」の正体を考えるヒントとして、五月五日の菖蒲のような雑給料として、ほかの青い草のようなものもあつたと考えられる。

また、なぜ清少納言が「菖蒲」や「蓬」のような青い草の「青ざし」を取って皇后定子に献上するのか、その目的を考えた結果、「青ざし」は、「薬草」ではないかと考えられる。そしてこの「薬草」は、一条天皇から送られてきたものとする。なぜなら、五月五日までに、天皇の身边では薬草を採る風習があるからである。

薬獵の歴史では、『日本書紀』「推古天皇十九年五月」の記事には、次のようにある。

夏五月五日、薬獵之、集^ニ于羽田^一、以相連参^ニ趣於朝^一。

（夏五月^{なつさつき}の五日^{いつかのひ}に、薬獵^{くすりがり}して、羽田^{はた}に集^{つど}ひて、相連^{あひつづ}きて朝^{あした}に参趣^{まうおもむ}く⁽¹⁵⁾）

この風習は、古代中国の端午節の風習の影響であつた。「夏小正、此月蓄薬、蠲除毒氣」〔『初學記』卷四、天部「五

月五日」とあるように、五月は不吉な月なので、薬草を置いて、邪気を払うという風習が採り入れられたものであった。このような風習と考え合わせてみると、本章段の五月五日に、清少納言が奉った「青ざし」は、一条天皇から用意された薬草と考えるのが自然であろう。

〈3〉「青ざし」と「青刺」

しかし、「青ざし」が、「薬草」ならば、具体的にどのようなものであろうか。この点を、本草の面から考えてみたい。

中国の本草書において、最も古い『神農本草経』（一世紀頃）に基づいて、陶弘景（四五六～五三六）が、『神農本草経集注』（五世紀末）が編纂され、唐の蘇敬（五九九～六七四）がそれを増補して勅撰の『新修本草』（六五九）を完成させている。同書はその後、『開宝本草』（九七三）、『嘉祐本草』（一〇六一）、『大観本草』（一一〇八）、『政和本草』（一一一六）、『紹興本草』（一一五九）などに受けつかれ、宋代以後も増補、加注が重ねられていった。しかし、完本で現在に伝えられるのは、『証類本草』のみである。この点を、真柳誠氏は、次のように述べている。

宋代になると印刷技術の普及もあり、政府が続々と医薬書を校訂・刊行した。その口火を切ったのは『新修本草』に増補・加注した九七三年刊の『開宝本草』で、翌年には『神農本草経』の文を白字で、その他は黒字にするなどの改訂が行われ、再度刊行されている。以来この書式が踏襲され、一〇六一年の『嘉祐本草』、一一〇八年の『大観本草』（図二）、一一一六年の『政和本草』、一一五九年の『紹興本草』のように、歴代宋政府の命

で増補・加注が重ねられていった。これらのうち、完全な形で現在に伝えられているのは、『証類本草』と統称される『大観本草』『政和本草』の二系統で、各々は影印本として現在も復刻されている。⁽¹⁶⁾

この『証類本草』第九卷、「大小薊根」に、「青刺」の記述が見える。

図経…小薊根、本経不著所出州土、今处处有之、俗名青刺薊、苗高尺餘、葉多刺、心中出花、頭如紅藍花而青紫色、北人呼為

千鍼草。⁽¹⁷⁾

(図経にいう、小薊の根、『本経』『神農本草経』では所出の州土が記されないが、今も多くの所で見られる。俗に青刺の薊と

いい、苗の高さは一尺余り、葉は多くの刺(とげ)があり、真中から花を出し、頭は紅藍の花の如く、青紫色であり、北方の

人は千鍼草と呼んでいる。)

「俗名青刺薊」の記述は、「図経」を引いて記されたものである。「図経」は、『舊唐書』「志第二六卷経籍上」に、「本草圖経七卷蘇敬撰」⁽¹⁸⁾と『新唐書』「志第四九卷芸文」に「本草圖経七卷(蘇敬)」⁽¹⁹⁾とある、唐の蘇敬(五九九〜六七四)「本草図経七卷」書名から推して、本草についての文字の説明に図絵が加わったものだろう(薬図)。図絵の説明文(図経)により構成される書であったのだろう。

その後、『新唐書』では、次のように記載している。⁽²⁰⁾

本草二十卷

藥圖二十卷

圖經七卷

顯慶四年、英國公李勣、太尉長孫无忌、兼侍中辛茂將、太子賓客弘文館學士許敬宗、禮部郎中兼太子洗馬弘文館大學士孔志約、尚藥奉御許孝崇胡子彖蔣季璋、尚藥局直長蘭復珪許弘直、侍御醫巢孝儉、太子藥藏監蔣季瑜吳嗣宗、丞蔣義方、太醫令蔣季琬許弘、丞蔣茂昌、太常丞呂才賈文通、太史令李淳風、潞王府參軍吳師哲、禮部主事顏仁楚、右監門府長史蘇敬等撰。⁽²¹⁾

また、藤原佐世（八四七～八九七）編『日本国見在書目録』には、『新修本草廿卷』、『本草圖廿七「卷」』が見え、⁽²²⁾後者は合計の巻数から「藥圖二十卷」と「圖經七卷」を含むものではないかと考えられる。

いずれにせよ、「俗名青刺薊」と記されることと、「図經」の作者である蘇敬の『新修本草』が日本に渡来しており、蘇敬『図經』を含むと思しき「本草図廿七卷」も日本に伝わったと考えられること等から、「俗名青刺薊」との言が伝えられた可能性は高い。ただし、唐宋代の技術で、しかも伝写を重ねた上での図がどこまで正確な情報を伝えていたかは疑問だ。例えば、『延喜式』巻一八式部上に、

凡^ハ医生。皆^ニ讀^ニ蘇敬新修本草⁽²³⁾一

とあるように、『新修本草』は医学生の必修書でもあったのである。また同卷三七典藥式には、

凡^レ讀^ニ医經^一者。大素經限^ニ四百六十日。新修本草^ハ三百十日⁽²⁴⁾。

とあり、『新修本草』を一年以内に修得することが義務付けられてもいたのであった。「青刺薊」という表現は、今のところ、「図經」に引く俗名にしか見えない。しかし、鄭樵（一一〇四―一一六三）『通志』第七五卷昆虫草木記略第一にも「有一種小薊曰猫薊曰青刺薊」が見える。こうした本草書の伝流を考えると、「青刺薊」の説が日本に伝わっていた可能性は高いのである。

〈4〉藥草としての青刺の薊

「薊」は、『新修本草』では、

大小薊根 葉同 味甘温 主養精 保血〔中略〕安胎〔中略〕令人肥健 五月采⁽²⁵⁾

（大小薊根は、葉も同じ、味が甘く温にして、主に精を養ひ、血を保つ〔中略〕胎を安じ〔中略〕人体を肥健ならしめる。五月に採る。）

とあり、妊婦や産後の女性の血行改善に有効な薬草だったようである。

「青刺」が「薊」とするならば、それこそが清少納言が、皇后定子に差し上げた理由であつたろう。
鄭樵『通志』に、

青刺薊北方曰千針草以其莖葉多刺故也⁽²⁶⁾（青刺の薊、北の方は千針草というは、その茎と葉にとげ刺多き故を以てなり。）

とあるように、「薊」は、茎、葉に刺の多いことから呼ばれた植物であるが、日本でも、食用と認識されていたことは、源順（九一一〜九八三）の『倭名類聚抄』が菜蔬部園菜に分類していることからわかる。その記述は、

薊 本草云薊 阿佐美^{音計和名} 味甘温 令人肥健 陶隱居曰 大小薊 葉並多刺⁽²⁷⁾

とあるが、掲出字「薊」は、「薊」の俗字である⁽²⁸⁾。

薊が平安代の宮廷で食用に供されたことは、例えば、『延喜式』卷三三大膳式下仁王経斎会供養料に、

薊四葉好物料⁽³⁰⁾（卷33大膳式下仁王経斎会供養料）

あるいは、

薺^{アサミ}六把⁽³¹⁾ (卷39内膳式供奉雑菜)

とあり、一日六把(束)が供されたとある。

さらに、『延喜式』三九内膳式の五月五日漬年料雑菜に、

薺二石四斗。升^料二合^{塩七} 芹十石⁽³²⁾。

と五月五日に、年間の料として、二石四斗(60キロ)供された。薺を塩漬にしたらしい。

また、『倭名類聚抄』園菜で扱われたように、薺が栽培されたことは、『延喜式』卷三九内膳式にも見え、

宮薺^{アサミ}一段。種子三石五斗。総単功卅四人。耕地二遍。把犁一人。馭牛一人。牛一頭。料理平和二人。糞百廿擔。運功廿人。殖功二人。芸二遍。第一遍三人。月^二七第二遍三人。月^七刈功四人。擇功八人。三年^二一度遷殖⁽³³⁾。

と、一段の畑で栽培が営まれていた。



前掲の「図経」の引用によると、青刺の薊は、小薊であつた（右図³⁴）。また「本草」文にある通り、大、小薊は、いずれも婦人の胎児を安じた点から考えて、清少納言がわざわざ青刺の薊を、皇后定子に献上した理由は、五月五日当時の皇后定子は懐妊三カ月であつたからと推測できる。

しかし、中宮定子は、長保二年十二月十六日に、三番目の皇女の媛子の出産時の異常により、媛子誕生後まもなく崩御された（『権記』、『日本紀略』、『扶桑紀略』）。

平安時代の医学博士丹波康頼（九一二〜九九五）の『医心方』（九八四）には、妊娠三カ月の婦人の胎児の形成が次のように記されている。

懐身三月名曰「始胎」。当「此之時」未有定義。見_レ物而化。是故応_レ見〔中略〕倂者侏儒醜惡。（懐身三月、名ヅケテ始胎と曰フ、此時ニ当リテ、未ダ定義アラズ、物ヲ見テ化ス、故〔中略〕ニ倂者、侏儒、醜惡ノモノヲ見ルベシ。）⁽⁹³⁾

懐妊三カ月目は、「胎児」を始めてなす「始胎」にあたる。

くり返しになるが、皇后定子の懷妊された身体の状況を、清少納言は察しているはずで、それ故に清少納言は、皇后定子に「青ざし」、すなわち漢語世界で俗名「青刺」と呼ばれた「薊」を献上したのであろう。

三「ませごし」について

〈1〉問題の所在

清少納言は「青刺」、つまり青刺の薊を取って、艶なる硯の蓋に盛って、「これ籬越しませごしに候まちふ」と申し上げて、皇后定子に献上した。清少納言は「青刺」を言わず、「ませごし」に変わったのである。では、「ませごし」は、どういう意味なのかについて考えたい。

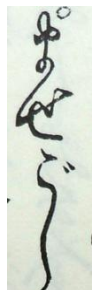
まず江戸から現代までの代表的な表記は次の通り。

- ① 「ませごし」 加藤盤斎『清少納言枕双紙抄』（一六七四）
- ② 「ませごし」 北村季吟『春曙抄』（一六七四）
- ③ 「ませごし」 武藤元信『枕草紙通釈』（有朋堂書店、一九一一）
- ④ 「ませごし」 金子元臣『枕草子評釈』（明治書院、一九二一～一九二四）
- ⑤ 「ませ越しませごし」 池田亀鑑『全講枕草子』（至文堂、一九五六～一九五七）
- ⑥ 「芭越しませごし」 岸上慎二『校訂三卷本枕草子』（一九六一）

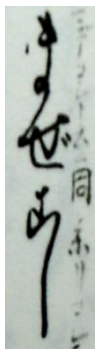
- ⑦ 「籬越し」^(まぜこし) 松尾聰・永井和子『枕草子』（小学館、一九七四）
- ⑧ 「芭越し」^(まぜ) 萩谷朴『枕草子』（新潮社、一九七七）
- ⑨ 「籬越し」^(まぜ) 石田穰二『新版枕草子』（角川書店、一九八〇）
- ⑩ 「芭越し」^(まぜ) 田中重太郎『枕草子全注釈』（角川書店、一九八三）
- ⑪ 「ませこし」 萩谷朴『枕草子解環』（同朋舎、一九八一～一九八三）
- ⑫ 「籬越し」^(まぜ) 増田繁夫『枕草子』（和泉書院、一九八七）
- ⑬ 「籬越し」^(まぜ) 渡辺実『枕草子』（岩波書店、一九九一）
- ⑭ 「籬越し」^(まぜ) 上坂信男・神作光一『枕草子』（講談社、二〇〇三）
- ⑮ 「ませ越し」^(まぜ) 中島知明・中島和歌子『新編枕草子』（あうふう、二〇一〇）

右の如く、盤斎は「ませこし」であり、季吟は「ませこし」と表記しているが、

「ませこし」^(まぜ)（盤斎）



「ませこし」^(まぜ)（季吟）



後世、季吟の「ませごし」を踏襲したものは、一つも見えない。⁽³⁸⁾ このことについて、かつて田中重太郎氏は、次のように述べている。

『春曙抄』は、「これませごしにさふらへば」の本文を「ませごし……」と読み、「までごしといふに同。まいりこし物なれはと也」と注しているが、これは誤りである。⁽³⁹⁾

筆者にも、加藤盤斎の表記に従って、すなわち「ませごし」を前提に論じる。

〈2〉「ませごし」と先行の解釈

「ませごし」について、古い解釈である江戸時代の盤斎と季吟の説を確認してみよう。

加藤盤斎（一六二一～一六七四）『清少納言枕双紙抄』

【ませごし】とは、築越^{マセコシ}なり。あをざしは野底^{ヤテイ}なるものなれば、ただませごしに、御覧^{ミミ}ずる迄にささげ奉ると也。今の世も貴人に物奉るは、御目にかくると云なり。⁽⁴⁰⁾

北村季吟（一六二五～一七〇五）『枕草子春曙抄』

までこし、といふに同、まいりこし物なればと也。

これませこしにさぶらへば、⁽⁴¹⁾

〔注コ、ニエガタシ、可考。〕

盤斎によると、「ませごしま」とは、「あをざし」は「野底ヤテイのもの」で、貴人である定子に献上する際に、下位の人から上位の人に物を差し上げる場合に、「御覧になる」や「お目にかかる」という意味であるという。

季吟の説について、前に掲げたように、田中重太郎氏によりすでに「誤り」と指摘されるが、また季吟も「可考」と断定はしていなかった。

その後、岩崎美隆（一八〇四〜一八四七）『枕草紙枉園抄』は、盤斎と季吟の注釈を踏まえて、次のように述べている。

少云、今の世も青麦の芽にてする也。ませこしとは、築越也。あをさしは野底なるものなれば、ただませこしに、御らんずるまでに、たてまつると也。今の世も貴人に物奉るは、御目にかくるといふ也。美云、注ともにむぎのもやしにて調するよしへど、河内国などにては、さるものも青さしといふ名もきかず、豊後国にては麦の穂のわかきほどを手にてひねりて、砂糖などつけてくふをさしといふ由、かの国人清厳といふ法師のかたりき。又考に、ませこしとは、万葉十四卷に、宇麻勢胡之むぎはむこまのと歌の詞もてかけるにて、むぎといふことを、たはぶれてかくいへるか、なほ考べし。⁽⁴²⁾

美隆は、盤斎の『清少納言枕双紙抄』に書かれた「青麦の芽」という物を検証して見当たらずと指摘し、豊後国の清厳という法師から聞いた、「麦の穂」の若いものに「砂糖」などにつけて食べる物があるそうだと記している。そして、『万葉集』の「宇麻胡之」と「むぎはむ駒」の連想で「ませこし」に繋がるのではないかとする。

ところが、美隆の説について、関根正直（一八六〇～一九三二）『枕草子集註』は、次のように反問している。

美隆云、麦食む駒という歌の詞もてかけるにて、麦といふ事を、戯れてかくいへるか。この説穩かなるべし。猶強ひて愚按を言い試みば、龜野なる物。宮の御叱り罵らるる品という意にてもあるか。⁽⁴³⁾

関根氏は、美隆が指摘した『万葉集』の歌に寄せて「麦」のことを述べたもので、妥当とするが、そもそも粗野なものだから、そのようなものを皇后定子に献上すること自体、相応しくないと疑問を呈してる。

その後、金子元臣（一八六九～一九四四）『枕草子評釈』で、「ませこし」の歌についての説が出されている。

ませこしにさぶらふ 籬越に候ふと也。餘所より到来したることを譬ふ。蓋し六帖に「ませ越に麦はむ駒のはつはつに及ばぬ恋も我はする哉（万葉十二に、^{ませこし} 柜檣に麦はむ駒の、とあるもあり）の歌にゆづりて、麦といふことを思はせたる也。「ませ」は馬塞^{うませき}の上下略にて、埒⁽⁴⁴⁾をいふ。

右の「古今六帖」は、関根『枕草子集註』の中で言及されないものである。⁽⁴⁵⁾
以後、昭和から平成まで、『枕草子』諸本の「ませこし」に関する解釈は、ほとんどこの『古今六帖』と『万葉集』

の歌を本説として⁽⁴⁶⁾いる。

しかし、典拠に『万葉集』か、『古今六帖』か、いずれが相応しいかについては、関根に従って『万葉集』より『古今六帖』の方を採る説もある。例えば、萩谷朴氏『枕草子解環』にも次のようにある。

『万葉集』卷十二にも、「馬柵^{ませ}越しに麦はむ駒の罵^のらゆれどなほし恋ふらく忍びかねつも」というのがあり、天皇と隔てられた皇后の慕情という点では一致点を見出だが、それを「罵^のらゆ」というのも穏当でないし、食思不振の皇后に、僅かでも召し上がれという気持を表わす「はつはつに」という副詞が見られないから、『万葉集』の歌は、この際、清少納言の念頭になかったと思われる。清少納言が常に引用するところとして、やはり『古今六帖』の歌を推すべきであろう。⁽⁴⁷⁾

ところが、萩谷氏の説も定説とはなっていない。例えば、藤本宗利氏に、次のような説がある。

確かに『枕草子』の同時代人にとって、『万葉集』と『古今六帖』のどちらが、より一般的な書物かと言えば、後者であることは言うまでもない。『六帖』は現に、多くの話題を『枕草子』に提供している。だが『万葉』に古点を付した元輔を父に持ち、「集は古万葉。古今」と言挙げした清少納言と、彼女をとりまく定子後宮の知的環境を考えると、万葉歌が引かれた可能性を、むげに否定できないであろう。⁽⁴⁸⁾

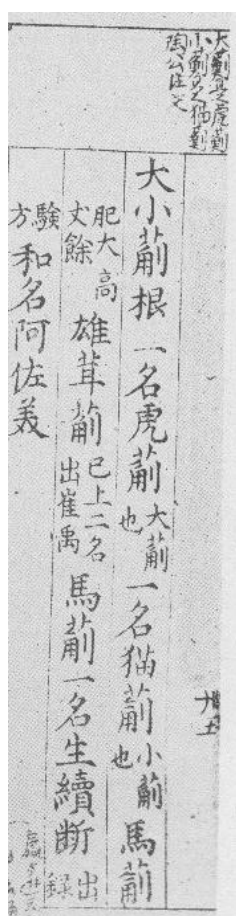
このように、「ませごし」に関する解釈は、定説を見ていないと言えるであろう。

〈3〉「ませごし」と「青刺」

では、「ませごし」は、どのように考えればよいであろう。

この点について、前節に考察した「青ざし」と同じように考えなければならない。つまり「ませごし」には、俗名である「青刺」の意味を含むと考えるべきであろう。すなわち「青刺」の「薊」の別な言い方があるのではないかと考えたい。

そして、平安時代の医学博士深根輔仁が延喜十八年（九一八）頃に編纂した『和名本草』を検証してみると、「大薊根」は、次のような呼称がある。^{（49）}



平安時代では、「和名阿佐美」の薊（俗字「薊」）は、また漢語で「虎薊」、「猫薊」、「馬薊」、「雄茸薊」などの名前と呼ばれている。そのうち「馬薊」に注目したい。その中の「薊」の読みを、槇佐知子氏『大同類聚方』（八〇八頃成立）で参照したい。

26 万由介久佐 味苦久無香四五〔□□〕花乎無実 〔中略〕

〔解説〕万由介久佐 従来の和名にはなく未詳。飛廉・漏蘆・苦参などの説がある。ノアザミ（生薬名**薊根**）の異称にマユハキがあるのでこれか。〔中略〕

薊根は和名阿佐美。大薊と小薊があり、大薊は『倭名類聚鈔』では夜万阿佐美。山谷間に生えるもので、現在のオニアザミか。古代中国では大薊と書き、別名を虎薊といった。日本では刺薊・山牛蒡・鶏冠草・千針草・野紅花の名がある。⁽⁵⁰⁾

「薊」は「せん」と読む。このことからみると、別名の「馬薊」は「ませ」と称呼することが可能になるのではないかと考える。すなわち「馬」は、「ま」に読む。例えば、『今昔物語』巻第十三「天王寺僧道公誦法花救道祖語第卅四」の中で、次のような描写がある。（本文は日本古典文学大系による）

男ノ形ノミ有テ、女ノ形ハ无シ。前ニ板ニ書タル繪馬有リ、足ノ所破レタリ。道公、此レヲ見テ、「夜ルハ、此ノ道祖ノ云
ナリ アリ
ヒケル也ケリト」思フニ、弥ヨ奇異ニ思テ、其ノ繪馬ノ足ノ所破タルヲ糸ヲ以テ綴テ、本ノ如ク置ツ。
イヨイ オモヒ エマ ヤブレ ツツリ オキ

（二五二頁）

右の「絵馬」は、大江匡衡（九五二―一〇二二）の文にも「色紙絵馬三疋」の例が見える。

俗名である「青ざし（青刺）」を使用しているが、皇后定子に献上するときに、敬語「さぶらひ」と呼応するように、俗名の「青ざし（青刺）」を避けて、別名の「ませ（馬薊）」を申し上げたのではないであろうか。

しかし、「こし」の部分はどうかという問題が残されている。

〈4〉「ませこし」と「五月五日」の風物

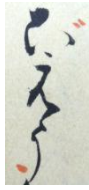
この点については、本章段の五月五日の端午節の背景に注目してみる、結論を先に申し上げると、それは『日本国語大辞典』に解釈されたようなものである。

こし【五糸】《名》五色の糸。中国では五月五日にこれを腕に巻き、疫病を避けるまじないとした。⁽⁵¹⁾

右の如く、「こし」は、漢語の「五糸」と考える。

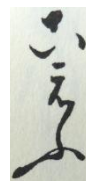
ただし、漢語の「五」は、平仮名で「こ」を表記することがあるのかという疑問が浮かび上がってくるであろう。この点については、四系統『枕草子』写本の中の用例で証明することができる。例えば、三卷本、能因本、前田家本、堺本いずれの活字本にも翻刻された「五葉」という木の名は、四系統の写本は、次のように表記している。

三卷本⁽⁵²⁾ 第三八段「花の木ならぬは」「五葉^{こえふ}」



『枕草子』『新編日本古典文学全集』（小学館）九二頁。

能因本⁽³⁾ 第四七段「木は」⁽³⁾「五葉」⁽³⁾



『枕草子』「日本古典文学全集」(小学館) 一三二頁。

前田家本⁽⁴⁾ 第四五段「木は」⁽⁴⁾「五葉」⁽⁴⁾



『前田家本枕冊子』(古典文庫) 二五頁。

堺本⁽⁵⁾ 第八段「花の木ならぬは」⁽⁵⁾「ごよふ」⁽⁵⁾



『堺本枕草子』(有朋堂) 六頁。

四系統『枕草子』写本のように、「五」を「こ」と表記することが、一目瞭然であろう。次は、「ごし」の「し」、すなわち「五糸」の「糸」を分析しておきたい。

漢語である「五糸」の「糸」は、和名「伊度(いと)」と呼び、『集韻』によると、「絲」の簡略の表記である。⁽⁵⁾

つまり「五糸」は、「五⁽⁵⁸⁾絲」と同じ意味で、五色の糸という飾り物である。古代中国の五月五日の端午節に、この細い五色の糸を手首に回して、病気を防ぐ、邪気を祓うという特有の風習があった。『初学記』巻四「歳時部」「五月五日」の項目では、次のように記している。

風俗通曰 五月五日 以五綵絲繫臂者 辟兵及鬼 令人不病温 又曰亦因屈原

一名長命縷 一名統命縷 一名辟兵繒 一名五色縷 一名五色絲 一名朱索 又

有條達等 織組雜物 以相贈遺⁽⁵⁹⁾

右の「長命縷」、「統命縷」、「五色縷」の「縷」は、「五色絲」の「絲」と同じ意味である。『倭名類聚抄』では、次のように解説が残されている。⁽⁶⁰⁾

絲縷也字亦作綫與縷矣

漢語で、「長命縷」、「統命縷」、「五色縷」、「五色絲」という物は、日本では、「薬玉」と同じ物と考えられることは、かつて後藤祥子氏が「薬玉と統命縷は同一の物と考えられている」とした推測は正しい。なぜなら残された『内裏式』「五月五日観馬射式」項目で、次のような記録があるからである。⁽⁶¹⁾⁽⁶²⁾

女蔵人等執「統命縷」。此間謂薬玉。

「続命縷」あるいは青、赤、白、黒、黄の五色の絲の「五糸」が、靈力を持つものとされ、麝香、沈香などの薬を玉にして錦の袋に入れ、菖蒲、よもぎなどを結び、五色の糸をさげたもの、そして室内にかけたり、身につけたりして邪気をはらい不祥をはらうとある。⁽⁶⁴⁾

このような薬玉を、宮中では、御帳、柱にかける風景については、清少納言が『枕草子』『節は』章段の中で、特に五月を強調し、いくつかの色々な糸をつける場面を記述している。（本文は『枕草子』『新編日本古典文学全集』による）

第三七段 節は

節は、五月にしく月はなし。菖蒲、蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし。九重の御殿の上をはじめて、言ひ知らぬたみのすみかまで、いかでわがもとにしげく葺かむと葺きわたしたる、なほいとめづらし。いつかはことをりに、さはしたりたるし。空のけしき曇りわたりたるに、中宮などには、縫殿より御薬玉とて色々の糸を組みさげてまゐらせたれば、御帳立てたる母屋の柱に、左右につけたり。九月九日の菊をあやしき生絹の衣に包みてまゐらせたるを、同じ柱に結びつけて月ごろある、薬玉に解きかへてぞ捨つめる。また薬玉は菊のをりまであるべきにやあらむ。されど、それは、みな糸を引き取りて物結ひなどして、しばしもなし。

御節供まあり、若き人々、菖蒲の腰ざし、物忌つけなどして、さまさまの唐衣、汗衫などに、をかし折枝ども、長き根にむら濃の組して結びつけたるなど、めづらしう言ふべき事ならねど、いとをかし。さて春ごとに咲くとて、桜をよろしう思ふ人やはある。

つちありく童^{わらは}べなどの、ほどほどにつけて、いみじきわざしたりと思ひて、常に袂^{たもと}まぼり、人のにくらべなど、えもいはずと思ひたるなどを、そばへたる小舎人^{こどねり}童^{わらは}などに引きはらて泣くもをかし。紫紙に棟^{あぐち}の花、青き紙に菖蒲^{さうぶ}の葉ほそくまきて結^ゆひ、また白く紙を根してひき結^ゆひたるもをかし。いと長き根を、文^{ふみ}の中に入れなどしたるを見る心地^{こころち}ども、艶^{えん}なり。返事書^{かへりて}かむと言ひ合はせ語らふどちは、見せかはしなどするもいとをかし。人のむすめ、やむごとなき所々に御文など聞えたまふ人も、今日^{けふ}は心ことにぞ、なまめかしき。夕暮^{ゆふぐれ}のほどに、郭公^{ほととぎす}のなのりしてわたるも、すべていみじき。

(八九〜九一頁)

右に傍線を付けた描写の、特に色々な「糸」に関する場面に注意したい。五月の節日に及ぶ月はない、御殿の菖蒲を飾り、宮中の御帳や母屋の柱に色々な糸を付けたり、薬玉をかけたり、児童がお互いに糸を引き遊び、みなで糸を取って物に結び、柱に掛けた薬玉の糸はまもなくなくなったという。

寛弘二年（一〇〇五）五月五日の薬玉を、糸所から提供することが、藤原道長が著した日記に次のように残されている。

五日、壬子、糸所者薬玉持来、賜禄、
(59)

清少納言は、青刺の薊を取って、薬玉に付ける五色の糸、すなわち「五糸」を結んで、定子に献上したのではないかと考える。懐妊された定子の親子の健康のための祈りであろう。

四 「花や蝶や」について

〈1〉問題の所在

前述のように、清少納言は「青ざし」という薊をとり、「ごし」の五色の糸を付けて、皇后定子に奉った。懷妊中の定子は、次の返歌で即答した。（本文は前引用文による）

みな人の花や蝶てふやといそぐ日もわが「心」（こころ）をば君ぞ知りける

下句「わが心をば君ぞ知りける」は、自分の心情を理解してくれる天皇への感謝を表していることは分かるが、上句「花や蝶や」は、従来解釈が分かれ、これも定説を見ていない。

「蝶よ花よ」という言葉は現代でも使われているが、「花や蝶や」は、今では使われず、一般の辞書に立項されてもいない。『日本国語大辞典』では、「蝶よ花よ」を「子をひととおりでなくいつくしみ愛するさまをいう」と説明し、「蝶や花や」とも書いて、「はなやぎ栄えるさま」という意味を表すとある。そして最も古い例では、鎌倉時代の慈光寺本『承久記』で、「加程に成なんに落行たりとも、蝶や花やと栄べきか」とある。また延享二年（一七四五）年七月初演の『浄瑠璃』夏祭浪花鑑第四の「手代が恋を堀出した 浮牡丹の箱入娘」にも、次のように見られるとある。

乳母はコレ此様に、皴しはも白髪はくがもいとはず。こなたの背長せ（たけ）の延のびるのを、蝶てうよ花はなよと フシたの樂しみて 詞しおのれや
がてさいご聳御りを取。玉の様な子を産（66）して。

しかし、「蝶や花や」や「蝶よ花よ」と「花や蝶や」の表現は同じだろうか。その点に問題をしばって考えたい。

〈2〉「花や蝶や」の先行の解釈

まず加藤盤齋『清少納言枕双紙』（延宝二年「一六七四」五月）を取り上げてみよう。

花やてふやとは、姫宮若宮を、花や蝶やと冊カシキ祝（67）ひ奉ると也。

介添えの女房達が、端午節のため、子供達（姫宮、若宮）をちやほや大切に扱い祝う様子という。
二ヶ月後に上梓された北村季吟『枕草子春曙抄』（延宝二年「一六七四」七月）では、

みな人は薬玉をして、花蝶と色々細工を急（68）ぐ。

と「花や蝶や」を、端午節の薬玉を飾る華やかな花蝶の細工としている。いずれも解釈は、前述の「蝶や花や」、「蝶よ花よ」の説明に類似するといえよう。

次に、平成までの諸説で代表的なものを示す。

① 池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』（岩波書店）

すべての人が権勢に赴く花やかな節日の今日、あなただけはさびしい私の心を知っているのですね。⁽⁶⁹⁾

② 渡辺実『枕草子』（岩波書店）

「みな人の花や蝶やといそぐ日」は、彰子方の隆盛への思いが言わせる言葉であろう。⁽⁷⁰⁾

③ 田畑千恵子『枕草子大事典』（勉誠出版）

この段の構成が、定子の歌を核とした、一種の歌語りとも言うべきものであることには異論がないだろう。だとすれば、詠歌の背景は、歌の直前までに語られているはずである。上の句の「みな人の花や蝶やといそぐ」は、若い女房たちや御匣殿（道隆四女、定子の妹）が、薬玉をもてはやし興ずる華やいだ様子に対応する。「中略」端午の節句の華やかな気分につつまれた皇后の里第、諸勢力から薬玉が献上され、周囲には大勢の若い女房たちが伺候している。この段が描くのは、今上帝の第一皇子、皇女とともにある、後の誇り高い姿そのものである。「みな人の」の歌も、そうした文脈の中で解釈すべきものと考える。⁽⁷¹⁾

右①の解釈を、権勢ある側になびく態度と見ているが、②と③では、「権勢」の対象は異なる。②は「彰子方の隆盛」と解釈され、③は「華やかな気分につつまれた皇后の里第」、つまり「皇后定子」方を指す。

このように、従来の解釈は、まだ揺れていると見られる。

そこで、本稿では、「花や蝶や」の表現を掘り下げて、「花や蝶や」の表現には、定子の念頭に何か寓意が込められているか、などの問題を考えることにより、定子の歌の上句の意味を考えてみたい。

〈3〉「花や蝶や」と和漢文学の表現

「花」は、奈良時代から平安時代までの歌に詠まれてきたが、「蝶」を詠む歌は少ない。古代日本人は「蝶」をあまり好まなかったらしい。たとえば、『古事記』や『日本書紀』には「蝶」が見えず、『万葉集』には、「蝶」が二箇所見えるが、いずれも、「序」で使われたものである。

① 『万葉集』第五卷「八一四」番

梅花歌卅二首 并序 天平二年正月十三日

庭舞_ニ新蝶_一 空帰_ニ故鴈_一 庭に新蝶舞ひ 空に故雁帰る₍₇₂₎

② 『万葉集』第十七卷「三九六六」番

二月二十九日、大伴宿祢家持

紅桃灼々	戯蝶廻 _レ 花舞	紅桃灼々 _{こうたうしゃくしゃく}	戯蝶 _{ぎてふ} は花 _{はな} を廻 _{めぐ} りて舞 _ま ひ
翠柳依々	嬌鶯隱 _レ 葉歌	翠柳依々 _{すいりうい}	嬌鶯 _{けうあう} は葉 _は に隠 _{かく} れて歌 ₍₇₃₎ ふ

①は、天平二年（七三〇）、太宰帥大伴旅人が、宴席での「梅花」歌群に、賦した序に使われたもの。庭には生れたばかりの蝶が舞い、空には昨年の秋に來た雁が北に返って行くという初春の風景を詠む。「新蝶」、「蝶舞」、「舞蝶」等は、いずれも唐詩に頻出するもので、例えば、李賀「惱公」に「晚樹迷新蝶」があり、李商隱「即日」にも「舞蝶不空飛」が、また李嶠「春日侍宴幸芙蓉園應制」に、「飛花隨蝶舞」が見られる。

②「戲蝶」や「蝶戲」は、例えば、『初學記』二十八果木部「李」に唐太宗皇帝の詩、「蝶戲脆花心」があり、『芸文類聚』五十職官部「刺史」に、梁元帝「戲蝶時飄粉」があるなど唐代類書に引かれる語句である。いずれも『万葉集』の用例は、「序文」に現れるもので、歌語ではない。その意味で、歌語として、「蝶」は詠まれていないといえる。

『万葉集』以降も、『枕草子』以前の勅撰集、私撰集、私家集で、「蝶」を詠まれた歌は少ないが、『古今和歌集』と『拾遺和歌集』に各一首、『古今和歌六帖』には二首ほど、「蝶」を物名題として詠んだものがある。

(1) 『古今和歌集』「卷第十」「物名」「くたに」「四三五」番（僧正遍昭）

散ぬれば後は芥あけになる花を思おもひしらずもまどふてふ 哉かな

(2) 『拾遺和歌集』「卷第七」「物名」「あさがほ」「三六四」番（作者不明）

我が宿やどの花の葉にのみ寝る蝶てふのいかなるあさかほかより来る

(3) 『古今和歌六帖』「第六」「てふ」「四〇二三」番（作者不明）

おほえてらこれはたれども世の中にあだなるてふにみゆる花かは⁽⁷⁹⁾

(4) 『古今和歌六帖』「第六」「てふ」「四〇二三」番（作者不明）

いへばえにいはねばさらにあやしくもかげなるいろのてふにも有るかな⁽⁸⁰⁾

右(1)の「てふ」は、異本に「といふ」とも示され、「夢中になるということだ」の説もあるが、それだと掛詞の興を削ぐことになる。 (2)の「てふ」は、「朝顔」の「花」の縁語で、現実の蝶ではなく、言葉遊びの抽象的な描写となっている。 (3)の「てふ」は、「花」が前に出て、「花や蝶や」と語順が異なる。 (4)も「てふ」はあるが、「花」が見当たらない。これらの歌に見える「てふ」は、「花や蝶や」の典拠に繋がらないだろう。

では、漢語として「花蝶」は、奈良から平安までの漢詩文では、どのように存在しているのか。そこで、前に述べた作品以後の表現を、代表的な漢詩文集から追ってみよう。

A 『懷風藻』

1 紀朝臣麻呂（七〇五没）「春日」

階梅闘素蝶⁽⁸²⁾ 塘柳掃芳塵

2 犬上王（七〇九没）「遊覽山水」

吹台哢鶯始 桂庭舞蝶新 (83)

3 紀朝臣古麻呂（生没年未詳）「望雪」

柳絮未飛蝶先舞 梅芳猶遲花早臨 (84)

B 『凌雲集』

4 嵯峨天皇（七八六～八四二）「神泉苑花宴賦 落花篇」

紅英落処鶯乱鳴 紫萼散時蝶群驚 (85)

5 小野岑守（七七八～八三〇）「雜言於神泉苑待讌賦落花篇応製」

遊蝶息尋葉初見 群蜂罷釀草纔生 (86)

6 小野岑守（七七八～八三〇）「雜言奉和聖製春女怨」

林暮歸禽入簷 園囀遊蝶抱花眠 (87)

C 『文華秀麗集』

7 嵯峨天皇（七八六～八四二）「舞蝶」

数群**胡蝶**飛乱空 雜色紛紛花樹中
(88)

8 桑原腹赤（七八九～八二五）「和野内史留後看殿前梅之作」

待蝶香猶富 藏鶯影未寬
(89)

9 巨勢識人（生没年未詳）「神泉苑九日落葉篇応製」

繞叢宛似**莊周蝶** 度浦遙疑郭泰舟
(90)

D 『経国集』

10 嵯峨天皇（七八六～八四二）「春江賦」

花飛江岸 草長河畔 **蝶態**紛紜 鶯声撩乱
(116)

11 石上宅嗣(七二九ゝ七八一)「七言三月三日於西大寺侍宴応詔一首」

青糸柳陌鶯歌足 紅藥桃溪蝶舞新⁽⁹²⁾

12 菅原清公(七七〇ゝ八四二)「五言奉和春日作一首」

樹暖鶯能語 藜芳蝶自奢⁽⁹³⁾

13 滋野貞主(七八五ゝ八五二)「雜言臨春風効沈約体応制」

黃鶯雜沓誰求媒 素蝶翩翩不倦廻⁽⁹⁴⁾

14 桑原腹赤(七八九ゝ八二五)「雜言奉和清涼殿画壁山水歌一首」

蜂蝶紛飛寧換藜 煙霞澹蕩不復空⁽⁹⁵⁾

E 『性靈集』

15 空海(七七四ゝ八三五)「為酒人内公主遺言」

既知夢蝶之非我 還驚谷神之忽休⁽⁹⁶⁾

16 空海（七七四～八三五）「九想詩十首」〔瓊骨猶連相第六〕

畏影不知陰 如蝶居世雲 （97）

F 『本朝麗藻』

17 藤原公任（九六六～一〇四一）「暮春〔中略〕賦度水落花舞応製」

双行蝶導流心動 送曲風来浮艶輕 （98）

18 藤原斎信（九六七～一〇三五）「暮春〔中略〕賦度水落花舞応製」

鶴遊蝶戲応同意 率舞皆知治世声 （99）

G 『本朝無題詩』

19 藤原敦基（一〇四六～一一〇六）「賦瞿麦」

褰簾倩見遊蜂戲 移榻豈饒舞蝶忙 （100）

20 惟宗孝言（生没年未詳）「春夜述懷」

偏感莊周夢作蝶 暫交翹楚曉聞鷄 (101)

21 藤原忠通(一〇九七〜一一六四)「秋三首」

日高蝶臥老甚哉 紙隔松門牖未開 (102)

22 藤原通憲(一一五九没)「秋日即事」

空疲鑽仰聚畿業 未識是非夢蝶心 (103)

H 『菅家文草』

23 菅原道真(八四五〜九〇三)「殘菊詩」

蝶栖猶得夜 蜂採不知秋 (104)

I 『菅家後集』

24 菅原道真(八四五〜九〇三)「辨地震」

至若栩栩蝶飛說 閑素道之玄宗 (105)

J 『都氏文集』

25 都良香（八三四～八七九）「決群忌」

蝶迎軍騎 定為何徵 (106)

K 『田氏家集』

26 島田忠臣（八二八～八九二）「五言禁中瞿麦花詩三十韻」

當時駈蝶子 每日引蜂玉 (107)

27 島田忠臣（八二八～八九二）「七言就花枝応製一首」

非暖非寒陪月砌 如蜂如蝶就花枝 (108)

28 島田忠臣（八二八～八九二）「菊花」

釀蜜蜂休投葉底 尋香蝶断上花脣 (109)

L 『本朝文粹』

29 兼明親王（九一四～九八七）「兔裘賦」

夢蝶之翁 任是非於春叢 冥冥之理 無適無莫⁽¹¹⁰⁾

30 源順（九一一～九八三）「後三月〔中略〕賦今年又有春各分一字応教」

帰谿歌鶯 更逗留於孤雲之路 辭林舞蝶 還翩翻於一月之花⁽¹¹¹⁾

31 大江朝綱（八八六～九五八）「暮春同賦落花乱舞衣各分一字応太上皇製」

於是遠尋姑射之岫 誰伝鶯歌 亦問無何之郷 不奏蝶舞⁽¹¹²⁾

M 『和漢朗詠集』卷上 「閏三月」

32 帰谿歌鶯 更逗留於孤雲之路 辭林舞蝶 還翩翻於一月之花⁽¹¹³⁾

右 A～M までの 1～32 箇所にわたる「蝶」に関する表現の、G 19～22 までの作者の時代は『枕草子』成立の以後であり、参考のために掲げた。また説明しておきたいことは、F 17と18の藤原公任と藤原斎信の詩句は、寛弘三年（一〇〇六）三月四日に藤原道長より宮廷で行った詩会⁽¹¹⁴⁾で書かれた作品である。つまり、これも『枕草子』

の後の詩作である。

右のゴシック字を付けたように、漢詩賦においては「花」と「蝶」に関わる描写は少なくない。例えば、Aの3、Bの6、Cの7、Dの11、Kの27、28、Lの30、Mの32などがある。しかし、詩語としての「花蝶」は見当たらない。また、前述したように、『万葉集』序文に表した「舞蝶」、「飛蝶」、「戯蝶」、等の表現も見えるように、これらの蝶に関する表現は、中国の漢詩文の影響が見られる。例えば、Cの9などの夢に関する蝶は、『莊子』内篇「斎物論」による夢の蝶と関係があるが、詩語として使われる方法は、白樂天の詩作に、幾つかの場面で援用されている。一例を示してみると、『白氏文集』卷二八「疑夢二首」のうち、「蝶花莊生詎可知」（『白居易集箋校』上海古籍出版社・一九六六頁）があるだろう。

このように、詩語としての「花蝶」は、現存の日本漢詩文の中には見えない。では、中国の詩集における「花蝶」はどうであろうか。たとえば、全唐詩における「花蝶」の用例は、次の通りである。

（ア）〔唐〕楊 續「安德山池宴集」

花蝶辭風影 蘋藻含春流 ⁽¹¹⁶⁾

（イ）〔唐〕上官儀「早春桂林殿應詔」

花蝶來未已 山光暖將夕 ⁽¹¹⁷⁾

（ウ）〔唐〕董思恭「詠風」

花蝶自飄舞 蘭蕙生光輝 ⁽¹¹⁸⁾

(エ) 〔唐〕白居易「步東坡」

新葉鳥下來 菱花蝶飛去 ⁽¹¹⁹⁾

(オ) 〔唐〕万俟造「龍池春草」

遲引縈花蝶 偏宜拾翠人 ⁽¹²⁰⁾

(カ) 〔唐〕李弘茂「詠雪」

甜於泉水茶須信 狂似楊花蝶未知 ⁽¹²¹⁾

(キ) 〔唐〕清江「春遊司直城西鷗」

春深花蝶夢 曉隔柳煙鞞 ⁽¹²²⁾

右のように、(ア)～(キ)まで七箇所「花蝶」が見える。それらの内、『枕草子』の本章段における「花や蝶や」の典拠として、最も相応しいものは(エ)白居易(白樂天)の作品ではないかと考えられる。

一方、詩作以外に目を向けると、日本でも、永観二年(九八四)成立の源為憲『三宝絵』の序文の中に、漢字と片仮名交じりの「花や蝶や」がある ⁽¹²³⁾ことが注目される。これは『枕草子』に先行する唯一 ⁽¹²⁴⁾の例である、これも

併せて、検討されるべきものだろう。まず、現存三種の伝本の該当する箇所を示してみよう。

一 東寺観智院旧蔵本

男女奈と仁寄ツ、花ヤ蝶ヤトイヘレハ罪ノ根ノこ葉ノ林ニ露ノ御心モト、マラシナニヲ⁽¹²⁶⁾

二 前田育徳会尊経閣蔵本

寄男女云花蝶罪根辞林露心不留⁽¹²⁶⁾

三 東大寺切 関戸家蔵本

(該当する本文なし)⁽¹²⁷⁾

右のように、**三**は該当する本文は残されず、**二**の表記は漢文で、**一**には漢字の間に片仮名混じりの表現。どの系統が為憲の原文に近いかについては、定説を見ていない。⁽¹²⁸⁾

しかし作者である為憲は、かつて元禄元年(九七〇)藤原為光の子のために、『口遊』を編纂し、また寛弘四年(一〇〇七)、藤原道長の子のために、『世俗諺文』を作った。これらは、男性読者を対象に、いずれも漢文で書かれたものである。一方、永観二年(九八四)、女性である尊子内親王のために作った『三宝絵』の原文は、漢字と仮名混じりの文と考える。ただし、「花ヤ蝶ヤ」は、漢語である「花蝶」から訓読した表現ではないかと前掲の『白氏文集』の「菱花蝶飛」の受容を考えた⁽¹²⁹⁾。

このように、『三宝絵』の「花や蝶や」と『枕草子』の「花や蝶や」は、白詩に受容された可能性は極めて高い。この点について、紙幅の限りがあるため、『三宝絵』は展開しないが、『枕草子』の「花や蝶や」と白詩を中心として論じる。

かつて相田満氏が、『枕草子』を漢文学の影響関係という観点で分析するには、「先蹤となる中国作品の存在は考えられないか、あるいは詩文秀句・漢故事・格言の引用典拠は何か等の問題である」と論じられたように、「花や蝶や」の典拠として、前掲した『白氏文集』の秀句「菱花蝶飛去」ではないかと考えたい。⁽¹³⁰⁾では、この秀句を含む『白氏文集』第一一卷感傷詩の歩東坡を取り上げておこう。

歩_二東坡_一

朝上_二東坡_一歩

夕上_二東坡_一歩

東坡何所_レ愛

愛_二此新成樹_一

種植當_二歲初_一

滋榮及_二春暮_一

信_レ意取次栽

無_レ行亦無數

綠陰斜景轉

東坡_{ある}を歩_く

朝_{あした}に東坡_{とうば}に上_{のぼ}りて歩_ほし

夕_{ゆふ}べに東坡_{とうば}に上_{のぼ}にて歩_ほす。

東坡_{とうば}何_{なん}の愛_{あい}する所_{ところ}ぞ、

此_この新成_{しんせい}の樹_きを愛_{あい}す。

種_{しゆ}植_{しよく} 歲_{さい}初_{しよ}に當_あたり、

滋榮_{じえい} 春暮_{しゆんぼ}に及_{およ}ぶ。

意_いに信_{まか}せて取次_{しゆじ}に栽_うゑ、

行_{かう}無_なく亦_{また}た數_{すう}無_なし。

綠陰_{りよくいん} 斜景_{しやけいでん}轉_{てん}じ、

芳氣微風度

芳氣^{はうき} 微風度^{びふうわた}る。

新葉鳥下來

新葉^{しんえふ} 鳥^{とり} 下來^{くだきだ}り、

萎花蝶飛去

萎花^{ゐくわ} 蝶^{てふ} 飛^とび去^さる

閑携斑竹杖

閑^{しづ}かに斑竹^{はんちく}の杖^{つゑ}を携^{たづ}へ、

徐曳黄麻屨

徐^{おもむ}ろに黄麻^{くわうま}の屨^{くつ}を曳^ひく

欲識往來頻

往來^{わうらい}の頻^{しき}りなるを識^しらんと欲^{ほつ}せば、

青苔成白路

青無^{せいぶ} 白路^{はくろ}と成^なる。⁽¹³¹⁾

元和十三年（八一八）、詩人が「江州司馬」から「忠州」に移転され、「忠州刺史」を勤めた二年目、元和十五年（八二〇）、四九歳の白樂天が、右の感傷詩「步東坡」を書いたのである。感傷詩とは、「事物の外に牽き、情理の内に動き、感遇に随いて嘆詠に形わる者一百首あり、之れを感傷詩と謂う」である。⁽¹³²⁾

忠州の城の東に大きな山坡地があつて、そこで詩人が多種の花が咲く木を植えていた。朝も夕も、花の木の様子を見に散歩していた白樂天が、ある日感興を覚えて、右の詩を詠んだ。注意したいのは、ゴシック部「新葉鳥下來萎花蝶飛去」である。「鳥」と「蝶」で擬人法を用い、新しい葉が出る際には、鳥が飛んでくる。萎れる花に対して、蝶が飛び去るという人間において新しいものを好み、古いものを厭う人情を表す。これは詩人が左遷された生活経験によって、深く内心に響く、嘆詠した人間関係の弱点を表したといえよう。

ただし、詩人の泰然自若の態度は、まさしく下定雅弘氏が指摘したように、「白居易は、感傷詩においては、煩惱を滅却しようとして仏教を希求している。」⁽¹³³⁾といえよう。

前掲した源為憲『三宝絵』序文による「男女奈と仁寄ツ、花や蝶ヤイヘレハ罪ノ根ノ」（東寺観智院旧蔵本）、あるいは「寄男女云花蝶罪根」（前田育徳会尊経閣蔵本）において「花や蝶ヤ」、「花蝶」の典拠もまた、同じ白楽天の感傷の詩句「菱花蝶飛」の「花蝶」と考えられよう。「菱花蝶飛」という新しいものを好み、古いものを厭う男女関係の場合の移り気は、罪の根になるということであろう。

皇后定子は、『三宝絵』序文によるか、『白氏文集』第一一卷感傷詩によるか、それとも両方を踏まえたのか、いずれにせよ、「花や蝶や」の典拠として、『白氏文集』の「菱花蝶飛」を考えることは無理ではないであろう。皇后定子は、「菱花蝶飛」を取り込んだ手法について、次の節に述べたい。

〈4〉「菱花蝶飛」と「花や蝶や」の寓意

定子が白詩に習熟しており、それを取り込んだことは、例えば、『枕草子』第二八〇段「雪のいと高う降りたるを例ならず御格子まゐりて」で、定子が次のように、『白氏文集』の詩句を引用したことで著名である。

雪のいと高う降りたるを例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語など

してあつまりさぶらふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」と仰せらるれば、

御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせたまふ。⁽¹³⁴⁾

定子が「少納言よ、香炉峰の雪はどんなであろう」と清少納言に尋ねるやいなや、清少納言が、すばやく御簾を

高く巻きあげたやりとりは、『白氏文集』巻十六「香炉峰下 新卜山居草堂初成 偶題東壁 重題」のうち、対句の下句の「香炉峰」をふまえた応報である。

遺愛寺泉欹枕聴 香炉峰雪撥簾看 (135)

同様に、本章段では、定子が『白氏文集』巻十一「歩東坡」のち、「菱花蝶飛去」の「花蝶」を援用したと考える。

新葉鳥下来 菱花蝶飛去（本文は前掲同）

いずれも対句の下句の詩句を部分的に引用したことも、手法的に一致している。

平安時代では、詩語、詩句を部分的に摂取する手法について、金子彦二郎氏が指摘されたように、「黄泉」を「きなるいづみ」、「風流」を「かぜのながれ」と言った類の一種の訓読的用例も多く見える。例えば、貫之の歌に白詩「都無秋雪詩」の詩語「秋雪」を摂取した「衣手は寒からねども月かげをたまらぬ秋の雪かとぞ見る」などであるのがそれである。⁽¹³⁶⁾

この方法で、白楽天の詩句を翻案して和歌に読む場面も、『枕草子』にも見られる。例えば、「第一〇二段」「二月つごもりごろに、風いたう吹きて」の中で、藤原公任から来た手紙の中には、『白氏文集』巻十四「南秦雪」の対句の下句を翻案した和歌に対して、清少納言は、対句の上句を摂取して返事をしたという場面である。対句と翻

案の和歌は次のようになる。

白氏文集…二月山寒少有春

藤原公任…すこし春ある心地こそすれ

白氏文集…三時雲冷多飛雪

清少納言…空寒み花にまがへて散る雪に⁽¹³⁷⁾

公任は漢詩句「少有春」を「すこし春ある」と詠み、清少納言は、「多飛雪」を

「散る雪に」と詠んだ。清少納言の返答について、藤原公任の評判が見えないが、前掲した定子との『白氏文集』の詩句を応答する場面とを合わせてみると、清少納言が深く『白氏文集』の詩句を知っていることは十分推察できるであろう。

本章段において定子の歌の「花や蝶や」が、『白氏文集』の詩句「萎花蝶飛去」を踏まえものであったことは、当然、清少納言が知っているはずと理解され、それに対して清少納言は「いとめでたし」との賛美で段を結んでいると考えられる。皇后定子の「花や蝶や」において「萎花蝶飛」の寓意を知った上でのこととすると、段落の余韻は俄然深いものになってくる。すなわち定子は自らの状況を萎れる花に例え、周りの若い女房達が蝶のように急ぎ飛び去ってゆく比喻を定子が詠んだことから、悲劇的な現実に対する無力感の心情を表す慨嘆さえも伝わるのである。

定子の不幸な実情は、古記録の中で否定できない事実として、残されている。例えば、本章段の長保二年（一〇

〇〇）五月五日に関わる前後を一覧してみよう。

長保二年（一〇〇〇）

二月十日 女御彰子蒙下可立后之宣旨上。仍出_二御内裏_一。（『日本紀略』）

二月二十五日 以_二女御從三位藤原朝臣彰子_一為_二皇后_一。號之中宮。（『日本紀略』）

以_二元中宮職（定子）_一為_二皇后宮職_一。（『日本紀略』）

三月二十七日 皇后宮出_二御散位平生昌朝臣宅_一。（『日本紀略』）

五月四日 （一條天皇）（藤原彰子）
主上渡御中宮御方、（『權記』）

八月八日 皇后宮自_二生昌朝臣宅_一入_二御内裏_一。（『日本紀略』）

八月二十七日 皇后宮還_二御本宮_一。（『日本紀略』）

十月十一日 天皇自_二一條院_一還_二御新造内裏_一。（『日本紀略』）

十二月十五日 皇后定子於_二（中略）平生昌宅_一。有_二御產事_一。（『日本紀略』）

十二月十六日 皇后崩給。年廿五。在位_二十一年_一。（『日本紀略』）

右に示したように、二月二十五日から藤原彰子が新たな中宮となり、元の中宮定子は皇后に変わった。そして翌月二十七日に定子が宮を出て、本章段の三條の宮の平昌宅に遷御する。五月五日の前夜、一条天皇は新たな中宮のところに出向くことは分かる。翌日の端午節のお祝いの状況は、中宮彰子と皇后定子とで対照的であったと『栄花物語』に記される。

「中宮彰子」はかなく五月五日になりぬれば、人々菖蒲、棟などの唐衣、表着なども、をかしう折知りたるやうに見ゆるに、菖蒲の三重の御几帳ども薄物にて立てわたされたるに、上を見れば御簾の縁もいと青やかなるに、軒のあやめも隙なく葺かれて、心ことにめでたうをかしきに、御薬玉、菖蒲の御輿など持てまゐりたるもめづらしうて、若き人々見興ず。⁽¹³⁹⁾（「かゞやく藤壺」）

右の中宮彰子の方面では、傍線を付いたように、若き人々の興奮している場面が見える。一方、皇后定子の方面では、「涙」をこぼすばかりの状況である。

「皇后定子」皇后宮には、あさましきまでものみおぼえたまひければ、御おととの四の御方をぞ、今宮の御後見よく仕まつらせたまふべきやうに、うち泣きてぞのたまはせける。御匣殿も、「ゆゆしきことを」と聞えて、うち泣きつつぞ過ぐさせたまひける。月日もはかなく過ぎもていき、内にはいとど皇后宮の御有様をゆかしく思ひきこえさせたまひつつ、おぼつかなからぬ御消息つねにあり。宮たちのうつくしうおはしますさまかぎりなし。⁽¹⁴⁰⁾（「かゞやく藤壺」）

右に述べた御匣殿という人は、まさしく清少納言が本章段で、（御匣殿など薬玉して、姫宮、若宮につけ）として書かれた人物であろう。これは定子の妹、藤原道隆の四女であり、第一皇子敦康親王（二歳）、脩子内親王（五歳）に薬玉を付けた人である。また、清少納言は応答の中で、定子の涙にはまったく触れていなかった。しかし定

子は白樂天の「菱花蝶飛」の寓意込めて、自らの愁思を吐露する。それに対し、清少納言は感心して無言で「いとめでたし」と記したのである。

皇后定子の悲劇的な状況について、坏美奈子氏は次のように述べている。

定子の短い生涯のその晩年は実に過酷なものであった。それまでも、后として受けたさまざまな試練から、一条がその定子を守る術はなかったのである。⁽¹⁴⁾

まさしく坏氏が指摘されたように、前に掲げた古記録の如く、懷妊中の皇后定子は八月八日、平生昌の宅から内裏に遷御し、しかも月末にまた平生昌の宅に戻る。この時期、定子は妊娠六ヶ月に相当するであろう。このような不安定な生活もあり、嵯子内親王を出産し、まもなく崩御されることとなった。わずか二十代であった。

こうした背景を踏まえるにつけ本章段において定子の歌は、絶唱とも言えるのではないであろうか。

五 おわりに

以上、『枕草子』「三条の宮におはしますころ」章段における漢語の表現について考察してきた。特に「青ざし」と「ませごし」及び「花や蝶や」に注目して検証してきた。その結果をまとめて言う、次のようになる。

まず、「青ざし」については、従来の研究の「青麦」で作られた「菓子」という解釈は、必ずしも本章段の五月の季節に合うものとは言えず、また青麦という材料から作られた菓子という説は近世頃からにすぎないことから、そ

れを再検証した結果、五月五日の皇族で薬草を取るという風習により、端午節の菖蒲のような青き草を、中国の本
草書物で検証したところ、俗名である「青刺」という五月に採る植物の薬草にたどりついた。

次に、「ませごし」については、俗名である「青ざし」は、『本草和名』で「馬薊」と呼ばれることに従って、「ま
せ」と考察し、「ごし」は、五月五日の特有の風物「五糸」と指摘した。

最後に、「花や蝶や」を改めて白楽天の詩句を受容したと解説した。「花や蝶や」という表現は、「花や蝶や」、「花
蝶」として『三宝絵』「序文」にも見え、これらの「花や蝶や」の典拠は、『白氏文集』卷十四「歩東坡」の詩句「萎
花蝶飛」からの「花蝶」であると考察した。

こうしたことを踏まえ本章段を考えると、『枕草子』の本文を新たに読むことが可能になる。特に本章段によって、
長保二年（一〇〇〇）五月五日、懷妊されている皇后定子は、白楽天の感傷詩の「萎花蝶飛¹⁴²去」を踏まえた歌を
読まれ、清少納言は当時の定子の心情を把握して「いとめでたし」と思った。この点にも、また『枕草子』の悲劇
的な一面を見ることができらるだろう。

〔注〕

- （１） 本稿『枕草子』の引用文は、三卷本『枕草子』、松尾聰・永井和子校注「新編日本古典文学全集（小学館）
により、能因本『枕草子』「日本古典文学全集」（小学館）により、前田家本『枕草子』田中重太郎校注（古
典文庫）により、堺本『堺本枕草子評釈』速水博司校注（有朋社）による。また渡辺実校注『枕草子』「新日
本古典文学大系」（岩波書店）、田中重太郎『校本枕冊子』（古典文庫）及び津島知明・中島和歌子『新編枕草
子』（おうふう）を参照した。

- (2) 田中重太郎解説「枕・ほそとのにひんなき人なん 三條の宮に(三ウ)」勘物「長保元年八月九日自式御曹司移生昌三条宅、二年五月」『枕草子 徒然草』陽明叢書 国書篇 第十輯(思文閣 一九七五)二四八頁。
- (3) ①「年廿五」『日本紀略』「国史大系 第十一卷日本紀略・百鍊抄」一九六頁。②「年廿四」『権記』「史料編纂集 権記第二」六八頁。
- (4) 本章段に関する考察は、昭和から平成まで、主な論は発表年次によって、次のように示す。①下玉利百合子「青ざしの歌 至高なる人間芸術——定子皇后と清少納言——」『枕草子幻想 定子皇后』(思文閣 一九七七)。②藤本宗利「籬越しの歌語り——三条の宮におはしますころの段をめぐって——」『常葉国文』(一九九五)。③田畑千恵子「三条の宮におはしますころ(第二三五段)」『枕草子大事典』(勉誠社 二〇〇一)。④坪美奈子「五月五日の定子後宮——まだ見ぬ御子への予祝——」『物語研究』(二〇〇三)。⑤山田利博『枕草子』「三条の宮におはしますころ」段についての「私解」『宮崎大学教育文化学部紀要(人文科学)』(二〇〇三)。⑥井上新子『枕草子』「三条の宮におはしますころ」の段考——定子後宮における文学的機知という視点からの試解——『枕草子の新研究』(新典社 二〇〇六)。⑦中島和歌子『枕草子』の五月五日——「三条の宮におはしますころ」の段が語る本書の到達点——『枕草子 創造と新生』(翰林書房 二〇一一)。
- (5) 山田利博『枕草子』「三条の宮におはしますころ」段についての「私解」『宮崎大学教育文化学部紀要』(二〇〇三・第九号)三二頁。
- (6) 加藤盤斎『清少納言枕草紙抄』「日本文学古注釈大成」(日本図書センター 一九七八)六四一頁。
- (7) 北村季吟『枕草子春曙抄扛園抄』「日本文学古注釈大成」(日本図書センター 一九七八)五八九頁。
- (8) 近年、本章段に関する論考では、「青ざし」という物については、基本的に「青麦で作った菓子」と理解さ

れている。例えば、①井上新子「そうした営みのかたわらで、清少納言が持つて来てあった「青ざしといふ物」(青麦で作った菓子)を「これ、籬越しにさぶらふ」という発言とともに皇后定子へ献上し、これに定子は「皆人の」歌をもつて応えた。」「『枕草子』「三条の宮におはしますころ」の段考―定子後宮における文学的機知という視点からの試解」『枕草子の新研究』(新典社 二〇〇六) 三三五頁。②赤間恵都子「清少納言の趣向は、「青ざし」(麦で作った菓子)」に『古今六帖』の歌「ませ越しに麦はむ駒のはつはつに及ばぬ恋いも我はするかな」をかけたものである。」「長保二年の章段について」『枕草子日記的章段の研究』(三省堂 二〇〇九) 二〇二頁。

(9) 田畑千恵子「三条の宮におはしますころ」「主要章段解説」『枕草子大事典』(勉誠出版 二〇〇一) 四七〇頁。

(10) 藤本宗利「三条の宮におはしますころ」の歌語り」『枕草子研究』(風間書房 二〇〇二) 二六三頁。

(11) 山田利博「『枕草子』「三条の宮におはしますころ」段について」『源氏物語解析』(明治書院 二〇一〇) 四〇六頁。

(12) 例えば、①『新潮日本古典集成』(新潮社)「五日の節供に消費する菖蒲草の量は莫大である」一二一頁。②『新日本古典文学大系』(岩波書店)「節句直前だから、当然「菖蒲」である。「おほく」とあったのと照応する」二五五頁。③『新編日本古典文学全集』(小学館)「節句に用いる菖蒲」三四八頁。④『新編枕草子』(おうふう)「端午の菖蒲」二二九頁。

(13) 『本朝月令』「清水潔」『新校本朝月令』(皇学館大学神道研究所 二〇〇二) 三三三頁。

(14) 『小右記』「増補 史料大成 別巻二」(臨川書店 一九九七) 三四三頁。

(15) 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋『日本書紀』下(岩波書店 二〇〇三) 一九九頁。

(16) 真柳誠「中国本草と日本の受容」『日本版 中国本草図録』巻九(中央公論社 一九九三)二二八〜二二九頁。

(17) 唐慎微撰 艾晟校定『經史証類大觀本草』三一巻(広川書店 一九七〇)二四六頁。

(18) 『舊唐書』(中華書局版)「卷四十七 志第二十七」「經籍下」二〇四八頁。

(19) 『新唐書』(中華書局版)「卷五十九 志第四十九」藝文三「醫術類」一五六六頁。

(20) 前掲(19)同。

(21) 前掲(19)同。

(22) 矢島玄亮『日本国見在書目録——集証と研究——』(汲古書院 一九八四)一九四頁。

(23) 『延喜式』「皇典講究所全国神職会」(大岡山書店 一九三一)六六四頁。

(24) 『延喜式』「皇典講究所全国神職会」(大岡山書店 一九三一)一一四四頁。

(25) 尚志鈞輯校『唐・新修本草』(中国安徽科学技术出版社 一九八一)二三七頁。

(26) 『四庫全書』「史部、別史類、通志、卷七十五」に参照。

(27) 正宗敦夫校訂『倭名類聚抄』(風間書房 一九七七)巻十七 二十二(裏)に拠る。

(28) 陳彭年等撰『廣韻』(一〇〇八)下「國學基本叢書簡編」(商務印書館)に参照。

薊 草名 [中略] 俗作薊

(29) 正宗敦夫校訂『類聚名義抄』(風間書房 二〇〇四)九五二頁。

薊 薊 薊

薊 薊 薊

薊 薊 薊

- (30) 『延喜式』「皇典講究所全国神職会」(大岡山書店 一九三一) 一〇六二頁。
- (31) 『延喜式』「皇典講究所全国神職会」(大岡山書店 一九三一) 一二一六～一二二七頁。
- (32) 『延喜式』「皇典講究所全国神職会」(大岡山書店 一九三一) 一二一八頁。
- (33) 『延喜式』「皇典講究所全国神職会」(大岡山書店 一九三一) 一二二八頁。
- (34) 参考図絵は『本草綱目』(鼎文書局 一九七三) による。
- (35) 原文は、『医心方』「卷第廿一札記」(オリエント出版社 一九九一) より、書き下し文は、富士川游『日本医学史(全)』(真理社 一九五二) による。七二頁。
- (36) 影印字は、有吉保編、杉山重行解説「加藤磐斎『清少納言枕双紙抄』」(限定版)(新典社 一九八五) 影印本による。
- (37) 影印字は、『清少納言』(五冊「ル¹⁷⁵⁻²」和古書、明治以前刊本) 旧「東京教育大学付属図書館蔵」現筑波大学蔵影印本による。
- (38) 加藤盤斎と北村季吟の本文の優劣について、川瀬一馬は、次のように述べている。「完本の伝存が極めて稀な加藤盤斎著、『清少納言枕草子抄』(俗に万才抄と呼ぶ)(延宝二年刊、十四卷七冊)を大正末年に入手している。それで、今回は盤斎抄を本書の底本とすることにした。これは枕草子の流布本となっている北村季吟著の『枕草紙春曙抄』(延宝二年刊)とほぼ同系統の本文であるが、春曙抄よりも本文をいじっていないと思われる。」『枕草子』上(講談社 一九八七) 三～四頁。
- (39) 田中重太郎『枕冊子全注釈』四(角川書店 一九八三) 一七五頁。
- (40) 加藤盤斎『清少納言枕草紙抄』「日本文学古注釈大成」(日本図書センター 一九七八) 六四一頁。

- (41) 北村季吟『枕草子春曙抄扛園抄』「日本文学古注釈大成」(日本図書センター 一九七八) 五八九頁。
- (42) 前掲(41) 同。五九〇頁。
- (43) 関根正直『枕草子集註』復刻版(思文閣 一九七七) 五四一〜五四二頁。
- (44) 金子元臣『枕草子評釈』(明治書院 一九四二) 八八九頁。
- (45) 前掲(43) 同。「例言」一頁。
- (46) 例えば、「万葉集・古今六帖」に関する指摘は、次のようになる。①池田亀鑑『全講枕草子』(至文堂)。②池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』(岩波書店)「万葉集・古今六帖」二六二頁。③松尾聰・永井和子『枕草子』(小学館)「古今六帖」三五八頁。④萩谷朴『枕草子』(新潮社)「古今六帖」一三四頁。⑤石田穰二『新版枕草子』下(角川書店)「古今六帖」一〇〇頁。⑥田中重太郎『枕冊子全注釈』四(角川書店)「万葉集・古今六帖」二一六頁。⑦増田繁夫『枕草子』(和泉書院)「古今六帖」一八三頁。⑧渡辺実『枕草子』(岩波書店)「古今六帖」二六三頁。⑨上坂信男・神作光一『枕草子』下(講談社)「古今六帖」三四頁。⑩中島知明・中島和歌子『新編枕草子』(あうふう)「万葉集・古今六帖」三二一〜三三二頁・二三三頁。
- (47) 萩谷朴『枕草子解環』四(同朋舎 一九八三) 三八五頁。
- (48) 藤本宗利「三条の宮におはしますころ」の歌語り『枕草子研究』(風間書房 二〇〇二) 二六七頁。
- (49) 影印字は、与謝野寛・正宗敦夫・与謝野晶子編纂校訂『本草和名』上巻「日本古典全集」(日本古典全集刊行会板 一九四〇) 影印本による。
- (50) 槇佐知子『大同類聚方』一「用薬部」(新泉社 一九九二) 三三〜三四頁。

- (51) 『日本国語大辞典』(小学館 二〇〇三) 七三三頁。
- (52) 三卷本影印字は、『枕草子・徒然草』「陽明叢書」(思文閣)による。
- (53) 能因本影印字は、学習院大学蔵『枕草子』(笠間書院)による。
- (54) 前田家本影印字は、「前田家尊経閣文庫蔵」『前田本枕草子』の写本の複製本による。
- (55) 堺本影印字は、「高野辰之旧蔵」現斑山文庫蔵『堺本枕草子』(古典文庫)による。
- (56) 正宗敦夫編纂校訂『倭名類聚抄』(風間書房 一九七七)「和名 卷十四(表)」による。
- (57) 『集韻』「日本宮内廳書陵部蔵 宋元版漢籍影印叢書」(綫装書局 二〇〇二)に参照。
- (58) 唐の詩人万楚(開元(七一三〜七四一)年間の進士)は、「五絲」を用いた詩作が見える。
「五日觀妓」 「西施謾道浣春紗，碧玉今時鬥麗華。眉黛奪將萱草色，紅裙妒殺石榴花。新歌一曲令人豔，醉舞雙眸斂鬢斜。誰道五絲能續命，卻令今日死君家。引用文は、『全唐詩』卷一四五(中華書局)一四六九頁に拠る。

- (59) 『初学記』本文は、『唐代四大類書』(清華大学出版社 二〇〇三)第三卷『古香齋初学記』(影印本)による。
- (60) 前掲(56)同。
- (61) 後藤祥子「五月五日」「四季の行事と古典文学」『年中行事の文芸学』山中裕・「今井源衛編(弘文堂 一九八一)三四九頁。
- (62) 『内裏式』中『神道大系 朝儀祭祀編一儀式・内裏式』(精興社 一九七八)三五〇頁。
- (63) 前掲(61)同。三四六頁。
- (64) 三谷栄一・伴久美『全解枕草子』(有精堂 一九七五)九三頁。

- (65) 大日本古記録・東京大學史料編纂所編『御堂関白記』上(岩波書店 一九五二) 三二四頁。
- (66) 乙葉弘『浄瑠璃集』上(岩波書店 一九六五) 二四一頁。
- (67) 加藤盤斎『清少納言枕草紙抄』(誠進社 一九七八) 六四〇頁。
- (68) 北村季吟『枕草子春曙抄』(誠進社 一九七八) 五九〇頁。
- (69) 池田龜鑑・岸上慎二『日本古典文学大系』(岩波書店) 二六三頁。
- (70) 渡辺実『枕草子』新日本古典文学大系(岩波書店) 二六三頁。
- (71) 田畑千恵子「三条の宮におはしますころ(第二二五段)」「主要章段解説」『枕草子大事典』(勉誠出版) 四七一〜四七二頁。
- (72) 山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注『万葉集』(岩波書店 一九九九) 四六五〜四六六頁。
- (73) 前掲(71) 同。一二四〜一二五頁。
- (74) 引用文は、李賀「惱公」本文は、『全唐詩』(中華書局 二〇〇八) 第十二冊、卷三百九十一、四四一〇頁により、李商隱「即日」本文は、『全唐詩』(上同) 第十六冊、卷六一九〇頁に拠る。
- (75) 『李嶠雜詠百二十首』には、この詩が見えず、『全唐詩』(前掲71同) 第三冊、卷五八に、題「春日侍宴幸芙蓉園応制」には見られる。六九二頁。
- (76) 類書の引用文は、『唐代四大類書』(清華大学版)『初学記』影印本による。一八七八頁。『芸文類聚』影印本による。一〇九九頁。
- (77) 小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』(岩波書店 一九八九) 一四三頁。
- (78) 小町谷照彦校注『拾遺和歌集』(岩波書店 一九九〇) 一〇五頁。

(79) 『新編国歌大観』(角川書店 二〇〇三) 二四八頁。

(80) 右(79) 同。

(81) 引用文は、小沢正夫『古今和歌集』(小学館 一九七九)に拠り、また片桐洋一『古今和歌集』(笠間書院 二〇〇五)を参考にした。「といふ」考証について、次の竹岡正夫『古今和歌集全評釈』上(右文書院 一九八一)に拠る。「といふ」のつづまったと解するもの

○花ハチッテシマヘバ後ニハ芥ニナツテシマウテ ナンデモナイ物ヂヤニ

ソレヲエガテンセズシテアハウナ サテモマア花ニマヨウ事カナ(遠鏡)

○花に夢中になるということだ。「てふ」は、本阿弥切には「といふ」とある。(大系) 九九七頁。

(82) 小島憲之『懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹』(岩波書店 一九七〇) 八六頁。

(83) 右(82) 同、九一頁。

(84) 前掲(82) 同、九三頁。

(85) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』中(中)(塙書房 一九六四) 一三七一頁。

(86) 右(85) 同、一六三六頁。

(87) 前掲(85) 同、一六六六頁。

(88) 前掲(85) 同、二八五頁。

(89) 前掲(85) 同、三〇三頁。

(90) 前掲(82) 同、三二三頁。

- (91) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』中(下)一(塙書房 一九七三)二二一〇頁。
- (92) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』中(下)二(塙書房 一九七三)二七八七頁。
- (93) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』下一(塙書房 一九八五)三〇六四頁。
- (94) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』下二(塙書房 一九八五)三二一〇頁。
- (95) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』下三(塙書房 一九九八)三九七〇頁。
- (96) 渡邊照宏・宮坂宥勝『三教指歸 性靈集』(岩波書店 一九七一)二五五頁。
- (97) 右(96)同、四六五頁。
- (98) 今浜通隆『本朝麗藻全注釈』三(新典社 二〇一〇)七頁。
- (99) 右(98)同、九六頁。
- (100) 本間洋一『本朝無題詩全注釈』(一)一二二頁。
- (101) 右(100)同、四九〇頁。
- (102) 本間洋一『本朝無題詩全注釈』(二)一七頁。
- (103) (102)同、二七頁。
- (104) 川口久雄『菅家文草 菅家後集』(岩波書店 一九七一)一〇七頁。
- (105) 右(104)同、五五一頁。
- (106) 中村璋八 大塚雅司『都氏文集全釈』(汲古書院 一九八八)一七九頁。
- (107) 小島憲之監修『田氏家集注』卷之下(和泉書院 一九九四)二八、二九頁。
- (108) 右(107)同、二一七頁。

(109) 前掲 (107) 同、三八八頁。

(110) 大曾根章介・金原理・後藤昭雄『本朝文粹』(岩波書店 一九九二) 一二九頁。

(111) 右 (110) 同、二六三頁。

(112) 前掲 (110) 同、三〇四頁。

(113) 川口久雄『和漢朗詠集』卷上(岩波書店 一九七〇) 六二頁。この詩句の出典は、前掲 (110) である。

(114) 『莊子』「齊物論」における「蝶」について、次のようなものである。引用文は、市川安司・遠藤哲夫『莊子』「新釈漢文大系」(明治書院 一九六六) による。

昔者、莊周夢為蝴蝶。栩栩然蝴蝶也。自喻適志與。不知周也。俄而覺、則蘧蘧然周也。不知周之夢為蝴蝶與、蝴蝶之夢為周與。周與蝴蝶、則必有分矣。此之謂物化。

先ごろ莊周は蝶になった夢を見た。それはひらひらと飛ぶ蝶で、いかにもののびのびとしていたが、自分では莊周であることに気がつかない。ふと目が覚めると、何と自分は莊周ではないか。これはいったい莊周が蝶になった夢を見たのだろうか、蝶が莊周になった夢を見たのだろうか。しかし、莊周と蝶とは、区別があるはずだ。このような変化を物化(物の変化)という。一八五―一八六頁。

(115) 『御堂関白記』「寛弘三年(一〇〇六)三月四日、中略 権中納言輔猷^{ササキ}題、渡水落花舞、奏聞後、聞人付韻字、

輕字〔後略〕「大日本古記録『御堂関白記』上(岩波書店 一九五二) 一七七頁。

(116) 『全唐詩』(中華書局 一九六〇)「第三三卷」四五三頁。

(117) 右 (116) 同、「第四十卷」五〇五頁。

(118) 前掲 (116) 同、「第六三卷」七四三頁。

(119) 前掲 (116) 同、「第四三四卷」四八〇四頁。

(120) 前掲 (116) 同、「第七八二卷」八八三五頁。

(121) 前掲 (116) 同、「第七九五卷」八九五〇頁。

(122) 前掲 (116) 同、「第八一二卷」九一四四頁。

(123) 津島知明・中島和歌子『新編枕草子』(おうふう 二〇一〇)

『三宝絵』序に見える。「花」「蝶」は姫宮・若宮(盤)、美麗なもの(田中)。字音語「蝶」和歌は稀。新奇な麦菓子と対応。二三五頁。

(124) 平安時代では、『枕草子』以後、二箇所「花や蝶や」が見える。一つは『源氏物語』「夕霧」である。(本文は、新編日本古典文学全集(小学館)による)「前略」「悲しきことも限りあるを、などか、かく、あま

り見知りたまはずはあるべき、言ふかひなく、若々しきやうに、と恨めしう、異事の筋に、**花や蝶や**とか
けばこそあらめ、わが心にあはれと思ひ、もの嘆かしき方さまのことを、いかにと問ふ人は、睦ましうあ
はれにこそおぼゆれ」「後略」四四五頁。もう一つは、『堤中納言物語』「蟲めづる姫君」である。(本文は、
日本古典文学大系(岩波書店)による)「前略」「うらやまし**花や蝶や**といふめれどかはむしくさき世をも
見るかな」「後略」三七八頁。

(125) 吉田幸一・宮田祐行校『三宝絵』「東寺観智院本」(古典文庫 一九六五)一五頁。

(126) 『三宝絵』「前田育徳会尊経閣文庫」(八木書店 二〇〇七)八頁。

(127) 小泉弘・高橋伸幸『諸本対照 三寶繪集成』(笠間書院 一九八〇)五頁。

(128) 山田孝雄「三寶繪詞の研究」『三寶繪略注』（寶文館 一九七二）四二一～四二二頁。

(129) 諸本『三寶絵』の注釈では、「花や蝶や」に関する解説は、漢語に関わる説は見えない。主な解釈は、次のようになる。「花や蝶や」と漢語「花蝶」に繋がる説は見えない。

(1) 山田孝雄著『三寶繪略注』（宝文館）

男女をとこをんななどに寄よつゝ花はなや蝶てふやといへれば、罪つみの根ね事こと葉はの林はやしに露つゆの御心みこころもとどまらじ。（九頁）

(2) 馬淵和夫・小泉弘校注『三寶絵』（岩波書店）

男女をとこをんなナドニ寄よつゝ、花はなや蝶てふヤトイヘレバ、罪つみノ根ね、事こと葉はノ林はやしニ露つゆノ御心みこころモトドマラジ。（六頁）

(3) 江口孝夫校注『三寶絵詞』（現代思潮社）

男女などに寄せつつ花や蝶やと云へれば、罪の根、言葉の林につゆの御心もとどまらじ。（三八頁）

(4) 出雲路修校注『三寶絵 平安時代仏教説話集』（平凡社）

男女などに寄せつつ花や蝶やといへれば、罪の根・事葉の林に露の御心もとどまらじ。（五頁）

(130) 相田満「『枕草子』漢故事考——『蒙求』故事とのかかわりを通して——」『東洋文化』（無窮会 一九九五）一八一頁。

(131) 本文は『和刻本漢詩集成唐詩』第九輯『白氏長慶集』（汲古書院）により、書き下し文は、『新釈漢文大系』第一一七卷『白氏文集』（二下）（明治書院）に参考した。

(132) 下定雅弘『白氏文集を読む』（勉誠社 一九九六）一六五頁。

(133) 下定雅弘「白居易の感傷詩」『帝塚山学院大学研究論集』第二四集（一九八九）六〇頁。

(134) 前掲（1）の三巻本に拠る。四三三頁。

(135) 前掲(131)同。

(136) 金子彦二郎『増補 平安時代文学と白氏文集』(培風館 一九五五)八三頁。

(137) 前掲(1)の三巻本に拠る。二〇九〜二一〇頁。

(138) 『日本紀略』本文は、「国史大系 第十一巻 日本紀略後篇・百鍊抄」(吉川弘文館 一九六五)により、

『権記』本文は、「史料纂集 権記第二」(平文社 一九八〇)に拠る。ただし、旧字体の表記は新字体に変えた。

(139) 『栄花物語』新編日本古典文学大系(岩波書店 一九九五)三一六頁。

(140) 右(139)同、三一七頁。

(141) 坏美奈子『王朝文学論——古典作品の新しい解釈——』(新典社 二〇一一)三八九〜三九〇頁。

(142) 『新編国歌大観』には、「菱花蝶飛去」を翻案した歌は、次の三首が見える。

(A) 三条西実隆『雪玉集』〔三〇六五〕

よの中を思ふもかなし花といへどうつれば蝶もすまずなり行く

(六五二頁)

(B) 橘千陰『うけらが花』「巻一」「春」〔二三四〕

とぶ蝶のは風にとがはおはじとやうつろふ花を返り見もせぬ

(四九八頁)

(C) 香川景樹『桂園一枝』「春」〔一一二〕

このさとは花散りたりと飛ぶてふのいそぐかたにも風や吹くらむ

(六二六頁)

第二章 『枕草子』 「蚊の細声」の表現考

——「にくきもの」の章段を中心に——

一 はじめに

本章では、引き続き、白楽天の詩句の影響について考察する。具体的には、三卷本、第二六段「にくきもの」の中で、微細な虫として名の挙がる、「蚊」に関する表現に注目したい。該当する本文は次の通り。（本文は新編日本古典文学全集による^①）

第二六段 にくきもの

ねぶたしと思ひて臥^ふしたるに、蚊^かの細声^{ほそこえ}にわびしげに名のりて、顔のほどに飛びありく。羽風^{はかせ}さへその身のほどにあるこそいとにくけれ。

眠い時に、顔の周りに飛んでくる蚊がいる。うるさく、大変憎らしいものだということを描写するものである。ここで、注目したいのは、傍線部「蚊の細声」である。この「蚊」に関する「微細」な表現が、『白氏文集』からの

発想と考え、この点について論じたい。

二 先行研究の解釈と問題の所在

では、三巻本に見える「蚊の細声」は、他の系統本では、どのように表現されたのか、それぞれ四系統の代表的な本文を対照しておきたい。⁽²⁾

三巻本

新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館）

蚊^かの細^{ほそ}声^{こゑ}にわびしげに名のりて、

（六七頁）

能因本

日本古典文学全集『枕草子』（小学館）

蚊^かの細^{ほそ}声^{こゑ}に名のりて、

（二〇一頁）

前田家本

『前田家本枕冊子新註』（古典文庫）

蚊^かのほそ^{こゑ}にてわびしげに名のりて、

（二一一頁）

堺本

『堺本枕草子評釈』（有朋堂）

かのほそ^{こゑ}になのりて、

（九八頁）

傍線を付けたように、「蚊の細声」は、四系統の、いずれの本文にも見える。先行研究では、次のように考察されている。

まず、近世から平成までの代表的な注釈を取り上げたい。

(1) 加藤盤斎(一六二一～一六七四)『清少納言枕草紙抄』(枕草子古註釈大成)

莊子云、蚊虫嚙膚。間通宵不寐云々、山谷詩云、半夜蚊雷起。西風為解紛。

(一二七頁)

盤斎は『莊子』「天運」篇の文と黄山谷の詩を援用している。山谷詩とは、黃庭堅(一〇四五～一一〇五)、字は魯直、号は山谷道人、北宋の詩人、詞人、能書家の作である。

(2) 北村季吟(一六二五～一七〇五)『枕草子春曙抄』(枕草子古註釈大成)は、次のようにある。

蚊のぶんぶんとなく心也。蚊の字ぶんのこえなれば也。

(九五頁)

(3) 金子元臣(一八六九～一九四四)『枕草子評釈』(明治書院)

蚊の細声に名のりて、「名のりて」は名を告ることなれども、ここは只鳴くをいう。我ここにありといふように聞くゆる故なり。時鳥の鳴くを名告るというも、その始こそ、名義の起源を思ひて用いるもしたれ、この頃は単に鳴くをいふこと、尚水鶏の鳴くを、叩くといひ習へるが如し。

蚊の字、ブンの音なればなどいへる説は、拘はれり。

(一三八頁)

- (4) 田中重太郎(一九一七―一九八七)『枕草子』(朝日新聞社)
力なささうなほそい声でぶーんと飛んで来て。

(一〇五頁)

- (5) 松尾聰・永井和子『枕草子』三巻本(小学館)
羽音の形容。「蚊」の音読「ブン」から「ブーン」といったとする説、「カー」とする説などがある。「ぶーん」と羽音を立てて蚊であることがわかるようにやって来るのを擬人化したものである。
う。

(六七頁)

- (6) 池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』日本古典文学大系(岩波書店)
切なそうに。心細そうに。自分の名を言う。存在を告げるなどの意。ここは単に鳴いての意であるが、表現としておもしろい。春曙抄に「蚊」の字音「ブン」を連想しているのはうがち過ぎである。
う。

(七〇頁)

(7) 渡辺実『枕草子』新日本古典文学大系(岩波書店)

蚊だとわかる音を立てるから「名公る」と擬人化した。それが「細声」なので「侘しげに」。

(三五頁)

(8) 津島知明・中島和歌子『枕草子』(おうふう)

「蚊のぶんぶんとなく心也。蚊の字、ぶんの声なれば也」(春)。音読みが「ぶん」。

(四五頁)

右(1)の盤斎の指摘には不適切なところが見える。『莊子』「天運」篇の文「蚊虻嚙膚 則通昔不寐矣」は、蚊に刺されて一晩眠れない描写である。しかし、『枕草子』の原文は「蚊の細声」が顔のまわりを飛びまわりという場面の表現である。よって『莊子』からの典拠とは言い難い。また「山谷詩」については、前に示した通り、「山谷道人」は、黄庭堅(一〇四五―一一〇五)が、北宋の詩人であるので、彼が書いた作品を清少納言が読んだとは考えられない。それゆえか、(1)の指摘は、(2)～(8)では触れられない。(2)は、「蚊」の鳴く声の「ブンブン」から連想して、「蚊」を「ブン」と読むこと。この点について、(6)は反対、(4)と(8)は賛成している。(3)は、「蚊の細声」と「名のりて」を合わせて考え、鳴く声からここにあるという解説である。(6)は(3)の観点を踏襲している。(5)と(7)は、いずれも「擬人法」と言う表現手法指摘している。

ところが、(1)から(8)まで、「蚊の細声」に関する表現については、解釈されてこなかった。本章は「蚊の細声」の表現について、『白氏文集』から受容された表現であると立証したい。

三 『枕草子』以前の「蚊の細声」の表現

『古事記』には、「蚊」に関する表記は三箇所。それぞれ次の通り。

① 『古事記』中巻「開化天皇」（岩波書店）

葛野之別、近淡海蚊野

（二七六頁）

② 『古事記』下巻「安康天皇」（岩波書店）

綿之蚊屋野、多_ニ在猪鹿_一。

（三〇四頁）

③ 『古事記』下巻「清寧天皇」（岩波書店）

即獲其御骨而、於_ニ其蚊屋野_一

（三二八頁）

右の三箇所の「蚊」は、いずれも虫の「蚊」ではなく、地名である。例えば、①の「蚊野」は、「近江国愛智郡蚊野」の場所という。このような地名は、『日本書紀』にも見える。例えば、

① 『日本書記』卷第十五「清寧天皇」（岩波書店）

於_レ蚊屋野_一、爲_二大泊瀬天皇_一見_レ殺。

（五〇九頁）

② 『日本書記』卷第十五「清寧天皇」（岩波書店）

由_レ是、仍於_二蚊屋野中_一、造_二起雙陵_一、

（五二一頁）

とあるように、この「蚊屋野」も、『古事記』の表記と同様に古地名を指し、現在滋賀県蒲生郡蒲生町、日野町付近の野に当る。

『万葉集』にも「蚊」に関わる地名が見える。歌語として「蚊」の和歌は、『万葉集』には見えない。勅撰集『古今和歌集』、『後撰和歌集』、『拾遺和歌集』には、いずれも「蚊」は和歌に詠まれていない。

ただし、「蚊遣火」という表現は、和歌に表れている。『古今和歌集』の一例を掲げたい。（本文は新日本古典文学全集による）

『古今和歌集』卷十一「恋歌」

500 夏なれば宿_{やど}にふすぶる蚊遣火_{かやり}のいつまでわが身したもえをせむ

（一六〇）

右の歌は詠み人が不明。夏であるからわが家にくすぶっている蚊やり火がいつまでも炎をあげずに煙を出しつづけるように、いつまでわが身は心ひそかに思いを燃やし続けるだろうかとうたっている。

もう一つの「蚊遣火」の用例を挙げてみよう。（本文は新日本古典文学全集による）

『拾遺和歌集』卷第十二「恋二」

蚊遣火を見侍て

769 蚊遣火は物思人の心かも夏の夜すがら下に燃ゆるん

能宣

（二二三頁）

平安朝の「梨壺の五人」の一人として、『万葉集』の訓釈、勅撰集の撰進に携わった能宣が、蚊遣火は、物思いをしている人の心を表すものなのか。人がひそかに思い焦がれているように、夏の夜、一晚中くすぶり続けているよ
うだと詠んだ。

「蚊遣火」、あるいは「蚊火」とは、『倭名類聚鈔』中では、次のように解説されている。（本文は『倭名類聚鈔』
（風間書房）による）

蚊火 新撰萬葉集歌云蚊遣火 加夜利比 今案 一云蚊火所出未詳但俗説蚊遇煙即去仍夏日庭中熏火放煙故以名之

蚊見虫彙部

「蚊遣火」は、和歌では、「燃ゆ」、「くゆる」の縁語として用いられる。この縁語は、物語の仮名文学の世界では、如何に用いられたのか。この点について、いくつかの作品を検証してみた。その結果、たとえば、『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『宇津保物語』、『落窪物語』、『源氏物語』、『堤中納言物語』などの作品の中で、「蚊」及び「蚊遣火」という表現は見当たらない。

また、『土佐日記』、『泉式部日記』、『更級日記』、『紫式部日記』などの日記にも、「蚊」が見えない。ただ、『蜻蛉日記』には「蚊遣火」がある。それが道綱母の家集のうちの一首の歌である。(本文は新日本古典文学大系による)

かやり火

あやなしややどのかやりびつけそめてかたらふむしのこゑをさけつる

(二四七頁)

蚊遣火をつけて蚊を払うのはよいが、私に語りつづける虫のこえを遠ざけてしまった。つまりしないことをしたという。

また、『栄花物語』巻第二十六「楚王のゆめ」には「蚊」に関する一箇所の描写が見える。(本文は新編日本古典文学全集による)

あないみじ、心憂きわざかなと思しながら、よろづを尽させたまふほどに、酉の時ばかりに、すべてただ蚊の

声ばかり弱らせたまふに、そこら満ちたる僧俗、上下、知るも知らぬもなく、願を立て額をつきののしる。えもいはぬものまで涙を流して、「観音」と申さぬなく、ただ額に手をあてて起居礼拝したてまつらぬなし。今は加持の声も聞えず、御読経の声も聞えず、「観音」とのみ申ののしる。

(五〇六―五〇七頁)

傍線を付けたように、ここに書いた「蚊」は、人の声に比喻しての描写である。夕方遅く、大勢の僧侶は、知人、知らない人達の、願の声は弱く、蚊の声に似ている。興味深いことは、この蚊の声に関する発想は、先蹤の『枕草子』の「蚊の細声」の影響と考えられるであろう。

このように、蚊の細い描写は、仮名文の中では、清少納言が格別の表現である。

では、仮名文でなく、漢詩文における「蚊」の表現は、いかがであろう。漢詩文を検証する場合、日本漢詩文と古代中国から輸入された漢詩文と二つの方面がある。まず、日本漢詩文の方面を確認する。

奈良時代において『懷風藻』には、「蚊」の文字は用いられていない。平安初期の勅撰三集、つまり『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』にも「蚊」はない。平安中期から平安末期にかけての代表的な漢詩文の作品、『菅家文草・菅家後集』『本朝文粹』にも「蚊」という表記は見えない。『和漢朗詠集』にも「蚊」が見当たらない。しかし、『三教指帰』には、「蚊」が一箇所、『日本霊異記』には、「蚊」が二箇所、『性霊集』には「蚊」が五箇所見られる。これらの「蚊」はどのように使われているのか。詳しく取り扱ってみたい。(本文は日本古典文学大系により、漢文は旧漢字に示す、仮名文の表記は常用漢字にする)

まず、『三教指歸』「卷下」の「蚊」を取りあげてみよう。

『三教指歸』卷下「假名乞児論」寫懷頌

築幻城於五陰之空國。興泡軍於四蛇之假郷。甲蛛網。鎧螟騎。鼓蝨皮而驚陣。旗蚊羽以標旅。
幻城を五陰の空しき国に築き、泡軍を四蛇の仮の郷に興す。蛛蝨の網を甲にし、蝨の騎に鎧せり。蝨皮を鼓
として陣を驚かし、蚊の羽を旗として旅を標はす。

(一二四～一二五頁)

傍線を付けた「蚊の羽」について、文字のとおり、蚊の「羽」を「旗」のように比喻した描写である。特異な発想であるが、「蚊の声」に関しての描写ではない。

次に、『日本靈異記』の二つの「蚊」を確認する。

①『日本靈異記』下卷「將寫_ニ法花經_一建_レ願人□肉暗穴頼_ニ願力_一得_レ全_ニ命縁△第十三_一」

于_レ時卅餘人 取_レ葛入_レ山 自_ニ穴邊_一往 穴底人 見_ニ人□_一叫言 取_ニ我手_一云 山人側聞 如_ニ蚊音_一即聞
怪之 取_レ葛繫_レ石 下_レ底而誠 底人取別 明知_レ人也

時に三十餘人、葛を取りに山に入り、穴の辺より往く。穴の底の人、人影を見て叫びて言はく「我が手を
取れ」と云ふ。山人側二聞くに、蚊の音の如し。即ち聞きて怪しび、葛を取り石を繫ぎ、底に下して試み

る。底の人取りて引く。

(三五〇～三五三頁)

② 『日本靈異集』下卷「用_レ網漁夫值_ニ海中難_一憑_ニ願妙見菩薩_一得_レ全_レ命縁 第卅二

皎天覺 身在_ニ彼部内蚊田浦 濱之草上_一焉

皎天に覺きて睠れば、身は彼の部内の蚊田の浦濱の草の上に在り。

(四一〇～四一二頁)

右①は、「蚊の音」を書いた。それは「怪しい」音でした。②は虫の蚊ではなく、「蚊田」という場所の名称である。これは、「和歌山県海草郡加太町の浜辺。和名抄「紀伊国 海部郡 賀太（カダ）」である。

続いて、『性靈集』における五箇所の「蚊」を取り上げてみたい。（本文は日本古典文学大系による）

① 『性靈集』卷第四「為人求官啓 一首」

雖然。巨石得舟者過深海於萬里。蚊虻附鳳者翔高天於九空。遇與不遇何其遼哉。

然りと雖も巨石舟を得つれば深海を萬里に過ぎ、蚊虻鳳に付きぬれば高天を九空に翔ける。遇ふと遇はざると何ぞ其れ遼なるや。

(二六〇～二六一頁)

②『性靈集』卷第九「大僧都空海嬰疾上表辭職奉狀 淳和天皇」

沙門空海言。空海。從沐恩澤竭力。報國歲月既久。常願。奮蚊虻力。答海岳德。

沙門空海言す。空海恩沢に沐せしより、力を竭して国に報ずること歲月既に久し。常に蚊虻の力を奮つて海岳の徳を答せむこと願ひき。

(三九〇～三九一頁)

③『性靈集』卷第九「奉造東寺塔材木曳運動勸進表 一首」

今塔幢材木近得東山。僧等從今月十九日與夫曳運。木大力劣。成功大難。譬如。蟪對車。蚊虻負嶽。自非。一人孝恩。百官忠心。何能。莊嚴先聖御願。成就廣大佛事。

木は大きに力は劣にして功を成さむこと太だ難し。譬へば蟪蛄、車に對ひ、蚊虻、嶽を負はむが如し。一人の孝恩、百官の忠心に非ずよりは何ぞ能先聖の御願を莊嚴し、廣大の佛事を成就せむ。

(三九三～三九四頁)

④『性靈集』卷第十「綜藝種智院式 序」

或有人難曰。國家廣開庠序。勸勵諸藝。霹靂之下。蚊響何益。答大唐城。坊々置閭塾普教童稚。縣々開鄉學廣導青衿。

或者の曰く、「善いかな」。或は人有つて難じて曰く、「國家に広く庠序を開きて諸芸を勧め勵ます。霹靂の下には蚊響何の益かあらむ」。答す、「大唐の城坊には坊ごとに閭塾を置いて普く童稚を教ふ、県ごとに郷學を開いて広く青衿を導く。」

(四二二～四二三頁)

⑤『性靈集』卷第十「叡山澄和上啓返報書 一首」

若使。附龍尾以揚名。寄鳳翼以顯行。則。蚊蝮之質。不勞而凌雲漢。无筋之蝱。无功而飲清泉。鄙陋之望於此足矣。何亦更加珍重々々。又云法花一乘眞言一乘有何優劣者。空海。智昧菽麥。何辨玉石。

若しくは龍の尾に附いて名を揚げ、鳳の翼に寄つて行を顕はさしめば、蚊蝮の質勞せずして雲漢を凌ぎ、無筋の蝱功無くして清泉を飲まむ。鄙陋の望、此にして足むぬ。何むぞ更に加らむ。珍重珍重。又云く、「法花一乗と眞言一乗と何の優劣か有る」とならば、空海智菽麥に昧し、何ぞ玉石を辨へむ。

(四四〇～四四一頁)

右に挙げた①の「蚊」は、鳳凰に付いて高く空へに飛ぶことができるであろうという比喻である。つまり、弱い「蚊」が強い相手に付けば、強くなるという例えの描写である。②の「蚊」は、「微力」として形容している。これ

は『莊子』『秋水』篇の、「是猶使蚊負山 商鉅馳河也（猶蚊虻をして山を負はしめ、商鉅をして河を馳せしむるがごとし）」からの出典である。③の「蚊」は、②と同じように、『莊子』の故事からの連想である。また、「譬えば蟻蝗、車に對ひ」という故事も、『莊子』『人間世』篇の、「汝不知夫螳螂乎 怒其臂以當車轍（汝、夫の螳螂を知らずや。その臂（ただむき）を怒らして車轍に當つ。其の任に勝（た）えざることを知らざるなり）」からであることは既に指摘されている。④の「蚊」は、鳴き声の描写であるが、これは『後漢書』卷四十一列伝「曾孫種」における「衆煦飄山，聚蚊成雷（衆煦、山を漂し、聚蚊雷を成す）」からの連想と論じられている。⑤の「蚊」は、「泰範（はじめ最澄の弟子、のち空海に師事）を喩える。前掲①の「蚊」の描写と同じように、「弱い」ものが「強い」ものに付けば強くなるだろうという比喻である。

以上、「蚊」に関する描写について、『枕草子』前後時代の代表的な仮名作品と漢詩文の作品を検証してきた。また、詩より賦の文章にも、管見の限り、「蚊」の表現は見当たらない。仮名文学の和歌、日記、物語では、蚊を用いた描写は少ない。日本の漢詩文にも、「蚊」の表現は少ない。一方、『日本靈異記』、『三教指歸』及び『性靈集』に見えた「蚊」の表現は、大陸からの漢籍、例えば、『莊子』、『後漢書』等の作品の中の話と関係があることは明らかである。これらの「蚊」に関する表現の背景から考えると、『枕草子』の「蚊の細声」の表現も、大陸からの漢籍からの発想ではないかと考える。この点について、次の節に論述する。

四 『白氏文集』における「蚊」の「頗微細」

『白氏文集』を考察する前に、唐代における詩の表現を検証するためにも、全唐詩にある「蚊」の表現に注目したい。（本文は中華書局版により、巻数と頁数を示す。）

作者	題名	詩句	巻数	頁数
1 韋承慶	直中書省	螢光向日盡 蚊 力負山疲	第四六卷	五五七頁
2 陳子昂	送著作佐郎崔融等從梁王東征	驅蚊 蚋之師 忽雷霆之伐	第八四卷	九〇八頁
3 張說	岳州作	器留魚鱉腥 衣點 蚊 虻血	第八六卷	九三二頁
4 韋應物	詠琥珀	蚊 蚋落其中 千年猶可覲	第一九三卷	一九八五頁
5 杜甫	通泉驛南去通泉縣十五里山水作	冬溫 蚊 蚋在 人遠鳬鴨亂	第二二〇卷	二三一七頁
6 杜甫	入衡州	氛埃期必掃 蚊 蚋焉能當	第二二三卷	二三八四頁
7 李端	瘦馬行	豈意今朝驅不前 蚊 蚋滿身泥上腹	第二八四卷	三二三九頁

8 王建	荊門行	南中三月蚊蚋生	黃昏不聞人語聲	第二九八卷	三三八六頁
9 范燈	狀江南	蚊蚋成雷澤	袈裟作水田	第三〇七卷	三四八九頁
10 權德輿	小言	醯雞伺晨駕蚊翼	毫端棘刺分畛域	第三二七卷	三六六八頁
11 韓愈	醉贈張祕	雖得一餉樂	有如聚飛蚊	第三三七卷	三七七四頁
12 韓愈	送陸暢歸江南	我實門下士	力薄蚋與蚊	第三四〇卷	三八一三頁
13 韓愈	雜詩四首	朝蠅不須驅	暮蚊不可拍	第三四二卷	三八三五頁
14 劉禹錫	聚蚊謠	沈沈夏夜蘭堂開	飛蚊伺暗聲如雷	第三五六卷	四〇〇〇頁
15 劉禹錫	秋螢引	撮蚊妖鳥亦夜飛	翅如車輪人不見	第三五六卷	四〇〇一頁
16 孟郊	西齋養病夜懷多感因呈上從叔子雲	蚊蚋亦有時	羽毛各有成	第三七四卷	四二〇五頁

17	孟郊	蚊	五月中夜息	飢蚊尚營營	第三八〇卷	四二六〇頁
18	盧仝	自詠三首	蚊 ・當家口	草石是親情	第三八七卷	四三七〇頁
19	元稹	苦雨	未飽風月思	已為 蚊蚋 圖	第三九七卷	四四五八頁
20	元稹	蟲豸詩 蟆子	蚊蟆與浮塵	皆巴蛇鱗中之 細蟲 耳	第三九九卷	四四七四頁
21	元稹	蟲豸詩 浮塵子	乍可巢 蚊睫	胡為附蟒鱗	第三九九卷	四四七四頁
22	元稹	落月	蚊聲 靄窗戶	螢火繞屋梁	第四〇三卷	四五〇二頁
23	元稹	酬樂天東南行詩一百韻	索綆飄 蚊蚋	蓬麻舐舳艫	第四〇七卷	四五三二頁
24	元稹	酬樂天江樓夜吟稹詩因成三十韻	卒章還慟哭	蚊蚋 溢山川	第四〇八卷	四五三五頁
25	元稹	閒二首	不堪堤上立	滿眼是 蚊蟲	第四〇九卷	四五四七頁

26 元稹 景申秋八首 蚊帳雨來卷 燭蛾燈上稀 第四一〇卷 四五五三頁

27 元稹 和樂天過秘閣書省舊廳 司馬見詩心最苦 滿身**蚊蚋**哭煙埃 第四一五卷 四五九〇頁

28 元稹 樂府古題序 人道短 **蚊蚋**與變化 鬼怪與隱藏 第四一八卷 四六〇九頁

29 白居易 蚊蠅 巴徼炎毒早 二月**蚊蠅**生 第四三四卷 四八〇五頁

30 白居易 得微之（中略）悵然有感因成四章 蟲蛇白晝攔官道 **蚊蚋**黃昏撲郡樓 第四三八卷 四八六九頁

31 白居易 臼口阻風十日 魚蝦遇雨腥盈鼻 **蚊蚋**和煙癢滿身 第四三八卷 四八七二頁

32 白居易 送客南遷 **蚊蚋**經冬活 魚龍欲雨腥 第四四二卷 四九三七頁

33 白居易 首夏 林靜**蚊**未生 池靜蛙未鳴 第四五二卷 五一一〇頁

34 白居易 禽蟲十二章 螭蝥殺敵**蚊**巢上 蠻觸交爭蝸角中 第四六〇卷 五二四五頁

35 雍裕之	細言	蚊眉 自可託	蝸角豈勞爭	第四七一卷	五三四九頁
36 李紳	和晉公三首	鳳儀常欲附	蚊力 自知微	第四八三卷	五四九四頁
37 殷堯藩	奉送劉使君王屋山隱居	鷹拳擒野雀	蛛網獵 飛蚊	第四九二卷	五五六五頁
38 施肩吾	贈莎地道士	池邊道士誇眼明	夜取蠅螟摘 蚊睫	第四九四卷	五五九三頁
39 張祜	題平望驛	雨氣朝忙蟻	雷聲夜 聚蚊	第五一〇卷	五八一四頁
40 項斯	遙裝夜	蚊蚋 已生團扇急	衣裳未了剪刀忙	第五五四卷	六四二四頁
41 薛能	聞官軍(中略)而固慮史氏遺忽因記	越嶠通遊客	苴·閉 聚蚊	第五五八卷	六四七五頁
42 薛能	吳姬十首	退紅香汗濕輕紗	高捲 蚊廚 獨臥斜	第五六一卷	六五二〇頁
43 皮日休	吳中苦雨因書一百韻寄魯望	雨工避罪者	必在 蚊睫 宿	第六〇九卷	七〇二七頁

44 皮日休	冬曉章上人院	松扉欲啟如鳴鶴	石鼎初煎若 聚蚊	第六一四頁	七〇八六頁
45 羅隱	秋霽後	蠅蚊 漸無況	日晚自相親	第六六〇卷	七五七六頁
46 羅隱	早秋宿葉墮所居	蠅蚊 猶得志	簾席若為安	第六六一卷	七五八三頁
47 羅隱	蟋蟀詩	蚊蚋 有毒	食人肌肉	第六六五卷	七六一〇頁
48 唐彥謙	感物二首	俯仰歲時久	帖然困 蚊蠅	第六七一卷	七六七六頁
49 唐彥謙	六月十三日上陳微博士	蚊蠅 如俗子	正爾相妒嫉	第六七一卷	七六七八頁
50 韓偓	冬至夜作	不道慘舒無定分	卻憂 蚊響 又成雷	第六八〇卷	七七八九頁
51 吳融	平望蚊子二十六韻	天下有 蚊子	候夜嚙人膚	第六八七卷	七九〇二頁
52 韋莊	不寐	蚊吟 頻到耳	鼠鬥競綠臺	第六九六卷	八〇一四頁

53 顔胄	適思	運否前政缺	群盜多 蚊虻	第七七六卷	八七九六頁
54 顔真卿	七言小言聯句	長路迢遙吞吐絲	蟪蛄 蚊睫 察難知	第七七八卷	八八八五頁
55 李紳	喜遇劉二十八偶書兩韻聯句	鳳儀常欲附	蚊力 自知微	第七九〇卷	八八九四頁
56 王起	秋霖即事聯句三十韻	蚊聚 雷侵室	鷗翻浪滿川	第七九〇卷	八八九九頁
57 寒山	詩三百三首	蚊子 叮鐵牛	無渠下觜處	第八〇六卷	九〇七一頁
58 齊己	湘江漁父	門前 蚊蜃 氣	蓑上蕙蘭馨	第八四〇卷	九四七三頁
59 楊鸞	即事	白日蒼蠅滿飯盤	夜間 蚊子 又成團	第八七一卷	九八七六頁

右のように、詩語として、多くの蚊に関わる言葉が使われている。例えば、蚊蚋、蚊蟻、蚊聲、蚊虻、蚊眉、蚊睫、蚊蠅、蚊力、蚊子などの語彙が見える。留意したいことは、一番多いのは、元稹一〇首（19、20、21、22、23、24、25、26、27、28）である。二番目に多いのは白樂天（白居易）六首（29、30、31、32、33、34）である。また興味深いことは、右の59首の詩作を読んでもみると、蚊に関しての**細い**描写については、二首の詩にしか見えない。

いのである。すなわち20元稹「蟲多詩 蟪子」と29白樂天（白居易）「蚊蟪」である。しかも二人の詩は、平安時代の貴族達に良く読まれていた。

では、この二つの詩作の中では、蚊の細い描写は、どのような状態であろう。

まず、元稹「蟲多詩 蟪子」と白樂天「蚊蟪」の題の共通語である「蟪」について、確認しておきたい。

日本では、「蟪」は、二つの意味がある。一つは、蛙の一種、蝦蟇は、ひきがへるという意味である。もう一つは、「ぶゆ」である。蚊に似て小さく、群れで飛び、よく人を囓むという小さい虫である。前者の「蝦蟇」は、『日本書記』（岩波書店）の中には、一箇所あり、次の通りである。

『日本書紀』卷十応神天皇十九年（戊申二八八）十月戊戌朔

夫國樸者。其爲人甚淳朴也。每取山菓食。亦煮蝦蟇爲上味。名曰毛瀨。

夫れ國樸は、其の爲人、甚だ淳朴なり。毎に山の菓を取りて食ふ。亦蝦蟇を煮て上味とす。名けて毛瀨と
いふ。

（三七二頁）

また、『続日本紀』卷廿九神護景雲二年（七六八）七月庚寅十九にも一例が見られる。

肥後國八代郡正倉院北畔。蝦蟇陳列廣可七丈。南向而去。及于日暮。不知去處。

古代人は、常に「蝦蟇」を食べるらしい。また『続日本紀』によつて、蝦蟇は幅七丈のように、列をなして、南

に向い、夕暮れになると、どこへ行くのか不明であ。極めて不思議な記録であるが、この「蝦蟆」は細いものとは言えないであろう。

前掲したように、もう一つ蚊に似ている「蟆」は、「ぶゆ」と読まれ、『日本国語大辞典』では、次のように解説されている。

ぶゆ 【蚋・蟆子】

ハエ（双翅）目ブユ科に属する昆虫の総称。体長一〜四ミリメートルぐらい。体形はハエに似ているが、きわめて小さい。体は黒色、灰色などで、はねは透明。人畜に群がって吸血し、不快感を与え、フィラリアなどの病原体も媒介する。アシマダラブユ、ウマブユなど、日本に約七〇種が分布する。ぶよ。ぶと。学名は Simuliidae
《季・夏》（一〇二二頁）

このようなきわめて小さい虫は、前掲した20元種「蟲多詩 蟆子」と、同じものとする。詩人は、このタイトルで、三首の詩を書いた。ここでは、三首の詩の序文を取り上げてみよう。（本文は元氏長慶詩集〈世界書局〉による）

蟆蚊類也 其實黑而小 不礙紗縠 夜伏而晝飛 聞柏煙與麝香輒去 蚊蟆與浮塵 皆巴蛇鱗中之細蟲耳 故
嚙人成瘡 秋夏不愈 膏楸葉而傅之 則差

（蟆は蚊の類である。その実体は黒くで小さい。小さくで薄い絹の穴に通る。夜に伏して昼に飛ぶ。柏の煙と

麝香の匂いに気付いた迅速に飛び去る。蚊蠅と浮塵は、皆巴蛇の鱗の中の細い虫である。それゆえ、人を嘔むと瘡なり、夏秋の両節に愈ず、薬を楸の葉にそれを傳く、悪くなる。）

元稹が、左遷された荊州で、住む場所の周り、樹木が茂って、湿気が強く、特に蛇、蚊、虫などの野生の動物に感心され、七篇の「蟲多詩」を書いた。それは、「巴蛇三首並序」、「蛸蜂三首並序」、「蜘蛛三首並序」、「蟻子三首並序」、「蠓子三首並序」及び「浮塵子三首並序」で合わせて、二十一首の虫に関わる詩作を作られたのである。ここで注意したいことは、前掲したように、「蠓子三首」の序文の中で、「蠓子」という蚊のような極めて小さい虫に関して、「細虫」と書かれている。

さらにこの細い蚊のような虫を中心に、白樂天も「蚊蠅」を書いた。（前掲29白居易（白樂天）「蚊蠅」）では、この「蚊蠅」の詩作は、果たしてどのような作品であろうか。また、清少納言が『枕草子』の中で書いた本章段における「蚊の細声」とどのような関係があるのか。この点について、分析してみたい。

まず、白樂天の「蚊蠅」詩を、次のように取りあげる。（本文は新釈漢文大系、第117巻、岡村繁『白氏文集』（二下）巻第十一、感傷詩である。漢字の表記は、一部を改訂したことがある。）

蚊蠅

巴徼炎毒早

三月蚊蠅生

啞膚拂不去

蚊蠅

巴徼は炎毒早く、

三月にして蚊蠅生ず。

膚を啞ひて拂へども去らず、

遠耳薨薨聲

斯物頗微細

中人初甚輕

有如膚受譖

久則瘡瘡成

瘡成無奈何

所要防其萌

麼蟲何足道

潛喻儆人情

耳を遠る薨薨たる聲。

斯の物は頗る微細にして、

人に中たる初めは甚だ輕し。

膚受の譖の如き有り、

久しくして則ち瘡瘡成る。

瘡成るは奈何ともする無し、

要する所は其の萌を防がんのみ。

麼蟲 何ぞ道ふ足らん、

潜かに喩へて人情を儆む。

(六九六〜六九七頁)

右の詩は、白樂天が、元和十五年（八二〇）四九歳の年に、書いた作品である。この年の三月、蚊のような小さい虫が生じている。傍線部分に書かれたように、蚊蟻のような虫はたいしたものではなく、これを喩えに借りて、「人情」、あるいは人の気持ちを表現したのである。

さて、この詩作は、清少納言が『枕草子』の中に書かれた「蚊」と、どういう関係があるのか。便宜上のため、漢詩文の訳文及び『枕草子』原文の訳文を取り上げて、対照させ読んで確認したい。

まず、白樂天の「蚊蟻」詩の前半部分の現代語訳を取り上げたい。

人の皮膚に吸い付いて、払いのけても飛び去らず、ぶんぶんと数多く羽音を立てて耳の当りを飛び回る。この虫はかなり微細で、人の皮膚に当たった時の最初の感覚は非常に軽いのだが、それはまるで皮膚の表面に受けただけの誹謗中傷のようなところがあって、しばらくすると傷がでてしまったら、もうどうすることもできない。大切なのは、そのごく初期に防ぎとめることである。

(右書同)

次に、清少納言の「にくきもの」の章段の現代語訳文を掲げる。(本文は新編日本古典文学全集による)

第二六段　にくきもの

眠たいと思つて横になつてゐる時に、蚊が細いかすかな声で心細そうにぶーんと名のつて、顔のあたりにとびまわるの。羽風までも蚊の身体相応にあるのこそ、ひどくにくらしい。

(六七頁)

右、いずれも現代語の訳文を比べてみると、「蚊」に関する描写について、一致しているところが多い。白楽天は、蚊のような微細な虫の特徴について、はっきり明記している。また、このような微細な虫は、すぐに人の皮膚の上に傷を付けることがあるので、傷にならないよう、事前に防止することも述べている。

一方、清少納言は、章段の題目に書いたように、「蚊」は憎らしいものと断じている。この点からみると、清少納言は、白楽天の「蚊蟻」詩を全体的に受けて、「蚊」に対する気持を「にくきもの」の中で表しており、清少納言の「蚊」に対する態度は、白楽天と合致すると言えるであろう。清少納言の「蚊の細声」という描写は、白楽天の「蚊

蝻」の詩の心を受けて発想されたのではないであろうか。

五 おわりに

以上、清少納言の「蚊の細声」について考察した。同時代の仮名作者は、あまり触れていなかった「蚊」について、清少納言の特異表現は、元稹「蟲多詩 蝻子」に関する描写の「細虫」と『白氏文集』第十三卷「感傷」「蚊蝻」に関する「頗微細」という描写について、一致することが見える。

本論の第一部の『枕草子』における漢文学受容の総覧、第二部の『枕草子』における『白氏文集』の引用、第三部の前章の考察から、本章段にも清少納言は『白氏文集』「感傷」詩の「蚊蝻」を参照したと考えるのである。このような表現の基層において漢文学との関係がある部分に注意することで、新たに『枕草子』を読むことが可能になるであろう。

〔注〕

- (1) 松尾聰、永井和子『枕草子』新日本古典文学全集（小学館 二〇〇四）六七頁。
- (2) 四系統『枕草子』本文について、参考した文献及び引用文は、次の通りである。三卷本『枕草子』陽明叢書国書篇「枕草子 徒然草」（思文閣、一九七五）『枕草子』大東急記念文庫蔵（古梓堂文庫旧蔵）複製本（日本古典文学刊行会、一九七四）。松尾聰、永井和子校注『枕草子』新編日本古典文学全集（小学館、二〇〇四）。

能因本『能因本枕草子』〈上〉学習院大学蔵「影印シリーズ」（笠間書院、二〇〇五）。『能因本枕草子』〈下〉学習院大学蔵「影印複製本」（笠間書院、一九九五）。松尾聰、永井和子校注『枕草子』日本古典文学全集（小学館、一九七九）。前田家本『前田家本枕草子』「前田家尊経閣文庫蔵の写本の複製」（育徳財団、一九二七）。田中重太郎校注『前田家本枕冊子新註』（古典文庫、一九七一）。堺本『堺本枕草子』吉田幸一（古典文庫、一九九六）。田中重太郎校注『堺本枕冊子』改定版（古典文庫、一九五六）。また、田中重太郎『校本枕冊子』一、二（古典文庫、一九五三）。引用文の後にページ数を示した。

第三章 『枕草子』「唐鏡のすこし暗き、見たる」の表現考

——「心ときめきするもの」の章段を中心に——

一 はじめに

『枕草子』における漢文学の影響は、漢詩秀句の引用、中国故事の援用などの分析を通じて、これまでも多くの論が積み重ねられてきた。その点に関わる先行研究を一覧するだけでも、作者清少納言の漢籍についての素養は推し量られよう。しかし、筆者はさらに、一見、何気ないような叙述においても、かかる方面への清少納言の漢籍素養が現れているのではないのか、そのように考える。ついでには、「心ときめきするもの」の段を例に採り上げて、そこに漢文学の影響が現れているかどうかを考えたい。

該当段は、諸本全四系統三卷本、能因本、前田家本、堺本には、いずれも存在する。論述の便宜上、現在多くの論文に引用されている三卷本文により示す（以下同）。

心ときめきするもの 雀の子飼。ちご遊ばする所の前わたる。よき薫物たきて一人臥したる。唐鏡のすこし暗き、見たる。よき男の、車とどめて、案内し問はせたる。頭洗ひ化粧じて、香ばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なき所にて、心のうちは、なほいとをかし。待つ人などのある夜、雨の音、風の吹きゆるがす

も、ふとおどろかる。

(六九〇七〇頁)

清少納言は、七つの場面で、「心ときめきするもの」すなわち、心に惹かれる瞬間の心情を表している。これらの場面について、過去の研究では、どのように解釈されてきたのだろうか。次のように、確認してみたい。^①

1 雀の子飼

「その無邪気な様子に心ひかれてわれを忘れる意」(池田亀鑑)とあり、また「あまり小さいので、これが育つかしらと、心配してどきどきするが期待を持っている」(田中重太郎)との解説もある。

2 ちご遊ばする所の前わたる

「幼児を遊ばせている家の前を車で通り過ぎる時、一瞬の風景が心を暖かくする」(増田繁夫)という解説があり、また「牛車にひかれはしまいかと心配する」(田中重太郎)という解釈もある。

3 よき薫物たきて一人臥したる

「数種の香を色々に組み合わせで作った練り香」(石田穰二)という説明があり、また「何か良い事が起りそうなのである。話し相手などが居るとこういう気持は生じない」(渡辺実)という解説も見える。

4 唐鏡のすこし暗き、見たる

「舶来の貴重な鏡。これに曇りが出はじめた。やがてひどく錆びてしまうのではないかと、未来は絶望にながって、胸もつぶれる思い」（萩谷朴）と解釈されている。しかし、「唐鏡の少し暗き見たる」は、よく分らない。通説は、秘蔵の鏡の曇ったのを発見した時、とするが、言葉の解釈に少々無理があるようである」（石田穰二）という説明もある。

5 よき男の、車とどめて、案内し問はせたる

「取次を申し入れて（Ⅱ案内し）何か尋ねさせている時。「よき男」が何の用かとの期待」（渡辺実）であり、また「果たして自分を訪ねてきてくれたのかどうか、誰に何の用件があるのだろうか」と、屋敷内の若い女性は、わくわくする」（萩谷朴）との解説もある。

6 頭洗ひ化粧じて、香ばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なき所にても、心のうちは、なほいとをかし

「お化粧をし、着飾った女性が、鏡の前でひとりほほ笑んだり、眉をひそめたり、自分に話しかけたり。夢と期待に満ちたナルシズムがそこにはある」（萩谷朴）という解釈があり、また「自分のために自分を装う内的な幸福感」（松尾聰・永井和子）という解説もある。

7 待つ人などのある夜、雨の音、風の吹きゆるがすも、ふとおどろかる

「侍人が訪れたのかと」（渡辺実）注釈があり、また「恋人の訪れを待っているような

夜」(萩谷朴)との解説がある。

七つの場面に対する解釈を取り上げて見た。これらの解釈では、①と②は、いずれも「心配」と「心配ない」という両説が見える。つまり1「雀の子飼」と2「ちご遊ばする所の前わたる」は、必ずしも「心配」するとは言えない。また、3、5、6、7の解釈には、「心配」という解釈が見えない。このように考えると、「心ときめきするもの」の章段の主旨は、「心配」ではなく、すべて良いことに解説することが可能になる。とすると、大きな問題となってくるのは、4の解釈である。前掲したように、4の解説は、「曇り」や「錆び」また「未来の絶望」と指摘され、他説は認められなかった。

本稿は、この「唐鏡のすこし暗き、見たる」という表現は、「曇り」や「心配」ではなく、「心のうちは、なほいとをかし」のような嬉しい「心ときめきするもの」に解釈することができないのではないか。この問題について、漢文学の影響の視点から説明してみたい。

二 四系統本文における「唐鏡」に関する表現

周知のように、古典文学を解釈するとき、極めて重要なことは本文である。本章段「心ときめきするもの」の本文については、諸本全四系統の本文が存在する。論述のため、「唐鏡のすこし暗き、見たる」に関する三卷本、能因本、前田家本、堺本の本文を表にして、対照してみたい。^②

四系統本

本文

三卷本

翻字

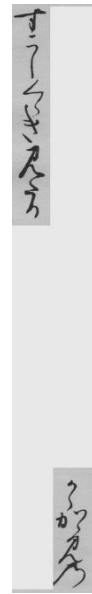
からかゝみのすこしくらきみたる



能因本

翻字

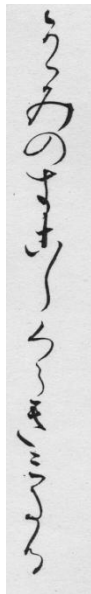
からかゝみのすこしくらきみたる



前田家本

翻字

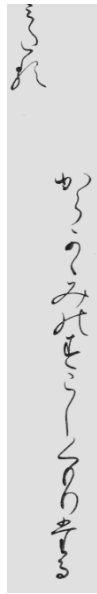
からかゝみのすこしくらきみたる



堺本

翻字

からかゝみのすこしくらきみたる



四系統本文を比べてみると、次のようにまとめられる。まず、三卷本と能因本の本文はほぼ一致。ただ、三卷本には仮名表記された「みたる」の「み」は、能因本では漢字で「見」である。次に、前田家本には、冒頭文「かゝ

み」の前に「から」が見えない。それ以外の本文は三巻本と合致する。また、堺本は、前半の「からかゝみ」は、三巻本、能因本と一致するが、後半の本文は、いずれも三巻本、能因本、前田家本の「くらきみたる」と違い、「くもりたるみたる」である。

四系統		唐鏡の	すこし	暗き	見たる
三巻	本	からかゝみの	すこし	くらき	みたる
能因	本	からかゝみの	すこし	くらき	見たる
前田家本		かゝみの	すこし	くらき	みたる
堺	本	からかゝみの	すこし	くもりたる	みたる

右に示したように、四系統本文の大きな相違点は、三巻本、能因本、前田家本の「くらき」と堺本の「くもりたる」という表現の違いである。

注意したい点は、「くらきみたる」と「くもりたるみたる」という微妙な違いである。二つの語彙の表現する意味は、いずれも「暗い」であるが、「たる」という助動詞があることから見ると、「くもりたるみたる」ということは、既に「くもり」になった事実に断定することができる。

このようにみると、三巻本、能因本、前田家本の「くらきみたる」より、堺本の「くもりたるみたる」本文は、現代読者にとっては分かりやすい本文である。しかし、他の三系統の本文には断定助動詞「たる」がないことに注意する必要がある。

では、この部分に対して、先行の研究では、どのように言及されてきたのだろうか。次項で確認してみたい。

三 研究史による「唐鏡」の解釈

『枕草子』の研究史を溯ると、古い注釈には、近世の加藤盤齋と北村季吟の注釈がある。盤齋と季吟は、「唐鏡」について、それぞれの次のように述べている（傍線は筆者が付けたものである）。

○加藤盤齋『清少納言枕双紙抄』（延宝二年（一六七四）五月）

からの鏡のすこしくらき見^①いたる。

【からのかぐみ】とは、うれしき心をいふ心を也。^②

○北村季吟『枕草子春曙抄』（延宝二年（一六七四）七月）

からのかぐみのすこし^{「くもりたる、展」}見・たる

からのかぐみのすこしくらき 唐鏡也。いみじき鏡を哀^{アハレ}今少明ラかなれかしと思ふこゝろなるべし。^③

右に傍線を付けたように、盤齋と季吟の解釈は違う。盤齋の解説は「うれしい」という気持ちであり、季吟の解説は「うれしい」ではなく、「哀れ」である。なぜ二人の解説は、「対立」しているのか。

先行研究によると、盤齋と季吟の校正した本文は、いずれも能因本系統本文である。^④ 同じ能因本系統本文である

のに、盤齋と季吟の本文は異なる部分が存在している。例えば、前に挙げたように、盤齋の本文の「くらき見いでたる」のうち、「いで」という語は、季吟の本文には見えない。また、季吟の本文の「くらき見たる」の傍には「くもりたる・辰」という注記が施されている。この「くもりたる」という表現は、前述の如く、堺本系統本文である。ところが、この注記は、盤齋の本文には記していなかった。

以上のことから、二つの疑問が浮かび上がってくる。一つは、盤齋の本文に見える本文は、季吟の本文には見えず、盤齋が見た本文を、季吟が見たのか、それとも見たが重視していなかったのか。もう一つは、盤齋が堺本系統本文を見たのかという疑問である。

盤齋と堺本系統本文との関係については、盤齋自身が書いた「奥書」が参考となる。

此本者佐野満雅持来してけるを見るに世に流布の本とはかはりて少異なるゆへに写もて行に書写のあやまりと見えてあやしき所略あり然とも筆そめて次第として功終畢

承応四年八月晦日

信秀書生わかのみちにこころさしふかくありける故に大原にこもりてありし時かき侍るをみいてておくりぬるなりまくら草紙異本あまたありこれは幽齋法師のもてあそひ給ふ本の写なり

寛文元年八月廿日

盤齋⁽⁷⁾

盤齋は承応四年（一六五五）佐野満雅が持来した堺本系統異本を書写した。その後、寛文元年（一六六一）信秀

という人がさらに異本を持って来て、盤斎がさらに書写したのである。盤斎が極めて早い時期に、堺本系統異本を書写したことが分かった。しかし、後に盤斎が校正した『清少納言枕双紙抄』本文には、特に「唐鏡」に関して、堺本系統異本について注記をしていない。盤斎と季吟は、堺本系統異本に関して取捨する態度が違うことは分かる。次に、盤斎が校正した本文の「くらき見いでたる」のうち、「いで」という語は、季吟の本文には見えない。この点に示唆されたことは、盤斎が見た本文を、季吟が見たのだろうか、それとも見たが重視していなかったのかというものである。

かつて、盤斎と季吟の、本文に対する忠実さについて、川瀬一馬は次のように述べている。

今回は盤斎抄を本書の底本とすることにした。これは枕草子の流布本となっている北村季吟著の「枕草紙春曙抄」(延宝二年刊)とほぼ同系統の本文であるが、春曙抄よりも本文をいじっていないと思われる。⁸⁾

以上のように、盤斎と季吟の、「唐鏡のすこし暗き、見たる」に対する解釈には、それぞれ「うれしい」と「哀れ」と解釈された理由は、各自の依拠した本文が違うことにあることが分かる。すなわち、盤斎が校正した本文「くらき見いでたる」であり、季吟が堺本系統本文「くもりたる見たる」である。

では、盤斎と季吟以降、現在に至るまで、「唐鏡のすこし暗き、見たる」に関しては、如何に解釈されてきたのだろうか。これを次のように確認してみたい。

周知のように、明治以降、昭和から現在に至るまで、多くの『枕草子』底本は、三卷本系統本文を利用している。例えば、三卷本底本により、日本古典文学大系『枕草子』(岩波書店)で、池田亀鑑は、次のように述べている。

大切な鏡にすこし曇りが生じたのを見出して心ときめきされる意なりと解し、それが大体通説となっている。しかし、鏡に曇りを発見して驚く心「心ときめき」よりむしろ「胸つぶる」の語で表現されるべきであろう。⁽⁹⁾

池田亀鑑は、「曇り」のような心情に対して、「心ときめき」より、むしろ「胸つぶる」方が相応しいと指摘した。池田氏は、また次のように詳しく説明している。

胸がときめくことで、何かを予想し期待するとき心が自然に動く状態についていう。未知または未然の事態への予想なので心の動揺はさけ得ないが、悪いことについては用いられない。その点「胸つぶる」の語と対照的である。⁽¹⁰⁾

そして、池田亀鑑は、「唐鏡のすこし暗き、見たる」について、次のように解説した。

かつて私見として、上等な鏡だというのに曇りが出ているのを見た時は、思わず苦情をいたくなって自制できないとの解釈を提出したが、なお考えるのに、「くらき」を陰翳をおびた状態と解し、上等な鏡への心ときめきとすることもできるように思う。⁽¹¹⁾

しかし、池田亀鑑の解説は、田中重太郎に認められなかった。田中重太郎は、能因本底本として『枕冊子全注釈』の中で、池田亀鑑の解説については、次のように反対している。

池田亀鑑氏は「悪いことについては用いられない。その点『胸つぶる』の語と対照的である」（『大系』頭注）と説かれたが、「心ときめきする」を「胸つぶる」とあまり対照的に見ようとするところに無理があるようで、この冊子の「胸つぶるるもの」と読み比べると、この二つの語にはそうした要素もあるが、程度の差ということも考えられるし、「心ときめきす」には、期待と不安とが入りまじっている¹²。

文字の如く、田中重太郎は「心ときめきす」の意味は、「期待と不安が入りまじっている」ようすとして理解するべきと指摘されている。田中重太郎は、「悪いことについては用いられない。その点「胸つぶる」の語と対照的である」という池田亀鑑の解説に対して、「無理がある」と反発している。

池田亀鑑氏は「鏡に曇りを発見して驚く心は『心ときめき』よりむしろ『胸つぶる』の語で表現されるべきであろう。（中略）『くらき』を陰翳をおびた状態と解し、上等な鏡への心ときめきとすることもできるように思う」（『大系』補注）と説かれるが、前にも述べたように、これは「心ときめきする」と「胸つぶる」と、あまりに対照的に見ようとするところに、無理があるようである。ここは、舶来のたいせつな鏡が曇っているのを見て、はっとした瞬間の気持をいったものと、すなおに解しておくほうがよい¹³。

田中重太郎は、池田亀鑑の解釈には「陰翳をおびた状態」で、「上等な鏡への心ときめき」することと「胸つぶる」こととの区別することは、「無理があるようである」と反発している。そして、田中重太郎は、すなおに考えて、「たいせつな鏡が曇っている」状態で、つまり、「不安」の通説のままがよいと解説されている。

その後、田中重太郎の解説と類似する解釈は、萩谷朴の解説である。萩谷朴は『枕草子解環』で、次のように述べている。

高価な舶来の鏡、これに曇りが出はじめた。やがてひどく錆びてしまうのではないかと、未来は絶望にもつながつて、胸もつぶれる思いがする⁽¹⁴⁾。

萩谷朴の解釈は、田中重太郎の解説より、具体的に「曇り」を「錆び」と指摘し、「未来は絶望」というような解釈を記した。

しかし、萩谷朴の解説を必ずしも踏襲しているとは言えず、同じ三巻本底本である新日本古典文学大系『枕草子』頭注で、渡辺実⁽¹⁵⁾は次のように記述している。

「唐鏡」は中国製の鏡。「鏡」を「見る」と言えば、顔を映すことだから、これは、舶来の鏡ちよつと曇ったのに顔を映した時の気持である。自分が高貴な美女になったように見える。現実より良い方向にかけはなれた例。

「少しくらき」は夜目遠目の類で、共感を呼んだであろう⁽¹⁵⁾。

萩谷朴の解釈と全く違う方向で、渡辺実⁽¹⁵⁾は、「曇った」鏡を見る時に、「未来は絶望」ではなく、「高貴な美女」になると解釈されている。

以上のように、近世以降、現在に至るまで、「唐鏡のすこし暗き、見たる」に対して、代表的な池田亀鑑、田中重

太郎、萩谷朴、渡辺実の解釈を見てきた。四人の解釈は、二組に分けられる。一組は、池田亀鑑と渡辺実の解釈により悪いことではなく、良いことに惹かれる心情を表すものである。もう一つ組は、田中重太郎と萩谷朴の解釈で、良いことではなく、大切な鏡が曇り錆びになって、不安な心配する気持ちの表現である。

これらの四人の二組の解釈は、近世の盤斎と季吟の説に類似している。すなわち盤斎の「うれしい」（池田亀鑑、渡辺実）気持ちであり、季吟の「哀れ」（田中重太郎、萩谷朴）な心情であろう。ようするに、「唐鏡」に関する解釈については、近世からいままで「二説」の状態であろう。

この二説はどちらが適切であろうかという疑問に回答は、極めて難しい問題である。ただ、前に分析したように、根本の原因は、四系統本文の中に、どちらの本文に従って展開することの問題である。

堺本文による「くもりたる」異文には、断定助動詞「たる」があることから、本章段の七つの場面のうち、前後文脈から見ると、相応しくないときが見える。また、堺本系統本文には、指摘され、問題となる箇所があるということは注意しなければならないところである。⁽¹⁶⁾とすると、三巻本、能因本、前田家本の本文による「くらきみたる」に従って解釈するべきと思われる。

私見によれば、この「唐鏡の少し暗き、見たる」という描写には、何か唐の鏡に関わる典故があるのではないだろうか。あるいは、この「唐鏡」に関する発想は、唐の文学との関係があるのではないかと考える。そこで、「唐鏡」と漢籍の関係について展開してみたい。

四 平安文学における「唐鏡」及び「鏡」と漢籍の影響

唐鏡は、元来漢鏡と並んで中国で特殊な発展を遂げた金属鏡の主要なもので、宋代の『博古図録』（宣和五年、一一二三）以来、古鏡の著録にはその種の遺例を収録する実状にある。日本では、古墳時代より大量の唐鏡が日本に輸入され、各地で出土されただけでなく、多種多様の唐鏡の優作が伝世している。例えば、正倉院に伝世されるこれらの鏡はもちろんの事、奈良県高松塚古墳出土の海獸葡萄鏡は中国本土ではいまだ例を見ないものである。七世紀後半から平安中期まで、唐鏡を模倣して作られた鏡は、「唐式鏡」と呼称されている。⁽¹⁾

該当段「心ときめきするもの」において「唐鏡」が、輸入された「唐鏡」、それとも日本で唐の様式に作られた唐式鏡であろうか、容易に判断することは難しい。ただ、いずれにしても、この「唐鏡」は、唐との間に何か関係があることは察せられる。そして、おそらくこの鏡は、唐の文学における鏡と関係があるであろう。なぜなら、日本古典文学における鏡の表現は、中国の文学との関係が深いからである。この点について、確認してみたい。まず、最初に、『風土記』『常陸国風土記』『久慈の郡』、次のような記事を取り上げたい。

東山石鏡 昔在魍魅 萃集翫見鏡 則自去 俗云疾鬼 面鏡自滅

東の山に石の鏡あり。昔、魍魅在り。萃集りて鏡を翫び見て、すなわち自去りき。俗、疾き鬼は鏡に面へば自づから滅と云ふ。⁽²⁾

「魍魅」は、本書頭注で、「人面獸身、四足にして好く人を惑はす」（史記注）という怪物の称」で、だが、この「怪物」が、鏡を見て逃げるといふ描写は興味深いところである。このような故事が、葛洪『抱朴子』内篇卷十七

「登渉」にも見られる。

是以古之入山道士。皆以明鏡徑九寸已上。懸於背後。則老魅不敢近。人或來試人者。則當顧視鏡中。其是仙人。及山中好神者。顧鏡中。故如人形。若是鳥獸邪魅。則其形貌。皆見鏡中矣。⁽¹⁾

昔、山に入る道士たちは皆な、直径九寸以上の鏡を背後に吊していた、こうすれば劫を経た魅もひとに近づけない。胆を試そうとしてやって来るものがあれば、ふり返って鏡の中を見よ。相手が仙人あるいは山中の良い神なら、鏡の中を見ると人間の姿のまま映る。もしそれが鳥や獣の悪い魅だったら、その顔かたちすべてが鏡の中に映る。⁽²⁾

右の描写を比べてみると、いずれも破邪の鏡のイメージが読まれている。ただ、ただ、『風土記』の描写は、漢籍からの発想と考える。

次に、平安初期勅撰三集のうち、『文華秀麗集』（日本古典文学大系）に収録された嵯峨天皇の（滋野貞主の「秋月歌」）に唱和した御製「和内史貞主秋月歌」には、次のような鏡に関わる詩句がある。

雲暗空中清輝少 雲暗く空中に清輝少く

風来吹拂看更皎 風来りて吹き拂ひ看更に皎らかなり

形如秦鏡出山頭 形は秦鏡の如く山頭を出で

色似楚練疑天曉　　色は楚練に似て天の曉くるかと疑ふ

(三〇六～三〇七頁)

「秦鏡」は、空海の『三教指帰』卷下「假名乞児論」(日本古典文学大系)にも、次のように見える。

吾当為汝等。略述綱目。宜鑒秦王顯偽之鏡。早改葉公懼真此迷。俱醒触象之醉。並学師吼之道。

吾当に汝等が為に略綱目を述べむ。宜しく秦王を偽を顯はす鏡を鑒みて、早く改葉公が真を懼づる迷を改め、俱に触象の酔を醒して並びに師吼の道を学ぶべし。

(一二六～一二七頁)

上の文には、いくつかの中国の故事を引用している。文字のように、秦王の鏡は、秦の朝廷の鏡に関わる故事である。「葉公」という人が、竜が好きで、本物の竜を見て失神気絶したという中国故事である。これらの「秦鏡」と「葉公」を、空海は『性靈集』「卷第一」の「遊山慕仙詩」にも用いている。

葉公珍假借　　葉公假借を珍とし

秦鏡照真相　　秦鏡真相を照らす

(一五八～一五九頁)

右に示したように、「葉公」という故事は、元来漢の劉向『新序』に見える。「秦鏡」は、秦の始皇帝の鏡である。この「秦鏡」は、横が四尺、高さが五尺九寸、いずれも表と裏が見られる。手を心の上に置いて見ると、腸や胃や肺などが見える。病気になった時、心を押してみると、その病因が分るとい⁽²¹⁾う。

次に、菅原道真『菅家後集』（日本古典文学大系）「秋夜九月十五日」の詠作には、次のような鏡に関わる詩句が見える。

昔被榮花簪組縛

昔は榮花簪組に縛がれき

今為眨謫草萊囚

今は眨謫草萊の囚たり

月光似鏡無明罪

月の光は鏡に似たれども 罪を明むることなし

風氣如刀不破愁

風の気は刀の如くなれども、愁へを破ることあらず

（五〇〇頁）

この詩句の興味深いことは、月光は鏡に似ているけれども、「罪」と書かれたのである。『菅家後集』頭注に「我が無実を訴えたいというはげしい願望がこもる」と注釈されているが、なぜ鏡に「罪」がないのかということは触れてこなかった。これは恐らく菅原道真は漢籍の典拠を援用したのではないであろうか。このような「鏡の罪」説が、『韓非子』「觀行第二十四」に見える。

古之人、目短於自見、故以鏡觀面。智短於自知、故以道正己。故鏡無見疵之罪、道無明過之怨。目失鏡、則

無以正鬚眉、身失道、則無以知迷惑⁽²³⁾。

昔の人は、目には自分の顔を見るのが難しいからとて、鏡を用いて顔をみることにした。また知る力も自分のことを知るには十分でないからとて、道を定め、これを用いて己れを正しく保つことにした。故に鏡が物の欠点を照らし出すことは罪でなく、道に由ることなしには、正しい判断ができず迷うのである。

漢詩句ではなく、真名で書かれた仏典及び説話における鏡の表現について、漢籍の故事との繋がりが見える。例えば、『大日本国法華経験記』巻下「源信僧都」の修行について、次のような記事がある。

夢見。堂中有藏。其中有種々鏡。或大或小。或明或暗。爰有一僧。取一暗鏡與之。小兒陳云。此小暗鏡中何用乎。欲得彼大明鏡。僧答云。彼非汝分。々々是也。持至横河。加磨云々。夢覺⁽²⁴⁾。

右文は、『今昔物語』巻第十二「横川源信僧都語第卅二」にも収録されている。

夢ニ見ル、「堂ノ中ニ藏有リ。其ノ藏ノ中ニ様様ノ鏡共有リ。或ハ大キ也、或ハ小サシ。或ハ明ラカ也、或ハ暗タリ。其ノ時ニ、一人ノ僧出来テ、暗タル鏡ヲ取テ、源信ニ与フ。源信、僧ニ語テ云ク、『此ノ鏡小クシテ暗タリ。我レ何ニカセム』。彼ノ大キニテ明ラカナル鏡ヲ取テ、源信ニ与フ、『彼ノ大キナル明キ鏡ハ汝ガ分ニハ非ズ。汝ガ分ハ此レ也。速ニ比叡ノ山ノ横川ニ持行テ、可磨瑩キ也』ト云テ、与フ」ト見テ、夢覺⁽²⁴⁾ヌ。

源信僧都は、高尾山に籠り居たとき、年に三回の齋戒が行われている。ある日、こんな夢を見た。中堂の中には、色々な鏡があった。一人の僧が一つ暗い鏡を源信にくれた。源信は、この鏡は暗くてまた小さいと言って、自ら明るく大きい鏡を取った。その時、僧都が、この大きな鏡は、あなたのものではなく、貴方の鏡は、こちらであると言って、一つの小さい暗い鏡を渡してくれた。はやく持って行って比叡山の横川で磨きなさいと僧都から言われた。その時、源信の夢は覚めたという。

この話の最後の鏡を磨くという説は、実に、『北堂書鈔』「鏡」項目の中で、「磨鏡取資」という故事があるのである。すなわち、徐孺子という人が、貧乏で、鏡を磨きで賃を稼ぎ、後に成功したという故事である。おそらく源信修行の説話には、暗い鏡を磨く、中国の「磨鏡取資」の故事から発想したのではないかと考えられる。つまり、源信は成長のため、自らの努力に励むのではないかと考える。

この話の中では、暗い鏡が出てきたのが、決して「うれしい」ものではない。

次に、もう一つの漢文の世界で現われた「明鏡」について分析してみたい。

それは、『淮南子』「卷二俶真訓」の次の例である。

人莫鑑於流沫、而鑑於止水者、以其静也。莫窺形於生鐵、而窺於明鏡者、以其易也。

人が流水を鏡とせず、止水を鏡とするのは、それが静かだからである。粗鉄に姿をうつすことなく、明鏡にうつすのは、それが平らだからである。⁽²⁾

右に示したように、流れる水は鏡にならない、粗末な鉄に姿を映すこともできない。

文字の通り、「明鏡」は優れるの特性があるゆえ、詩語として、人間の美德を比喻する表現も見られる。例えば、『和漢朗詠集』（日本古典文学大系）に収録された野相公の詩句は、次のように見える。

明鏡乍開隨境照 明鏡乍ちに開けて境を随ひて照す

白雲不著下山来 白雲は著かず山より下りて来る

（二〇五頁）

以上のように、文学作品における鏡の意味は、日常の顔を映すだけ道具ではなく、人間の優れる知恵、美德などの性格を比喻する表現である。また、歴史の鏡についても、注目したいところであろう。

平安時代における史書の名称による「鏡」についても、注意したいところである。例えば、『大鏡』という名称における中国文化からの影響については、すでに様々な論考があることはいうまでもなく、ここでは、二例の漢籍の歴史の鏡に関する例を取り上げてみよう。まず『孔子家語』には、次のような名句がみえる。

夫明鏡所以察形 往古所以知今

明鏡は形をはつきりと写し出すもので、往古は、現在を理解する手段である。⁽⁶⁾

次に、『旧唐書』には、唐太宗（五九九～六四九）に関わる「三鏡」という有名なエピソードが、次のように記さ

れている。

夫以銅為鏡、可以正衣冠、以古為鏡、可以知興替、以人為鏡、可以明得失。朕常保此三鏡、以防己過。今魏徵殂逝、遂亡一鏡矣。^{（三）}

唐太宗は、常に三つの鏡をご用意になる。一つは朝服を整理する銅鏡であり、二つは時代を変える興衰を知るための歴史の鏡であり、三つは自らの過失を知るための人の鏡である。この「人の鏡」は魏徵である。魏徵が急に逝去した。「三鏡」のうち、一つの鏡は亡くなったと唐太宗皇帝は悲嘆している。

右のエピソードは、『貞觀政要』「卷二任賢第三」にも見える。唐太宗としては、鏡の効用は三つである。衣服を調整する鏡、時代を知る歴史の鏡、自らの欠点を知る人の鏡である。

周知のように、白樂天の「百鍊鏡」という詩作は、唐玄宗皇帝に関する鏡の故事を援用して作られた作品である。この「百鍊鏡」詩が、『白氏文集』「卷四」「新樂府」に収録されている。

「百鍊鏡」という由来について、唐玄宗の時、楊州の銅をもち、船の中に鑄られたものである。唐玄宗は「百鍊鏡」を珍視し、祖の唐太宗のような英明に天下治まりという。全詩は長いので、ここでは、唐太宗に関する典故の部分を取り上げてみたい。

太宗常以人為鏡 太宗常に人を以て鏡と為たまふ

鑒古鑒今不鑒容 古を鑒み、今を鑒みて容を鑒みたまはず

この詩は、平安貴族は熟知しているはずであろう。なぜなら、右に挙げた二句の後に続けた詩句は、『和漢朗詠集』「下巻」「帝王」篇に収載されているからである（日本古典文学大系）。

四海安危照掌内

四海の安危は掌の内に照らし

百王理乱懸心中

百王の理乱は心の中に懸けたり

（二一八頁）

漢詩文のみならず、仮名文学における鏡の表現にも、漢籍との関係が見える。例えば、『源氏物語』「賢木」巻、源氏は、次のような「鏡」の和歌を詠まれている。

さえわたる池の鏡のさやけきに見なれしかげを見ぬぞかなしき⁽²⁸⁾

厳冬に凍っている池の水面は鏡のようである。おみなれ申した院の面影を拝見することのできないのが悲しいという心情を表している。このような池の鏡の和歌は、『大和物語』（日本古典文学大系）第七十二段にも見える。「池は猶むかしながらの鏡にてかげみし君がなきぞかなしき」。池の面は、昔のままに、鏡のようだが、そこに姿を映されていた宮様がもはやおいでなされないのは悲しいことだ（二六五頁）。

この「池の鏡」という表現は、唐詩では、池を鏡に比喻する詩作が見える。例えば、白楽天が大和四年（八三〇）五九歳に書かれた「看採菱」（『白氏文集』第二八卷律詩）の冒頭詩句に、「菱池如鏡淨無波 白点花稀青角多」があ

り、また張説「奉和聖製同玉真公主遊大哥山池題石壁」には、「池如明鏡月華開 山学香爐雲氣来（池は明鏡の如く、月華を開く。山は香爐のように、雲氣を来る）」が見られる。

『枕草子』における「鏡」の用例は六箇所。本章段以外の場面、四例は、日常用の道具であるが、「鳥は」章段の一例は漢籍との関係があることが、すでに先行の研究で指摘されている。念のため、本文を確認してみよう。

山鳥、友を恋ひて、鏡を見すれば、なぐさむらむ、心わかう、いとあはれなり。

（九五頁）

この山鳥が、鏡を見て自分で踊るという説話については、過去の研究に指摘されたように、中世の歌学書類に種々見える。例えば、「山鳥はめをとこ一つ所には寝ず、山の尾を隔ててぬるに、暁にを鳥のはつ尾にめ鳥の影の映るを見て鳴けば、それをはつをに鏡かくとは云なり」（袖中抄十二）がある。山鳥と鏡の話は、大江朝綱「為清慎公辞右大臣、第三表」にも「山鶏ノ円鏡ニ対フ二類ス。舞ヒテ何ニカ為シ」（本朝文粹、五）と見える。ただし、『袖中抄』にいう二種の用法はいずれも漢籍を典拠とするものであるが、前者は『芸文類聚』鳥部の「山鶏」に引く諸話などによったものであり、後者は同じく「鸞」の話につながるものであると増田繁夫はこのように述べている。^{②③}

『芸文類聚』「第九十一巻」「鳥部中」「山鶏」項目には、次のような故事がある。『異苑』に引き、ある山鶏は自らの毛が好きで、水に映してそれから踊る。後に、魏武の時、鶏を皇帝に献上した。公子蒼舒は人に大きな鏡を鶏の前に置いた。すると、鶏は鏡を見ながら、踊り出し止まらず、疲れて死んでしまったという。

以上、いくつかの鏡に関する漢籍との関係がある表現を提示してきた。文学における鏡の意味は日常用の道具よ

り真実を言う、偽装を識別、歴史を見るなどの寓意に注目したい。大谷雅夫は次のように述べている。

中国の文学における鏡は、化粧道具としての鏡そのものを言うか、静かな水面の譬喩か、または、虚心ゆえに万事に融通無碍に応え、自らは損われなという聖人の心を譬える表現であつた。それは、鏡を生活に実用した上に、それを自然描写にも、思想の表現にも応用した、いわば文明人としての鏡の見方なのであつた。⁽³⁰⁾

このように、本章段「心ときめきするもの」による「唐鏡の少し暗き、見たる」において「唐鏡」の解釈は、唐の文学における鏡の典拠について考えなければならない。なぜなら多くの鏡に関わる事典は、唐の鏡と繋がるからである。

五 唐代伝奇小説『古鏡記』による「暗い鏡」——「宝鏡」

周知のように、唐代文学と言うと、多くの作品は、いわゆる「唐詩」である。唐詩における「鏡」については、前述した如く、鏡に関わる故事、典拠などが援用されている。しかし、暗い鏡は見当たらない。一方、唐代伝奇小説に目を向けて検証してみると、確かに唯一暗い「宝鏡」があつた。この鏡は、見出しに示したように、『古鏡記』という伝奇小説である。

いったい、この鏡はどのように暗くするのか、『枕草子』の「暗き見たる」とどういう関係があるのか、次のように分析してみたい。

『古鏡記』作者の王度は、隋と唐の両朝代に関わる人物である。『古鏡記』によると、最後の年次は、大業十三年（六一七）、隋朝滅亡の直前であり、翌年（六一八）は、李氏父子（李淵「高祖」と李世民「太宗」）が、唐を建国した年である。『古鏡記』は最初に唐の末期に編纂された『異文集』に収録されている。唐の顧況が『戴氏広異記序』に、唐の「国書」一種「王度古鏡記」と記している。^③

作者王度は、隋の汾陰の侯先生から、一つの古い鏡を貰った。この鏡は、人間を侵害する妖怪を識見することができるので「宝鏡」という。大業七年（六一一）から大業十三年（六一七）まで、様々な場面で、この鏡の神奇的なことが現われている。

では、この「宝鏡」の不思議な「暗く」なる特性は、どのようなものなのか、『古鏡記』の原文を、次のように確認する。

大業八年四月一日、

大業八年の四月一日には

太陽虧。

日蝕があった。

度時在臺直。

私はその時、御史台の当直であった。

晝臥廳閣、

昼間役所の部屋に寝ころんでいて、

覺日漸昏。

太陽が次第次第に暗くなるのに気がついた。

諸吏告度以日蝕甚。

役人たちがひどい日蝕だといって私に知らせにきた。

整衣時、引鏡出、

起きあがり着物をきちんと着ようとして、

自覺鏡也昏昧、

鏡を引き出したところ、鏡もやはり暗くなつて

無復光色。

以前のような光のないのに気がついた。

度以、寶鏡之作、

私は思った、宝鏡の作り方は、

合於陰陽光景之妙。

日月の光の靈妙なはたらきと合致させてあるのだ、

不然、

そうでなければ、

豈合以太陽失曜、

どうして太陽が光を失うことによって、

而寶鏡也無光乎。

宝鏡も光がなくなるようなことがあるう、と。

嘆怪未已、

この不思議に感嘆しているうちに、

俄而光彩出、

ほどなくうるわしい光が出だすと、

日亦漸明。

太陽も次第次第に明るくなってきた。

比及日復、

太陽がもとにもどった時には

鏡亦精朗如故。

鏡ももとのように光りかがやいた。

自此之後、

これからのち、

毎日月薄蝕、

日蝕・月食が近づくたびに、

鏡亦昏昧。

鏡も暗くなるのであった。³²

作者王度が、初めて発見した宝鏡が暗くなる日は、大業八年、つまり六一二年の四月一日である。この日、王度は昼寝の時、太陽の光が暗くなって、役人から日蝕のことが報告されていた。そして、王度が、鏡を持って外に出ると、鏡も暗くなってきたのである。また、日蝕が終わり、太陽の光が戻ってくると、不思議なことに、宝鏡の光

も戻ってくるということであつた。その後、日蝕だけでなく、月蝕のときにも、鏡の光が失われる。これを何回も確認したのである。

この宝鏡は、日蝕と月蝕のとき、自らの光を失い、暗くなることは、確実であろう。

もし清少納言が、「唐鏡の暗く見たる」という表現が、この「宝鏡」を指すとすれば、「心ときめきするもの」の章段は、すべて嬉しい物として、解釈することに無理ではないだろう。

もう一度、本論の冒頭に上げた七箇所を見てみよう。

1 雀の子飼

2 ちご遊ばする所の前わたる

3 よき薫物たきて一人臥したる

4 唐鏡のすこし暗き、見たる

5 よき男の、車とどめて、案内し問はせたる

6 頭洗ひ化粧じて、香ばしうしみたる衣など着たる。ことに見る人なき所にても、心のうちは、なほいとをかし

7 待つ人などのある夜、雨の音、風の吹きゆるがすも、ふとおどろかる

1は可愛い動物。2は可愛い子供。3は綺麗な匂い。4は不思議な宝鏡。5は好きな人と会う嬉しい気持ち。6は髪の毛を洗ってすっきりしたよい気持ち。7は恋人を待ち興奮している敏感な心情。このように、七つの場面には、よいこと、嬉しいこと、期待していることと解釈することが可能になるであろう。そうすると、この章段の

描写は、実物より精神的な心の気持ちを表すことを趣旨として纏めることができるだろう。

またこのように解釈すると、近世の盤斎の「うれしき心」と一致し、現代の渡辺実氏のように、悪いことではなく良いものと解釈することを合致するのである。

六 おわりに

以上、『枕草子』「心ときめきするもの」の章段の「唐鏡のすこし暗き、見たる」を中心に述べてきた。

本章段の四系統『枕草子』の三卷本、能因本、前田家本及び堺本の該当する本文を取り上げて分析し、四系統本文の異文、盤斎と季吟の依拠した本文を検討した。

先行の研究では、「唐鏡の少し暗き、見たる」に関する解釈史の流れを整理した。盤斎の「嬉しき心」、季吟の「哀れなところ」における「二説」の解釈は、現在に至るまで存在されている。そこで、盤斎の独自の異文「くらき見いでたる」と季吟の堺本系統異文による「くもりたる見たる」の解釈の適切さを考証した。その結果、「心ときめきするもの」の主旨によって、盤斎の「嬉しき心」の解釈は相応しいと考えた。

そして、鏡に関わる描写を検証したうえ、唯一暗き特徴がある「宝鏡」は、唐の伝奇小説『古鏡記』にあることを確認した。

「唐鏡のすこし暗き、見たる」という表現は、『古鏡記』による「宝鏡」によれば、嬉しき心と解釈することはできる。そうすると、「唐鏡のすこし暗き、見たる」は、「心配」ではなく、「宝鏡」に思い期待する「心ときめきする」心情を表すのである。

こうした結果、唐代伝奇小説が『枕草子』に与えた影響については、新たな視点に注目すれば、解釈する価値があるであろう。また『枕草子』における難解部分を説明するためには、漢文学からの考察が不可欠な方法と考えることが可能になってくる。

〔注〕

(1) 本章段に関する注釈によって、取りあげた解釈文は、次のような諸本に拠る。

池田亀鑑『枕草子』日本古典文学大系（岩波書店 一九七二）

田中重太郎『枕冊子全注釈』日本古典評釈・全注釈叢書（角川書店 一九七二）

石田穰二『新版 枕草子』（角川ソフィア文庫 二〇〇六）

渡辺実『枕草子』新日本古典文学大系（岩波書店 一九九九）

萩谷朴『枕草子解環』一（同朋舎 一九八一）

松尾聰・長井和子『枕草子』新編日本古典文学全集（小学館 二〇〇四）

(2) 三卷本底本は大東急記念文庫蔵『枕草子』日本古典刊行会複製本に拠る。能因本底本は学習院大学蔵『枕草子』笠間文庫複製版に拠る。前田家本底本は尊経閣文庫蔵の写本の複製本に拠る。堺本底本は、高野辰之旧蔵慶長頃古写本『堺本枕草子』、古典文庫影印本に拠る。また田中重太郎『校本枕冊子』（古典文庫 一九七四）及び林和比古『堺本枕草子本文集成』（日本書房 一九八八）に参照した。

(3) 加藤盤斎『清少納言枕双紙抄』（誠進社 一九七八）一四一頁。

- (4) 北村季吟『枕草子春曙抄〔扛園抄〕』(誠進社 一九七八)一〇一頁。
- (5) 中西健治「伝能因所持本」『枕草子大事典』(勉誠社 二〇〇一)七五頁。
- (6) この「も」については、堺本諸本による異なる部分がある。例えば、山井本『清少納言枕さうし』(桃園文庫旧蔵)二冊による盤斎の「奥書」には「大原にこもりて」と記されている。龍門本『清少納言枕草紙』(龍門文庫蔵)上下二冊にも見えるが、無窮会本『異本枕草紙 完』には、「大原にこり」の中には「も」が脱落している。本稿の引用文は、『清少納言枕さうし』により、林和比古『堺本枕草子本文集成』を参照した。
- (7) 林和比古『堺本枕草子本文集成』下(日本書房 一九八八)一九五二〜一九五三頁。
- (8) 川瀬一馬『枕草子』「序」(講談社 一九八七)三〜四頁。
- (9) 池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』(岩波書店 一九七一)三三六〜三三七頁。
- (10) 池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』(岩波書店 一九七一)七二頁。
- (11) 池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』(岩波書店 一九七一)三三六〜三三七頁。
- (12) 田中重太郎『枕冊子全注釈』一(角川書店 一九七二)二六三頁。
- (13) 田中重太郎『枕冊子全注釈』一(角川書店 一九七二)二六四頁。
- (14) 萩谷朴『枕草子解環』一(同朋舎 一九八一)二七五〜二七六頁。
- (15) 渡辺実『枕草子』(岩波書店 一九九九)三七頁。
- (16) 堺本系統本文の信憑性については、四人自身の観点を取り上げてみよう。(張…表記形式は変えるところがあり、傍線も施した。)

①池田亀鑑『日本文学研究資料叢書 枕草子』(有精堂 一九九一)

但し堺本には、著しい後人の補筆が認められるのであって、現存の形を以って直ちに古い形のままであると断言し難い事は勿論である（「枕草子の形態に関する一研究」七四頁）。

②田中重太郎『陽明叢書 枕草子 徒然草』（思文閣 一九七五）

いうまでもなく、清少納言枕冊子の現存諸本は、池田亀鑑博士の分類せられたように

一 伝能因所持本系統

二 三卷本（安貞二年奥書本）系統

三 前田家本

四 堺本系統（宸翰本を含む）

の四つの系列にわけられる。これら四系統本のうち、三は書写年時は現存本中最古のものではあるが、後人の改編編纂によることが明らかであり、四も現存本は作者の日記自伝的章段を意識的に省いた略本であるから、一と二とが清少納言枕冊子の主流本ということになる（「枕草子解説」一三頁）。

③萩谷朴『新潮日本古典文学集成 枕草子』（新潮社 二〇〇〇）

現存堺本は、この古堺本の本文系譜の末流に立つものであることは認められるものの、古堺本が類纂本であったなら、それをそのまま、古堺本が雑纂形態であったという伝承にでも基づいて、それを復原しようとの意欲からこれを再編輯し、いずれにもせよ、物名・件名を恣意的に増補したり、難解な本文箇所を任意に添削して、大きく改訂した不純な伝本であるというの他はない（「解説」四一二頁）。

④渡辺実『新日本古典文学大系 枕草子』（岩波書店 一九九九）

「元龜元年十一月日」の日付けを持つ「宮内卿清原朝臣」の奥書に、「泉の堺」の道巴という人の持つ

ていた本を写した、ということが記されている所から、堺本と呼ばれる。回想章段を欠くのが特徴である。その本文の大体は、雑纂本の本文に手の加ったものとされる一方、部分的に雑纂本よりも古い性格を残す、とされていて、今後の研究が期待される（「解説」三七七頁）。

（17）梅原末治『唐鏡大観』（同朋社 一九八四）及び青木豊『和鏡の文化史』（刀水書房 一九九二）に参照。

（18）秋本吉郎『風土記』（岩波書店 一九七二）八二頁。

（19）『抱朴子』「諸子集成」第八冊（中華書局 一九九六）七七頁。

（20）本田濟『抱朴子』内篇（平凡社 一九九〇）三五〇頁。

（21）『西京雜記』和刻本漢籍隨筆集「十三」（古典研究会 一九七四）に参照。

（22）竹内照夫『韓非子』上（明治書院 一九七七）三四〇頁。

（23）藤井俊博『大日本国法華經驗記』下 校本・索引と研究（和泉書院 一九九六）八五頁。

（24）山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄『今昔物語』三（岩波書店 一九六一）一七八～一七九頁。

（25）楠山春樹『淮南子』（明治書院 二〇〇八）一一八～一一九頁。

（26）宇野精一『孔子家語』（明治書院 二〇〇八）一四七頁。

（27）『旧唐書』「卷七十一」「列傳第二十一」「魏徵」（中華書局 二〇〇二）二五六～二五七頁。

（28）阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男『源氏物語』②（小学館 二〇〇六）一〇〇頁。

（29）増田繁夫『枕草子』（和泉書院 二〇〇一）四〇頁。

- (30) 大谷雅夫『歌と詩のあいだ 和漢比較文学論攷』(岩波書店 二〇〇八) 一七七頁。
- (31) 『文苑英華』「卷七十七」(中華書局 一九八二) に参照。
- (32) 内田泉之助・乾一夫『唐代伝奇』(明治書院 一九七八) 一八〇頁。

第四章 『枕草子』「月の窓より洩り」の表現考

——「九月二十日あまりのほど」の章段を中心に——

一 はじめに

『枕草子』「九月二十日あまりのほど」の段は次のようにある。

九月二十日あまりのほど、初瀬に詣でて、いとはかなき家にとまりたりしに、いとくるしくて、ただ寝に寝入りぬ。

夜ふけて、月の窓より洩りたりしに、人の臥したりしどもが衣の上に、白うてうつりなどしたりしこそ、いみじうあはれとおぼえしか。さやうなるをりぞ、人歌よむかし。

（第二一二段「九月二十日あまりのほど」〔本文は新全集に拠る 以下同〕三五〇頁）

本段は三巻本にしかいたためか、加藤盤斎『清少納言枕草紙抄』、北村季吟『枕草子春曙抄』、岡西惟中『枕草紙旁註』などで扱われず、先行の研究でもあまり深くは考察が行われてこなかった。

ところが、九月二十日に初瀬（長谷寺）へ参り、疲れていた夜中、皎々と照る月に感興を催したことを記す、この記載を改めて考えみると、いくつかの問題点を挙げることができるだろう。例えば、傍線を付したところ、①「九

月二十日」はいつの年なのか。②仮名文学において「窓」の用例は少ないが、ここで「月の窓より洩り」と「窓」が現れているのはどういうことなのだろうか。そして、③「人歌よむかし」において「人」はどのような人を想定していたのだろうか。本稿では、これらの問題点を考えてみたい。

二 「九月二十日」はいつの「年」なのか

『枕草子』本文はその内容から三種の章段に分けられている。いわゆる類聚章段、随想章段、日記章段であるが、厳密に言えば、これらの三種の区分法では分別し難い段は多い。例えば、本段「九月二十日あまりのほど」も、その典型的な例であろう。記述の流れをつかむためにも、本段の前後の並び方を一覧にしてみよう。

三巻本		能因本	前田家本	堺本
二一〇	賀茂へ詣る道に	二四八	なし	なし
二一一	八月つごもり、大秦に詣づとて	二四九	なし	なし
二一二	九月二十日あまりのほど、初瀬に詣でて	なし	なし	なし
二二三	清水などにまゐりて、	なし	なし	なし
二二四	五月の菖蒲の、	二〇六	二九七	一九八
二二六	よくたきしめた薫物の	二〇七	二九八	一九九
二二六	月のいと明かきに	二〇八	二六〇	一九七

右に示したように、本章段は、四系統『枕草子』本文の中の、能因本、前田本、堺本いずれにも見えない。三巻本にある本章の前後の並び方を見てみると、いずれも当時の人気のあった寺を参詣した記事である。例えば、賀茂へ行く途中で見た田植えの風景、太秦（広隆寺）の途中で稲を刈る風情、初瀬（長谷）寺で粗末な家に宿泊した体験、清水寺の途中で柴を焚く印象を記したものである。このように賀茂、太秦、初瀬、清水などの名利を主題に扱う視点に着目すれば、本章は「類聚章段」と考えられる。一方、これらの特定の寺に参詣した自分の体験を記載しているという点に注意するならば、本章は「日記章段」と言えなくもない。

では、文頭の「九月二十日」はどういう意図で記されたもののだろうか。この点は、『枕草子』の古注を含む諸註では言及されてこなかった。^② 一つのことかについては、極めて少数の研究者には考察が試みられはしたものの、その年次がはっきりと提示されることはなかったのである。^③

ところが、『小右記』を検すると、長徳三（九九七）年、藤原道長が九月二十日に、「長谷寺」へ参詣した記事がある。この年次を候補に加えることはできないであろうか。確認のため、その記事を示す。

廿日、壬午。今曉左府被参長谷寺云々、一上布衣城外例、仰訪前古所不聞也、事々軽忽、未知所比、

（廿日、壬午。今曉左府参長谷寺に参らると云々。一上の布衣にて城の外なる例、^④ そもそも前古を訪ふも聞かざる所なり。事々軽忽にして、未だ比ぶる所を知らず）。

二十日の曉方、左大臣藤原道長が、長谷寺に参詣した。「一上（いちのかみ）の人」が「布衣」たる軽々しい服装で平安京を出たことを、前代未聞の軽率なふるまいと非難している。

この記事と『枕草子』本段とを照らし合わせてみると、興味深いことに、清少納言は道長と同日に京を出発した可能性があることが指摘できる。

京から初瀬の、本段に記す「いとはかなき家」に到着するまでにかかった時間については、石田穰二氏に、次のような指摘がある。

更級日記によるに二泊の旅が普通のように、早朝京を発ち、贅野の池の辺の下衆の小家に一泊、山の辺の寺に一泊、夜、寺に着いている。⁽⁵⁾

すなわち、清女が「九月二十日」に京から出発したとすれば、『小右記』に載った記事は年次さえ合えば、道長と同道の記事である可能性が生じてくるのである。

では、この時期、すなわち長徳三年（九九七）頃、女房である清女と中宮定子との関係はどうだったのだろう。確認してみたい。

まず、先の道長の長谷寺詣の記事の前後、定子の動向について、岸上慎二氏の整理された所に従って示しておく。

長徳元年正月十九日 原子、東宮（のち三条院）に入内

四月十日 道隆薨（四十三歳）

長徳二年二月二十五日 定子、梅壺より職へ

三月四日 定子、職より二条北宮へ

四月二十四日 伊周・隆家配流の宣命

五月一日 定子、落飾

六月八日 定子の里第二条宮焼亡、高階明順邸へ

七月二十日 公季女、義子入内

十一月十四日 顕光女、元子入内

十二月十六日 脩子誕生（今上第一皇女、母定子）

長徳三年六月二十二日 定子、職へ遷る

長徳四年二月十一日 道兼女、尊子入内 (三)

右に示したように、定子の父道隆が薨去した後から、定子の置かれた状況は急速に暗転する。例えば、長徳二年（九九六）二月二十五日から長徳三年（九九七）六月二十二日までの一年四か月の間に、四回遷御している。その間の長徳二年（九九六）六月八日、里第二条宮が火事に遭って、定子は暫く御伯父高階明順の邸に身を寄せ、後に小二条殿に移っている。一方、この期間、清女は定子と離れて自分の里にいた。このことについて、『枕草子』の中で次のように記述している。

殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来、さわがしうなりて、宮もまゐらせたまはず、小二条殿といふ所におはしますに、何にもなくうたてありしかば、久しう里にゐたり。

(第一三七段「殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来」二五九〜二六〇頁)

これは、森本元子氏が指摘されるように、清女の「定子の逆境にはじめて触れた記事であり、自分も鬱々とたのしまぬことがあつて久しく里居をした由を述べている」ものといえよう。周りの同僚女房達は清女が左大臣道長の人間だという噂をしており、清女は鬱々としている。この点について、坏美奈子氏も次のように述べている。

清女がこの秋定子後宮を去った直接の原因には、道長方との件が係わると思われる。七月二十日、ついに左大臣となった道長であつたが、同僚の女房の言葉に「左ノ大殿」とあることによつて清女の退出はその後、おそらく直後と考えるのではないだろうか。⁽⁸⁾

坏氏が指摘したように、長徳二年(九九六)七月二十日に道長は左大臣になった。直後の時期、女房達の「左大臣側の者」という噂を避け、清女は退出したのであつた。しかしその時、萩谷朴氏は「清少納言の居所を本人から知らされていたのが、前夫則光は別として、源経房・済政等、道長方の人間であつたところに、語るに落ちた清少納言の道長方への心寄せが露顕している(第七九・一三六段)といえよう。」⁽⁹⁾と指摘されている。『枕草子』に確認できるように、定子の職に遷御された後、清女の再出仕の時期は、長徳四年(九九八)である(二五六・二五七段)。とすれば、おそらく清女は長く自分の里に居た時期、左大臣道長に誘われて長谷寺へ参詣した可能性はあるのではないだろうか。

三 「人歌よむかし」の「人」や「歌」

前節で「九月二十日」はいつの年なのかについて考えた。ただし、「九月二十日」ということについては、この年次が、いつのことかと詮索することとは別に、「九月二十日」が歳時の風物として扱われる記事が、『枕草子』以外に見えることにも留意が必要である。

例えば、『枕草子』成立後の『和泉式部日記』十六段の「有明の月の手習文」にも、「九月二十日あまり」の記事が見える。

九月二十日あまりばかりの有明の月に、御目さまして、「いみじう久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらんかし。人やあるらん」とおぼせど、例の、童ばかりを御供にておはしまして、門をたたかせたまふに、女、目をさまして、よろづ思ひつづけ臥したるほどなりけり。⁽¹⁰⁾

宮が有明の月を眺めて、久しぶり逢わなかった人を思い出して感動していた場面である。『枕草子』に記された九月二十日のことは、『和泉式部日記』に見えるように「有明の月」の時季であったろう。同様場面は『徒然草』三二段の「九月二十日の頃」にもみえる。

九月廿日のころ、ある人にさそはれたてまつりて、明くるまで月見ありくこと侍りしに、おぼしいづる所ありて、案内せさせて入り給ひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂ひ、しめやかにうちかをりて、しの

びたるけはひ、いともあはれなり。

よきほどにて出で給ひぬれど、なほ事ざまの優におぼえて、物のかくれよりしばし見みたるに、妻戸をいま少しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけこもらましかば、口をしからまし。あとまで見る人ありとは、いかでか知らん。かやうの事は、ただ朝夕の心づかひによるべし。その人、ほどなく失せにけりと聞き侍りし。⁽¹¹⁾

九月二十日の頃、作者はある貴人に誘われて、あちらこちらで有明の月を眺め、その風情を記している。前掲の『和泉式部日記』に見られる場面と同じように、「九月二十日」は「有明の月」の時季であるが、さらに注意したのは、『徒然草』「九月二十日」という性格、記事、場面が、『枕草子』の本段を踏まえている可能性が高いことである。

『和泉式部日記』では、宮は有明の月に感動され、思い人も同じような月をみて感動するのではないかと自ら思い、次のような歌を詠まれている。

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて帰りにしかな⁽¹²⁾

有明の月を眺めながら宮は、あの人を月に入る前に来るのかなという心緒を表しているのである。

では、『枕草子』本段に書かれた「人歌よむかし」の「歌」はどうだろう。

清少納言は、平安京を離れて遠くの田舎に宿泊し、「いとくるしくて」、深夜、一人目が覚め、窓から洩りこむ月

光が皆の衣の上に映された情景に感動した。こういう風情のある時に、「人歌よむかし」と清女は記した。清女が念頭に浮かべた「人」とはどういう人だろうか。清女のこの場での歌が残されているのかということを考えてみたい。まず、清女の歌を読む力量を確認してみよう。中世の『無名草子』の中に清少納言の歌詠みの評が次のように残されている。

歌詠みの方こそ、元輔が女にて、さばかりなりけるほどよりは、すぐれざりけるとかやとおぼゆる。『後拾遺』などにも、むげに少く入りて侍るめり。みづからも思ひ知りて、申し請ひて、さやうのことにはまじり侍らざりけるにや。さらでは、いといみじかりけるものにこそあめれ。⁽¹³⁾

清少納言が有名な歌人、元輔の娘にしては、『後拾遺集』に収録された和歌が少ないという。確かに『後拾遺集』における和泉式部と赤染衛門の入集数六十八首、三十二首に比べると、紫式部の入集数三首、清女の歌数は二首と少ないが、勅撰集に入集したことから見ると、清女の歌の評価は、そう卑下されたものではなかったと考えてよいだろう。では、本段に記した「歌」は清女本人の歌であろうか。この点については、森本茂氏はその故を分析して、次のように述べている。

この段の末尾の「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」の文は、「私みずからは歌がよめないのだが」という含みを持つているとみられる。清原深養父の後裔、元輔の娘であった清少納言が、こういう情景のもとで歌がよめないはずはないと、いちおう疑ってみたくもなるが、しかし、これは案外彼女の本心から出たことばのように

思われ
る。⁽¹⁴⁾

森本氏が指摘したように、清女は本心からこの場で歌を詠みたかったと考えられましょう。しかし、何をさすのか不明とあるように、清女のこの場での歌は残されていない。この点に関する指摘は、『枕草子』の諸注釈にも次のように見られる。

① 自分は歌ができないがといふ気持ちがある。

(田中重太郎『枕冊子』日本古典全書・朝日新聞社一 九六八・三二五頁)

② 歌の場を語って歌を記していない。

(松尾聰・永井和子『枕草子』新編日本古典文学全集・小学館二〇〇二・三五〇頁)

③ に長徳四年五月頃には、中宮から詠歌御免の仰せをこうむっていたとはいいながら(第九十四段)、まるで他人事のように評論して、清少納言自身、ここで和歌を残していないことが面白い。『清少納言集』にも相当する歌はない。

(萩谷朴『枕草子』下 新潮日本古典集成・新潮社 二〇〇五・三四一頁)

①から③までの指摘は、ほぼ同じように、この場での、清女の歌は残されていなかったというものである。要するに、相応しい「歌」は残せなかったのである。ただし、本段の「月の窓より洩り」という描写を考えてみると、

この場での「人歌よむかし」の「人」や「歌」は、必ずしも清女本人の歌を指すとは言えない。なぜなら、歌語として、一般的でない「窓」という文字が現れているからである。

四 仮名文学における「窓」

では、和文の世界における「窓」の使われ方は、実際の所どうだろう。確認してみよう。まず、『万葉集』には「窓」が二例。

(1) 「二六八七」窓超尔 月臨照而 足檜乃 下風吹夜者 公平之其念

まどごしに つきおしてりて あしひきの あらしふくよは きみをしぞおもふ

(2) 「二七四〇」牛窓之 浪乃塩左猪 嶋響 所依之君尔 不相鴨将有

うしまどの なみのしほさゐり しまとよみ よそりしきみは あはずかもあらむ

『新編国歌大観』(1) 一〇一頁 (2) 一〇二頁

(1) と (2) は和(かな)の世界において「窓」の早い用例である。平安時代勅撰集の『古今集』、『後撰集』、『拾遺集』及び私撰集には「窓」は見当たらない。よって『万葉集』から平安までの和歌には窓は定着していないようである。

平安以後の歌の世界における「窓」の使用状況について、本間洋一氏は次のように述べている。

おしなべて窓・月・風で表現される世界は、潘岳の亡妻を悼む「皎々 窓中月、照我室南端、清商応秋至」（悼亡詩）や「秋風入窓裏、羅帳起飄颻。仰頭看明月、寄情千里光。」（近代呉歌・秋歌）などの漢詩（玉台新詠集）世界の表現に由来するかと思われ、背後に孤独（孤閨）の心情を揺曳させていることが多い。また、「恋しくは夢にも人を見るべきを窓打つ雨に目をさましつ」（後拾遺集・雑三・一〇一五・高遠）は、上陽宮に幽閉された宮女の侘しくもやるせない心情を託した一節「蕭々 暗雨打窓声」（白居易・上陽白髮人）を句題に詠まれたものである。この句は『和漢朗詠集』（秋夜・二三三）にも所収され、以後「思ひ出でぬことこそなけれつれづれと窓打つ雨をきき明かしつつ」（清輔集・三五九）、「秋の夜のしづかに暗き窓の雨打ちなげかれてひましらむらん」（式子内親王集・一四五）、「明かしかね窓暗き夜の雨の音に寢覚めの心いくしほれしつ」（玉葉集・雑二・二一七一・永福門院）など、この趣向に倣う作は枚挙にいとまなく、その浸透ぶりが窺えよう。⁽¹⁵⁾

本間氏が述べたように、歌の世界における漢字で書かれた「窓」（窗・囪・牖）は、やはり漢の世界と深く繋がるようである。

仮名日記はどうだろうか。『土佐日記』、『蜻蛉日記』、『紫式部日記』、『更級日記』には、いずれも、「窓」が見えない。『和泉式部日記』八段「窓打つ雨」の「窓」が一例である。

五月五日になりぬ。雨なほやまず。ひと日の御返りの、つねよりももの思ひたるさまなりしを、あはれとおぼし出でて、いたう降り明かしたるつとめて、(宮)「今宵の雨の音は、おどろおどろしかりつるを。などのたまはせたらば、(女)「夜もすがらなにごとをかは思ひつる窓打つ雨の音を聞きつつかげに居ながら、あやしきまでなん」と聞こえさせたらば、⁽¹⁶⁾

この「窓打つ雨の音」は、『和漢朗詠集』卷上「秋夜」に見える『白氏文集』卷三「上陽白髮人」の句をふまえている。

物語はどうかであろうか。例えば、『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『篁物語』には「窓」は見えないが、『宇津保物語』に二例ある。(本文は新編日本古典文学全集に拠る。)

1 夏は螢を涼しき袋に多く入れて、書の上に置いてまどろまず、まいて日など白くなれば、窓に向かひて光の見ゆる限り読み、冬は雪をまろがして、そが光に当てて眼のうぐるまで学問をし、

(「祭の使」四八七頁)

2 七歳にて入学して、今年は三十一年、それよりいく眼の抜け、臓の尽きむを期に定めて、大学の窓に光ほがらなる朝は、眼も交はさずまぼる、光を閉ぢつる夕べは、叢の螢を集め、冬は雪を集へて、部屋に集へたること、年重なりぬ。

(「祭の使」四九五頁)

これらは平安時代に流行した『蒙求』による「車胤聚螢」と「孫康映雪」の著名な故事を念頭に置く表現になっている点が目される。

『源氏物語』には「窓」は七例。これにも同様に漢故事を踏まえた措辞が見られる。（本文は新編日本古典文学全集に拠る。）

① 親など立ち添ひもてあがめて、生ひ先籠れる窓の内なるほどは、ただ片かどを聞きつたへて心を動かすこともあめり。

頭注…「養ハレテ深閨ニ在リ人未ダ識ラズ」（長恨歌）。「籠れる」は前後の語を掛詞のように結んでいる。

（「帚木」五七頁）

② 源氏「今あらため描かむことは本意なきことなり。ただありけむかぎりをこそ」とのたまへど、中納言は人にも見せで、わりなき窓をあけて描かせたまひけるを、院にもかかること聞かせたまひて、梅壺に御絵ども奉らせたまへり。

頭注…無理に部屋を用意して秘密裡に製作。源氏とは対照的。「深窓、秘蔵心也」（河海抄）。

（「絵合」三八三頁）

③ 博士の人々は四韻、ただの人は、大臣をはじめたてまつりて、絶句作りたまふ。興ある題の文字選りて、文

章博士奉る。短きころの夜なけば、明けはててぞ講ずる。左中弁講師うまつる。容貌いときよげなる人の、声づかひものものしく神さびて読みあげたるほど、いとおもしろし。おぼえ心ことなる博士なりけり。かかる高き家に生まれたまひて、世界の榮華にのみ戯れたまふべき御身もちて、窓の螢を睦び、枝の雪を馴らしたまふ志のすぐれたるよしを、

頭注…いわゆる螢雪の功を積むこと。「窓の螢」は『晋書』や『蒙求』にみえる車胤の故事。「枝の雪」は、『孫氏世録』にみえる孫康の故事。

（「少女」二六～二七頁）

④ 源氏「少将、侍従など率て参で来たり。いと翔り来まほしげに思へるを、中将のいと実法の人にて率て来ぬ、無心なめりかし。この人々は、みな思ふ心なきならじ。なほなほしき際をだに、窓の内なるほどは、ほどに従ひて、ゆかしく思ふべかめるわざなれば、この家のおぼえ、内々のくだきほどよりは、いと世に過ぎて、ことごとしくなむ言ひ思ひなすべかめる。方々ものすめれど、さすがに人のすき事言ひ寄らむにつきなしかし。かくてもものしたまふは、いかでさやうならむ人の気色の深さ浅さをも見むなど、さうぞうしきままに願ひ思ひしを、本意なむかなふ心地しける」など、ささめきつつ聞こえたまふ。

頭注…（前略）長恨歌による。

（「常夏」一二七頁）

⑤ 督の君は、なほ大殿の東の対に、独り住みにてぞものしたまひける。思ふ心ありて、年ごろかかる住まひを

するに、人やりならずさうずうしく心細きをりをりあれど、わが身かばかりにてなどか思ふことかなはざらむとのみ心おごりをするに、この夕より屈しいたく、もの思はしくて、いかならむをりに、またさばかりにてもほのかなる御ありさまをだに見む、ともかくもかき紛れたる際の人こそ、かりそめにも、たはやすき物忌、方違への移ろひも軽々しきに、おのづから、ともかくもものの隙をうかがひつくるやうもあれ、など思ひやる方なく、深き窓の内に、何ばかりのことにつけてか、かく深き心ありけりとだに知らせたてまつるべきと胸いたういぶせければ、小侍従がり例の文やりたまふ。

頭注…「深き窓の内」↓帚木五七ページ注一九。付録五七〇ページ。「五七〇頁」…「深き窓の内に」は、1付録四二三ページ、長恨歌第四句。帚木1五七ページ注一九。ここの物語本文は通行本の「深閨」ではなく「深窓」とある『白氏文集』によっていることとなるが、諸伝本のうち古本に属する金沢文庫系統も同じく「深窓」である。

（「若菜」上・一四七〜一四八頁）

⑥ 君の御身には、かの一ふしの別れより、あなたこなた、もの思ひとて心乱りたまふばかりのことあらじとなん思ふ。后といひ、ましてそれより次々は、やむごとなき人といへど、みなかならずやすからぬもの思ひ添ふわざなり。高きまじらひにつけても心乱れ、人に争ふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし。その方は、人にすぐれたりける宿世とは思し知るや。

頭注…「源の子のやうにして紫をとりたて給へば也」（岷江入楚）付録五七三頁。《親の窓の内ながら過ぐしたまへるやうなる心やすきことはなし》「長恨歌」による。

⑦ 花橘の月影にときはやかに見ゆるかをりも、追風なつかしければ、「千代をならせる声」もせなんと侍るるほどに、にはかに立ち出づるむら雲のけしきいとあやにくにて、おどろおどろしう降り来る雨に添ひて、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして、空暗き心地するに、「窓をうつ声」など、めづらしからぬ古言をうち誦じたまへるも、をりからにや、妹が垣根におどなはせまほしき御声なり。

頭注…「秋ノ夜長シ 夜長クシテ眠ルコト無ケレバ天モ明ケズ 耿々こうこうタル残ノ灯ノ壁ニ背ケタル影、蕭々タル暗キ雨ノ窓ヲ打ツ声」(白氏文集・卷三・上陽白髮人、和漢朗詠集・秋夜)

(「幻」五三九頁)

『源氏物語』における①②④⑤⑥は『白氏文集』「長恨歌」の句を踏まえた「窓」である。③は『蒙求』の「車胤聚螢」、「孫康映雪」の故事による。⑦は『白氏文集』「上陽白髮人」による「窓打つ雨」であろう。

参考までに、『枕草子』以後の作品を取り上げてみよう。例えば、『浜松中納言物語』には「窓」が見えないが、『狭衣物語』のうちに「窓」は二例ある。(本文は新編日本古典文学全集に拠る。)

① 野分だちて、風いと荒らかに、窓打つ雨ももの恐ろしう聞こゆる宵の紛れに、例の忍びておはしたり、いつもなよなよとやつれなしたまへるに、いとど雨にさへいたうそぼちて、隠れなき御匂ひばかりは、ところせきまでくゆり満ちたるを、隣々には、あやしがるもをかしかりけり。

頭注…「蕭蕭タル暗キ雨ノ窓ヲ打ツ声」(白氏文集・三・上陽白髮人、和漢朗詠集・秋・秋夜)による。

(「卷一」一二二頁)

② 九月には、嵯峨院に、入道の宮の作らせたまへる、法華の曼陀羅、供養せさせたまひて、やがて、八講行はせたまふ。そのほどは、殿も日々に参らせたまへば、まいて、さらぬ人、上達部、殿上人参りつつ、朝夕に居替る講師どもの、選りすぐらせたまへる、各々年ごろ心を尽くしける、窓の内の学問の本見ゆべき度なれば、心尽くしたるしるしありて、尊くめでたきにも、おもしろき所多かり。

頭注…「窓の内」は深窓の意。自家で大切に培われ伝えられた学問の意か。大系は、「窓前看古書、燈下尋書義」(古文真宝前集。勸学文王安石)を引く。

(「卷三」一七〇～一七一頁)

これらの①と②の「窓」の用例も、漢故事と密接に関わる表現と考えられる。

以上まとめると、仮名文学にける「窓」の用例の、多くは『蒙求』の故事「車胤聚螢」「孫康映雪」や『白氏文集』の「長恨歌」や「上陽白髮人」の秀句を踏まえたものであった。

こうした状況を観察した上で、『枕草子』において一箇所、本段の「月の窓より洩り」における「窓」はどう考えればよいのだろうか。確認のため、先行の諸注を参考にしてみよう。

増田繁夫氏は「ここは、排煙や採光のために、屋根の部分にあげられたもの。当時の建物には現代でいう窓はまらない。(増田繁夫『枕草子』和泉書院二〇〇一・一八〇頁)」と指摘している。石田穰二氏は「漢詩から来た言い

方。」(石田穰二『新版 枕草子』下巻 角川文庫一九九九・九四頁)と述べている。

また、鈴木日出男氏も「和文中には例の少ない用語で、漢詩文の影響がうかがえる。(鈴木日出男『枕草子』下巻 ぽるぷ出版一九八七・二〇一頁)と漢籍から導かれた視点であることをほのめかしている。では、詩の世界において「窓」はどのように用いられているのか。確認してみよう。

五 「詩」の世界における「窓」

ここでは日本の詩文集を中心に、奈良時代から平安時期までの代表的な作品集を確認してみたい。

まず、奈良時代の『懷風藻』には「窓」が一箇所ある。作者山田史三方の詩、「五言 秋日於長王宅宴新羅客」の序の中で「窓」を用いた例である。

秋日於長王宅宴新羅客。秋日長王が宅にして新羅の客を宴す。一首。並せて序。

〔前略〕

清談振発。

清談振発して、

忘貴賤於窓雞。

貴賤を窓雞に忘る。

歌台落塵。

歌台塵を落して、

郢曲與巴音雜響。

郢曲と巴音と響を雜⁽¹⁷⁾へ。

〔後略〕

傍線を付した「窓雞」という表現は『幽明録』が指摘される。⁽¹⁸⁾ 晋の袁州刺史、沛国宋処宗は、嘗て一つ良く啼く鶏を買った。大事に養って恒籠の中に入れて窓に付けていたという。

次に、平安初期の勅撰三集、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』を確認してみよう。

『凌雲集』には「窓」が一例。坂上今継の「詠史」の句の「遥望南岳径 高嘯北窓隈」である。この「窓」は、「詠史」の内容に見えるように陶淵明の「帰園田居」（園田の居に帰る）「種豆南山下 草盛豆苗稀」（豆を種う南山の下 草盛んにして豆苗稀なり）からの発想と考えられる。

『文華秀麗集』の中で「窓」は十一例。そのうち「窓」をよく使った詩人巨勢識人の作品を確認してみよう。

① 伴姫秋夜閨情。

伴姫が「秋夜の閨情」に和す

一首 巨勢識人

一首 巨勢識人

〔前略〕

真珠暗箔秋風閉。

真珠の暗箔秋風閉ぢ、

楊柳疎窓夜月寒。

楊柳の疎窓夜月寒し。

不計別怨経歳序。

計らざりき別怨歳序を経むとは、

唯知曉鏡玉顔残。

唯知るは曉鏡玉顔の残はるのみ。⁽¹⁹⁾

② 日侍神泉苑。賦得春月 春日神泉苑に侍り。賦して「春月」を得たり。

応製。一首。巨勢識人

応製。一首。巨勢識人

春天霽静無纖翳。

春天霽静纖翳も無く、

皎潔孤明桂月来。

皎潔孤明桂月来たる。

窓外曲鉤疑卷箔。

窓外の曲鉤箔を卷かむかと疑ひ、

空中懸鏡不開台。

空中の懸鏡台に開れず。⁽²⁰⁾

〔後略〕

①題名の如く、巨勢識人が姫大伴氏という女性詩人の「晚秋述懷」に応えて作った作品である。この詩句は秋の夜で、窓外の月の寒さの感じを表している。②は巨勢識人が「春月」と題して作った詩である。窓の外の三日月の描写と考えられる。

『経国集』では「窓」が八例、「牖」は三例。「窓」と「月」の表現で関連性ある例を確認してみよう。太上天皇在祚「五言和藤朝臣春日過前尚書秋公帰病之作一首」（藤朝臣が『春日に前尚書秋公の帰病を過ふ作』に和す一首）には「夜来琴酒意 松月暁窓虚」（夜来琴酒の意あり 松月暁窓虚し）とある。後句「松月暁窓虚」は、孟浩然の「歳暮帰南山」の終句「永懷愁不寐 松月夜窓虚」と一致することは先行の研究で指摘されている。⁽²¹⁾

『菅家文草・菅家後集』の「窓」は二十三例。そのうち「窓下」は五例、「窓頭」は四例、「窓中」は二例である。「窓」と「月」の文字を用いた句は四例。そのうち「暁月」をとりあげてみよう。

暁月

暁の月

客舎陰蒙四面山

客舎陰り蒙る四面の山

窓中待月甚幽閑

窓の中にして月を待つ甚だ幽閑なり

遠鷄一報廻頭望

遠鷄一たび報じて頭を廻して望めば

插著寒雲半缺環

寒雲に插著す半缺くる環⁽²²⁾

右の詩の第二句の「窓中待月甚幽閑」の典拠とされる表現は、先行の研究に拠ると、白居易の「老来生計詩」「林下の幽閑気味深し」と考えられる。

ほかの漢詩集はどうだろう。例えば、『扶桑集』、江相公の「重以吟贈」の「窓螢役了辞応退」の「窓螢」は、『蒙求』の車胤の故事を念頭に置くもの。『本朝無題詩』釈蓮禪「賦雪」の「孫氏寒窓如燭映」の詩句も、『蒙求』の「孫康映雪」の故事による。『江吏部集』にも「窓」が見える。それは「巻中」「釈教部」「奉和前源遠州刺史水心寺詩」の、第三句「詩酒故窓花自散」とあるが、ここは故事とは無縁の表現であろう。

『枕草子』よりやや後に編集された『和漢朗詠集』の秀句にも、いくつかの「窓」が見られるが、ここでは、「夜」「窓」「月」の文字が含まれる秀句を確認しておく。（本文は新編日本古典文学全集に拠る。）

① 生竹夜窓間臥 月照松時台上行 白

風の竹に生る夜窓の間に臥せり 月の松を照ららす時台の上に行く 白。

（「巻上」一五一「夏夜」九二頁）

② 夜窓閑螢度後 深更軒白月明初 白

空夜に窓閑かなり螢度つて後 深更軒白し月の明らかなる初 白。

（「卷上」一五二「夏夜」九三頁）

③ 触石春雲生枕上 銜嶺曉月出窓中 直幹

石に触るる春の雲は枕の上に生ず 嶺に銜める曉の月は窓の中より出づ 直幹。

（下「五六二」「山家」二九六頁）

④ 幽思不窮 深巷無人之處 愁腸欲斷 閑窓有月之時 白

幽思窮まらず 深巷に人無き処 愁腸断えなむとす 閑窓に月の有る時上に同じ。

（「卷下」六一五「閑居」三三二頁）

⑤ 晦跡未抛苔径月 避喧猶臥竹窓風 佐幹

跡を晦ましては未だ苔径の月を抛たず 喧を避けては猶ほ竹窓の風に臥せり 佐幹。

（「卷下」六二一「閑居」三三四頁）

⑥ 花月一窓交昔昵 雲泥万里眼今窮 正通

花月一窓交り昔昵じかりき 雲泥万里眼今窮まんぬ 正通。

（「卷下」七七〇「慶賀」四〇一頁）

これらのうち①②は『白氏文集』に拠る秀句であり、いずれも「夏夜」の風景である。又④も白樂天の秀句であ

るが、これは「閑窓」に月の有る時に、眺める人は思慕を生じ来るのであるという。③は春の暁月が山の上に出る風景である。⑤は「窓外」の風景と考えられる。⑥は「雲」のような「窓外」の月光と花影の重なる風情を表しているものであろう。

では、平安の漢詩人の表現の基層をなした典籍とされる『白氏文集』『文選』における「窓」はどうだろう。

『白氏文集』には、前掲の『和漢朗詠集』に収録された佳句以外、「窓」は百三十一例、それぞれ次の「東窓」「南窓」「西窓」「北窓」「隔窓」「傍窓」「臨窓」「点窓」「拂窓」「打窓」「送窓」「透窓」「涼窓」「紅窓」「緑窓」「竹窓」「松窓」「小窓」「夜窓」「紗窓」「軒窓」「経窓」「滅窓」「春窓」「闇窓」「陰窓」「水窓」「満窓」というような表現が使われている。

『文選』には「窓」が十例。たとえば、第二十三卷「哀傷」、潘安仁の「悼亡詩」中の第二首である。全詩は長く、二八句があり、最初の第一、二句を確認してみよう。「皎皎窓中月 照我室南端」（皎皎たる窓中の月 我が室の南端を照らす）。この作品については、既に掲げた本間洋一氏が解釈されているように、詩の世界で「窓」と「月」の典型的な用例である。

これら古代から平安朝にかけての代表的な仮名文学、漢詩文における「窓」の用例を挙げて見た結果、「窓」は漢籍と関係があると考えられる。

六 「窓」から射し込む「月光」

ここまで述べてきたように、平安時代中期まで、歌語として「窓」は定着していなかったようであり、漢語的に

仮名文学に使用されているようである。したがって、『枕草子』本段の「月の窓より洩り」の風景からは、まず、漢詩・漢文的世界が想起されたのではないかということを想定するのが自然だろう。

では、窓から射し込む月光に対する詩作を確認してみたい。

詩の世界に見られる最も早い明月の例は、『古詩十九首』の中の「其十九」の作者不明の「明月何皎皎」（明月何ぞ皎皎たる）であろう。この秀句に倣う作は多い。例えば、『文選』卷三十、陸士衡の「擬古詩十二首」のうち「擬明月何皎皎」（「明月何ぞ皎皎たる」に擬す）の例がある。

擬明月何皎皎（「明月何ぞ皎皎たる」に擬す）

安寝北堂上

安らかに北堂の上に寝ぬれば

明月入我牖

明月 我が牖に入れり

照之有餘暉

照らしては餘りの暉有れど

攬之不盈手

攬らんとすれば手に盈たず

涼風繞曲房

涼風は曲房を繞り

寒蟬鳴高柳

寒蟬は高柳に鳴く

踟躕感節物

踟躕して節物に感ず

我行永已久

私の行は永く已に久し

游宦會無成

游宦も成ること無かる會し

離思難常守

離の思ひは常しくは守り難し

作者は故郷を離れて、深夜の寢室に入つて月光に感動した心情を表す作品である。このような風流は、『白氏文集』
「卷二十二」「銘・贊・箴・諠・偈」「素屏謠」にも見える。

素屏謠 白居易

素屏の謠 白居易

素屏素屏

素屏よ素屏よ

孰為乎不文不飾、不丹不青

孰為れぞ文せず、丹せず青せざる。」

當世豈無

當世 豈に無からんや

李陽冰之篆文、張旭之筆跡、

李陽冰の篆文、張旭の筆跡、

邊鸞之花鳥、張璪之松石。

邊鸞の花鳥、張璪の松石。

吾不令加一點一畫於其上者、

吾一點一畫を其の上に加へ令めざる者は、

欲爾保真而全白。」

欲爾の真を保ちて白を全うせんことを欲すればなり。」

吾於香爐峰下置草堂、

吾香爐峰の下に於いて草堂を置き、

二屏倚在東西牆。

二屏 倚せて東西の牆に在り。

夜如明月入我室、

夜は明月の我が室に入るが如く、

曉如白雲圍我床。

曉は白雲の我が床を囲むが如し。

我心久養浩然氣、

我心に久しく浩然の氣を養ひ、

亦欲與爾表裏相輝光。」

亦た爾と表裏して相輝光せんと欲す。⁽²⁴⁾」(後略)

注目したいのは、白氏の「素屏謡」の中に書かれた月は実物ではない。作者が創造した明月が「我が室」に入つた風景である。

詩の世界で最も多く明月を詠んだ詩人は李白であろう。興膳宏氏の論文によれば、月の出てくる詩は三百首をこえる。四百箇所あまりで月が書かれているという。（『月明の中の李白』『中国文学報』第四十四冊）ここでは、李白が書いた明月が寢室に射し込む詩を掲げたい。それは『樂府詩集』に収録された「静夜思」である。

李白 静夜思

静夜の思ひ

牀前看月光。

牀前月光を看る。

疑是地上霜。

疑ふらくは、是れ地上の霜かと。

舉頭望山月。

頭を挙げて山月を望み、

低頭思故郷。

頭を低れて故郷を思ふ。⁽²⁵⁾

開元十五年（七二七年）、二十七歳の李白は安陸（湖北省）を訪れ、西北部にある寿山に隠れ住んだ。この詩はその年の秋、或る夜ふけに月を見ながら故郷の思いを詠んだものである。⁽²⁶⁾

題名「静夜思」のように、深夜、窓から射し込む月光は、白く霜のように寝台の直前に現れている。詩人は頭を挙げて山月を望み、頭を低れて故郷を思うという名作である。『唐詩選』に採られて、日本人には、あまりにもよく知られている詩ではあるが、平安時代における李白の詩作の享受は必ずしも盛んとは言い難く、当時にあつて、周知の詩であつたという保証はない。しかし、藤原佐世（八四七～八九七）撰、八九〇年ごろ成立の『日本国見在書

目録』には「李白歌行」三⁽²⁷⁾」が見え、『千載佳句』にも次に示すように李白の二首の佳句が見られる。

一 階一夜留明月 金殿三春滿落花

二 山半落青天外 二水中分白鷺洲⁽²⁸⁾

その例をもって考えれば、平安時代に李白の作品が読まれた可能性はあるだろう。

以上、いくつかの窓から射しこむ月光に対する漢詩をあげてきた。『枕草子』本段において「月の窓より洩り」の「窓」は漢文学の世界を想起したものと記されている。そして、深夜の寝室に白い月光の風情に対して「人歌よむかし」と「歌」が使われているものの、ここでは、おそらく相応しい漢詩を思い出し、男性ならば思いきり漢詩の秀句を口ずさむか朗詠することであろうが、女性である清女は、やはり「歌」を詠みたかったのだろう。

『枕草子』には月にかんする漢詩を朗詠した場面がいくつか確認できる。

(1) 「左衛門の陣にまかり見む」とて行けば、我も我もと問ひつぎて行くに、天上人あまた声して、「なにがし一声秋」と誦してまゐる音すれば、逃げ入り、物など言ふ。「月を見たまひけり」などめで歌よむもあり。

(第七四段「職の御曹司におはしますころ」一三二頁)

(2) 果てて、酒飲み、詩誦じなどするに、頭中将齊信の君の、「月秋と期して身いづくか」といふ事をうち出だしたまへりし、はたいみじうめでたし。

(第二二九段「故殿の御ために、月ごとの十日」二四二頁)

(3) 五月ばかり、月もなういと暗きに、(中略)まめごとなども言ひ合はせてゐたまへるに、「裁ゑてこの君の称す」と誦して、またあつまり来たれば、「殿上にて言ひ期しつる本意もなくては、など帰りたあひぬるぞとあやしうこそありつれ」とのたまへば、「さる事には、何のいらへをかせむ。

(第一三一段「五月ばかり、月もなういと暗きに」二四七〜二四八頁)

(4) 大路近なる所にて聞けば、車に乗りたる人の、有明のをかしきに簾あげて「遊子なほ残りの月に行く」という詩を、声よくて誦したるもをかし。

(第一八五段「大路近なる所にて聞けば」三二三頁)

(5) 十二月二十四日、宮の御仏名の半夜の導師聞きて出づる人は、夜中ばかりも過ぎにけむかし。(中略)月の影のはしたなさに、うしろざまにすべり入るを、常に引き寄せ、あらはになされてわぶるもをかし。「凜々として氷鋪けり」といふことを、かへすがへす誦しておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、行く所の近うなるも、くちをし。

(第二八三段「十二月二十四二日、宮の御仏名の」四三七〜四三八頁)

これらの(1)～(5)は主に月を主題として朗詠した場面である。季節によって様々な形の月を朗詠している。例えば、(1)は秋の月、漢詩は源英明「納涼」であり、(2)も秋の月、漢詩は菅三品「懷旧」であり、(3)は五月の月、漢詩は、藤原篤茂「竹」であり、(4)は有明の月、漢詩は賈嵩「暁」であり、(5)は冬の月、漢詩は、公乘億「十五夜」である。このように、全て漢詩の秀句を朗詠したものである。

男性は漢文学(真名)、女性は仮名文学(かな)という平安貴族の教養からみると、女性である清少納言は詩的世界を想いながらも歌を詠うとしたと考える方が相応しいであろう。

七 おわりに

以上、三卷本『枕草子』にしか見えない「九月二十日あまりのほど」章段について、3つの問題点を考えた。一つは、文頭「九月二十日」の年時について、『小右記』長徳三年(九九七)、清少納言は中宮定子から離れて、自分の里にいる時期に、左大臣道長に誘われて長谷寺に参詣した可能性を提言した。

もう一つは、「月の窓より洩り」の「窓」で、歌語としての「窓」は、『万葉集』から平安朝まで定着していなかったようである。仮名文学における「窓」を考察してみると、多くの場面で漢詩文と関係があることについて考察した。

本段では、清少納言は深夜の窓から射し込む月光に感動して、歌を詠みたかったのであろう。これは清女の本音

とも考えられるが、「窓」があることから考えて、同じような情景の相応しい漢詩を思い出し、男性ならば大きく声を出して、漢詩の秀句を朗詠するべきだろうが、女性である清女はやはり「歌」に表現したのであろう。

『枕草子』本段に現れた「人歌よむかし」や「月の窓より洩り」を合わせてみると、これらの表現は、典型的な「和」と「漢」を融合したものと考えられる。『枕草子』における漢文学の背景を理解すれば、新たな読みの可能性が広がるであろう。

〔注〕

- (1) 三卷本、松尾聰・永井和子『枕草子』新編日本古典文学全集（小学館二〇〇二）。能因本、松尾聰・永井和子『枕草子』日本古典文学全集（小学館一九七九）。前田本、田中重太郎『枕冊子新註（前田家本）』（古典文学庫一九七一）。堺本、速水博司『堺本枕草子評釈——本文・校異・評釈・現代語訳・語彙索引——』（有朋堂一九九〇）。

- (2) 加藤盤斎『清少納言枕草紙抄』、北村季吟『枕草子春曙抄』、岡西惟中『枕草子旁註』の中では、いずれも本章段はなし。明治以後、平成までの代表的な三卷本注釈書を見ると、池田亀鑑・岸上慎二『枕草子』（日本古典文学大系）、渡辺実『枕草子』（新日本古典文学大系）、松尾聰・永井和子『枕草子』（新編日本古典文学全集）、萩谷朴『枕草子』上・下（新潮日本古典集成）、石田穰二『枕草子』上・下（角川ソフィア文庫）には、本章段「九月二十日」に対して、何年の九月二十日なのかについて触れていない。

- (3) 岸上慎二『枕草子』と中関白家『撰関時代史の研究』（吉川弘文館一九六五・三五〇頁）と萩谷朴『枕草

子解環』四（同朋舎一九八三・三四〇頁）を参照。

- (4) 『増補史料大成 小右記』一別巻（臨川書店一九九八）一三六～一三七頁。『小右記』の記事は、大日本史料第二編之三、次のようにある。「二十日、壬午、左大臣道長、長谷寺ニ詣ヅ」。これらの記録は『枕草子大事典』『枕草子総合年表』の「主要事項」の中にも、次のように書かれている。「九月二十日 道長長谷寺に参詣。「一上布衣城外の例、抑訪ぬるに前古聞かざる所なり、事々軽忽」（小右記）『枕草子大事典』（勉誠出版二〇〇一）一〇九七～一〇九八頁。但し、「清少納言事項」には空白である。書き下し文は、『訓読小右記』（古日記輪読会）に拠る。

- (5) 石田穰二『新版 枕草子』下巻（角川書店二〇〇六）九四頁。
- (6) 岸上慎二『枕草子研究（続）』（笠間書院 一九八三）一〇七～一〇九頁。
- (7) 森本元子『古典文学論考』『枕草子和歌日記』（新典社一九八九）二一五頁。
- (8) 坏美奈子『新しい枕草子論』（新典社 二〇〇四）四六頁。
- (9) 萩谷朴『枕草子』上「解説」（新潮社 二〇〇〇）三七二頁。
- (10) 近藤みゆき『和泉式部日記』（角川書店 二〇〇三）四二頁。
- (11) 木藤才蔵『徒然草』（新潮社 一九八三）五三頁。
- (12) 右（10）同、四三頁。
- (13) 桑原博史『無名草子』（新潮社一九七六）一〇九～一一〇頁。
- (14) 森本茂「枕草子鑑賞」『枕草子講座』三（有精堂 一九七五）一八〇頁。
- (15) 久保田淳・馬場あき子『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店 一九九九）八二一頁。

- (16) 近藤みゆき『和泉式部日記』(角川文庫 二一〇〇三) 二二一～二三三頁。
- (17) 小島憲之『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』(岩波書店 一九八八) 一一六～一二七頁。
- (18) 窓鶏 芸文類聚(鳥部)に「幽明錄曰、晉袞(えん)州刺史沛国宋処宗、嘗買得一長鳴雞、愛養甚至、恒籠著窓間、雞遂作人語、与処宗談論、極有玄致、終日不綴、処宗因此功業大進」(小島憲之『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』日本古典文学大系・懷風藻補注⁵²) 四五九頁。
- (19) 前掲(17) 書同、二四七頁。
- (20) 前掲(17) 書同、二九九頁。
- (21) 小島憲之『国風暗黒時代の文学』下――弘仁・天長期の文学を中心として――(塙書房一九九一) 三〇八六頁。
- (22) 川口久雄『菅家文草・菅家後集』(岩波書店 一九八八) 三五二頁。
- (23) 花房英樹『文選』(詩騷編) 四(集英社 一九八一) 四五三頁。
- (24) 岡村繁『白氏文集』(明治書院 二〇〇四) 二九頁。
- (25) 目加田誠『唐詩選』(明治書院 二〇〇四) 六〇六頁。
- (26) 宇野直人『NHK古典講読漢詩 李白』(日本放送出版協会二〇〇七) 六四頁。
- (27) 矢島玄亮『日本国見在書目録――集証と研究――』(汲古書院一九八七)「李白歌行集三「卷」○李白の歌行詩を邦人の収録したものか。」二二五頁。
- (28) 後藤昭雄・金原理『新撰万葉集・千載佳句』による。①は五六頁であり、②は五八頁である。
- (29) 『枕草子』における漢文学の受容について、昭和から代表的な論文及び単行本を、次のようにある。田中

重太郎氏「枕冊子に投影した海外文学」『国文学』（一九六一）。大曾根章介氏「『枕草子』と漢文学」『国文学』（一九六七）。塩田良平氏『諸説一覽 枕草子』（木越隆「出典・源泉・先縦」）（明治書院一九七〇）。川口久雄氏「唐代民間文学と枕草子の形成」『平安朝日本漢文学史の研究』下卷（明治書院一九八二）。松田豐子氏「清女表現と漢籍典拠——出典語の形象性——」『清少納言の獨創表現』（風間書房一九八三）。相田満氏『枕草子』漢故事考——『蒙求』故事とのかかわりを通して——『東洋文化』（無窮会一九九五）。古瀬雅義氏『枕草子』「憚りなし」の指示する『論語』基本軸『論考平安王朝の文学』（新典社一九九八）。矢作武氏「枕草子と漢籍」『枕草子大事典』（勉誠出版二〇〇一）。坏美奈子氏「枕草子の本文——典拠引用における能因本と三卷本の表現差——」『新しい枕草子論』（新典社二〇〇四）。李曉梅氏『枕草子と漢籍』（溪水社二〇〇八）

第五章 『枕草子』 「朝にさる色」の表現考

——「雲は」の章段を中心に——

一 はじめに

『枕草子』 「雲は」の章段は、いずれも四系統本文に見えるが、異文は少なくない。まず該当する章段の四系統本文^①を対照するために、それぞれ示す。

三卷本『枕草子』新編日本古典文学全集（小学館）

第二三七段 雲は

雲は 白き。紫。黒きもをかし。風吹くをりの雨雲。明けはなるるほどの黒き雲の、やうやう消えて、白うなり行くも、いとをかし。「朝にさる色」とかや、文にも作りたなる。
月のいと明かき面に薄き雲、あはれなり。

（三七一～三七二頁）

能因本『枕草子』日本古典文学全集（小学館）

第二三〇段 雲は

雲は 白き。紫。黒き雲あはれなり。風吹くをりのあま雲。

(三七二頁)

前田家本『前田家本枕冊子新註』(古典文庫)

第一〇段 雲は

雲は 白き。紫。風吹くをりのあま雲。いま明けはなるるほど、黒き雲のやうやう明けてしろくなりゆく、をかし。「朝にさる色」とかや、ふみにも作りためる。

(七頁)

堺本『堺本枕草子評釈』(有朋堂)

九四 雲は

雲は、むらさき。風ふく日のあまぐも。ひいりはてたるやまのはの、まだなごりとまれるに、うすきばみたる雲の、ほそくたなびきたる、いとあはれなり。

あけはななほど、くろきくものやうやうきえて、しろくなり行をかし。「あしたにさるいろ」とかや、ふみにもつくりためり。

(四七頁)

右に掲げた四系統本文を比べてみると、能因本本文には、「白」、「紫」、「黒」と風吹く「あま雲」以後の文が見えない。これが能因本本文では欠落したのか、容易に定め難い。ここで注意していただきたいことは、右に傍線を付けた、いずれも三巻本、前田家本、堺本本文に見える「朝にさる色」、あるいは「あしたにさるいろ」の表現である。これは作者が「ふみにもつくりためり」と記しているが、いったいどのような「ふみ」の表現であろうか。そこで、

もつと詳しく考証してみたい。

二 先行研究の解釈及び問題

最初に江戸時代から現在までの従来の代表的な註釈書における「朝にさる色」に関する解釈を確認する

1 加藤盤斎（一六二一～一六七四）『清少納言枕草紙抄』（新典社）

【朝さる色】とは、朝にさうある色と云義なり。

（六五九頁）

2 北村季吟（一六二五～一七〇五）標注 岩崎美隆（一八〇四～一八四七）旁注

『枕草子春曙抄』（国文名著刊行会 一九三四）

雲は「辰ニ記セル如シ」

しろき。むらさき。くろき雲・哀也。風吹折のあま雲。（明はなるゝほどの、くろき雲のやうやうしろ
ふな

りゆくも、いとおかし。朝にさる色とかや、ふみにもつくりけり。月のいとあかき面に、薄き雲いと
哀也。）

【標注】朝に去色 古詩の詞なるべし。未考。

（六一〇頁）

3 金子元臣（一八六九～一九四四）『枕草子評釈』（明治書院 一九六〇）

釋 ○朝に去る色 本文あるべしと思へど、未だ考えず。準據は巫山の故事なり。宋玉の高唐賦に「昔者

楚襄王與宋玉游於雲夢之臺云々、妾住巫山之陽高丘之岨、旦爲朝雲暮爲行雨、朝々暮々陽臺之下、旦朝視之如言、故爲立廟號曰朝雲、王曰、朝雲始出狀若何也。玉對曰、其始出也、對兮若松櫨、其少進也、晰兮若姣姬揚袂朝日而望所思、忽兮改容、偁兮若駕騶馬建羽旗湫兮如雨風淒兮如雨云々」とあり。

評 曙雲を中心として、いろいろの雲を挙げ、さて月前の雲に及んだ。當時において雲の觀察に、これだけ耽り得たことは、珍しい事であり、又空前であつた。

（九一二頁）

4 池田亀鑑・岸上慎二校注『枕草子』（岩波書店）

頭注…「さる」は然るで、「朝に何々の色」の意か。漢詩の句と解されるが、いかなる詩か未詳。関係のありそうな詩に宋玉の高唐賦「…旦爲朝雲、暮爲行雨。朝々暮々陽臺之下。旦朝視之如言。故爲立廟名曰朝雲」がある。

（二七一頁）

5 萩谷朴校注『枕草子』下（新潮社）

頭注…白樂天が『文選』卷十九、宋玉の「高唐賦」を踏まえて作った『白樂天詩集』卷十二所収「花非花」の「花非花、霧非霧。夜半來、天明去。來如春夢幾多時。去似朝雲無覓處」を引く。

（一五二～一五三頁）

6 上坂信男・神作光一校注『枕草子』下（講談社学術文庫 二〇〇三）

「語釈」 朝にさる色 出典未詳。

（七二頁）

7 津島知明・中島和歌子編『新編枕草子』（おうふう 二〇一〇）

「花か花に非ず、霧か霧に非ず。夜半に來^{きた}たり、天明に去る。來ること春夢の如く。幾多の時。去ること朝雲に似て、覓^みむる處無し」（文集・十一・花非花）に拠る。↓補注1・112

（二四四頁）

補注1 「朝雲」は、楚の王が昼寝の夢中で契った神女の「去るときに辞して曰く、妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。旦には朝雲と為り、暮には行雨と為り、朝朝暮暮、陽台の下にあらん。旦朝、之を視るに言の如し」（文選・十九・宋玉・高唐賦序）が出典。これに拠る白詩「花非花」（二三九注）や、劉禹錫「嗟く所有り、二首」の「相逢ふも相失ふも尽く夢の如し、雨と為り雲とや為りにけん、今は知らず」「鄂渚濛濛として煙雨微なり、女郎（恋人）の魂暮雲を逐ひて帰る」等にも拠る。（後略）

（三〇八頁）

補注112 「曙をみれば、霧か雲かと見ゆるもの立ちわたりて、あはれに心すごし」（蜻蛉・下・天禄二年・鳴滝籠り）も、同詩句を引くか。又「非花非」の出典は、願文や詩歌に引かれる「朝雲暮雨」による。「（神女は王に）去るときに辞して曰く、妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。旦には朝雲と為り、暮には行雨と為り、朝朝暮暮、陽台の下にあらん。旦朝之を視るに言の如し」（文選・十九・宋玉・高唐賦の序）。本段は、これ自体も踏まえるか。

右の1～7の解釈を纏めて言うと、次のようになる。

1は、文字の通り、「朝にさる色」は「朝にそうある色」である。「さる」は「そうある」と解釈した。2は、「朝にさる色」について、「古詩の詞なるべし。」と指摘し、ただ、具体的には、どのような「古詩」の「詞」かは指摘していない。「さる」を「去る」に翻字した。3は、『文選』にある宋玉「高唐賦」と明示した。4は、「1」「2」に対して、異なる解釈を出した、それは「さる」は「去る」ではなく、「然る」と解釈した。つまり「朝にさる色」は「朝に何々の色」という意味である。5は、まず「さる」の意味については「1」「2」と同じように「去る」と指し、また漢籍の典拠として、白樂天「花非花」を指摘した。しかし、6は、「1」「3」「4」「5」のどの解釈も踏襲せず、「2」の「未考」のように再び「出典未詳」を記した。7は、「3」の指摘に賛成し、「5」が指摘された典拠を引用している。

これらの解釈をさらに絞って、問題点を纏めたい。第一に、「さる」は「去る」と解釈することが必ずしも正しくないということである。第二は、「5」、「7」に指摘された白樂天の「花非花」は必ずしも相応しいと考えられていない。これらについて論考を進めたい。

三 「朝にさる色」と「朝に去る雲」

前述したように、「7」は「5」を踏まえて、白樂天の「花非花」を典拠と指摘する。このことは、萩谷朴氏が最初に『新潮日本古典集成』『枕草子』頭注に指摘し、後に『枕草子解環』(四)の中で、もっと詳しく解釈した。な

お、氏の解説は長文であるため、ここで論述に必要な箇所のみを次に書いておく。ただし、文頭のアルファベットは筆者が付けた。

A しかし、高唐賦というも神女賦というも、枕草子に「朝に去る色」と引いたものに合致する章句を、そこから見出すことは出来ない。その点は、関根集注が「確とそれとも思はれず」といい、金子評釈が「本文あるべしと思へど未だ考へず。準拠は巫山の故事なり」という如く、朝雲暮雨の巫山神女の故事に基づく古詩を引用したもので、直接に、宋玉の賦を引用したものとは思われないのである。

B そこで田中全書と全講とは、この本文個所を「朝に去る色」とよむことをやめて、巫山の故事と一応切り離し、「朝に然る色」と原詩を臘化したものの、それゆえに、原典を見出だすのは難しいのであろうと考え始めた。

C やはり「朝に去る色」と訓で、巫女神女を詠じた古詩を引用したものと考え、現在の調査の段階において、最も有力な原典として、白氏文集感傷四にある「花非花」の詩を挙げるのである。

花非花、霧非霧。夜半来、天明去。来如春夢幾多時、去似朝雲無覓处。

これは、藤原定家（推定）が、松浦宮物語一篇を創作し、それが如何にも古い昔の物語であるかの如くに見せ、終末もなく書きさしになっていることを、冊子の奥が巧ちて散佚したものであるかのように見せかける為に付加した偽跋に引用したところであつたが（「松浦宮物語作者とその漢学的素養」『国語と国文学』昭和十六年二

○八〇二〇九号所載拙稿参照)

D 「天明ニ去ル」は「アシタニ去ル」ともよみ得るし、「去ルコト朝ノ雲ニ似テ」からも「朝に去る色」の句は導き出すことが出来る。「色」は即ち「雲の色」に他ならないからである。或はもし、「色」と「雲」と酷似する草書字体を媒体として、「朝に去る色」が「朝に去る雲」から転化した誤謬本文であると仮定したら、「朝に去る雲」という句は、全くこの「花非花」の詩から出たものに他ならないと確定してもよい位なのだが。⁽⁴⁾

右に挙げたA、B、C、Dの文をよく読んでみると、次のような問題が浮き上ってくる。

第一は、原文の「朝にさる色」が「朝に去る雲」に転化した証拠がない。

それが更にはっきり表示された部分は、氏の「朝にさる色」の現代語訳文である。

「朝に去る雲」とか何とかね、詩にも作っているようだ。⁽⁴⁾

右に挙げた訳文には二つ問題がある。

一つ目は、「去る」の問題である。「さる」は「去る」と「然る」の二つの論説がある。なぜ萩谷氏は「去る」と解釈したのだろうか。その理由は、恐らく、前掲したBに「朝に然る色」と「原詩を臆化したもの」、「それゆえに、原典を見出だすのは難しいのであろうと考え始めた」から、「然る」をやめて、「やはり」Cでは「花非花」の中の「天明去」に基づいて推定したのであろう。その推定過程はD文に展開されている。もう一度見てみよう。

「天明ニ去ル」は「アシタニ去ル」ともよみ得るし、「去ルコト朝ノ雲ニ似テ」からも「朝に去る色」の句は導き出すことが出来る。(Dによる)

しかし、これらの推定は非常に危ないものである。一般に原典を推定する場合、表示された語句に類似のものを探すはずである。しかし、萩谷氏は決めた漢詩に基づいて清女の書いた文を推定するのである。この方法は極めて危険で本末転倒の可能性があると思われる。

もう一つは、「雲」が「色」に転化した問題である。もしそうだとしたら、「雲は」の章段に相応しくない。文字の通り、「色」と「雲」の二つのイメージである。一方、「朝にさる色」を「朝に去る雲」に変化したら、原文の趣旨とリズムが相応しくない。

さらに、なぜ萩谷朴氏は「最も有力な原典として」に「白氏文集感傷四にある「花非花」の詩」だけを挙げたのだろうか。つまり、原文の「朝にさる色」は巫山の故事を詠じた、「花非花」以外の漢詩ではないかということなのである。

周知の通り、白樂天は唐代の詩人である。「巫山」と「朝雲」のキーワードとして、全唐詩には多くの関連の詩が現れている。その中に、萩谷朴氏に指摘された白樂天の「花非花」も含まれるが、わかりやすくするために、そのうちの「巫山」と「朝雲」の文字があつた詩で、この問題と関係がありそうな一〇首をここに参考までに引用しておく。

- | | | | |
|------|-------|--------|-----------------------|
| (二) | 沈佺期 | 「巫山高」 | 俯眺琵琶峽 平看雲雨臺 |
| (三) | 劉方平 | 「巫山高」 | 峽出朝雲下 江來暮雨西 |
| (四) | 僧齊己 | 「巫山高」 | 巫山高，巫女妖 雨爲暮兮雲爲朝 |
| (五) | 郎大家宋氏 | 「朝雲引」 | 巴西巫峽指巴東 朝雲觸石上朝空 |
| (六) | 李端春 | 「遊樂」 | 明朝若相憶 雲雨出巫山 |
| (七) | 劉禹錫 | 「楊柳枝」 | 巫峽巫山楊柳多 朝雲暮雨遠相和 |
| (八) | 李白 | 「感遇」 | 巫山賦綵雲 郢路歌白雪 |
| (九) | 李白 | 「巫山枕障」 | 朝雲夜入無行處 巴水橫天更不流 |
| (一〇) | 白居易 | 「長相思」 | 深畫眉 淺畫眉 蟬鬢鬢髻雲滿衣 陽臺行雨回 |
| | | | 巫山高 巫山低 暮雨瀟瀟郎不歸 空房獨守時 |

これらの詩は、いずれも「巫山」と「朝雲」の表現はあるが、本章段における「朝にさる色」の典拠とはしづらい。なぜなら、根本的な原因は、朝雲の色について一切表現していないからである。同じように、萩谷朴氏が指摘された白樂天「花非花」にも「朝雲」の「色」がないため、典拠とはいいい難いところである。

四 「巫山」と「白帝」

次に、一では挙げなかったが、先行の研究で、もう一つの典拠として、指摘された漢詩を分析してみたい。それ

は、李白の「早發白帝城」である。

李白の「早發白帝城」を指摘したのは高橋敬子氏である。^⑤ 周知の如く李白の「早發白帝城」は次のようなものである。(引用文は『李太白集』続国訳漢文大成)による)

李白「早發白帝城」

朝辞白帝彩雲間

千里江陵一日還

兩岸猿声啼不住

輕舟已過万重山

(三二〇頁)

以上の漢詩をざっと見ると、「朝にさる色」に似ているのであるが、よく読むと、清少納言がこの漢詩を引用したとは思えないと、坪美奈子氏は次のような疑問点を書いた。

高橋敬子氏(略)は新たに、典故として李白の「早發白帝城」詩「朝辞白帝彩雲間」を指摘する。しかし、清女が主体を李白から雲に転じて「朝に彩雲が去って行く」の意に解いたとまでみることの蓋然性について、章段の文脈とも合致せず疑問である。^⑥

さらに付け加えれば「朝にさる色」の出典が、確実に「巫山」の故事を踏まえるかは断定できないが、前に引用

した「2」にはそう指摘されているし、「巫山」の故事自体は「朝雲」との間に密接な関係がある。念のため、中国の『辞源』（北京、商務印書館「合訂本」、一九九八）による解説を、それぞれ記入する。

【巫山】（一）山名。1 在四川巫山縣東、即巫峽。巴山山脈特起處。有十二峰、峰下有神女廟。（略）2 在山東肥城縣西北。（略）（二）縣名。属四川省。（三）文選戰國楚宋玉高唐賦記楚襄王遊雲夢臺館、望高唐宮觀、言先王（懷王）夢與巫山神女相會。神女辭別時說…「妾在巫山之陽、高丘之阻。旦爲朝雲、暮爲行雨。朝朝暮暮、陽臺之下。」後人附會、爲之塑像立廟、號爲朝雲。後稱男女幽會爲巫山、雲雨、高唐、陽臺、皆本此。

（五二〇頁）

続いて、「白帝」の解説文も掲げておく。（引用文は同上）

【白帝】（一）五帝之一。（略）（二）城名。在今四川奉節縣城東瞿塘峽口。東漢公孫述至魚復、見白氣如龍出井中、自以爲瑞、改魚復爲白帝。三國時蜀漢以此爲防吳重鎮、改名永安。唐李白李太白詩「早發白帝」朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還」。即此地。

（一一七〇頁）

以上に挙げた資料の中の、「巫山」は四川省の巫山縣の東にあり、「白帝」は四川省の奉節縣の城東にある。これらは同じ場所ではない。また典拠から見ると、「巫山」に関わる故事は「朝雲」である。これは、前掲した『辞源』（三）の『文選』の宋玉が書いた「高唐賦」における楚懷王と巫山の神女が会う故事である。神女が巫山の南に向

いた高山で、朝は雲になり、夕方は雨が降るといふ。そして、後世の人たちにより、この故事から、「巫山」や「雲雨」などの語彙は、男と女の出会いの意味となった。

一方、「白帝」と「巫山」の違いは、まず場所はそれぞれ異なる。また「白帝」の故事は、「白氣」と言われる。この「白氣」の由来は、前掲の『辞源』の解釈したように、東漢の公孫述という人物が、はじめて「魚復」のところで、「白氣」が萌えて、まるで龍の口から出たようで、その後、場所の名前「魚復」を「白帝」と変更したという。唐代の李白は「早發白帝城」という詩を書いた後に有名になったのである。

以上のことから見ても、高橋氏が指摘された李白の「早發白帝城」は出発点からして間違いではないだろうか。さらに、「全唐詩」によると、「雲」が使われた、一二七六〇首の唐詩を明記しているが、他に似ているような唐詩がたくさんある可能性が存在している。

更に、「早發白帝城」の趣旨と清少納言の「朝にさる色」が全体的に相応しくないといい点であるが、それについてはまず高橋氏の論の次の箇所をみてほしい。

「朝にさるいろ」という引用は、「朝辞白帝彩雲間」の詩句から、「朝」「辞」「彩」の三文字を採り上げ、上から順に和訓読みをして、つなげた形である。「雲」が取上げられていないのは、この段のテーマが雲なので、引用詩句には当然「雲」の文字が含まれているはずだからである。「白帝」は固有名詞であり、話題と関係がなく、「間」は、作者の関心が「雲」までであったので採り上げなかったものと思われる。

夜明けの雲の様子に感興を覚えた作者は、同じように朝の雲の情景が美しく表現されたこの詩句を想起して引用したものと思われる。

詩の「辭（さる）」の主語は李白であるのだが、作者は本来の意味を知らず、「朝に彩雲が去って行く」と解釈したのかもしれない。あるいは、本来の意味は知ってはいたが、雲の話題に引用するのであるから雲を主体とした解釈にしたかったものと思われる。

しかし、この文章から次のような疑問が浮かび上がって来る。

問題は、なぜ清少納言が「朝辭白帝彩雲間」の中の「朝にさるいろ」のみを採ったのだろうか。高橋氏の文の推測によると、「さる」は「辭」であり、「いろ」は「彩」であるが、その論理でいけば、「朝にさるいろ」は「朝に辭彩」になる、いったい清少納言はこれらのような「漢詩」を引用して何を表現したいのだろうか。高橋氏の文の分析の通り「詩の「辭（さる）」の主語は李白であるのだが」、清少納言が引用した「朝に辭彩」の中の「辭」の主語は誰だろう。これを比べて見ると、「朝にさる色」の中の「さる」を「辭（さる）」と理解することは間違いである。

では「白帝」は「固有名詞であり、話題と関係がなく」と指摘されたが、なぜ清少納言がこれらの「話題と関係がなく」漢詩を思いだしたのだろうか。高橋氏は一切提供していない。清少納言の漢籍引用方法の特徴の一つに、漢詩と枕草子の文脈の一致がある。

例えば、本論「序章」に分析した『枕草子』「第二八〇段」「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて」の中に中宮定子は「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」と、仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げれば、笑はせたまふ。」のように、無論、この章段の引用漢詩は『白氏文集』「卷一六」律詩「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」の「重題」という題の四番目の詩の中の「香炉峰雪撥簾看」であるが、清少納言がこの漢詩の内容を知らない場合は、「御簾を高く上げた」とはできないだろう。

また本論の第一部の第一章『枕草子』における『白氏文集』の引用」に挙げた「第七八段」「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」の章段では、頭中将は清女の状況を聞くため漢詩『白氏文集』「卷一七」律詩「廬山草堂 夜雨 獨宿（廬山草堂に、夜雨獨り宿し）」の対句「蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中」の遣り取りから見ると、もし、清少納言が元々漢詩の原文を理解してないとしたら、返事の中で「草の庵」の文字を書くことはないだろう。ここで枕草子の全ての漢籍を分析はできないが、これだけの例を見ても、高橋氏が言う「作者は本来の意味を知らず」は当たっていないと思われる。

以上の論述を纏めて言えば、高橋氏文に指摘された「朝にさる色」の「さる」は「早辞白帝彩雲間」の「辞」と理解することは相応しくない。李白の「早發白帝城」の作品と枕草子の「雲は」章段を比べてみると、内容的に関係がないので、清少納言がこの漢詩を引用した可能性は低い。既に前文に論証した「朝にさる色」の「さる」は白楽天の「花非花」の中の「天明去」の「去」でもないことが分かった。これらを考えて見ると、既に述べた可能性が再び浮かび上がる。一つは、「さる」は「然る」になる可能性が極めて高いことである。もう一つは引用原典の特定である。先行研究で指摘されたように「準拠は巫山の故事なり」である。「巫山」をキーワードとすると、「全唐詩」には、一四八首の関連の詩がある。それらの詩を検討してみると、「朝にさる色」の典拠は探せなかった。

では、日本人が書かれた漢詩における「雲」、「巫山」、「朝雲」、「色」に関する表現はいかがであろう。

五 日本漢詩における「朝雲」の表現

『懷風藻』には、「朝雲」は一箇所。その詩を次に掲げておく。

大伴王

欲尋張騫跡 幸逐河源風

朝雲指南北 夕霧正西東

嶺峻糸響急 谿曠竹鳴融

將歌造化趣 握素愧不工

朝の雲に対して、夕方の霧の対句の連想であるが、朝の雲はどのような典拠とは読み取れない。

平安期漢詩文における「朝雲」の表現は、多くはない。「巫山」と繋がる表現が、『経国集』、南淵永河の「雑言奉和太上天皇春堂五詠」のうち、「春堂六扇屏」の詩句である。

淡墨図形尚可弁 **朝雲**帰処巫山晴

これは実物の朝の雲の描写ではなく、いわゆる「巫山」による物語からの「朝雲」の風景であろう。

藤原伊周（儀同三司）が「牛女秋意」という題で、「朝雲」を援用して詠んだ詩は、『本朝麗藻』のなかにある。詩の全文は次のようになる。（本文は『本朝麗藻全注釈』による）

何為靈匹久相思 一歳唯成一会期

行佩応紐冷靈玉 双蛾且画遠山眉

未終秋夜難來意 已至**朝雲**欲別時

此恨綿綿無説尽 蒼茫天水問阿誰

これは牽牛と織姫の故事を翻案した詩作である。一年一度会い、別れるときにその惜別の気持ちを表すものである。この「朝雲」は、特に「巫山」との関係はないであろう。

『枕草子』以後、編纂された『和漢朗詠集』を検討してみると、「雲」を用いる詩作はいくつか見えるが、「朝雲」の詩句は一箇所。それは、『和漢朗詠集』巻上、秋、「霧」の江相公（八八六～九五八）の「延喜御屏風詩」である。

雖愁夕霧埋人枕 猶愛**朝雲**出馬鞍

この詩の故事は、始皇帝の時、この山から五色の気が立ったので、山を削りつたところ、それで馬の鞍の形になったという。山中に幽居していると、夕方霧がたちこめて枕のほとりまで埋めるのでわびしい。しかし、朝やけの雲が馬鞍山のみなを立ち出るすがたのおもしろさはすてがたとある。⁽⁷⁾

以上、いささか例を取り上げて、日本の漢詩文における「朝雲」の表現を検討した。「朝雲」は「巫山」との繋がりに、また自然の景物として、例えば「夕霧」と対する表現が見える。しかし、『枕草子』における本章段の「朝にさる色」とは繋がり難いところがある。「色」に関しての描写がないからである。

清少納言が記した「朝にさる色」は、彼女が書いた「文にも作りたなる」といことは、やはり大陸から輸入され

たものと考えたい。

六 「朝にさる色」と「朝雲曲」

前述したように、『全唐詩』には「朝雲」に関する「色」が付いた相応しい詩作が見えないが、一方、隋、唐時代の類書⁽⁸⁾における「天部」の「雲」に関する色の描写、「五色」に注目したい。すなわち雲の色は五つあるということである。

『初學記』卷一 雲

京房易飛候占曰 視四方 常有大雲五色

西京雜記曰 瑞雲曰慶雲 曰景雲 雲五色曰慶

五つの色は「慶雲」と言われる。この五つの色は、具体的にどのような色なのか、また各色はどのような意味を象徴しているのか、『北堂書鈔』、『初學記』、『藝文類聚』、『白氏六帖』は、いずれも次の文を引用している。

鄭司農注云 一二至二分觀雲色 青為虫 白為喪 赤為兵荒 黑為水 黄為豐

しかし、これらの五つの色の雲は、必ず「朝雲」と繋がるとは限らない。「朝雲」については、前述の四種類書を検

討した結果、最も『枕草子』本章段における「朝にさる雲」の表現に近いものは『藝文類聚』にしか見えない詩作である。それは沈約（四四一～五一三）の次の詩作である。（本文は『藝文類聚』上海古籍出版社に拠る）

『藝文類聚』卷四十二 樂部二 樂府

朝雲曲曰 陽臺氛氲多異色 巫山高高上無極 雲來雨去長不息 長不息 夢來游 經萬世 度千秋

（七六五頁）

「朝にさる色」の出典は沈約の「朝雲曲」と考えられる理由は、三点がある。第一に、漢詩の「巫山」の故事である。第二に、漢詩のテーマ「朝雲」である。第三に、「色」である。これらの三つの理由をそれぞれ分析していきたい。

第一に、漢詩の「巫山」の故事である。前に挙げたように、「後人附會、爲之塑像立廟、號為朝雲。後稱男女幽會為巫山、雲雨、高唐、陽臺、皆本此」から、「巫山」と「朝雲」の密接な関係とは、有名な楚懷王と巫山の神女の話事であると判断される。このような有名な故事は清少納言も知っている可能性が高い。だとすれば、「雲は」章段を書く時に、「巫山」の「朝雲」の色についての漢詩を思いだしたのは自然であろう。

第二に、漢詩のテーマ「朝雲」である。既に述べたように、「巫山」についての漢詩の中には「朝雲」の文字がたくさん出て来るのは事実であるが、「巫山」の「朝雲」を中心として詠んだ漢詩は、沈約の「朝雲曲」しかなかった。「朝雲曲」の「曲」の意味は『辞源』（北京 商務印書館「合訂本」、一九九八）によると、次のようなものである。

〔前略〕（八）樂曲。（略）（九）樂曲的唱詞。又韻文的一種文體。秦漢以來各種可以入樂的樂曲、如漢以及唐宋的大曲、民間小曲等、皆稱曲。」

（七八七頁）

沈約の「朝雲曲」は「朝雲」がテーマで間違いない。同じように、清少納言は「雲」を見て、「白」い雲、「紫」の雲、「黒」の雲及び雨雲を表現し、翌日の朝の雲を見て、同じ朝雲を中心にした漢詩を思い出すことは自然である。

第三に、「色」である。「色」は「朝にさる色」の漢詩の出典を特定する時に十分注意しなければならないポイントである。「雲は」の章段にある、「白き」、「紫」、「黒き」、「黒き雲の、やうやう消えて、白うなり行くも」は「朝雲曲」の「陽臺氛氲多異色」を踏まえているに違いない。

先行研究に指摘された、宋玉の「高唐賦」、白樂天の「花非花」は、いずれも、「色」がない。この事実を無視してそれらを出典と認定することは難しい。

最後に、沈約の時代、及び清少納言はどこで、沈約の「朝雲曲」を読んだかについて、説明しなければならない。

沈約（公元四四一―五一三）休文、吳興武康（今屬浙江）人。曆任宋、齊、梁三代。官至尚書令、封建昌縣侯。卒諡隱。著作今存者有『宋書』及後人輯的『沈隱侯集』。⁹⁾

とあるように、有名な文人である、沈約の「朝雲曲」は『藝文類聚』に見られる。『藝文類聚』については既に小島

憲之氏は『上代日本文学与中国文学——出典論を中心とする比較文学的考察——』（塙書房 一九九三）上巻の中で「藝文類聚の利用」（一二六頁）というタイトルで論考されたが、それを簡略に纏めたものとして、小島氏の『日本古典文学大辞典』の『藝文類聚』の解説文を下に書いて置く。

藝文類聚 百卷。漢籍。子部・類書類。唐の欧陽詢ら撰。六二四年（武徳七年）成立。『唐会要』卷三十六「修撰」に「武徳七年九月十七日、給事中欧陽詢奉敕撰芸文類聚成、上之とみえ、唐の高祖の勅命によることがかかる、諸書より同じ類に属する「事」と「文」の佳句を類聚した一大類書、百科文学辞典として名高い。（中略）【日本への伝来・影響】本書の伝来は、『日本書紀』の文中に利用された跡が見られ、したがって『日本書紀』成立の養老四年（七二〇）を降らず、遅くとも遣唐使帰朝の養老二年頃には伝来していたであろう。『日本書紀』の撰者は本書の語句を利用することによってその文を美しく飾り、（中略）『懷風藻』の詩句の中にも本書を利用した詩句が見られ、本書の上代文学に及ぼした影響は多大である。平安時代初期の漢詩文の場合も同様であり、佚書『修文殿御覧』を除いては、「類書」の白眉としてわが文学の宝典となった。^{（一〇）}

以上挙げた文からも、平安男性貴族が、続けて類書を触れた可能性は高いと考える。女性である清少納言は、男性貴族と同じように漢文知識を持っていたとは言えないが、彼女の性格、中宮定子の女房の立場の優勢から見ると、彼女は、宮廷の中で、鑑賞したのではないであろうか。あるいは、男性貴族と交際した時に、『藝文類聚』の「楽府」に注目したのではないであろうか。

七 おわりに

以上、「雲は」における「朝にさる色」の表現について考察してきた。従来すでに二つの典拠が指摘されているが、いずれも「朝にさる色」の「色」はなかったから、典拠とはいえないと論証した。そして、「朝雲」について、古典の和漢文における表現に注目して考察した上、漢籍による「巫山」と「朝雲」の故事から、さらに輸入された漢籍を検証した。その結果、「巫山」に関わり唯一「色」の文字が含まれた詩作は、沈約の詩「朝雲曲」と考えられることを提示した。

〔注〕

- (1) 四系統『枕草子』引用文は、それぞれ次のような本である。三卷本は、松尾聰・長井和子校注『枕草子』新編日本古典文学全集（小学館 二〇〇二）により、能因本は、松尾聰・長井和子校注前校注者同『枕草子』（小学館 一九七九）により、前田家本は、田中重太郎校注『前田家本枕冊子新註』（古典文庫 一九七一）により、堺本は、速水博司『『堺本枕草子評釈』——本文・校異・評釈・現代語訳・語彙索引——』（有朋堂 一九九〇）による。表記は現代仮名遣いに統一した。
- (2) 田中重太郎『枕冊子全注釈』（角川書店 一九八三）二四二頁。
- (3) 萩谷朴『枕草子解環』四（同朋舎 一九八三）四六〇～四六一頁。
- (4) 萩谷朴『枕草子解環』四（同朋舎 一九八三）四五九頁。

- (5) 高橋敬子 「朝にさる色」(枕草子) の出典『語学と文学』卷三五 (群馬大学語文学会 一九九九)
三五～四二頁。
- (6) 坏美奈子『新しい枕草子論』(新典社 二〇〇四) 四九〇頁。
- (7) 川口久雄・志田延義『和漢朗詠集 梁塵秘抄』(岩波書店 一九六五) 一三四頁。
- (8) 四種類書(『北堂書鈔』、『初學記』、『藝文類聚』、『白氏六帖』) 本文は、『唐代四大類書』(清華大学) 影印本に拠る。
- (9) 王運熙 顧易生『中国文学批評史』上(上海古籍出版社 一九八五) 一二八頁。
- (10) 『日本古典文学大辞典』第三卷(岩波書店 一九八四) 三六九頁。

第六章 『枕草子』「春はあけぼの」章段考

一 はじめに

『枕草子』「春はあけぼの」の章段は、日本の古典文学作品において、最も有名な文章で、江戸時代から、現在に至るまで、さまざまな視点からの考察が積み上げられてきた。^①

この章段の形態についての論は、かつて加藤盤斎（一六二一～一六七四）が『清少納言枕双紙抄』の中で、四季の春、夏、秋、冬に沿って、「四節に見るべし」と注釈されて以降は、詳しい論が見えない。しかし、四季によって、四段に分けることは当然であるが、文章の形態としては、ほかにも四段に分けられた理由があると考ええる。

例えば、漢詩の作法として、近体詩には四句から成る詩形、起、承、転、結の絶句の規則があり、律詩では、八句四韻より成る首聯、頷聯、頸聯、尾聯のような規則もある。

詩だけでなく、詩と散文の要素が融合した賦の構造も注目される。賦は、漢、魏、六朝時代にかけて、多くの対句の句法と駢文の要素が含まれた表現を用いた「俳賦」や「駢賦」が作られ、科挙の試験に課される音韻や修辭の規則が定まった「律賦」が生まれ、宋代には、古文を復興する趨勢の中で、「文賦」が流行した。これらのうち、唐代の「律賦」は、新しい賦で、いわゆる「新賦」と言われた。新賦の文体と、それ以前の古賦である「俳賦」と「駢

賦」との典型的な違いは、段落を四段に分けるという規則があり、ここにも規則が通底していたのである。

いわば、中国における作文、作詩の作法書である詩格では、詩文の構成は基本的に四段と認識しているといってもよからう。当然のことながら、この種の作法書が、日本の歌論や詩論に及ぼしてきた影響は尽大で、歌では、古くは、『浜成式』とよばれた『歌経標式』、詩文では、空海『文鏡秘府論』などをはじめ、多くの書が残されている。また文章の構成だけでなく、修辞上の重要な作法である「対」の構造をはじめ、音声、リズムの効果の演出など、中国の詩格の影響を抜きに考えることは不可能だろう。

ところが、平安仮名文学を対象とする、こうした視点に立った分析は、これまで西洋の詩学理論に立った分析はあるものの、中国詩賦学に依る考究の方は、管見の限りにおいて、試みられてこなかったようである。そこで、本章では、中国詩賦学の理論を『枕草子』序段「春はあけぼの」の表現と比較することにより、その適用の可否を判断してみたい。

二 四系統「春はあけぼの」本文

考察を進めるに際し、『枕草子』における四系統諸本には、どの系統の本文を対象とするのがよいかという問題がある。そこで、まずこの点について、まず四系統本文を対照し、先蹤の業績を踏まえつつ、最も適切な本文を設定する必要があるかを確かめておきたい。

具体的には、四系統「春はあけぼの」本文を1春、2夏、3秋、4冬の四段に分けて、平仮名で、一行に八字当るてとし、該当する文字がなければ、「…」を記し、それぞれ対応させて比較することにする。⁽³⁾

1 春

三巻本（四九字）

はるはあけぼの…

…

…やうやう

しろくなりゆくや

まぎは…すこし…

…あかりてむらさ

きだちたるくもの

ほそくたなびきた

る…

能因本（四九字）

はるはあけぼの…

…

…やうやう

しろくなりゆくや

まぎは…すこし…

…あかりてむらさ

きだちたるくもの

ほそくたなびきた

る…

前田家本（六四字）

はるはあけぼの…

そらはいたくかす

みたるにやうやう

しろくなりゆくや

まぎはのすこしづ

ゝあかみてむらさ

きだちたるくもの

ほそくたなびきた

る…

堺本（七〇字）

はるはあけぼのの

そら…いたくかす

みたるにやうやう

しろくなりゆくや

まのはのすこしづ

つあかみてむらさ

きだちたるくもの

ほそくたらびきた

るもいとをかし

2 夏

三巻本（七二字）

なつはよるつきの

ころはやらなりや

みもなほほたるの

おほくとびちがひ

たるまたただひと

能因本（四二字）

なつはよるつきの

ころはさらなりや

みもなほほたる…

…とびちがひ

たる…

前田家本（七二字）

なつはよるつきの

ころはさらなりや

みも…ほたるの

ほそくとびちがひ

たるまたただひと

堺本（八四字）

なつはよるつきの

ころはさらなりや

みもなをほたる…

おほくとびちがひ

たるゆふただひと

つふたつなどほの
かにうちひかりて
ゆくも……をかし
あめなど……
……ふ……る……も
……をかし……

3 秋

あきはゆふぐれゆ
うひの………
さしてやまのはい
とちかうなりたる
にからすのねどこ
ろへゆくとてみつ
よつふたつみつな
どとびいそぐさへ
あはれなりまいて
かりなどのつらね

………たるがい
とちいさくみゆる
はいとをかしひ…
いりはてて……か
ぜのおとむしのね
…などはたいふべ
きに…あらず……

……

………たるがい
とちいさくみゆる
…いとをかしひ…
いりはてて……か
ぜのおとむしのね
…など………
………

……

………たるがい
とちいさくみゆる
………をかしひの
いりはてて……か
ぜのおとむしのね
…などはたいふべ
きに…あらずめで
たし

とびつれたる…い
とちいさくみゆる
はいとをかしひ…
いりはててのちか
ぜのおとむしのこ
ゑなどは…いふべ
きにもあらずめで
たし

4 冬

三巻本（一〇七字）

ふゆはつとめてゆ
きのふりたる…は
いふべきにもあら
ずしも……のいと
しろきもまたさら
でもいとさむきに
ひな…どいそぎお
こしてすみ……も

能因本（一一三字）

ふゆはつとめてゆ
きのふりたる…は
いふべきにもあら
ずしもなどのいと
しろく…またさら
でもいとさむきに
ひな…どいそぎお
こしてすみ……も

前田家本（一一九字）

ふゆはつとめてゆ
きのふりたる…は
いふべき……なら
ずしもなどのいと
しろく…またさら
でもいとさむきに
ひな…どいそぎお
こし…すみなども

堺本（一二九字）

ふゆはつとめてゆ
きのふりたるには
………さらにもいは
ずしも……のいと
しろきもまたさら
ねどいとさむきに
ひなんどいそぎお
こしてすみ……も

てわたるも……	てわたるも……	てわたるも……	てありきなどする
……いとつきづ	……いとつきづ	…………つきづ	みるもいとつきづ
きしひるになりて	きしひるになりて	きしひるになりて	きしひるになりぬ
……ぬる……	……ぬる……	やうやうぬる……	ればやうやうぬる
くゆるびもてゆけ	くゆるびもてゆけ	くゆるびもてゆけ	くゆるびもていき
ば……	ば……すび	ばゆきもきえすび	てゆきもきえすび
…ひをけのひもし	つひをけのひもし	つひをけ……もし	つひをけのひもし
ろきはひがちに……	ろきはひがちに……	ろきはひがちにさ	ろきはいがちに……
…なりて……わろ	…なりぬるはわろ	えなりぬるはわろ	…なりぬればわろ
し……	し……	し……	し……

序段の構成は、1春、2夏、3秋、4冬の四段に分かれると考えられ、その分類に従えば、1春の段の文字数は、三巻本と能因本はいずれも49文字で、字数と内容とも一致する。また2夏の段の文字数は、三巻本と前田家本は72文字で、これも一致する。

三巻本と能因本とは、1春の段の字数は一致するが、2夏の段の字数に違いがある。三巻本「また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光て行くも、をかし」は、能因本には見えず、それが字数の差にも反映している。

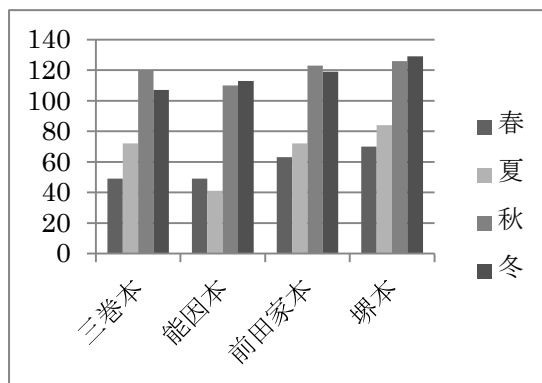
3秋の段は、能因本に、風の音、虫の音の後の「はたいふべきにあらず」という描写がないのが際だった差異となっている。

これら四系統の本文全体についての特徴と言うと、堺本の本文が最も長いことが挙げられよう。例えば、1春の段の最後、三巻本、能因本、前田家本では、「むらさきだちたるくものほそくたなびきたる」と結句されているが、堺本では「もいとをかし」と付け加えられ、このような付加部分により、堺本文が四系統本文の中で最も長くなつたと考えられる。

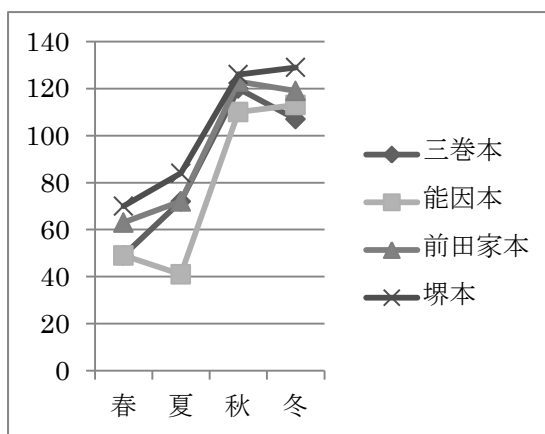
なお、これら四系統の本文の1春、2夏、3秋、4冬の各段の文字数を次の図表にて示してみた。

四 段	春	夏	秋	冬	総計
三巻 本	49	72	120	107	348
能因 本	49	42	110	113	314
前田家本	64	72	123	119	378
堺 本	70	84	126	129	409

図表一



図表二



図表三

図表一、二、三の通り、1春、2夏、3秋、4冬の四段を字数の観点で比較した際に、注目されるのは、三巻本

と前田家本の四段が似ていることであろう。つまり1春の段が一番短く、3秋の段が一番長い。

ところが、この形態は、能因本と堺本は大きく違っている。例えば、能因本では、一番短い段は、2夏の段（四二字）であり、一番長い段は、4冬の段（一一三字）である。堺本で一番長い段は、4冬段（一二九字）であるが、一番短い段は、2夏の段ではなく、1春段（七〇字）である。特に、能因本の2夏の段が1春の段より短いことは、前に述べたように、蛍が飛び交う姿に関する「また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光て行くも、をかし」という描写がなかったことが、能因本と堺本の大きな差であることを、数字が明示している。

また、興味深いところは、能因本になかった部分は、三巻本にしか見えない対的な表現がとられているということである。例えば、次のようである。

三巻本

B	あめなどふるもをかし	↓	雨など降るも	をかし
A	ひかりてゆくもをかし	↓	光りて行くも	をかし

AとBの本文にある「光」と「雨」、「行くも」と「降るも」及び「をかし」と「をかし」のような表現を対的な表現と考えることができるだろう。ただし、「光」と「雨」は漢字、仮名交り文に改めて、恣意的に示したものと言えなくもない。原本の三巻本系統の本を翻刻で示してみると、

① 田中重太郎『枕冊子』（朝日新聞社）

光りて行くもをかし。

雨など降るもをかし。

(七一頁)

② 岸上慎二『校訂三卷本枕草子』(武蔵野書院)

光りて行くもをかし。

雨など降るもをかし。

(二五頁)

③ 石田穰二『枕草子』(角川書店)

光りて行くも、をかし。

雨など降るも、をかし。

(二五頁)

④ 萩谷朴『枕草子』(新潮社)

光りて行くも、をかし。

雨など降るも、をかし。

(二八頁)

⑤ 松尾聰 永井和子『枕草子』(小学館)

光りて行くもをかし。

雨など降るもをかし。

⑥ 津島知明 中島和歌子『新編枕草子』(おうふう)

光りて行くも をかし。

雨など降るも をかし。

(一八頁)

と、表記面において、対構造が意識されていることがみて分かるだろう。

しかし、この対的な表現は、三巻本にしか見えず、他の三系統本文には見えないということに注意しておきたい。念のため、前に述べたように、能因本、前田家本、堺本の該当部分をAとBとで照合してみたい。

能因本

A	B
(ナシ)	あめなどのふるさへをかし

前田家本

A	B
ひかりてゆくもをかし	あめなどのふるさへをかし

堺本

A	ひかりてゆくもいとをかし
B	あめののどやかにふりたるさへこそおかしけれ

右のように、能因本では「A」の部分が欠如しているから「B」と対にならない。前田家本では、「B」の部分では「A」より二文字増え、厳密に言うとは、対的な表現とは言えない。また堺本の「A」と「B」の表現は、それぞれ異なっており、形式の面からみても、対的な表現とは言い難い。

このような状態なので、本章段を考察する対象として、『枕草子』の原態との距離を考慮に入れた上で、どの系統本文を扱うのがよいかという点を解決しなければならない。

もとより、先行の研究では、三卷本文を善本とする論が多い。^④例えば、田中重太郎氏は岸上慎二氏・池田亀鑑氏の三卷本善本説を踏まえ、「現在のわたくしとして、一般に『枕草子』の本文は三卷本（特に第一類本）に個々の古態を存していることを確認し、善本であると考えていることにかわりない。」（『枕草子全注釈』第一冊、角川書店、一五頁）と述べている。また萩谷朴氏も「現存伝本四系統」本文のうち、「三卷本の卓越」（『枕草子』上、新潮日本古典集成、新潮社、四〇八頁）と論じられている。さらに沢田正子氏は『枕草子の美意識』の中で、三卷本文の性格に関して、次のように記している。

三卷本は具象性に富み理屈ではなく直接感覚に訴えるような表現がとられることが多く、詩としての軽やかな動きやきびしい快さがある。一方の能因本は文脈がよく整理されて無駄がなく落ち着いた文章ではあるが、読

む人の心をわくわくさせるような躍動感や気魄には欠ける面がある。重複も多く未整理な点も多いが直情的で純な息吹の豊饒な三巻本の本文には、枕草子という作品を辿るのにふさわしい輝きと魅力とがこめられている。

(一五頁)

沢田氏が記したように、能因本本文は整理されているのに比べて、三巻本本文は原文と近いと考えられる。

あるいは、このような印象的批評を論拠とするよりも、早川光三郎氏、矢作武氏の指摘を深めて、相田満氏が、『枕草子』『故殿の御服のころ』の章段に見える朱買臣故事をめぐるやりとりのように、三巻本のみに古注『蒙求』をはじめその基層をともしする『類林』など、唐代の俗伝承と共通する言説を踏まえた特異な表現が見えることが、三巻本の古さを裏付けているといった指摘もある。⁽⁵⁾

本章段に関しては三巻本本文を最善本として、積極的に支持する材料はないが、従来の三巻本本文の善本の説を尊重し、少なくとも前に分析した三巻本にしか見えない対句の表現からみると、三巻本本文は最も簡潔で、整っているといえるだろう。

そこで、本稿においては、三巻本本文を主たる分析対象として、「春はあけぼの」の章段に関する1春、2夏、3秋、4冬の四段の形成について、具体的に対句の表現、段落分け、賦の文体に関する規則を照合して考察することとする。

三 漢詩文の対句的表現と「真名序」及び「仮名序」

周知の如く、対的な表現は、あるいは対句という方法は、そもそも詩や韻文の技法である。日本文学では、古い時代から、こういう技法も使用されている。例えば、『万葉集』には多くの用例が見られる。ここでは、『万葉集』第八卷「一五二〇」番の山上憶良（六六〇〜七三三）「七夕」に関連する歌を取り上げてみたい。

ひこほしは、たなばたつめと あめつちの 別れし時ゆ いなむしろ 川に向き立ち

思ふそら	(思空)	安けなくに	(不安久尔)
嘆くそら	(嘆空)	安けなくに	(不安久尔)

青波に	(青浪尔)	望みは絶えぬ	(望者多要奴)
白雲に	(白雲尔)	涙は尽きぬ	(啼者盡奴)

かくのみや	(如是耳也)	息づき居らむ	(伊伎都枳乎良牟)
かくのみや	(如是耳也)	恋ひつつあらむ	(恋都追安良牟)

さにぬりの	(左丹塗之)	をぶねもがも	(小船毛賀茂)
たままきの	(玉纏之)	まかいもがも	(真可伊毛我母)

朝なぎに	(朝奈芸尔)	いかき渡り	(伊可伎渡)
夕しほに	(夕倍尔毛)	いこぎ渡り	(伊許芸渡)

ひさかたの 天の川原に 天飛びや ひれ片敷き

またまでの たまでさしかへ あまたよも いねてしかも 一に云ふ、「眠もさ寝てしか」

秋にあらずとも 一に云ふ、「秋待たずとも」⁽⁶⁾

右のように、五組の二つの句を互に対応させて対にする表現がみえる。例えば、「思ふ」と「嘆く」、「青波」と「白雪」、「絶えぬ」と「尽きぬ」、「朝」と「夕」及び「渡り」と「渡り」などは対的な表現と考える。このような対的な表現の種類について、平安初期の空海は『文鏡秘府論』「東」巻において「二十九種対」を纏めている。⁽⁷⁾

『文鏡秘府論』以後、平安後期に成立した、漢詩文を制作するための手引書の『作文大体』(大江朝綱(八八六〜九五八)が天慶二(九三九)年の序)では、対句の表現について、『文鏡秘府論』よりも、やや実態に近い形で、中国詩論の理念を引き写した規則を記しているので、ここで簡単に纏めて取り挙げたい(本文は東寺観智院本(天理図書館所蔵)を底本とした小沢正夫「作文大体注解」による)。

『作文大体』規則

發句 一字 二字等、夫 夫以 原夫 於是 等

壯句 三字有對

緊句 四字有對

長句 從五字至九字 五字 六字 七字 八字 九字

輕隔句 上四下六字

重隔句 上六下四字

隔句 疎隔句 上三下不限多少

密隔句 上五已上下六已上

平隔句 上下或四或五

漫句 不對合 不調平他聲 或四 五字 七八字 或十 余字也

送句 者也 而已 等 或一字或二字無對

傍字 抑 且 就中 等也如發⁽⁸⁾

右に示した如く、対句の字数が決まっている。例えば、「壮句」は三文字であり、「緊句」は四文字であり、五文字、六文字、七文字、八文字、九文字の対句は、すべて「長句」という。

隔句という対句は、二句が隣接して並ぶのではなく、一句以上離れた句、つまり第一句と第三句、第二句と第四句が対になる規則である。隔句の種類には、五つの「軽、重、疎、密、平」にわけられる。これらの五つの隔句対の文字数はそれぞれ異なる。

また、対句をしない「漫句」もある。漫句の文字数は、短いもので、四文字、長いもので、十文字に及ぶ。「送句」と「傍字」は、一字と二文字くらいである。

では、漢詩文の対句の規則に従って、『枕草子』の先蹤であり、清少納言の時代の、重要な知識教養であった『古今和歌集』の序文を取り上げてみよう。

なお「仮名序」と「真名序」の成立の前後関係は、今なお未解決ではあるが、ここで、確認したいことは、「真名序」とそれに対応する「仮名序」における対句の表現であるから、このことにはふれないでおく。

まず、「真名序」と「仮名序」の冒頭文を取り上げてみたい（『作文大体』本文は前引用文同、『古今和歌集』「序文」、本文は、日本古典文学全集に拠る）。

『作文大体』

真名序

仮名序

発句

夫

発句

和歌者

やまと歌は

長句

対

託其根於心地
発其華於詞林

人の心を種として
よろづの言の葉とぞなれりける

送句

者也

緊句

対

人之在世
不能無為

世の中にある人
ことわざ繁きものなれば

緊句

対

思慮易遷
哀樂相変

心に思ふことを
見るもの

緊句

対

感生於志
詠形於言

聞くものにつけて
言ひ出せるなり

発句

是以

長句 対

逸者其声楽
怨者其吟悲

花に鳴く鶯

水に住む蛙の声を聞けば

緊句 対

可以述懷
可以發憤

生きとし生けるもの

いづれか歌をよまざりける

(四一三頁)

(四九頁)

右に挙げたように、「真名序」の冒頭表現には、発句の一文字、二文字、三文字があり、対句の種類は、三文字の「壮句」、四文字の「緊句」、五文字と六文字の「長句」が使われている。また「送句」の「者也」などの表現も使っていることが分かる。さらに、内容からみると、「根」と「華」、「心地」と「詞林」、「感生」と「詠形」、「志」と「言」、「逸者」と「怨者」、「声楽」と「吟悲」、「述懷」と「發憤」のような対応する表現は、『文鏡秘府論』の「二十九種」の対句の「意対」と「同対」などの種に属することが分かる。

興味深いことは、「仮名序」にも対句の表現が見えることである。ただし、「真名序」のように漢字で、一字一音のように対応していると言うには無理がある。しかし、次のように詳しく分析してみると、かなり対句的な表現を意識していたと思われるところは少なくない。具体的に、次の①②③④のように示してみたい。

①
人の心を種として
世の言の葉と

②

聞	見
く	る
も	も

③

水	花
に	に
住	鳴
む	く
蛙	鶯

④

生	生
け	き
る	と
も	し

右の①②③④で□で囲んだ表現は、対句としか考えられない。『文鏡秘府論』の「二十九種」の「対」を参照すれば、「人」と「世」、「心」と「言」、「種」と「葉」、「見る」と「聞く」、「花」と「水」、「鳴く」と「住む」、「鶯」と「蛙」などは、「第六対」の「異類対」、「第十四対」の「同対」の種に属する。例えば、「同対」の規則は、次のようにある。

第十四 同対

同対者 若大谷 広陵 薄雲 輕霧 此「大」与「広」、「薄」与「輕」、其類是同
 故謂之同対。同類対者 雲 霧 星 月 花 葉 風 煙 霜 酒 觴 東 西南
 北 青 赤 白 丹 素 朱 紫 宵 夜 朝 旦 山 岳 江 河 台 堂 車 馬 途 路

右のように、「同対」は、同類の物を対応させる対的表現である。また、そのほかにも、数字の場合、「数対」に属し、色に関して、「色対」に属するものであろう。さらに、このような対句の方法は、必ずしも『文鏡秘府論』だけに限るものではなく、中国の詩格における規則を踏まえた方法と考えるのも不思議ではない。

四 「春はあけぼの」の対句的表現の基層

前述した如く、『古今和歌集』「仮名序」において漢詩文の対句の規則が見られる。このことから仮名文の作者紀貫之は、漢詩文を作る規則を参考にして、仮名文を創作したと考えてよいだろう。

それに対して、清少納言が書いた仮名文である「春はあけぼの」の章段には、対句の表現は如何に存在しているのか。そこで、先行の研究^⑧を踏まえ、「春はあけぼの」の章段を分析してみたい。解析に際しては、なるべく分析しやすい形に対応させるように漢字を当てて表記する。

四段 三巻本「春はあけぼの」本文

2
夏

1
春

夏は夜

春は曙

やうやう

紫だち

白く

なり

ゆく

たる

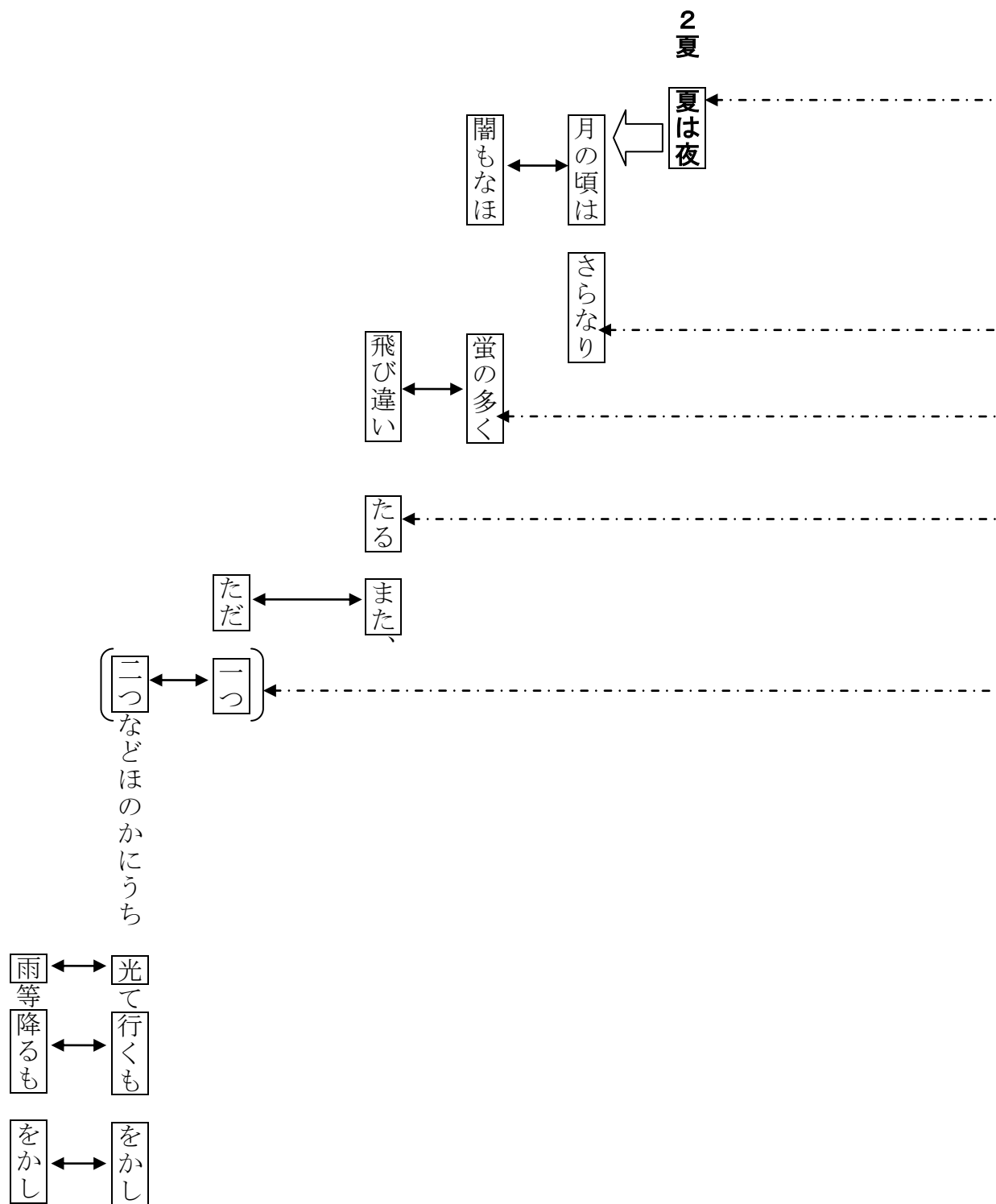
雲の

山ぎは

（細く 少し）

たなびきたる

あかりて



3 秋

秋は夕暮れ

夕
日の射して

山の端

山の端いと近う成りたるに鳥の寝ところへ行くとして

三三三

二二三つ
— など

飛び急ぐさへ

まいて雁などの

列ねたるが

あはれなり

いと小さく見ゆるは

いとをかし

日入り果てて

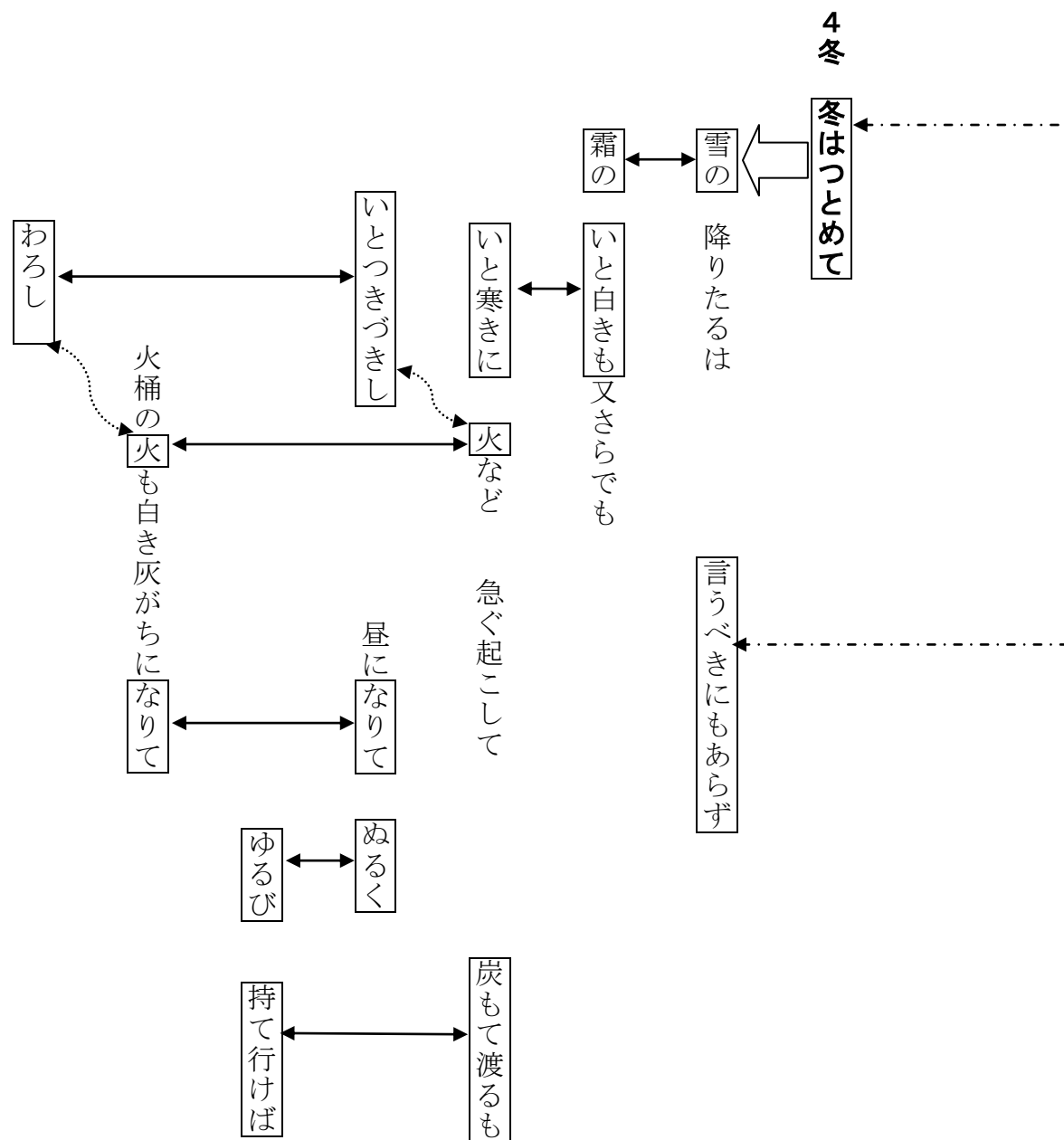
風の音

虫の音

言うべきにもあらず

4 冬

冬はつとめて



右に分析したように、「春はあけぼの」の章段は、1 春の段と2 夏の段が対応し、3 の秋の段と4 冬の段はそれ
 ぞれ似た対構造を持つ、二つの対応する組と考える。各段の対句の対象は、矢印のように示した。さらに注意した

いことは、二点である。一点は、2夏の段の最後の対句「雨等降るもをかし」の「し」と、4冬の段の最後の「わろし」の「し」は同字同音である。これは前に述べたように、近体詩の四句である詩形によって、第二句と第四句の押韻の規則に通底している。例えば、唐の李白の五言絶句を取り上げてみたい。(○は平声、●仄声、◎は韻字を示す。)

秋浦歌

李白

(押韻の図式)

1	起句	白髮三千丈	●	●	○	○	●
2	承句	縁愁似箇長	○	○	●	●	◎
3	転句	不知明鏡裏	●	○	○	●	●
4	結句	何処得秋霜	○	●	●	○	◎

右のように、第2句の最後の「長」と第4句の最後の「霜」は同韻である。いわゆる絶句の押韻の規則によって、第二句と第四句の最後の文字を押韻する脚韻の規則一致している。このように、「春はあけぼの」の章段の2夏の段末の「し」と4冬の段末「し」と同音することは単に偶然ではなく、作者が詩句の押韻の規則を意識して工夫したのではないであろうか。

もうひとつ注目したい点は、やはり対句の規則によったところである。これは2夏の段の最後の対句と3秋の段の最後の対句である。対句の本文を次のAとBのように取り上げたい。

三巻本

2夏の段末の対句

A	B
光て行くもをかし	雨等降るもをかし

3秋の段末の対句

A	B
言うべきにもあらず	言うべきにもあらず

右の2夏の段末の対句は、すでに述べたように、三巻本にしか見えない対句である。3秋の段末の対句は、三巻本だけであろうか、それとも他の三系統本文にも見られる対句であろうか。まずこの点を確認してみたい。

能因本

A	B
(本文なし)	言うべきにもあらず

前田家本

A	B
言うべきに…あらず	言うべき…ならず

堺本

A 言うべきにもあらず
B ……さらにもいはず

能因本では「A」の本文はないから、「B」と対句にならない。前田家本ではいずれも「A」と「B」の本文は欠如があるので、完全に対句にならない。堺本では「A」の本文はあるが、「B」の本文は不完全で、内容も違っているから、対句とは言えない。このように、3秋の段末の対句は、三巻本にしか見えないものである。しかも、「B」の本文は、4冬の段の冒頭文である。ようするに、清少納言が、3秋の段末に対句の上句を想定していたのである。

なぜ作者は、四段の中の第2段と第3段の段末を対句にしなければならないのだろうか。この点を解くためには、前に述べたように、漢詩句の形式の視点からみることにより、その理由が分かる。例えば、唐代に定着していた律詩における1首聯、2頷聯、3頸聯、4尾聯において、1首聯と4尾聯では、対句をするかしないかについては、特に規則はない。しかし、2頷聯と3頸聯の部分では、必ず対句をしなければならないという規則が厳然としている。この視点からみると、清少納言がわざわざ2夏の段末と3秋の段末で、対句のような文を構成したことは、漢詩の対句の規則と一致する。

かつて、勝俣隆氏は「春はあけぼの」の章段を「対句」の構成と指摘されているが、氏が「春」段と「秋」段、「夏」段と「冬」段を対句の対象として考察している。しかし、秋の段と冬の段に見えるこの「言うべきにもあらず」は対句という論は崩れてしまっていた。また、古瀬雅義氏の「対句」とは言わず、「対比」の変容に着目した分

析もあった。両氏とも優れた論考と思われる。⁹⁾だが残念ながら両氏とも具体的な漢詩の対句の規則などについて、いっさい展開されなかったのである。その意味で、本論のように、中国詩賦格を参考に、その対応関係を分析することは、意義あるものと考ええる。

五 「新賦」の「四段」と「春はあけぼの」の構成

ここまで「春はあけぼの」の章段における対句的表現の分析を試み、詩の対句規則とも関連する修辞が施されていることを確認してみた。一方で、「春はあけぼの」が、なぜ1春、2夏、3秋、4冬のように、四つの段落に分かれているのかについては、『文鏡秘府論』、『作文大体』のような作法には、明確な規則はみえない。ただし、かつて大曾根章介氏は、次のように述べている。

平安時代の文章作法には章段についての具体的な説明がない。作文大体に見える文章の分析も形式的な句型についてのもので、文章を構成している句の排列は分つても、その文体が如何なる内容を持ち、どのような順序に叙述されているかという、一貫した文章の構成については解明されていない。¹⁰⁾

また、大曾根氏は、平安時代の文章の作法だけでなく、中国からの文論にも文章の段落については言及されていないと次のように推論している。

これは日本だけでなく、当時の学者が手本にした中国の修辞学においても、文章の段落については筆が及んでいなかった様に思われる（前引用文同）。

おそらく大曾根氏は、『文鏡秘府論』とほぼ同じ時代に、日本に輸入された唐代の賦に関する文献、『賦譜』⁽¹⁾（中国で紛失）を見通してなかったのだろう。この『賦譜』には、賦の文章の構成、すなわち「新賦」（唐代の律賦）の段落に関して、極めて詳しく分析されているのである。

賦は、詩の韻文と散文が含まれた文体である。詩のような対句、押韻などのリズムを持ち、また文章の段落について、明確な規則が決まっている。その手引書の一種『賦譜』によれば、漢、魏、六朝の賦は「古賦」といい、段落に関する規則はないが、唐代の賦を「新賦」といって、四段に分けることは、基本的規則であるとはっきり記されている。

また興味深いことは、三巻本『枕草子』「文は」章段にも、「新賦」が明記されていることである。清少納言が書いた「新賦」は、『賦譜』にいう「新賦」と同じものと考えられるだろう。（この点については、本論文の第二部の第三章の第一節「新賦について」に詳しく論じた。また拙論「枕草子における新賦の新解」がある。⁽¹²⁾）

では、新賦（唐代の律賦）における段落の規則は、いったいどういうものなのか、「春はあけぼの」章段との関係を想定することが可能かということについて、『賦譜』に記される「新賦」の段落に関する規則と照らし合わせることで確認してみたい。（なお『賦譜』の本文は、本論文の第二部の第三章の第一節「新賦について」の影印文による）まず、古賦と新賦の段数について、

凡賦体分段 各有所歸

但**古賦**段 或多或少

若『登樓』三段

『天台』四段之類也

至今新体 分為四段

と、古賦の段落は、王粲の「登樓賦」(『文選』卷一二)は三段、孫綽の「遊天台山賦」(『文選』卷一一)は四段と
いうように数は不定である。対して、新体の賦、新賦は四段に分けられるという。この「新体」の賦は、『賦譜』に
よると、唐代の「新賦」で、「律賦」のことである。

『賦譜』によれば、新体の賦の段落を四段に分ける点が古賦と異なっている。その四段の名称は、1頭、2項、
3腹、4尾であり、そのうち、3腹の段はさらに五つに分られる。原文を確認しよう。(『賦譜』原文は前掲同)

A

初三四対 約卅字為頭

次三対 約卅字為項

次二百余字為腹

最末約卅字為尾

就腹中更分為五

約卅字為胸

次約冊字為上腹

次約冊字為中腹

次約冊字為下腹

次約冊字為腰

都八段 段転韻発語為常体

このように、新賦は人間の体に見立てられており、いわゆる四段の1頭、2項、3腹、4尾のうち、3腹の段は、さらに「胸、上腹、中腹、下腹、腰」と分けられる。人間の体と同じように、頭より腹の方が太っているようである。この点については、各段の字数を示して次のようにみたい。

新賦四段	文字数
1 頭	三〇字
2 項	四〇字
3 腹	二〇〇字
4 尾	四〇字
合計	三一〇字

数字から見ると、30字あるいは40字を叙述の一単位としており、それらを組合わせて段が出来あがっていると言

えよう。ただ、第一段「頭」段は、一番短く、第三段の「腹」段は一番長いという特徴が見えることに注意したい。

ところが、『賦譜』に引用された新賦の例を検証してみると、三一〇字にぴったりの賦は一首しか見えず（喬琳「灸輶賦」三一〇字、『全唐文』卷三百五十六収録）、他の賦例の字数は、主に三一〇字以上である。つまり、主題によって、字数の増減は可能である。この点を、『賦譜』で確認してみたい。（『賦譜』原文は前同）

B

一賦内用七緊八九長隔
一壯一漫六七發或四五六緊十二三長五六七隔三五
發二三漫壯或八九緊八九長七八隔四五發二三漫
壯長或八九三漫壯或元壯付通計首尾三百
六十左右字

一賦内用六七緊、八九長、八隔、

一壯、一漫、六七發或四五六緊、十二三長、五六七隔、三四五

發二三漫、壯或八九緊、八九長、七八隔、四五發、二三漫、

壯長或八九三漫、壯或無壯皆通。計首尾三百

六十左右字。

右に記した如く、一篇の新賦では、いくつかの「緊」、「長」、「隔」、「壯」、「漫」、「發」などの句が使われる。これらの句式の意味は、前に述べたように、『作文大体』にある対句の規則と同じである。すなわち緊句、長句、隔句

（輕隔句、重隔句、疎隔句、密隔句、平隔句）、壯句、漫句（對句なし）、発句の意味である。

そして、これらの句式の文字数を合わせて、だいたい、一篇の新賦の文字数は、**三二〇**字から**三六〇**字前後までということである。

前掲したAとBを合わせてみると、「新賦」の第三段「腹」段は一番長くなる原因と考えられることは、主題が五つあるからである。すなわち「胸」、「上腹」、「中腹」、「下腹」、「腰」の五つ主題があるからである。このように、『賦譜』における唐代の新賦の二九例、平安時代に残された文献による四〇例の賦作を、新賦の四段の1頭、2項、3腹、4尾にわけ、文字数を数えると、新賦の場合、1頭の段は一番短い、3腹の段は一番長いということであつた。⁽¹³⁾では、「新賦」の四段の1頭、2項、3腹、4尾の規則に従って、「春はあけぼの」の章段の構成について照合してみたい。分かり易くするため、「春はあけぼの」の文章は、すべて平仮名で、一行に二十字表記とする（引用文は三卷本系統本文である。前同）。

四段 三卷本「春はあけぼの」本文

総字数

1 春 はるはあけぼのやうやうしろくなりゆくやま

ぎはすこしあかりてむらさきだちたるくもの

ほそくたなびきたる

四九字

2 夏 なつはよるつきのころはさらなりやみもなほ

3
秋

ほたるのおほくとびちがひたるまたただひと
つふたつなどほのかにうちひかりてゆくもを
かしあめなどふるもをかし

七二字

4
冬

あきはゆふぐれゆうひのさしてやまのはいと
ちかうありたるにからすのねどころへゆくと
てみつよつふたつみつなどとびいそぐさへあ
はれなりまいてかりなどのつらねたるがいと
ちいさくみゆるはいとをかしひいりはててか
ぜのおとむしのねなどはたいふべきにあらず

一二〇字

ふゆはつとめてゆきのふりたるはいふべきに
もあらずしものいとしろきもまたさらでもい
とさむきにひなどいそぎおこしてすみもてわ
たるもいとつきづきしひるになりてぬるくゆ
るびもていけばひをけのひもしろきはひがち
になりてわろし

一〇七字

右に数えたように、「春はあけぼの」の章段の1春、2夏、3秋、4冬の四段の文字数と「新賦」の四段の構成を対照させてみると、次のようになる。

「新賦」の「四段」		「春はあけぼの」の「四段」	
	文字数		文字数
第一段	三〇字	第一段	春 四九字
第二段	四〇字	第二段	夏 七二字
第三段	二〇〇字	第三段	秋 一二〇字
第四段	四〇字	第四段	冬 一〇七字
合計	三一〇字	合計	三四八字

このように対照させてみると、「春はあけぼの」の四段の構成は、新賦の規則である四段に分ける方法と合致する。すなわち「春はあけぼの」の1春の段は四九字で、一番短く、3秋の段は一二〇字で、一番長い段であり、これは「新賦」の1頭の段は三〇字で、一番短く、3腹の段は二〇〇字で、一番長い段という規則に一致することである。

また、文字数からみると、前述したように、新賦の文字数は、三一〇字から三六〇までくらいである。三四八字である「春はあけぼの」の章段の文字数は、新賦の規則による文字数の範囲に相応しいであろう。文字数だけでなく、また「秋」段における描写された実物として、一番多い。例えば、夕日が落ちる風景、鳥と雁の飛ぶ様子及び日の入り後の風景、つまり視覚から転移して、聴覚である。すなわち風の音と虫の音などの描写である。これらの、

夕日、鳥、雁、風、虫のような五つの主題は、『賦譜』の段落の構造と一致している。

六 おわりに

以上、漢文の作法の視点から、『枕草子』「春はあけぼの」の章段の構成について述べてきた。四系統諸本の三巻本、能因本、前田家本、堺本の「春はあけぼの」本文を比較してみたうえ、とりわけ三巻本「春はあけぼの」本文に見える対句的表現に注目し、先行の研究を踏まえ、三巻本文が最善本であるという説により、三巻本「春はあけぼの」の本文を取り上げて考察してきた。

その結果、三巻本「春はあけぼの」の章段における漢文の作法の受容については、主に二つの特色が言える。

一つは、対句の方法を利用している。先蹤の文芸である『万葉集』、『古今和歌集』「真名序」、「仮名序」などの作品の中に見える対句の表現と同じように、「春はあけぼの」の章段では、対句的表現を使用している。これが詩のリズム、押韻及び詩の対句の規則に沿った方法と同じであることは判明している。また対句の表現の方法については、漢文の対句の規則による同対、意対、数対、色対等の対的な表現と合致している。

もうひとつは、段落の分け方で、詩や散文の素要が含まれた賦の文体、特に唐代の新賦による段落を分ける方法と一致している。その共通点とは、1春、2夏、3秋、4冬の四段のうち、1春の段は一番短く、3秋の段は一番長いことで、唐代の新賦の1頭、2項、3腹、4尾の四段のうち、1頭の段は一番短く、3腹の段が一番長いというものと合致する。

以上のように、作者清少納言は漢文の対句のリズム、作法、特に新賦の段落を分ける方法を受容して、仮名文で、

語彙を厳選し、文字数を制限し、文章の全体的には段落のバランスを合わせ、叙述の整合性と内在するリズム形式を表している。

〔注〕

- (1) ①加藤盤斎(一六二一～一六七四)「此一段を**四節**に見るべし。いはゆる春夏秋冬也。」『清少納言枕草紙抄』三五頁。②北村季吟(一六二五～一七〇五)「此**発端**に、春は曙を賞していへる、少納言の心あらはれて、枕双紙一部の形容もこもり侍るべし。」(『春曙抄卷一』『枕草子春曙抄』(杠園抄)一八頁。③岡西惟中(一六三九～一七一)「是は**序分**の様に四季折々のおもしろきありさまを書きたり草紙ものがたり等の一體也。」(『枕草紙旁註卷一』『枕草紙傍註 他三篇』二二頁。④池田亀鑑「四季折々の自然を描くにあたって、先ずその**総序**というような意味で、この一段を置いたものと考えられる。」(『全講枕草子』三頁。⑤萩谷朴「第一段は、いうまでもなく『枕草子』の序章である。清少納言がこの作品を制作するに際して、必ずしもこの第一段から起筆したと主張するのではない。しかし、作品全体の**序章**としてここに据えた一段の重みは十分に意識していたものといえよう。」『枕草子解環』(二)六頁。⑥武藤元信(一八五四～一九一八)は、はやめに「かく**連体形**にて留め、次の詞を含蓄せしむるは、少納言の慣用手法也。」『枕草紙通釈』二頁。②田中重太郎「これは「春は あけぼの(いと)をかし」「春は あけぼのことをかしけれ」などとある文よりも、このほうがずっと簡潔で力強い。散文学作品における**体言止め**は、平安時代において、清少納言の創始した文体といえよう。」『枕

冊子全注釈』(一)二四頁。⑦小松英雄「作品の冒頭に置かれたこの一節は、たいへん凝った文章であり、作者のなみなみならぬ筆才を物語っている。「はるはあけぼの」「あきはゆふくれ」「ふゆはつとめて」が、いずれも〈七音〉であり、また、「なつはよる」が〈五音〉になっている事実も、そのことに寄せて考えると、偶然ではなさそうにみえる。(中略)しかも、この「春はあけぼの」という〈七音〉は、それ以下につづく文章のトーンが**詩的**であることを予告している。」「仮名文の原理」一五三頁。⑧上野理(a)『白氏文集』「卷三一」「早春憶蘇州寄夢得」「吳苑四時風景好 就中偏好是春天 霞光曙後殷於火 草色晴来嫩似煙……」「春曙」考」『文芸と批評』第2巻・第8号(一九六八)五二頁。(b)『枕草子』の初段はこうした類書を中継に『修文殿御覧』や『芸文類聚』等の**中国の類書**の体系にしたがって構想され、執筆されたようだ。」「枕草子初段の構想と類書の構造」『国文学研究』第五十集(一九七三)四九頁。⑨藤本宗利「春はあけぼの」を活かすために 古典教材としての新たな試み」『〈新しい作品論〉へ、〈新しい教材論〉へ古典編3』(右文書院 二〇〇三)⑩藤原浩史『枕草子』第一段の国語学的解釈―潜在する論理の再構築』『日本女子大学紀要』(二〇〇六)⑪岸上慎二「この内容は(注、つまりこの「春は曙」の段のこと) 純粋な記事評論であり、形式、内容ともに完備してをり、清少納言としては**後年の執筆**に属しはしまいかと考へられる。」「枕草子研究」(新生社 一九七〇)四七〜四八頁。⑫萩谷朴「清少納言がこの作品を制作するに際して、必ずしもこの第一段から起筆したと出張するのではない。」「枕草子解環」一(同朋舎 一九八一)六頁。

- (2) ①勝俣隆「枕草子冒頭部の構造について」『国語と教育』第十四号 長崎大学国語国文学会(一九八九年十二月) ②古瀬雅義『枕草子』冒頭章段の構成――対比の変容に着目して――」『安田女子大学・安田女子短期大学』(一九九八年二月)を参照。

(3) 四系統『枕草子』諸本の底本は、三卷本、大東急記念文庫蔵（古梓堂文庫旧蔵）。能因本、学習院大学蔵。

前田家本、尊経閣文庫蔵。堺本、斑山文庫蔵（高野辰旧蔵）による。また、田中重太郎『校本枕冊子』（古典文庫）、松尾聰・永井和子『枕草子』（三卷本・小学館）、松尾聰・永井和子『枕草子』（能因本・小学館）、田中重太郎『前田家本枕冊子新註』（前田家本・古典文庫）、速水博司『堺本枕草子評釈』（堺本・有朋堂）を参照した。

(4) 田中重太郎『枕冊子』四系統本における地位については、池田亀鑑博士をはじめ、楠（旧世光明）道隆教授、岸上慎二博士、林和比古博士、それにわたくも何回か論じている。（中略）岸上博士は三卷本善本説を採られ、楠教授・林博士はともに能因本善本説を採られる。（中略）現在のわたくしとして、一般に『枕草子』の本文は三卷本（特に第一類本）に個々の古態を存していることを確認し、善本であると考えていることにかわりない。『枕冊子全注釈』一（角川書店 一九七二）一五頁。

(5) 相田満「『枕草子』漢故事考——『蒙求』故事とのかかわりを通して——」『東洋文化』第七五卷（一九九五）一八九頁。

(6) 平仮名文は『万葉集』新日本古典文学大系に拠り、括弧の中の万葉仮名は、『補訂版万葉集本文篇』（塙書房）に拠る。

(7) 一曰的名対、亦名正名対、亦名正対。二曰隔句対。三曰双擬対。四曰聯綿対。五曰互成対。六曰異類対。七曰賦体対。八曰双声対。九曰疊韻対。十曰迴文対。十一曰意対。十二曰平対。十三曰奇対。十四曰同対。十五曰字対。十六曰声対。十七曰側対。十八曰鄰近対。十九曰交絡対。廿曰当句対。廿一日含境対。廿二曰背体対。廿三曰偏対。廿四曰双虚実対。廿五曰仮対。廿六曰切側対。廿七曰双声側対。廿八曰疊韻対。廿九曰

総不對対。『文鏡秘府論』本文は、廬盛江『文鏡秘府論彙校彙考』（中華書局 二〇〇六）を参考した、現代漢字を表記した。六七八頁。

(8) 小沢正夫「作文大体注解」（上・下）、『中京大学文学部紀要』第19巻第2号通巻第47号（上）（一九八四）、『中京大学文学部紀要』第19巻第3―4号通巻（下）（一九八五）を参照。

(9) 勝俣隆「枕草子冒頭部の構造について」『国語と教育』第十四号 長崎大学国語国文学会（一九八九年十二月）。古瀬雅義『『枕草子』冒頭章段の構成——対比の変容に着目して——』（安田女子大学・安田女子短期大学）（一九九八年二月）を参照。

張・両氏とも三卷本文を分析対象でしたが、若干異なる本文がある。例えば、古瀬氏が石田穰二『枕草子』（角川文庫）本文を引用されているが、秋の段の「鳥の、寝どころへ行くとして、三つ四つ二つなど、飛び急ぐさへ、あはれなり。」部分では、「三つ四つ二つ」の後の「三つ」がなかった。なぜなら、石田氏が「三卷本は「二つ」の下にさらに「三つ」とあるが、能因本、堺本宸翰本系統、三卷本抜書本によって欠削る。」（角川文庫・一五頁）からである。しかし、「三つ」を消すと、漢詩文の対句の「数対」によれば、「三つ」と「四つ」、「二つ」と「三つ」の対句のリズムを崩すの可能になる。やはり対句の視点からみると、三卷本文にしか見えない「三つ四つ二つ三つ」の表現を取るべきであろう。

(10) 大曾根章介「平安時代の駢儷文について——文章の段落と構成を中心に——」『白百合女子大研究紀要』（一九六七年一二月）二二頁。

(11) 張培華「枕草子における「新賦」の新解」『古代中世文学論考』第十六集（新典社 二〇〇五）参照。『賦譜』の原文は、五島美術館に所蔵、複製本として、国立国会図書館に見える。本稿の引用文は、基本的に張伯偉

『全唐五代詩格彙考』（江蘇古籍出版社二〇〇二）による。ただし、表記は日本の漢字にする。また、小西甚一『文鏡秘府論』研究篇 下（講談社 一九五一）、中沢希男「賦譜校箋」『群馬大学教育学部紀要』（人文・社会科学編）第一七卷（一九六七）、柏夷『賦譜』略述』『中華文史論叢』第四九輯（上海古籍出版社 一九九二）等の中文書を参考する。異議がある漢字に注記を付けた。

(12) 三卷本『枕草子』『文は』の章段の内容は、次のようにある（本文は新編日本古典文学全集による）。

文は 文集。文選。新賦。史記、五帝本紀。願文。表。博士の申文。

（三三六頁）

この「新賦」は、作品の中のものなのか、それとも、作品集であろうか。不明である。藤原佐世『日本国見在書目録』の中には「新賦」が見えないが、参考となる資料は、『通憲入道藏書目録』のうち、『新賦略抄』という書物が見える。この『新賦略抄』については、「辞賦か文賦か、また新作か新集か不明であるが、賦を抄集したものか。」と矢島玄亮氏は指摘している。

(13) 『賦譜』『新賦』の用例を検証してみると、数多くの唐の作者の作品が引用されている。また、平安時代における賦を検証すると、新賦のような類型作品も見える。ここでAは、『賦譜』の代表的な一〇首の三一〇字（三六〇字前後の賦を取り上げてみたい。Bは平安時代における代表的な五首を取り扱う。また、それぞれのAとBの一作を取り上げて、「新賦」の規則に照らして分析する。

A 番号	作者	賦 名	頭 項	腹	尾	字 数 合 計	全唐文卷数
1	喬琳	灸輶賦	32	49	198	310字	卷三百五十六
2	喬潭	群玉山賦	39	63	187	47	三三六字 卷四百五十一

3	浩虚舟	木雞賦	48	36〇字	卷六百二十四
4	浩虚舟	陶母截髮賦	50	36〇字	卷六百二十四
5	李程	竹箭有筠賦	52	三五三字	卷六百三十二
6	席夔	冬日可愛賦	56	三六二字	卷六百三十三
7	陳仲師	駟不及舌賦	34	三五七字	卷七百十六
8	蔣防	隙塵賦	45	三五七字	卷七百十九
9	蔣防	獸炭賦	62	三二五字	卷七百十九
10	師貞	秋露如珠賦	64	三六七字	卷九百四十六

B 番号	作者	賦名	頭 項	腹 尾	文字合計	作品集
1	菅原道真	清風戒寒賦	42	36	三五六字	本朝文粹
2	紀斎名	落葉賦	64	40	三二九字	本朝文粹
3	菅原道真	昧旦求衣賦	43	60	三六七字	本朝文粹
4	源英明	孫弘布被賦	40	47	三五九字	本朝文粹
5	大江匡房	羽觴随波賦	47	50	三六二字	本朝続文粹

次に、**A**の3浩虚舟「木雞賦」と**B**の5大江匡房「羽觴随波賦」を新賦の規則によつて照合する。

四段 八段 「唐」

浩虛舟 木鷄賦 本文

大江匡房 羽觴隨波賦 本文

一頭 ①頭

惟昔 有人心至術 精得雞之情

昔周公之卜城也

情可馴 而無小無大

瞻彼東洛 建我西周

術既盡 而不飛不鳴

開翠罇于岸上 濫羽觴於波頭

對勁敵以自持 堅如挺植

臨翫有心 水能可滌雜穢

登廣場而莫顧 混若削成

會飲無筭 酒亦足除百憂

二項 ②項

初其 教以自然 誘之不懼

原夫豫遊擇地 歡宴傳風

希漸染而能化 將枯槁而是喻

其說聞于東氏 其義起自姬公

質殊樸斲 用明不競之由

潭月纔浮 手舉纖影之白

狀匪雕鏤 蓋取無情之故

岸花漫落 口吹輕葩之紅

三腹 ③胸

然則 飲啄必異 嬉遊每殊

於是潔其心 去其卜

竚棲心而自若 期顧敵而如無

酌下若之餘味 臨中流而求福

日就月將 功盡而稍同顛杓

浮魚泛躍 似轉三雅於遠近

不震不悚 性成而漸若朽株

沿鳥和鳴 疑呼四字於遲速

④上腹

已而 芥羽詎設 雕籠莫閉

尔乃洞乎頻勸 陶然自樂

卓然之志全變 兀若之姿已致

誠置酒之如淮 遂取醉於曲洛

首圓脰直 輪栢之狀俱呈

沙頭快飲 默任冷暖乎風煙

觜利距鉅 枳枸之銛並利

潭邊漫傾 豈待賓主之酬酢

⑤中腹

是以 縱逸情絕 端良氣全

既而 一周爰始 二漢相因

臆離披而踵附 眸眩曜而節穿

尋勝趣于吉日 傳芳躅于嘉辰

驚被文 而錦翼蔚矣

水是無情 誰論淺深之戶

迷塞木 而花冠爛然

浪其不定 難知次第之巡

虛僞者懷不才之虞 安能自恃

況復 十分頻酌 三澁無休

賈勇者有攻堅之懼 莫敢爭先

始染指於泓澄之蕙渚

⑥下腹

故能 進異激昂 處同虛寂

終開眉於澹泞之芳洲

郢工誤起乎心匠 邱氏徒驚乎目擊

顏兮已酤 奪紅桃之曉色

澹然無撓 子綦之質方儔

心不及亂 只枕麴塵之春流

確爾不回 周勃之強未敵

國家 恩波遠蕩 惠景高泛

其喻斯在 其由可徵

人皆得醉德而灑灑

馴致已志乎力制 積習漸通乎性能

義何必流盃之汎汎

⑦腰

是則 語南國者 未足與議

馨香其治 咲鄭俗之採闌

逗東郊者 無德而稱

弥恠其祥 嘲金人之捧釵

四尾

⑧尾

士有 特立自持 端然不倚

則知 神器惟新 聖曆可及

塊其形 而與木無二

配靈瑞於天地 詢往事於左右

灰其心 而顧雞若是

叡智生知 非獨同類於晉武之風

彼靜勝之深誠 冀一鳴而在此

膏澤遍施 非獨傳美於秦昭之酒者也

右に照合したように、大江匡房「羽觴随波賦」は、唐の浩虚舟の新賦「木雞賦」の書き方とほぼ一致している。総合文字数からいうと、大江匡房の最後の送句「者也」を脱ぐと、「三六〇」字は、合致する。また『賦譜』新賦の規則によって四段の発句を対応すると、次のようになる。

『賦譜』 新賦 段落 規則					
羽 觴 隨 波 賦	木 雞 賦	① 頭	一 頭	發 句	
	惟 昔	② 項	二 項		
	原 夫	③ 胸	三 腹		
	於 是	④ 上 腹			
	尔 乃	⑤ 中 腹			
	既 而	⑥ 下 腹			
	國 家	⑦ 腰			
	則 知	⑧ 尾	四 尾		
	者 也				送 句

右のように、発句は段落を分かる際、極めて効果あるキーワードである。また発句によって、段落の位置を決めることができる。大江匡房「羽觴随波賦」の書き方は、基本的に唐の浩虚舟の新賦「木雞賦」の書き方に類似している。ただし、前掲したように、「⑥下腹」と「⑦腰」の位置は若干異なるところがあるのである。また大江匡房の最後に「送句」の「者也」を用いてから見ると、最も新賦の形に完備されている。

終章 漢文学受容の特徴と意義

『枕草子』と漢文学の関わりは深い。この関係は、どのように考えられるのだろうか。『枕草子』を読む時、漢文学の関係をどのように認識するのか。これらの問題を追究することが本論の目的として、考察してきた。

そもそも『枕草子』における漢文学の受容を考えるに際しては、単に出典となる漢詩句の追究だけではなく、女性の目による観察や、女性の手を経た真名の世界の表象であると考えられるべきで、高級貴族の高踏的な教養を持つ精神生活の中で育まれた「和」と「漢」を融合した美意識が表現されたものであると言えよう。

そこで、本論文では、典拠論を超えた考察を目ざして、一見すると和語だけで成り立っているかのような表現の基層にも含まれている漢籍の影響にも目を向け、その受容の実態を踏まえた、新しい「読み（解釈）」の可能性を提示した。また、その考察の過程で、従来の注釈で難解とされていた問題についても、改めて考証した。たとえば、四系統『枕草子』の本文に引用された漢詩句と『和漢朗詠集』の漢詩句が一致する部分に着目し、『和漢朗詠集』の古注釈の訓読を参照し、四系統の本文における漢詩文の表現の特徴を考察したことなどは、その一例である。

以下に本論の各部、各章の主な内容を簡潔に述べたい。

序章では、清少納言を取り巻く漢文学の背景、本研究の目的及び構成を述べた。

第一部は『枕草子』における漢文学受容の総覧である。『枕草子』における漢籍の典拠について、すでに先行する研究や既存の研究成果のまとめはあるが、四系統の本文を対照整理したものはまだない。そこで、本章では、

江戸時代から現在までの『枕草子』に関する漢文学との関係がある箇所を整理し、四系統の本文を対照させながら一覧できるように配慮した表を作成し、あわせて明治から平成までの『枕草子』における漢文学に関する重要な論考を網羅した。

第二部「詩句と典籍をめぐる問題」では、次の三点を扱って論じた。まず平安時代の貴族の間に大流行した、『白氏文集』との関わり、次に、藤原公任（九六六―一〇四一）の撰になる『和漢朗詠集』との関係、最後に、清少納言が『枕草子』の中で、中国と日本の漢籍に関する「文は」章段を中心として考察した。

これらの三点（第一章、第二章、第三章）について、少し詳しく述べておきたい。

第一章『枕草子』における『白氏文集』の引用」では、『枕草子』と『源氏物語』の中に引用された白楽天の詩句を網羅的に整理した上で分析した。そして、『枕草子』に関する『白氏文集』の引用には、「感傷詩」が最も多く引かれる点で、『源氏物語』と異なる点が判明した。また「秀句」部分だけの引用にとどまらず、詩句の内容と、引用される時の場面や背景とが合致していることを明らかにした。

第二章『枕草子』における『和漢朗詠集』の引用」では、四系統の本文に引用された朗詠集の秀句を整理し、朗詠集の古注釈の部分に残存する訓読を指標として、四系統の本文において、朗詠集の詩句と対応する部分の表現の特徴を明らかにすることを試みた。そして、この方法により、『枕草子』の最古の写本である前田家本の特徴について、従来の説とは異なり、能因本と堺本を下敷にしたのではなく、独自の異本であることが明らかになった。

第三章『枕草子』「文は」の章段の問題」では、従来、難義とされている三巻本の「文は」の章段における「新賦」と「史記五帝本紀」の問題を考証した。

まず、「新賦」については、『通憲入道蔵書目録』に「新賦略抄」の名が見えることや日本に佚書『賦譜』が残存

していることから、その内容を考察した結果、「新賦」が『文選』の六朝時代の古賦に対する唐の新体の賦、すなわち「律賦」であることを示した（第一節）。

次に、同じ章段にある「史記五帝本紀」を考察するとともに、作者が『史記』の第一巻である「五帝本紀」と書名「史記」を並べて記した理由を考察した（第二節）。

第三部「表現の基層」では、『枕草子』本文の基礎的な表現の背後にある漢籍の影響について論じたものである。従来の注釈で、難解とされているところを改めて考証し、第一章から第六章まで、六つの章に分けて論じた。

第一章では、「三条の宮におはしますころ」の章段における「青ざし」、「ませごし」、「花や蝶や」を考察した。まず「青ざし」は「青麦」で作られた菓子ではなく、俗名である「青刺」の「薊」という植物の草葉であることなどを考察した。また定子が、当時流行していた『白氏文集』「感傷詩」の「菱花蝶飛」を踏まえて、歌に詠み、自らを「菱花」に例え、周りの若い人々が蝶のように飛んで去るということをたとえた内容が盛りこまれた章段であることを論証した。

第二章では、「にくきもの」の章段を中心として、特に微細な蚊についての「蚊の細声」を考証した。和歌、説話、物語、日記には、「蚊」の描写は極めて珍しい。しかし、清少納言は『枕草子』の中で援用し、漢詩文の精華を吸収して、その基盤から再構成することに注目し、その結果、『白氏文集』巻一一による「感傷詩」に含まれる「蚊蟻」の影響であることと、白楽天の親友の元稹が書いた「虫多詩」とも繋がることを検証した。

第三章では、「心ときめきするもの」の章段にある「唐鏡すこし暗き、見たる」の表現について考察し、唐の伝奇小説である『古鏡記』における暗い特徴を持つ「宝鏡」との関係を提示した。引用された漢籍の内容と背景は『枕草子』の該当する章段の内容と背景と方向的に一致することが、『枕草子』における漢詩文の引用の特徴である。近

年の研究動向として、仮名日記と唐代伝奇小説との関係が採り上げられ始めているが、『枕草子』における唐の伝奇小説に関する指摘は本論が初めてである。

第四章では、「九月二十日あまりのほど」の章段にある「月の窓より洩り」の表現と「歌詠む」について考察した。まず、漢語である「窓」が詠まれた和歌がないことから、また「窓」の表現史を検証し、作者が様々な漢詩文によって、「和」と「漢」の美意識を融合する新たな表現が創出されていることを証した。

第五章では、「雲は」の章段にある「朝にさる色」の表現について考察した。朝の雲の色に注目し、従来の指摘された漢籍の典拠ではなく、唐の時代に編纂された類書に見える沈約の詩の「朝雲曲」のテーマと合致することを指摘することにより、漢籍の影響についての新たな指摘を行った。

第六章では、初段「春はあけぼの」の章段を考察した。具体的には対的な表現や、春、夏、秋、冬の四段を分ける理由などの背後に、漢文学による対句の表現や唐の新体の賦（第一部の第三章の第一節に述べた）との関連性を、中国詩格で、分析によって示した。

終章では、各章によって考察した結果をまとめ、改めて四系統『枕草子』本文における漢文学の受容の特徴及び本論の考察の意義と価値を述べることを通じて、標題に掲げた『枕草子』における漢文学の受容のあり方とその研究手法の有効性についてまとめた。

付録資料『賦譜』翻字

はじめに

なぜここで今さら『賦譜』を翻字するのか、その理由を述べたい。

周知の如く、最初の『賦譜』の翻字は、昭和四三（一九六七）年、『群馬大学教育学部紀要』「人文・社会科学編」に掲載した中沢希男氏の「賦譜校箋」である。中沢氏は、小西甚一氏が『文鏡秘府論』（一九五一）の中で言及された『賦譜』を、初めて全文に訓読みを付け、また誤字、脱落、引例の出典について考証された。『賦譜』に対する研究には、中沢氏は大きな業績と言えるだろう。しかし、氏の「賦譜校箋」には、『賦譜』に引用した「月中桂樹賦」の作者は、「楊弘貞」を「楊広真」と誤記されている。^(*)また、詩句の典拠について、氏が「なお欠漏があるのでないかと恐れる」のように、『賦譜』を再検討することが必要であろう。

さらに、近年、海外の『賦譜』に関する研究は少なくなき、例えば、アメリカカ柏夷（一九九二）、香港陳萬成（一九九九）、中国張伯偉（二〇〇二）等の様々な角度から論じられてきてもいる。そういう状況をふまえ『賦譜』の全貌は、どういうものなのか、先行の業績を踏まえ、影印本を対照しながら、改めて全文の翻字に取り込むものである。なお、本翻刻は、『枕草子』だけでなく、平安文学における賦について研究にも価値があるのではないかと考える次第である。

* 中沢希男「賦譜校箋」『群馬大学教育学部紀要』「人文・社会科学編」（昭和四三年三月）二一八頁。

凡 例

- 一 『賦譜』原文は、五島美術館所蔵。
- 一 『賦譜』影印本資料は、国会図書館複製本に拠る。
- 一 『賦譜』本文翻字は、左記の資料を参考にした。
- 一 張伯偉『全唐五代詩格彙考』江蘇古籍出版社（二〇〇二）。
- 一 中沢希男「賦譜校箋」『群馬大学教育学部紀要』（一九六七）。
- 一 小西甚一『文鏡秘府論』研究篇 下 講談社（一九五一）。
- 一 柏夷『賦譜』略述』『中華文史論叢』上海古籍出版社（一九九二）。
- 一 小沢正夫「作文大体注解」上・下『中京大学文学部紀要』（一九八四）。
- 一 翻字の影印資料の行数の首字は、ゴシック字にした。
- 一 漢字の表記は、常用漢字を使い、句読点などの符号を施した。

賦譜一卷

凡賦句有壯、緊、長、隔、漫、發、送、合、織成、不可偏捨

壯 三字句也

若水流濕、火就燥、悅禮樂、敦詩書、万国會、百工休之類、綴發語之下、為便、不要常用

緊 四字句也

若方以類聚、物以群分、四海會同、六府孔修、銀車隆代、金鼎作國之類、亦綴發語之下、為便、至今所用也

長 上二字下三字句也 其類又多 上三字下三字

若石以表其貞、變以彰其異之類、是感上仁於孝道、合中瑞於祥經、是六也。因依而上下相遇、修分而貞剛失全、是七也。當白日而長空四朗、披青天而平雲中斷、是八也。我者謂量力而後、今見機者料成功之遠而、是九也。六、七者堪常用、八次之、九次之。其者時有之得、但有似緊、體勢不堪成緊、則不得已而死之、必也不須綴緊、承發下可也



賦譜一卷

凡賦句有壯、緊、長、隔、漫、發、送、合、織成、不可偏捨。

壯 三字句也

若「水流濕、火就燥」、「悅禮樂、敦詩書」、「万国會、百工休」之類、綴發語之下為便、不要常用。

緊 四字句也

若「方以類聚、物以群分」、「四海會同、六府孔修」、「銀車隆代、金鼎作國」之類、亦綴發語之下為便、至今所用也。

長 上二字下三字句也 其類又多 上三字下三字

若「石以表其貞、變以彰其異」之類、是五也。「感上仁於孝道、合中瑞於祥經」是六也。「因依而上下相遇」、修分而貞剛失全、是七也。「當白日而長空四朗、披青天而平雲中斷」、是八也。「我者謂量力而徒尔、見機者料成功之遠而」、是九也。六、七者堪常用、八次之、九次之。其者時有之得。但有似緊、體勢不堪成緊、則不得已而施之。必也不須綴緊、承發下可也。

障

障句對者其辭云障體有六輕重疎密平雜輕隔者如上有四字下六字若器將道志五色發以成文化盡歡心百獸舞而葉曲之類也重障上六下四如化輕裾於五色猶忍羅衣變纖手於一拳以迷紈質之類是也疎上三下不限多少若酒之先必資於麴蘖室之用終在乎戶牖而米異綠蛇之宛轉忽而往同飛燕之輕盈「府而察、煥而呈科斗之文靜而觀、炯尔見雕蟲之藝」等是也密上五已上、下六已上字若「微老聃之說、柔弱勝於剛強、驗夫子之文、積善由乎馴致」、詠『團扇』之見託、班姬恨起於長門、履堅冰以是階、袁安歎驚於陋巷」等是也。平者、上下或四、或五字等。若「小山桂樹、權奇可比、丘林花、顏色相似、進寸而退尺、常一以貫之、日往而月來、則就其深矣」等是也。雜者、或上四、或上四下五七八、或下四、上亦五七八字若「悔不可追、空勞於駟馬、行而无跡、豈繫於九衢」、「孤雲煙不散、若襲香爐峰之前、團月斜臨、似對鏡廬山之上、得用而

隔

隔句對者、其辭云。隔體有六輕、重、疎、密、平、雜。輕隔者、如上有四字、下六字。若「器將道志、五色發以成文。化盡歡心、百獸舞而葉曲」之類也。重隔、上六下四。如「化輕裾於五色、猶忍羅衣。變纖手於一拳、以迷紈質」之類是也。疎、上三、下不限多少。若「酒之先、必資於麴蘖。室之用、終在乎戶牖」、條而來、異綠蛇之宛轉。忽而往、同飛燕之輕盈、「府而察、煥而呈科斗之文。靜而觀、炯尔見雕蟲之藝」等是也。密、上五已上、下六已上字。若「微老聃之說、柔弱勝於剛強。驗夫子之文、積善由乎馴致」、詠『團扇』之見託、班姬恨起於長門。履堅冰以是階、袁安歎驚於陋巷」等是也。平者、上下或四、或五字等。若「小山桂樹、權奇可比。丘林花、顏色相似」、「進寸而退尺、常一以貫之。日往而月來、則就其深矣」等是也。雜者、或上四、下五七八、或下四、上亦五七八字。若「悔不可追、空勞於駟馬。行而无跡、豈繫於九衢」、「孤雲煙不散、若襲香爐峰之前。團月斜臨、似對鏡廬山之上」、「得用而

行將陳力於休明之世，首途不息，苦節於少壯之年，又素秋之節，信謂逢時。當明德之年，何憂淹望？「採大漢強幹之宜，裂地以爵。法有周維城之制，分土而王」，「虛矯者懷不材之疑，安能自持。賈勇者有攻堅之懼，豈敢爭先」等是也。此六隔，皆為文之要，堪常用，但務暈澹耳。就中輕、重為最，雜次之、疎、密次之，平為下。

湯

不對合，少則三四字，多則三句。若「昔漢武」、「賢哉南容」、「我聖上之有國」、「甚哉言之出口也」、「電激風趨」、「過乎馳驅」、「守靜勝之深誠」、「冀一鳴而在此」、「歷歷游游」、「宜乎涼秋」、「誠哉性習之說」、「我將為教之先」等是也。湯之為體，或奇或俗。當時好句、施之尾可也、施之頭亦得也。項腹不必用焉。

發

發語有三種：原始、提引、起寓。若「原夫」、「若夫」、「觀夫」、「稽其」、「伊昔」、「其始也」之類，是原始也。若「洎夫」、「且夫」然後，則「豈徒」、「借如」、「則曰」、「僉曰」、「矧夫」、「於是」、「已而」、

行、將陳力於休明之世。自強不息，必苦節於少壯之年」、

「及素秋之節、信謂逢時。當明德之年、何憂淹

望」、「採大漢強幹之宜、裂地以爵。法有周維城之制、

分土而王」、「虛矯者懷不材之疑、安能自持。賈勇者有

攻堅之懼、豈敢爭先」等是也。此六隔、皆為文之

要、堪常用、但務暈澹耳。就中輕、重為最、雜次之、

疎、密次之、平為下。

漫

不對合、少則三四字、多則二三句。若「昔漢武」、「賢哉南容」、「我聖上之有國」、「甚哉言之出口也」、「電激風趨」、「過乎馳驅」、「守靜勝之深誠」、「冀一鳴而在此」、「歷歷游游」、「宜乎涼秋」、「誠哉性習之說」、「我將為教之先」等是也。漫之為體、或奇或俗。當時好句、施之尾可也、施之頭亦得也。項、腹不必用焉。

發

發語有三種：原始、提引、起寓。若「原夫」、「若夫」、「觀夫」、「稽其」、「伊昔」、「其始也」之類，是原始也。若「洎夫」、「且夫」然後、「然則」、「豈徒」、「借如」、「則曰」、「僉曰」、「矧夫」、「於是」、「已而」、

故是是故故得是，今乃知是從觀之類是提引也。觀其替其等也，或通用之，如主有客有儒有我皇國家。

翼字至矣哉，大矣哉，類是起寓也。原始發項起寓發頭尾提引在中。

送

送語者也，而已哉之類也。

凡句字少者居上，多者居下，緊、長、隔以次相隨，但長句有六、七字者，八、九字者相連不要，以八、九字者似隔故也。自餘不須，且長、隔雖遙相望，要異體為佳。其用字「之」、「於」、「而」等，量澹為綺矣。

凡賦以隔為身體，緊為耳目，長為手足，緊為唇舌，壯為粉黛，漫為冠履。苟手足護其身，唇舌葉其度，身體在中而肥健，耳目在上而清明，粉黛待其時而必施，冠履得其美而即用，則賦之神妙也。凡賦體分段，各有所歸。但古賦段或多或少，若「登樓」三段、「天台」四段之類也。至今新體，分為四段：初三、四對，約卅字為頭，次三對，約卅字為項，次二百

「故是」、「是故」、「故得」、「是以」、「尔乃」、「乃知」、

「是從」、「觀夫」之類，是提引也。「觀其」、「稽其」等也，或通用之。如「士有」、「客有」、「儒有」、「我皇」、「國家」、

「嗟乎」、「至矣哉」、「大矣哉」之類，是起寓也。原始發項、起寓發頭、尾、提引在中。

送

送語、「者也」、「而已」、「哉」之類也。

凡句字少者居上，多者居下。緊、長、隔以次相隨。但

長句有六、七字者，八、九字者，相連不要，以八、九字者以隔故也。自余不須。且長、隔雖遙相望，要異體為佳。其用字「之」、「於」、「而」等，量澹為綺矣。

凡賦以隔為身體，緊為耳目，長為手足，發為唇

舌，壯為粉黛，漫為冠履。苟手足護其身，唇舌

葉其度，身體在中而肥健，耳目在上，而清明，粉黛

待其時而必施，冠履得其美而即用，則賦之神妙也。

凡賦體分段，各有所歸。但古賦段或多或少，若「登樓」

三段、「天台」四段之類也。至今新體，分為四段：

初三、四對，約卅字為頭，次三對，約卅字為項，次二百

餘字為腹，最末約冊字為尾。就腹中更分為五：初約冊字為胸，次約冊字為上腹，次約冊字為中腹，次約冊字為下腹，次約冊字為腰，都八段。段，轉韻，發語為常體。其頭初緊，次長，次隔，即項原始、緊。若「大道不器」云：「道自心得，器因物成。將守死以為善，豈隨時而易名。率性而行，舉莫知其小大。學而致，受無見於滿盈。稽夫廣狹異宜，施張殊類」之類是也。次長，次隔。即胸、發、緊、長、隔至腰。如此，或有一兩箇以壯代緊。若居緊上及兩長連續者，仇也。夫體相變牙、相暈澹，是為清才。即尾起寓，若長，次隔，終漫一兩句。若「蘇武不拜」云：「使乎使乎，信安危之所重」之類是也。得全經為佳。約略一賦內用六、七緊、八、九長、八隔、一壯、一漫、六、七發；或四、五、六緊、十二、三長、五、六、七隔、三、四、五發、二、三漫、壯；或八、九緊、八、九長、七、八隔、四、五發、二、三漫、壯、長；或八、九、三漫、壯；或無壯、皆通。計首尾三百六十九字，但官字有限，用意折衷耳。

近來官韻多勒八字，而賦體八段，宜乎一韻管一

余字為腹、最末約冊字為尾。就腹中更分為五：初約冊字為胸、次約冊字為上腹、次約冊字為中腹、次約冊字為下腹、次約冊字為腰。都八段、段，轉韻，發語為常體。其頭初緊、次長、次隔、即項原始、緊。若「大道不器」云：「道自心得、器因物成。將守死以為善、豈隨時而易名。率性而行、舉莫知其小大。以學而致、受無見於滿盈。稽夫廣狹異宜、施張殊類」之類是也。次長、次隔。即胸、發、緊、長、隔至腰。如此、或有一兩箇以壯代緊。若居緊上及兩長連續者、仇也。夫體相變牙、相暈澹、是為清才。即尾起寓、若長、次隔、終漫一兩句。若「蘇武不拜」云：「使乎使乎、信安危之所重」之類是也。得全經為佳。約略一賦內用六、七緊、八、九長、八隔、一壯、一漫、六、七發；或四、五、六緊、十二、三長、五、六、七隔、三、四、五發、二、三漫、壯；或八、九緊、八、九長、七、八隔、四、五發、二、三漫、壯、長；或八、九、三漫、壯；或無壯、皆通。計首尾三百六十九字。但官字有限、用意折衷耳。

近來官韻多勒八字、而賦體八段、宜乎一韻管一

段則轉韻以待發語通相牽綴實得其便。若「木鷄」是也。若韻有寬窄，詞有短長，則將韵不待發語，不待發語，不待發語，逐文限制，以綴屬耳。若「泉泛珠盤」韻是寬，故四對中含發；「用」韻窄，故二對而已，下不待發之類是也。又有連數句為一對，即押官韻，而箇盡者，若「駟不及舌」，「嗟乎」，「駸駸之足」，追言言之，豈能之而不欲。蓋嗷嗷之喧，喻駿駿之奔，在戒之而不言。是則「言」與「欲」並官韻，而「欲」字故以「足」、「駸」協，即與「言」為一對。如此之輩，賦之解証，時復有之，必巧乃可。若不然者，恐職為亂階。凡賦題有虛、實、古、今、比喻、雙關，當量其體勢，乃裁之。

虛

無形像之事，先叙其事理，令可以發明。若「大道不器」云：「道自心得，器因物成。將守死以為善，豈隨時而易名？」『性習相近遠』云：「噫下自人，上達君。感德以慎立，而性由習分。習而生常，將俾乎善惡區別。慎之在始，必辨乎是非糾紛之類也。」

段，則轉韻必待發語、遞相牽綴，實得其便。若『木鷄』

是也。若韻有寬窄、詞有短長，則轉韻不必待發語、

發語不必由轉韻、逐文理體制以綴屬耳。若「泉泛珠

盤」韻是寬、故四對中含發；「用」韻窄、故二對而已、下

不待發之類是也。又有連數句為一對、即押官韻

而箇盡者。若『駟不及舌』云：「嗟乎」、「駸駸之足」、追言言之、

豈能之而不欲。蓋嗷嗷之喧、喻駿駿之奔、在戒之而不言。」

是則「言」與「欲」並官韻、而「欲」字故以「足」、「駸」協、即

與「言」為一對。如此之輩、賦之解証、時復有之、必巧乃可。若

不然者、恐職為亂階。凡賦題有虛、實、古、今、比喻、雙關、

當量其體勢、乃裁之。

虛

無形像之事、先叙其事理、令可以發明。若『大道

不器』云：「道自心得、器因物成。將守死以為善、豈隨

時而易名。」「性習相近遠」云：「噫下自人、上達君。感德以

慎立、而性由習分。習而生常、將俾乎善惡區別。慎之

在始、必辨乎是非糾紛之類也。

實

有形像之物則究其物像體其形勢若陳塵
惟陳有光惟塵是依土牛服牛是比合土成美
月中桂月滿於東桂芳其中是也雖有形像
意在此喻則引其物像以證事理如石投水石
至堅兮水至清堅者可投之必中清者可受而不
盈此義如君臣之叶德事之目諫納而垂名竹
箭有筠箭人守禮如竹有筠不及舌云云甚哉
言之出口也電激風趨過乎馳驅木鷄言昔人
有心至術精得鷄之情事是水石鷄鷄者實而
納諫慎言者虛故引實證虛也
古昔之事則發其事舉其人若通天台之謠漢
武分恭玄風建會臺兮冠靈宮『群玉山賦』云
王与偃佺之倫為玉山之會舒姑化泉云云漂水之
上蓋山之前昔有處女之類是也
而自行簡望夫化為石无切類石事者惜哉
今事則舉所見述所感若『大史頒朔』云『國家
法古之制則天』『泛渭賦』云『亭亭華山下有渭』

實

有形像之物、則究其物像、體其形勢。若『陳塵』云…
「惟陳有光、惟塵是依。」「土牛」云…「服牛是比、合土成美。」
『月中桂』云…「月滿於東、桂芳其中」等是也。雖有形像、
意在此喻、則引其物像、以証事理。『如石投水』云…「石
至堅兮水至清。堅者可投之必中、清者可受而不
盈」比「義兮如君臣之叶德、事兮因諫納而垂名」。『竹
箭有筠』云…「喻人守禮、如竹有筠。」「駟不及舌」云…「甚哉
言之出口也、電激風趨、過乎馳驅。」「木鷄」云…「惟昔有人、
心至術精、得鷄之情」等是。「水」、「石」、「鷄」、「駟」者實、而
「納諫」、「慎言」者虛、故引實証虛也。
古昔之事、則發其事、舉其人。若『通天台』之「謠漢
武分恭玄風、建會臺兮冠靈宮」。『群玉山賦』云…「穆
王与偃佺之倫、為玉山之會。」「舒姑化泉」云…「漂水之
上、蓋山之前、昔有處女」之類是也。
而自行簡『望夫化為石』無切類石事者、惜哉
今事則舉所見、述所感。若『大史頒朔』云…「國家
法古之制、則天之理。」「泛渭賦」云…「亭亭華山下有渭」

之類是也。又有以古事如今事者，即須如賦今事，因引古事以證之。若『冬日可愛』引趙衰、辟虎魄枕引宋武之類，近來題目多此類。而獸炭未及羊琇、鵲處雞群如遺平稽紹、實可為恨。此喻有二：曰明、曰暗。若明比喻，即以被喻之事為幹，以為喻之物為支。每幹支相含，至了為佳，不以雙闕。但頭中一對，叙比喻之由，切似雙闕之體可也。至長三、四句不可用。若『秋露如珠』，「露」是被喻之物，「珠」是為喻之物，故云：「風入金而方勁，露如珠而正圓。映蟾輝而廻列，疑蚌割而俱攢。」「磨南容之詩，可復千嗟。別江生之賦，斯吟是月。」月之与珪雙闕，不可為准。若暗比喻，即以為喻之事為宗，而內含被喻之事，亦不用為雙闕。如『朱絲繩』，『求玄珠』之類是。「絲」之与「繩」、「玄」之与「珠」，並得雙闕。「絲繩」之与「真」、「玄珠」之与「道」，不可雙闕。而『炙輠』云：「惟輠以積膏而潤，惟人以積學而才。潤則浸之益，才則厥修乃來。」『千金市駿』或廣述物類，或遠徵事始，雖或廣述物類，或遠徵事始，似古賦頭，實文化也。石之至堅者，石之至靈者，人是破題也。何

之類是也。又有以古事如今事者。即須如賦今事、因引古事以証之。若『冬日可愛』引趙衰、『辟虎魄枕』引宋武之類。近來題目多此類。而『獸炭』未及羊琇、『鵲處雞群』如遺平稽紹、實可為恨。比喻有二：曰明、曰暗。若明比喻、即以被喻之事為幹、以為喻之物為支。每幹支相含、至了為佳、不以雙闕。但頭中一對、叙比喻之由、切似雙闕之體可也。至長三、四句不可用。若『秋露如珠』，「露」是被喻之物、「珠」是為喻之物、故云：「風入金而方勁、露如珠而正圓。映蟾輝而廻列、疑蚌割而俱攢。」「磨南容之詩、可復千嗟。別江生之賦、斯吟是月。」月之与珪雙闕、不可為准。若暗比喻、即以為喻之事為宗、而內含被喻之事。亦不用為雙闕。如『朱絲繩』、『求玄珠』之類是。「絲」之与「繩」、「玄」之与「珠」、並得雙闕。「絲繩」之与「真」、「玄珠」之与「道」、不可雙闕。而『炙輠』云：「惟輠以積膏而潤、惟人以積學而才。潤則浸之益、才則厥修乃來。」『千金市駿』或廣述物類、或遠徵事始、則浸之益、才則厥修乃來。『千金市駿』或廣述物類、或遠徵事始、却似古賦頭。『望夫化為石』云：「至堅者石、最靈者人。」是破題也。「何

精誠之所感、忽變化也如神。離思無窮、已極傷春之目。貞心弥固、俄成可轉之身。是小賦也。「原夫念遠增懷、憑高流眄。心遙遙而有待、目眇眇而不見。是事始也。又陶母截髮賦：「項既盡容方來、蕙心斯至。顧巾幘而無取」是頭既盡截髮之義。項更徵截髮之由來。故曰新賦之體。項者、古賦之頭也。借如謝惠連『雪賦』：「歲將暮、時既昏。寒風積、愁雲繁。」是古賦頭、欲近雪、先叙時候物候也。『瑞雪賦』云：「聖有作兮德動天、雪為瑞而表豐年。匪君臣之合契、豈感応之昭室。若乃玄律將暮、曾冰正堅。」是新賦先近瑞雪了、項叙物類也。入胸已後、緣情體物、縱橫成綺。六義備於其間、至尾末舉一賦之大統而結之、具如上說。

自宋玉『登樓』、相如『子虛』之後、世相放倣、多假設之詞。貞元以來、不用假設。若今事必煩、著述則任為之。若元稹『郊天日祥雲五色賦』是也。

賦譜一卷

精誠之所感、忽變化也如神。離思無窮、已極傷春之目。貞心弥固、俄成可轉之身。是小賦也。「原夫念遠增懷、憑高流眄。心遙遙而有待、目眇眇而不見。」是事始也。又『陶母截髮賦』項：「原夫蘭客方來、蕙心斯至。顧巾幘而無取」是頭既盡截髮之義、項更徵截髮之由來。故曰新賦之

體。項者、古賦之頭也。借如謝惠連『雪賦』：「歲將暮、

時既昏。寒風積、愁雲繁。」是古賦頭、欲近雪、

先叙時候物候也。『瑞雪賦』云：「聖有作兮德動天、雪

為瑞而表豐年。匪君臣之合契、豈感応之昭

室。若乃玄律將暮、曾冰正堅。」是新賦先近瑞

雪了、項叙物類也。入胸已後、緣情體物、縱橫成

綺。六義備於其間、至尾末舉一賦之大統而結之、

具如上說。

自宋玉『登樓』、相如『子虛』之後、世相放倣、多假設之

詞。貞元以來、不用假設。若今事必煩、著述則

任為之。若元稹『郊天日祥雲五色賦』是也。

賦譜一卷

〔注〕

(1) 原文「送」字なし。張伯偉氏の考証に従って補字した。

(2) 「唐」楊弘貞の「溜穿石賦」の賦句である。『文苑英華』卷三一に収録。中沢希男氏は、「楊弘貞」を「楊広真」と誤記している。また詹杭倫氏の『文苑英華』の「卷八九」は巻数が誤っている。

(3) 『賦譜』原文「咲」は、『文苑英華』には「笑」であった。典拠は、前(2) 同の楊弘貞の「溜穿石賦」の賦句である。しかし、中沢希男氏はさらに作者の名を「楊宏真」と別記している。氏が『全唐文』を利用したので、詹杭倫氏の説によつて、「楊弘貞」を『全唐文』に「楊宏真」に改めたことは、清の皇帝の諱を避けるというこの点から見ると、中沢氏が『文苑英華』を確認していなかったかもしれない。「楊宏真」と

記したことは、『全唐文』に依拠したことが分かる。ただ、前に述べた「楊広真」という名は誤記しか考えられない。たしかに、唐代では、楊宏真という人物がいることは間違いない。『全唐詩』卷四三八には、白樂天が「楊弘貞」について、次のような「七言絶句」を書いたのである。白居易「見楊弘貞詩賦因題絶句以自諭」
「賦句詩章妙入神、末年三十即無身、常嗟薄命形憔悴、若比弘貞是幸人」楊氏はまだ三十歳になつていないうちに亡くなった。当時四十四歳の白樂天は楊氏と比べて幸せな人だった。楊氏の賦句や詩章を読んで讃評していた。
この「楊弘貞」は、『賦譜』に引用していた『文苑英華』に収録された「溜穿石賦」の作者楊弘貞と同一人物であれば、中沢希男氏は、『全唐詩』や『文苑英華』を寓目していなかったかもしれない。